

出合遺跡

第34・35・37・39・40・43・44次埋蔵文化財発掘調査報告書



2011年

神戸市教育委員会

出合遺跡

第34・35・37・39・40・43・44次発掘調査報告書

2011

神戸市教育委員会



出合遺跡遠景（北西から）



出合6号墳 空中写真（北から）



出合6号墳（東から）



出合7号墳（西から）



出合11・12号墳（東から）



出合13号墳 空中写真（北西から）



13トレンチ SD01 赤色顔料付着遺物



出合7号墳 出土遺物



出合12号墳 出土埴輪



出合12号墳 出土遺物



42 レンチ SD07 出土遺物

序

神戸市西部に位置する西区は、緑豊かな田園風景とニュータウンを中心とする新しい街並みが調和を織り成し、工業・物流の拠点としても大きく発展をしております。区内には貴重な文化財が数多く所在し、豊かな歴史を有する街でもあります。

出合遺跡は、西区玉津町出合、中野、平野町中津付近に広範囲に確認されている遺跡で、これまでの調査から旧石器時代から中世にかけての人々の生活の跡が確認されています。

今回の発掘調査は、圃場整備事業に伴うもので、5ヶ年に及ぶ調査の結果、古墳群や飛鳥時代から平安時代頃の掘立柱建物群をはじめとする、弥生時代から中世にかけての数多くの遺構、遺物が確認されました。本書が地域の歴史研究、あるいは文化財の保護、普及啓発の資料として、市民の皆様をはじめ、多くの方々に広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の作成にご協力いただきました、兵庫県神戸県民局神戸土地改良事務所、神戸市上津橋土地改良区をはじめ、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

神戸市教育委員会

例　言

1. 本書は、神戸市西区平野町中津において発掘調査を実施した、出合遺跡第34・35・37・39・40・43・44次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、集落基盤整備事業（上津橋地区）に伴うもので、神戸市教育委員会が兵庫県神戸県民局の委託を受け、現地における調査は平成17年度から平成21年度にかけて（財）神戸市体育協会が実施した。調査の組織体制および各調査の期間、面積等の詳細については、第1章第1節に記した。
3. 遺物整理作業は、平成18年度から平成22年度にかけて神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の実測作業は調査担当者・整理担当者が行なった。
遺物写真の撮影は西大寺フォト　杉本和樹氏が行なった。
4. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「前開」、「須磨」、「東二見」、「明石」、神戸市発行の2,500分の1地形図、「上津橋」、「玉津」を使用した。
5. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。
6. 出合古墳群1号墳～5号墳の位置等については、岡山理科大学総合情報学部教授　亀田修一氏のご教示を得た。また、これまで「堂ノ上古墳群」として報告されていたものや、それ以後に同一丘陵上で発見された古墳については、出合古墳群として一連の通し番号を付することにする。
7. 本書の執筆は、「第2章 第1～4・6・7節と第5節(一部)」及び「第3章 第1～4節」、「第4章」、「第5章(遺構)」を文化財課　斎木 嶽、「第9章」を同 中村大介、この他については同 阿部 功が執筆し、阿部が編集を行なった。
8. 出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
9. 現地での発掘調査の実施には、兵庫県神戸県民局神戸土地改良事務所、神戸市上津橋土地改良区の協力を得た。

目 次

序

例言

目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査組織	2
(3) 調査の経過	2
第2章 出合遺跡の立地と歴史的環境	6
(1) 遺跡の立地	6
(2) 歴史的環境	6
(3) 既往の調査概要	9
第2章 第34次調査	13
第1節 1トレンチ	13
第2節 2トレンチ	18
第3節 3トレンチ	21
第4節 4トレンチ	21
第5節 5トレンチ	23
第6節 6トレンチ	43
第7節 7トレンチ	46
第3章 第35次調査	47
第1節 8トレンチ	47
第2節 9トレンチ	49
第3節 10トレンチ	50
第4節 11トレンチ	50
第5節 12トレンチ	51
第6節 13トレンチ	56
第7節 14トレンチ	57
第8節 15トレンチ	57
第9節 16トレンチ	57
第10節 17トレンチ	58
第11節 18トレンチ	59
第12節 19トレンチ	60
第4章 第37次調査	61
第1節 20トレンチ	61
第2節 21トレンチ	61
第3節 22トレンチ	71
第4節 23トレンチ	72
第5節 24トレンチ	73
第6節 25トレンチ	74
第7節 26トレンチ	78
第8節 27トレンチ	91
第9節 28トレンチ	92
第10節 29トレンチ	92

第5章 第39次調査	93
第1節 30トレンチ	93
第2節 31トレンチ	94
第3節 32トレンチ	96
第4節 33トレンチ	98
第6章 第40次調査	99
第1節 34トレンチ	99
第2節 35トレンチ	101
第3節 36トレンチ	103
第4節 37~39トレンチ	110
第5節 40トレンチ	111
第6節 41トレンチ	118
第7節 17号墳	120
第7章 第43次調査	121
第1節 42トレンチ	121
第8章 第44次調査	129
第1節 43トレンチ	129
第2節 44トレンチ	132
第9章 鉄製品・金属製品生産関連遺物・烏帽子	133
第1節 鉄製品・金屬製品生産関連遺物	133
第2節 烏帽子	134
第10章 まとめ	137
第1節 調査の成果	137
第2節 上津橋地区で確認された家形石棺	139
第3節 出合古墳群について	141

卷頭カラー図版目次

- 卷頭カラー図版1
出合遺跡遺景（北西から）
出合6号墳 空中写真（北から）
卷頭カラー図版2
出合6号墳（東から）
出合7号墳（西から）
卷頭カラー図版3
出合11・12号墳（東から）
出合13号墳 空中写真（北西から）

- 卷頭カラー図版4
13トレンチ SD01 赤色顔料付着遺物
出合7号墳 出土遺物
卷頭カラー図版5
出合12号墳 出土埴輪
出合12号墳 出土遺物
卷頭カラー図版6
42トレンチ SD07 出土遺物

挿図写真図版目次

写真1 重機搬削	2	写真15 12号墳遺物出土状況	84
写真2 作業風景	5	写真16 12号墳埴輪出土状況	86
写真3 現地説明会	5	写真17 吉田池 古墳状況起	91
写真4 遺物接合復元作業	5	写真18 鳥帽子	135
写真5 遺物実測作業	5	写真19 縁部分 マクロ写真(25倍)	136
写真6 1トレンチ SK204	17	写真20 布痕跡 マクロ写真(7倍)	136
写真7 1トレンチ SR201遺物出土状況	17	写真21 布残欠 顕微鏡写真(50倍)	136
写真8 6トレンチ SR01遺物出土状況	46	写真22 布・不明繊維残欠 顕微鏡写真(50倍)	136
写真9 8トレンチ 上層水田	49	写真23 漆・布断面(縦糸横断方向)顕微鏡写真(70倍)	136
写真10 11トレンチ 下層水田	50	写真24 同左 顕微鏡写真(240倍)	136
写真11 SK02完掘状況（南から）	63	写真25 漆・布断面(縦糸横断方向)顕微鏡写真(70倍)	136
写真12 SK04遺物出土状況（北から）	70	写真26 漆塗膜断面 顕微鏡写真(600倍)	136
写真13 22トレンチ全景（北東から）	71	写真27 確認された家形石棺	139
写真14 12号墳遺物出土状況	79		

写真図版目次

第34次調査

- 図版1 1トレンチ北半第1遺構面全景（北から）
1トレンチ北半第2遺構面全景（南から）
図版2 2トレンチ第2遺構面（北西から）
3トレンチ全景（南西から）
5トレンチ2区第2遺構面（東から）
5トレンチ2区第2遺構面（西から）
図版3 5トレンチ2区SR201（西から）
5トレンチ2区SR201遺物出土状況（南東から）
図版4 5トレンチ4区全景（南東から）
5トレンチ4区SK5401～5403（北から）
5トレンチ4区SK5402（西から）
図版5 5トレンチ5区第1遺構面全景（南東から）
5トレンチ5区SB55101（南東から）
5トレンチ6区第2遺構面全景（北から）
図版6 5トレンチ6区SK56201（南から）
6トレンチ全景（南から）

- 6トレンチSR01（北東から）
図版7 1トレンチSR201・SK204出土遺物
図版8 5トレンチ2区SR201出土遺物（1）
図版9 5トレンチ2区SR201出土遺物（2）
5トレンチ2区SK201出土遺物
5トレンチ4区SK5403出土遺物
5トレンチ5区SK55202出土遺物（1）
図版10 5トレンチ4区SD5401・SK5404出土遺物
5トレンチ4・6区出土石器
図版11 5トレンチ5区SD55201・SK55202出土遺物（2）
5トレンチ5区SK55202出土遺物（3）
図版12 5トレンチ6区SK6201出土遺物（1）
図版13 5トレンチ6区SK6201出土遺物（2）
6トレンチSK04出土遺物
図版14 6トレンチSR01出土遺物

第35次調査

- 図版15 12トレンチ東半第1塗拂面（南西から）
12トレンチ西半第2塗拂面（南東・北西から）
図版16 12トレンチSD205遺物出土状況（北西から）
12トレンチSD205（北東から）
12トレンチSD206（南東から）
図版17 13トレンチ全景（北西から）
13トレンチSD01（南東から）
13トレンチSK01（南西から）
図版18 12トレンチSD204出土遺物
12トレンチSD205出土遺物
12トレンチSD206出土遺物(1)
図版19 12トレンチSD206出土遺物(2)
図版20 12トレンチSD206出土遺物(3)
13トレンチSD01出土遺物
13トレンチSK01出土遺物

第37次調査

- 図版21 21トレンチ3区全景（西から）
21トレンチ3区全景（西から）
21トレンチ3区SB01（北から）
図版22 21トレンチ7号墳（西から）
21トレンチ7号墳出土状況（南西から）
24トレンチ8号墳（南東から）
図版23 25トレンチ6号墳（東から）
25トレンチ6号墳（南東から）
図版24 26トレンチ12号墳（東から）
26トレンチ12号墳出土状況（東から）
図版25 26トレンチ12号墳（北西から）
26トレンチ12号墳出土状況（東から）
図版26 21トレンチSK02出土遺物
21トレンチ7号墳出土遺物(1)
図版27 21トレンチ7号墳出土遺物(2)
26トレンチ12号墳出土遺物(1)
図版28 26トレンチ12号墳出土遺物(2)
図版29 26トレンチ12号墳出土遺物(3)

第39次調査

- 図版30 30トレンチ全景（東から）
31・32トレンチ全景（南西から）
図版31 33トレンチ全景（南西から）
33トレンチSB01・02（東から）

第40次調査

- 図版32 34トレンチ全景（南西から・北東から）
34トレンチSB01（南から）
図版33 35トレンチ16号墳（北西から）

- 36トレンチ抜張区13号墳（東から）

- 図版34 36トレンチ抜張区13・14号墳（東から）
36トレンチ抜張区掘立柱建物群（北西から）
図版35 40トレンチ（東から）
17号墳（北東から）
図版36 35トレンチSD02・03（16号墳）出土遺物
36トレンチ抜張区SK01出土遺物
36トレンチ抜張区13号墳出土遺物(1)
図版37 36トレンチ抜張区13号墳出土遺物(2)
図版38 36トレンチ抜張区13号墳出土遺物(3)
36トレンチ抜張区SK02出土遺物
36トレンチ抜張区SK06出土遺物
図版39 40トレンチSD09出土遺物
図版40 40トレンチSK01出土遺物(1)
図版41 40トレンチSK01出土遺物(2)
図版42 40トレンチSK01出土遺物(3)
第40次調査出土埴輪

第43次調査

- 図版43 42トレンチ3区（南から）
42トレンチ4区（北西から）
42トレンチSB01（北東から）
図版44 42トレンチ4区遺物出土状況（北西から）
42トレンチ4区SD07（北東から）
42トレンチ4区SD10（北東から）
図版45 42トレンチ4区SD07出土遺物(1)
図版46 42トレンチ4区SD07出土遺物(2)
図版47 42トレンチ4区SD07出土遺物(3)
図版48 42トレンチ4区SD07出土遺物(4)
図版49 42トレンチ4区SD10出土遺物
42トレンチ造構に伴わない遺物

第44次調査

- 図版50 43トレンチ全景（北東から）
43トレンチ西半（北東から）

家形石棺

- 図版51 家形石棺棺蓋
棺蓋外面
棺蓋内面
図版52 上部平坦面工具痕
短側辺部工具痕
長側辺部工具痕

鉄製品・金属製品生産関連遺物

- 図版53 鉄製品・金属製品生産関連遺物

- 図版54 鉄製品・金属製品生産関連遺物（X線透過像）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

出合遺跡は神戸市西区玉津町出合、中野、王塚台、平野町中津に所在する旧石器時代～中世の遺跡である。

出合遺跡の所在する西区は、市域の西端に位置しており、昭和57年（1982）に垂水区から分区して誕生した。西側を加古郡稻美町、南側を明石市と接し、北側は三木市と接している。面積137.86km²で北区に次いで市内2番目の面積を有し、豊かな田園と丘陵の広がる近畿地方有数の郊外農業地域である一方で、神戸鉄工団地、西神工業団地、神戸ハイテクパークなどが所在する市内有数の工業地域でもある。

昭和50年代前半頃からは、臨海市街地と接し、南が明石市街地と隣接する地理的条件から、ベッドタウンとしての計画的な開発が盛んに実施され、丘陵部では「西神ニュータウン」造成などを始めとする大規模な開発が実施されている。近年は住宅供給の急増化も加わり、土地区画整理事業が積極的に推進されており、景観は著しく変貌している。人口は9区中最も多い、約25万人の人々が生活をする街となっている。

今回の発掘調査は、県営圃場整備事業に伴うものである。事業計画区域は、周知の埋蔵文化財包蔵地である出合遺跡の近接地であることから、神戸市教育委員会では平成15・16年度に事業計画区域内で試掘調査を実施し、弥生時代～古墳時代及び中世の遺構・遺物が良好な状況で確認された。この結果を受けて、神戸市教育委員会は出合遺跡の範囲を拡大すると共に、兵庫県神戸県民局神戸土地改良事務所・神戸市上津橋土地改良区と協議を行ない、埋蔵文化財が確認された地区の内、工事による掘削の影響を受ける範囲について発掘調査を実施することとなった。調査は平成17年度より開始した。



fig1. 出合遺跡の位置

(2) 調査組織

平成17年度～22年度

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

榎上 重光 前 神戸女子短期大学教授（～平成19年7月14日）

工樂 普通 大阪府立狹山池博物館長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
教育長	小川 雄三	小川 雄三	小川 雄三	橋口 秀志	橋口 秀志	橋口 秀志
社会教育部長	高橋英比古	大谷 幸正	黒住 章久	黒住 章久	大寺 直秀	大寺 直秀
参考（文化財課長事務取扱）	桑原 泰豊	柏木 一孝	柏木 一孝	柏木 一孝	柏木 一孝	柏木 一孝
社会教育部主幹 (埋蔵文化財指導係長事務取扱)	渡辺 伸行	丸山 潔	丸山 潔	丸山 潔	-	-
社会教育部主幹 (埋蔵文化財センター所長事務取扱)	丸山 潔	渡辺 伸行	渡辺 伸行	渡辺 伸行	渡辺 伸行	渡辺 伸行
埋蔵文化財指導係長	-	-	-	-	丸山 潔	丸山 潔
埋蔵文化財調査係長	丹治 康明	丹治 康明	千種 浩	千種 浩	千種 浩	千種 浩
文化財課主査	安田 滋	安田 滋	丹治 康明	丹治 康明	丹治 康明	丹治 康明
事務担当学芸員	東 喜代秀	前田 佳久 阿部 敬生	阿部 敬生 中谷 正	阿部 敬生 中谷 正	中谷 正	佐伯 二郎
調査担当学芸員	藤井 太郎	-	-	-	-	-
整理担当学芸員	-	-	黒田 恭正	黒田 恭正 佐伯 二郎	黒田 恭正 佐伯 二郎	西岡 誠司 阿部 功
保存科学担当学芸員	中村 大介	中村 大介	中村 大介	中村 大介	中村 大介	中村 大介

神戸市体育協会						
会長	家治川 豊	家治川 豊	表 孟宏	表 孟宏	表 孟宏	-
副会長（専務理事事務取扱）	矢野栄一郎	水田 裕次	水田 裕次	小川 雄三	小川 雄三	-
常務理事	野浪 建作	碩 弘四郎	碩 弘四郎	碩 弘四郎	碩 弘四郎	-
義務課長	横関 勇	横関 勇	横関 勇	赤沢 徹	赤沢 徹	-
義務課主査	曾本 宏明	山本 雅和	山本 雅和	-	-	-
調査担当学芸員	斎木 嶽 阿部 敬生	斎木 嶽 東 喜代秀 藤井 太郎	斎木 嶽	東 喜代秀 藤井 太郎 阿部 功	藤井 太郎 阿部 功	-

表1 調査組織

(3) 調査の経過

調査対象地の面積は7395m²で、調査は平成17年11月24日から開始した。

平成17年度（第34次調査）は水路部分の調査である。1～7トレンチを設定し、約1908m²（延べ3023m²）の調査を実施した。弥生時代前期後半、古墳時代後期～中世の遺構、遺物が確認された。この他範囲確認のため、約28m²の試掘調査を実施した。平成18年3月31日調査完了。

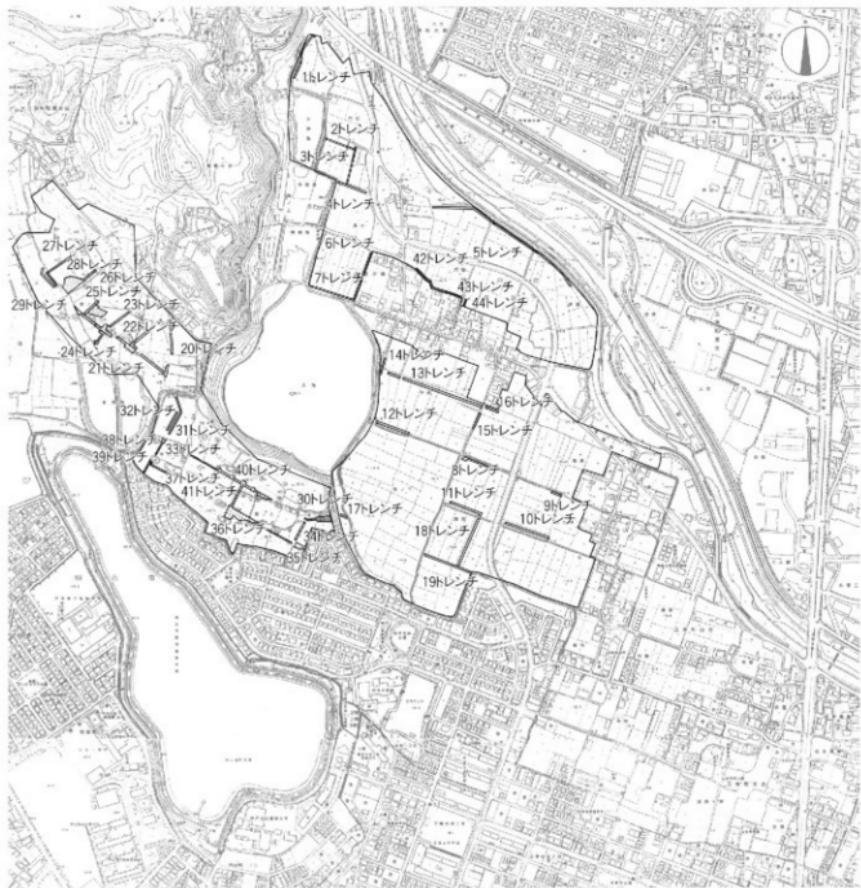
平成18年度（第35次調査）は水路・パイプラインの調査である。8～19トレンチを設定し、平成18年11月1日～平成19年3月31日まで、約1468m²（延べ2002m²）の調査を実施した。12トレンチでは溝から弥生時代後期末～古墳時代初頭の多量の遺物が検出され、13トレンチでは古墳時代前期と中世の溝から遺物



写真1 重機掘削

年度	次数	トレンチ名	調査開始日	調査終了日	面積	担当者	主な内容	
平成17	34次	1トレンチ	2005/11/24	2006/2/17	260m ²	斎木 嶽	古墳時代の溝・流路、中世の掘立柱建物	
		2トレンチ	2005/11/24	2005/12/28	268m ²	阿部 敬生	古墳時代～中世の溝、ピット	
		3トレンチ	2005/11/24	2006/1/27	236m ²	阿部 敬生	中世の溝・水田	
		4トレンチ	2005/11/24	2006/2/14	150m ²	阿部 敬生	中世の溝・水田	
		5トレンチ	2005/12/20	2006/3/31	802m ²	藤井・阿部・斎木	弥生時代前期後半の溝、中世の土坑・柱穴	
		6トレンチ	2005/2/7	2006/3/15	255m ²	斎木 嶽	古墳時代後期の河道	
		7トレンチ	2005/2/9	2006/2/28	85m ²	斎木 嶽	古墳時代後期の河道	
平成18	35次	8トレンチ	2006/11/1	2006/12/4	67m ²	斎木 嶽	中世の溝・水田畦畔	
		9トレンチ	2006/11/8	2006/12/7	26m ²	斎木 嶽	弥生時代後期の遺物	
		10トレンチ	2006/11/9	2006/12/18	247m ²	斎木 嶽	中世の水田	
		11トレンチ	2006/11/28	2006/12/27	135m ²	斎木 嶽	中世の水田	
		12トレンチ	2006/12/19	2007/3/20	160m ²	東 喜代秀	弥生時代後期後半～古墳時代初頭・中世の溝	
		13トレンチ	2006/12/21	2007/2/22	263m ²	東 喜代秀	古墳時代前期の溝、中世の土坑	
		14トレンチ	2007/2/2	2007/2/8	100m ²	東 喜代秀	近世の水路	
		15トレンチ	2007/2/8	2007/3/2	70m ²	東 喜代秀	弥生時代～古墳時代の流路	
		16トレンチ	2007/2/15	2007/3/13	43m ²	東 喜代秀	弥生時代後期・中世の溝	
		17トレンチ	2007/2/5	2007/3/9	15m ²	藤井 太郎	古墳時代のピット、中世の溝	
		18トレンチ	2007/2/5	2007/3/8	170m ²	藤井 太郎	中世の溝・水田	
		19トレンチ	2007/2/13	2007/3/16	172m ²	藤井 太郎	中世の溝・水田	
平成19	37次	20トレンチ	2007/7/25	2007/8/10	97m ²	斎木 嶽	古墳時代後期のピット	
		21トレンチ	2007/7/30	2008/1/9	648m ²	斎木 嶽	古墳1基、奈良～平安時代の掘立柱建物	
		22トレンチ	2007/8/2	2007/9/5	61m ²	斎木 嶽	中世の土坑	
		23トレンチ	2007/8/16	2008/1/9	101m ²	斎木 嶽	中世の溝	
		24トレンチ	2007/11/16	2008/1/10	120m ²	斎木 嶽	円墳1基	
		25トレンチ	2007/9/7	2007/12/21	72m ²	斎木 嶽	円墳1基	
		26トレンチ	2007/9/5	2008/1/9	123m ²	斎木 嶽	円墳4基	
		27トレンチ	2007/9/19	2007/11/8	95m ²	斎木 嶽	土坑	
		28トレンチ	2007/9/14	2007/11/8	42m ²	斎木 嶽	土坑	
		29トレンチ	2007/9/14	2007/11/8	81m ²	斎木 嶽	土坑	
	39次	30トレンチ	2008/1/9	2008/1/22	161m ²	斎木 嶽	中世の土坑	
		31トレンチ	2008/1/9	2008/2/14	129m ²	斎木 嶽	中世の溝	
		32トレンチ	2008/1/9	2008/2/8	86m ²	斎木 嶽	中世の溝	
		33トレンチ	2008/1/22	2008/2/7	101m ²	斎木 嶽	平安時代の掘立柱建物	
平成20	40次	34トレンチ	2008/4/16	2008/5/12	50m ²	東 喜代秀	飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物	
		35トレンチ	2008/4/21	2008/5/19	125m ²	東 喜代秀	円墳1基	
		36トレンチ	2008/4/22	2008/6/18	1110m ²	東 喜代秀	円墳・方墳各1基、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物	
		37トレンチ	2008/6/11	2008/6/17	60m ²	東 喜代秀	溝、ピット	
		38トレンチ	2008/6/10	2008/6/18	50m ²	東 喜代秀	ピット2基	
		39トレンチ	2008/6/10	2008/6/19	47m ²	東 喜代秀	溝1条、落ち込み2ヶ所	
		40トレンチ	2008/5/29	2008/7/17	250m ²	東 喜代秀	方墳1基、飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物	
		41トレンチ	2008/7/2	2008/7/15	70m ²	東 喜代秀	飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物	
		43次	42トレンチ	2008/11/10	2008/12/4	150m ²	東 喜代秀	弥生時代後期・中世の溝
		44次	43トレンチ	2008/4/8	2009/5/8	80m ²	藤井・阿部功	古墳時代前期の土坑、中世の土坑、ピット
平成21	44次	44トレンチ	2008/4/8	2009/4/22	20m ²	藤井 太郎	近世の落ち込み	

表2 調査一覧表



- 平成17年度調査(第34次)1トレーンチ～7トレーンチ
- 平成18年度調査(第35次)8トレーンチ～19トレーンチ
- ▨ 平成19年度調査(第37次)20トレーンチ～29トレーンチ
- ▨ 平成19年度調査(第39次)30トレーンチ～33トレーンチ
- ▨ 平成20年度調査(第40次)34トレーンチ～41トレーンチ
- ▨ 平成20年度調査(第43次)42トレーンチ
- 平成21年度調査(第44次)43・44トレーンチ

fig2. 調査トレーンチ配置図 (S=1:10,000)

が出土した。

平成19年度（第37・39次調査）は、第37次調査は平成19年7月25日～平成20年1月10日まで、水路・パイプライン新設範囲の約1440m²を対象に調査を実施した。調査の結果、後世に削平されて周溝のみとなった古墳群が検出された。平成19年12月16日に現地説明会を開催し、100名の参加があった。第39次調査は、平成20年1月22日～2月7日まで、パイプライン新設範囲約477m²を対象に、30～33トレンチを設定して調査を実施した。

平成20年度（第40・43次調査）は、第40次調査は平成20年4月16日～12月4日まで、水路・パイプライン新設範囲約1762m²を対象に、34～41トレンチを設定して調査を実施した。古墳の周溝、数多くの奈良時代～中世の掘立柱建物群を始めとする多くの遺構、遺物が確認された。

第43次調査は、水路新設範囲の約260m²が調査の対象で、平成20年11月10日～12月4日まで、42トレンチを設定して、調査を実施した。溝から弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の遺物が多量に検出された他、竪穴建物と考えられる遺構も確認された。

平成21年度（第44次調査）は、水路新設範囲の約100m²を対象として、43・44トレンチとして調査区を設定し、平成21年4月8日～5月8日まで延べ約160m²の調査を実施した。古墳時代前期、中世後半の遺構、遺物が確認された。

平成22年度は、埋蔵文化財センターにおいて、整理作業・発掘調査報告書作成業務を実施した。平成18年度～平成22年度に水洗洗浄、接合復元作業を実施した出土遺物の実測作業、遺物写真撮影、図版作成、報告書の編集作業を行なった。



写真2 作業風景



写真3 現地説明会



写真4 遺物接合復元作業



写真5 遺物実測作業

第2節 出合遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の立地

出合遺跡は明石川中流域西岸の沖積地及び洪積段丘上に立地する。

西区押部谷町木見付近に源を発した明石川は木津川、櫛谷川、伊川などの各支流と合流して明石市域に入り、播磨灘へと注ぐ。その流域は、洪積段丘を開拓して小平野を形成しており、大別すると東から伊川谷、櫛谷、明石川本流域の3つの地域に分けられる。

出合遺跡は明石川と櫛谷川の合流地点付近の西岸、標高10~18m前後の沖積地及びその西方の印南野台地から南東に派生する標高26~33mの段丘上に立地する。段丘上は南方に淡路島、明石海峡及び播磨灘を望む眺望の地である。出合遺跡の南半は、昭和50年代前半以降に急速に住宅地化が進行し景観の変化が著しい、一方北半は豊かな田園が広がり、大池、野々池などの大小のため池が段丘上や段丘裾に点在する。

(2) 歴史的環境

当地域は神戸市内で最も濃密に遺跡が分布する地域である。近隣の遺跡から歴史的環境を窺覗する。

①旧石器時代

明石川流域で最も古い段階の生活の痕跡は旧石器時代まで遡る。印南野台地上の西区神出町の雌岡山麓の金棒池、拍子ヶ池などのため池の周囲からは数多くの石器が採取されており、神出遺跡群とも呼称される。この他菅野、池上口ノ池、狩口台、大歳山、明石市藤江川添などの各遺跡から石器の出土が確認されている。

②縄文時代

縄文時代は草創期の有茎尖頭器が印路、玉津田中、青谷、高津橋大塚、明石市野々池遺跡から出土し、続く早期は狩口台遺跡から押型文土器が出土している。前期は、直良信夫氏により大正末年~昭和初期に調査された、山田川流域の大歳山遺跡が著名で、近畿地方を代表する前期「大歳山式土器」の標識遺跡である。

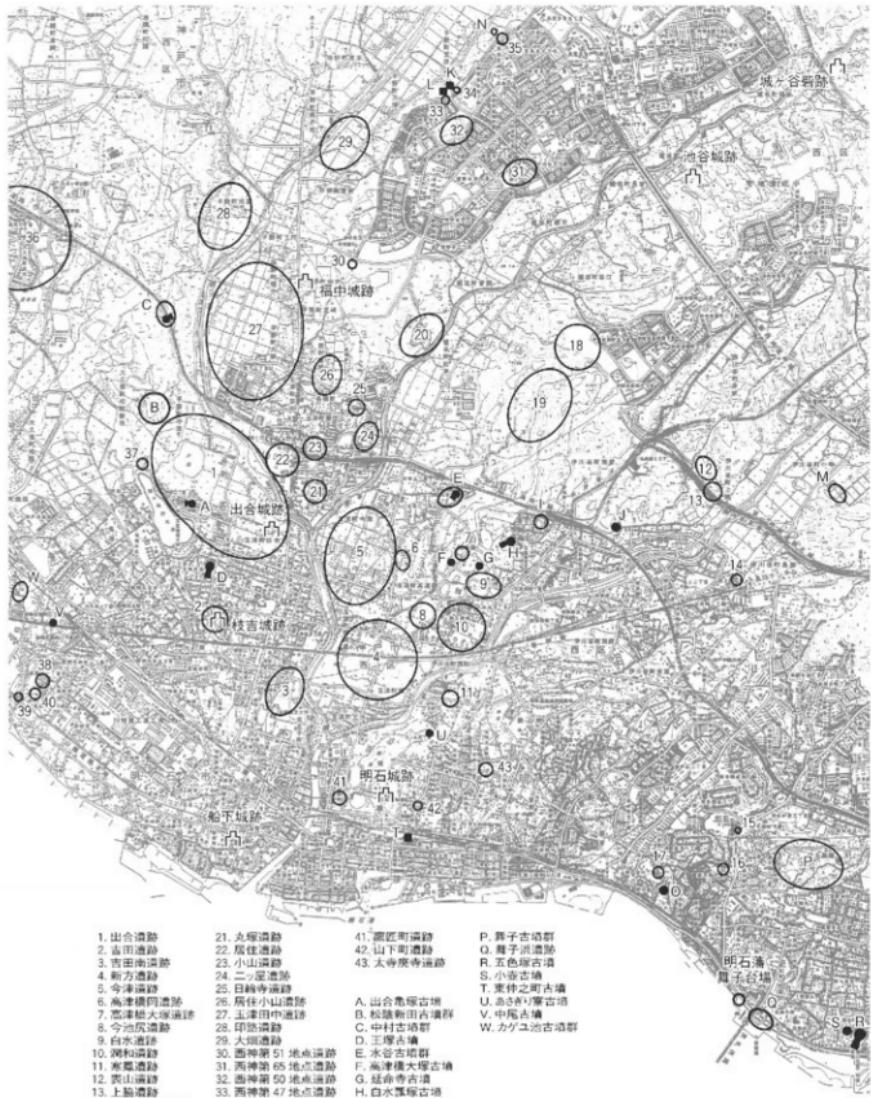
明石川流域では中期の遺跡は明らかではないが、藤江川下流域の明石市藤江出ノ上遺跡から中期~後期の土器、石器が採取されている他、藤江川添遺跡からは早期~後期の各時期の縄文土器が検出されたことが注目される。後期~晩期の遺跡では、明石川中流域の元住吉山遺跡が昭和2年(1927)に直良信夫氏により発見され、近畿地方の後期後半を代表する「元住吉山式土器」の標識遺跡となっている他、印路、人畑などの各遺跡から後期の遺物が出土し、晩期は玉津田中遺跡などで滋賀里式の土器が出土している。

③弥生時代

弥生時代は次の古墳時代にかけて、爆発的に遺跡が急増する。

古田遺跡は大正末期~昭和初期に直良信夫氏らにより調査が行なわれ、出土遺物は今里幾次氏、小林行雄氏らの研究⁽¹⁾により、近畿地方最古段階の弥生土器として位置づけられた。また、新方遺跡では、前期前半に縄文的骨格で抜歯を行なった人物の埋葬例が確認され、弥生時代の近畿地方最古の例として注目された。

明石川中流域では弥生時代のほぼ全般に亘り集落が継続する、いわゆる「母村集落」的な中核的集落の存在が指摘されている⁽²⁾。前期から継続する遺跡には玉津田中遺跡と新方遺跡をあげられる。玉津田中遺跡は集落域、方形周溝墓群により構成された墓域や、生産域としての水田が確認され、中期後半には石包丁生産も確認されている。新方遺跡では中期以降、古墳時代中期まで玉製品の製作が継続して行なわれており、「玉造り工房」の集落として指摘されている。两者共、中期以降集落が大規模化し、中核集落化したものと推定されている。この両者の近隣には、「子村集落」的な衛星集落とも言える、小規模な集落の存在が指摘されており、玉津田中遺跡では居住・小山、新方遺跡では今池尻・今津などの各遺跡が該当するものと考えられる。中期後半には伊川流域の頭高山、上脇、櫛谷川流域の青谷、城ヶ谷、西神第65、50地点遺跡などで丘陵上に



※「西神第〇地点」は、「西神ニュータウン第〇地点」の略

fig3. 周辺の遺跡 (S=1 : 50,000)

立地する、いわゆる「高地性集落」が出現する。池上口ノ池遺跡では中期と後期末に火災により集落が断絶した可能性が指摘されており、これらの現象から瀬戸内海沿岸地域における社会的緊張状態が考えられる。

垂水区投上遺跡からは銅鐸が、西神第65地点遺跡から銅鐸の鋳型が出土したことが注目される。銅剣型石剣が養田中の池、西神第38号、頭高山遺跡、鉄剣型石剣が青谷遺跡から出土している。後期に入ると吉田南遺跡が成立し、以後、古墳時代に至るまで、明石川流域の中核的集落として位置づけられる。また、大歳山遺跡で後期の集落が、明石市藤江別所遺跡では弥生時代後期～古墳時代の井泉、祭祀遺構が確認されている。

④古墳時代

明石川流域で最も古い段階の古墳は、伊川下流西岸の丘陵上に築かれた天王山4・5号墳である。出土遺物から4世紀前半と考えられる。西神第44・45地点遺跡で確認された方墳2基、堅田神社境内1号墳は出土遺物から、4世紀中葉の時期が考えられている。

前期中葉には伊川下流西岸の丘陵上に、明石川流域最古の前方後円墳である白水瓢塚古墳（全長56m）が築かれる。その後、明石川流域に5世紀前半の王塚古墳（全長74m）まで前方後円墳の築造は確認できない。

5世紀後半～末に割竹形木棺を埋葬墓主体とする高津橋大塚古墳（円墳、直径18m）が築造される。5世紀末には明石川、伊川、榎谷川の各流域に、ほぼ同時期に帆立貝形古墳が築造されることが特筆される。明石川流域の出合亀塚古墳、中村5号墳、伊川流域の天王山3号墳、榎谷川流域の水谷大東古墳などである。6世紀前半～中葉の古墳には鬼神山古墳、延命寺古墳群、柿谷古墳群、明石市藤江中尾古墳などが挙げられる。

6世紀中頃以降の横穴式石室を埋葬施設とする古墳は、垂水区舞子古墳群、狩口台きつね塚古墳（円墳、直径26m）などがある。明石川流域では難岡山周辺の古墳や、慶明寺古墳群が知られるが詳細は不明である。近年、明石市東仲之町遺跡で丸木舟を埋葬施設とした後期の方墳（一辺約11m）が確認され、注目される。

集落遺跡では、明石川流域の玉津田中、新方、吉田南の各遺跡が継続して中核集落として挙げられる。新方遺跡は大日地点の玉製品製作、野手・西方地区の5世紀代の多数の竪穴建物跡、多量の滑石製品を伴う祭祀遺構は特筆される。また、伊川下流域東岸の丘陵上に立地する寒風遺跡は、濃密な遺構分布と6世紀末の大礎造りの建物が確認され、渡米系集団との関連が窺われる。この他、中期～後期の白水、小山の各遺跡や、明石市太寺廃寺、鷹匠町遺跡などで6世紀代の集落が形成されている。また、明石市赤根川・金ヶ崎窓、鴨谷池窓などの古墳時代後期に操業した須恵器窯が知られている。

⑤飛鳥時代～平安時代

高津橋・岡遺跡で古墳時代末～飛鳥時代の集落が形成される。吉田南遺跡では奈良時代後期～平安時代前期の計画された配置の掘立柱建物群や、奈良時代の木橋が検出された。明石市太寺廃寺遺跡は明石川流域で確認された唯一の奈良時代の創建が推定される寺院である。吉田南遺跡は明石郡衙、太寺廃寺遺跡は古代山陽道の明石駅家に推定されている。明石市高丘古窯址群は古墳時代末頃～奈良時代に操業した須恵器窯で、鷹尾の生産も確認されている。平安時代の遺跡では白水遺跡から、11世紀前半の梵鐘铸造遺構が検出され、平安時代中期～後期にかけては、日輪寺、上池、今津、水谷、寒風の各遺跡から掘立柱建物が検出されている。平安時代後期の輝宅跡と考えられる礎石建物・掘立柱建物・圍池が検出された二ツ屋遺跡は特筆される。

⑥鎌倉時代以降

平安時代後期以降、遺跡の数は急増し、各遺跡において生活の痕跡が認められると言っても過言ではない。特に当地域を特色づけるものに須恵器生産がある。11世紀後半に神出古窯址群の操業が開始され、生産された須恵器は瀬戸内海地域を中心に、西日本各地一帯に広く流通し、一部は東日本での流通が確認されている。12世紀後半には、生産の拠点は明石市魚住古窯址群に移動し、以後中世を通じて生産が行なわれている。

(3) 既往の調査概要

出合遺跡は、過去には上津橋地区で遺物の採取が報告されていた。昭和52年度に「出合ふれあいの街建設事業」に伴い第1次調査が実施され、以後、昭和58年度の第9次調査まで継続された調査では、弥生時代～鎌倉時代までの多くの遺構・遺物が確認された。以来44次にわたる発掘調査が実施されてきた。ここではこれまでの調査成果についてみてみたい。遺跡はこれまでの調査成果から、明石川西岸の沖積地である低地（以下低地部とする）と、西側の洪積段丘上（以下段丘上とする）の2ヶ所に分布が大別できる。旧石器時代～縄文時代の状況は明らかになっておらず、弥生時代から遺構・遺物が確認されている。

① 弥生時代

低地部の第14次調査で中期中葉の方形周溝墓群が検出され、木棺が遺存していた。第13次（H26次）で中期の水田、第10次調査は後期～終末期の溝から遺物が多量に出土した。第12次調査で後期の周溝墓2基を検出している。南側の低地から段丘へとかかる地点での第25次、第27次調査は弥生時代後期の溝、土坑が検出され、比較的まとまった量の遺物が出土している。弥生時代の遺構・遺物は、遺跡南北と北部明石川南岸付近の低地部に集中して分布する傾向が認められるが、集落域は確認されていない。段丘上での遺構・遺物の分布は、現在までに確認されていない。

② 古墳時代

第1次～第5次、第7・9次調査で、低地部の微高地上において中期～後期の堅穴建物が20数基検出されている。第20次調査では中期の堅穴建物と考えられる遺構が検出された。また、後期の堅穴建物が、微高地から検出されている。第25・27次調査では古墳時代後期の溝、土坑が検出され、遺物も比較的まとまって出土している。

また、段丘上からは、帆立貝形古墳1基、方墳1基、円墳3基で構成される古墳群が確認されている。いずれも墳丘は削平されており、周溝のみが確認された。帆立貝形古墳である亀塚古墳（出合1号墳）は全長29mで、出土遺物には須恵器、須恵質及び土師質の円筒埴輪、家、太刀、盾、人物、動物などの形象埴輪が確認されている。出土遺物から築造時期は6世紀初め頃と考えられ、平安時代末まで周溝はくぼみとなって残存していたものと報告されている。また、3号墳（円墳、直径17m）からは、5世紀後半の須恵器高壺が出土している。この2基以外は古墳時代の遺物の出土が確認されておらず、築造時期は不明である。この他、4～5世紀代の埴輪が段丘上東端部から出土しており、古墳の存在が推定されている。

この他、低地部では出迎昭三氏の編年によるTK73型式に併行するものと考えられる時期の、いわゆる初期須恵器の段階の須恵器窯（出合窯）が検出されている。また、陶質土器、朝鮮三国系軟質土器、初期須恵器の出土が報告されており、朝鮮半島との強い関係が窺われ、出合遺跡の性格を特徴づけるものと言えよう。

③ 飛鳥時代～奈良時代

飛鳥時代の遺構・遺物については、現在までに明らかではない。奈良時代には、第1次～第5次・第7・9次調査において、段丘上で大型の掘立柱建物群や井戸などのまとまった遺構の分布が確認されている。

④ 平安時代後半～鎌倉時代

平安時代後半～鎌倉時代の遺構については、第2次～第9次調査低地部と段丘上から掘立柱建物が複数確認されている。この他、第10次調査で、平安時代末～鎌倉時代初頭（12世紀後半）の掘立柱建物、土坑、溝が検出され、第26次調査では平安時代後半（11世紀末～12世紀前半）の掘立柱建物、土坑が検出されている。共に柱の沈下を防ぐために柱穴に石や礎板を入れている状況が確認されている。段丘東側の低地部及び、遺跡北部の明石川南岸の微高地上に集落の形成が認められる。

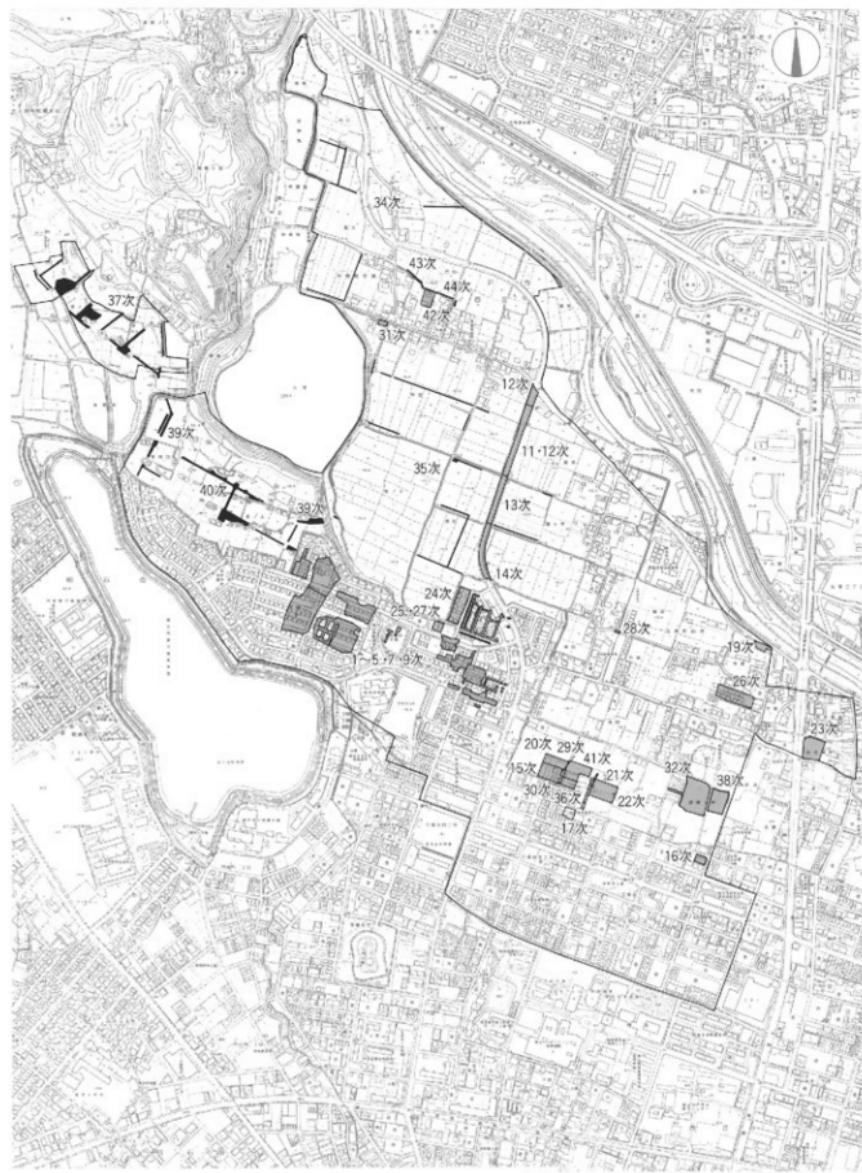


fig4. 出合遭跡調査地 (S=1 : 10,000)

年度	次数	旧次数	調査地名	調査事業名	調査主体
昭和52	1次	1～3次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	上地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
昭和53	2次	4次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	下地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
昭和54	3次	5・6次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	上地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
昭和55	4次	7～9次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
昭和56	5次	10～13次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	上地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
	6次	13～2次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	雨水幹線敷設	兵庫県教育委員会
昭和57	7次	14～16次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	下地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
	8次		神戸市西区玉塚台6・7丁目	下水管敷設	兵庫県教育委員会
昭和58	9～1次	17次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
	9～2次	18次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	上地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
	9～3次	19次	神戸市西区玉津町中野1・2丁目	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所
	10次	20次	神戸市西区玉塚台5丁目	污水管敷設	兵庫県教育委員会
昭和61	11次	22次	神戸市西区平野町中津	道路建設	神戸市教育委員会
昭和62	12～1次	23次	神戸市西区平野町中津	道路建設	神戸市教育委員会
昭和63	13次	26次	神戸市西区平野町中津	道路建設	神戸市教育委員会
平成元年	13～3次		神戸市西区平野町中津	道路建設	神戸市教育委員会
平成2・3	14次	27次	神戸市西区平野町中津	道路建設	神戸市スポーツ教育公社
平成3	15次	28次	神戸市西区玉津町出合字中ノ田	宅地造成	神戸市教育委員会
平成4	16次	29次	神戸市西区玉津町出合	個人住宅建設	神戸市教育委員会
平成5	17次	32次	神戸市西区玉塚台5丁目	地域福祉センター建設	神戸市教育委員会
欠番	18次				
平成7	19次	33次	神戸市西区玉津町出合字寺家	県道拡幅工事	神戸市教育委員会
	20次	34次	神戸市西区玉津町出合字中ノ田	住宅建設	神戸市教育委員会
平成8	21次	35次	神戸市西区玉塚台5丁目、玉津町出合字中ノ川	道路建設	神戸市教育委員会
平成9	22次	36次	神戸市西区玉津町出合字中ノ田	宅地造成	神戸市教育委員会
	23次	37次	神戸市西区玉津町出合屋敷	ガソリンスタンド建設	神戸市教育委員会
	24次	38次	神戸市西区中野1丁目	宅地造成	神戸市教育委員会
平成10	25次	39次	神戸市西区中野1丁目	宅地造成	神戸市教育委員会
	26次	40次	神戸市西区玉津町出合字寺家	宅地造成	神戸市教育委員会
	27次	41次	神戸市西区中野1丁目	個人住宅建設	神戸市教育委員会
	28次	42次	神戸市西区玉津町出合字高田	道路改良	財神戸市体育協会
平成12	29次	43次	神戸市西区玉津町出合字中ノ川	個人住宅建設	神戸市教育委員会
	30次	44次	神戸市西区玉津町出合字中ノ田	個人住宅建設	神戸市教育委員会
平成15	31次		神戸市西区平野町中津	個人住宅建設	神戸市教育委員会
	32次		神戸市西区玉津町出合字辰間ヶ坪	宅地造成	神戸市教育委員会
欠番	33次				
平成17	34次		神戸市西区平野町中津字富池・門田・厚張	圃場整備事業	財神戸市体育協会
	35次		神戸市西区平野町中津字満田・平田	圃場整備事業	財神戸市体育協会
平成18	36次		神戸市西区玉塚台5丁目	宅地造成	神戸市教育委員会
平成19	37次		神戸市西区平野町中津字堂ノ上	圃場整備事業	財神戸市体育協会
	38次		神戸市西区玉津町出合字辰間ヶ坪	宅地造成	神戸市教育委員会
	39次		神戸市西区平野町中津字坂ノ上・平内口	圃場整備事業	財神戸市体育協会
平成20	40次		神戸市西区平野町中津字坂ノ上・平内口	圃場整備事業	財神戸市体育協会
	41次		神戸市西区玉塚台5丁目、玉津町出合字中ノ田	宅地造成	神戸市教育委員会
	42次		神戸市西区平野町中津	個人住宅建設	神戸市教育委員会
	43次		神戸市西区平野町中津字門田	圃場整備事業	財神戸市体育協会
平成21	44次		神戸市西区平野町中津字門田	圃場整備事業	財神戸市体育協会

表3 出合遺跡調査一覧表（太字は本書報告分）

本表の作成には、兵庫県立考古博物館 小川佐太氏にご協力を頂いた。

文献・『兵庫県史考古資料編』1992

『出合遺跡第27次発掘調査報告書』1994

昭和61～63年度・平成元年～5・8～12・15・17～19年度『神戸市埋蔵文化財年報』1989～1996・1999・2000～2003・2006

- 註 (1) 今里幾次「畿内遠賀川式土器の細別について－河内西瓜破遺跡水門西地点調査概報－」『古代文化』13-8 日本古代文化学会 1942
直良信夫・小林行雄「播磨古田史前遺跡の研究」『考古学』3-5 東京考古学会 1942
(2) 丸山 漢「弥生時代の集落の動態－浜坂国境地城－」『完班』15周年記念論文集編集委員会 1992

主要参考文献

全般に関わるもの

- 直良信夫「近畿古文化考」草牙書房 1943
黒川義隆編「明石市史資料（考古編）第4集」明石市教育委員会 1985
新修神戸市史編集委員会編「新修神戸市史 歴史編I 自然・考古」神戸市 1989
兵庫県史編集専門委員会編「兵庫県史 考古資料編」兵庫県 1992
兵庫県教育委員会「神戸市西区・玉津田中遺跡」第1～6分冊 兵庫県教育委員会 1994～1996
①旧石器時代
丸山 漢編「明石最古の狩人 明石原人から縄文人へ」発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市教育委員会 2009
②縄文時代
直良信夫（春成秀爾編）「播磨大歳山遺跡の研究」真陽社 1987
小村善則「播磨大歳山遺跡I - 縄文土器 -」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986
春成秀爾「藤江山ノ上遺跡の縄文土器」「藤江別所遺跡」明石市教育委員会 1996
日野博史・阿部 功「玉津田中遺跡 第8次調査」『平成5年度 神戸市埋蔵文化財調査年報』神戸市教育委員会 1996など
③弥生時代
福原昭嘉「藤江別所遺跡」明石市教育委員会 1996
山本三郎「明石海峡・明石川流域における弥生時代の高地性集落小論」「あまのともしび」原口先生の古希を祝う集い事務局 2000
山口英正編「新方遺跡 野手・西方地区発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003
丸山 漢編「明石の弥生人」発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市教育委員会 2010
福宜田伸作「明石川流域の弥生時代集落」「坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政のはざまで－」坪井清足先生の卒寿をお祝いする会 2010
④古墳時代
千種 浩・須藤 宏「天王山5号墳」「昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1989
明石市文化博物館編「一古墳時代の明石～発掘された明石の歴史展」明石市文化博物館 1995
山本雅和・浅谷誠吾「水谷大東古墳」「平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1999
宮本郁雄編「神戸の古墳」神戸市教育委員会 2000
安川 澄編「白木遺跡第3・6・7次 高評橋大塚遺跡第1・2次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2000
明石市文化博物館編「発掘された明石の歴史展～まさに眠る古代の姿～」明石市文化博物館 2001
谷 正俊編「水谷遺跡第10次調査 馬掛原遺跡第1次調査」神戸市教育委員会 2005
丸山 漢編「西神ニュータウンの遺跡」神戸市教育委員会 2006
安田 澄編「白木瓢塚古墳発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2008
徳田誠志・清吉裕二「玉津陵墓参考地墳丘群・外堤内法護應岸工市区域の調査」「貴賤墓紀要」第53号 宮内庁書院部 2003
⑤飛鳥～奈良時代
明石市文化博物館編「発掘された明石の歴史展 太寺廃寺と高家寺」明石市文化博物館 2004
明石市教育委員会地域連携課編「明石市太寺廃寺跡現地説明会資料」明石市教育委員会 2009
⑥平安時代
新修神戸市史編集委員会編「新修神戸市史 歴史編II 古代・中世」神戸市 2010
山本雅和「白木遺跡 第4次 埋蔵文化財発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1999
⑦鎌倉時代以降
森田 稔「出合遺跡系中世須磨惣生産の成立と展開－神山古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』3 神戸市立博物館 1986

出土遺跡

- 神戸市教育委員会「昭和61～63、平成元～5・8・12・15・17～19年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1989～1996・1999・2000～2003・2006・2008～2010
峰本義昌・亀田修一「出土遺跡」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県 1992
宮山直人編「出土遺跡 第27次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1994
亀田修一・「播磨出土遺跡の検討」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』岡山理科大学埋蔵文化財研究会 2008

第2章 第34次調査

第1節 1 トレンチ

第34次調査は圃場整備事業の北部に位置する調査区で、明石川と丘陵が近接する北端部から大池の北までの範囲及び、明石川沿いの範囲に、1トレンチから7トレンチまでを順に設定して、調査を実施した。調査トレンチは圃場整備事業計画の水路やパイプラインが新設される部分にあたる。

1トレンチは事業地の北端部に位置する南北方向のトレンチで、その全長は約100mである。トレンチの北半部は現水田部分で、南半部は丘陵裾部にあたる。遺構が発見されたのはトレンチの北半部の水田部分で、基本層序は現水田耕作土・底土の下層に砂質シルトの旧耕作土層や底土層があり、茶灰褐色シルト質極細砂層の基盤層が第1遺構面となり、その下層のしまりの良い暗茶褐色シルト質極細砂が第2遺構面となる。

南半部の丘陵裾部では表土下10cm~20cmで地山面となり、後世の搅乱はあるものの、遺構は確認されなかった。

第1遺構面

掘立柱建物1棟、土坑1基、溝5条、ピットを検出した。

SB01

トレンチの中央部付近で確認された、南北2間(4.5m)以上、東西1間(2.2m)以上の掘立柱建物で、全体の規模は調査区外に延びるため明らかではない。主軸は南北方向と思われ、N-18°-Eである。柱間は南北方向が2.2m、東西方向が2.2mである。柱穴の直径は30cm内外、深さ30cmの円形の掘形である。埋土に炭化物や焼土が含まれており、焼失したものであろう。出土遺物から13世紀頃の建物と考えられる。



fig5. 第34次調査 トレンチ配置図 (S=1:5,000)

SK01

トレンチ外に延びるため、全体の規模は明確ではないが、直径1.5m、深さ35cmの円形の土坑である。出土遺物から13世紀頃の時期が考えられる。

溝

SD01は幅50cm、深さ15cmの溝で、北側の丘陵方向から延びる溝である。

SD02も丘陵方向から南に向けて流れる溝で、幅90cm、深さ30~50cmを測る。調査区内ではその一部のみを検出したにすぎないため、全容は不明であるが、溝の片側の一部は幅を拡げて緩やかに底から肩部に至る。溝の埋土は砂質シルトが殆どであるが、中層には第2遺構面の基盤層がブロック状に混入しており、溝の掘削土を短期間で埋め戻したような状況が推測される。このSD02を境に北側は、後世の水田化によって遺構面が一段下がっている。SD02の時期は11世紀頃のものと考えられる。

SD03は南北方向の溝で、幅2.8m、深さ35cmである。溝は肩部から浅く緩やかに落ち込み、一段の平坦部を有し、さらに深くなっていた。溝からは10世紀頃の壺や椀が出土している。

2~7は溝埋土より出土した須恵器坏身である。2は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外傾き、端部を丸くおさめる。復元口径12.9cm、器高7.4cmである。3は底部から直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。復元口径14.2cm、器高3.7cmである。4・5は回転ヘラ切りの底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は、4はわずかに外傾し、5は外につまみ出している。内面は回転ナデ調整で仕上げる。4は復元口径12.6cm、器高3.3cmである。5は復元口径13.7cm、器高3.0cmである。6は平高台の底部から内湾気味に立ち上がる体部からやや外傾する口縁部となり、端部を丸くおさめる。復元口径15.6cm、器高5.6cmである。7は底部に断面方形の短い貼り付け高台をもつ。体部は直線的に上方に伸び、口縁端部はやや

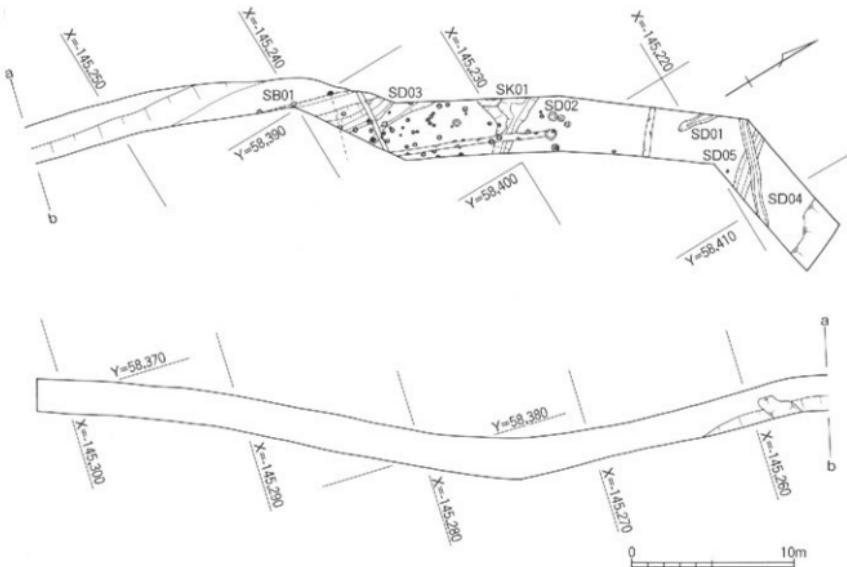


fig6. 1トレンチ 第1遺構面 平面図

細く丸くおさめている。復元口径15.6cm、器高5.4cmである。

SD04は、幅が60cm、深さ15cmの溝で、ほぼ東西方向に流れている。SB01の東西方向と同じ方向性を持っている。溝からの遺物は小片で特定が困難であるが、13世紀頃と思われる。

SD05は、幅が1m、深さ30cmの溝である。溝からは8・9の須恵器坏蓋が出土している。天井部回転ヘラケズリの範囲は小さい。7世紀初頭頃の時期が考えられる。

第2造構面

土坑5基、溝6条、ピット、流路を検出した。

SK201

長径1.1m、短径55cm、深さ20cmの楕円形の土坑で、埋土は淡茶灰色シルト質極細砂のみであった。土坑掘形は比較的垂直に掘られている。遺物は時期不明の土師器の細片が出土している。

SK202・SK203

隣接して検出した土坑で、SK202が長径80cm、短径50cm、深さ15cm、SK203が長径90cm、短径40cm、深さ10cmの規模で、どちらも楕円形で、浅い皿状の土坑である。

SK204

レンチ外に延びるため、全体の規模は不明確だが、長径1.5m以上、短径90cm、深さ8cmの楕円形の平面形で、浅い皿状の土坑である。土坑の中央部は暗渠で搅乱されていた。埋土からは長胴形の土師器の壺がやまとまって出土している。土坑の埋土は淡灰褐色砂質シルトである。

1はSK204から出土した遺物で、丸底の底部から直立する体部を有し、胴部の中央部分が最大径となる。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁端部はやや尖り気味におさめる。表面は剥離して調整は不明である。器高

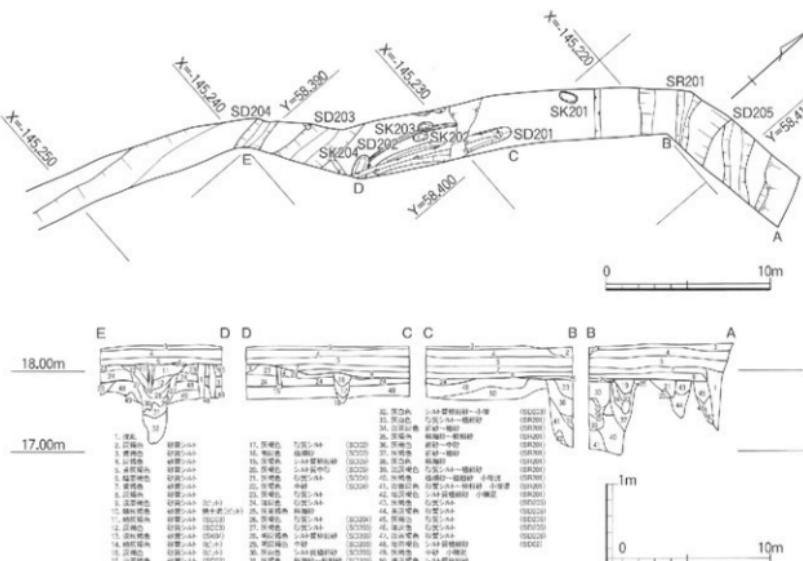


fig. 7 1トレンチ 第2造構面 平面図・東壁土層断面図

36.2cm、口径17.6cmである。6世紀頃の時期が考えられる。

溝

SD201は幅1.2m、深さ10cmの浅い溝で、SD202はSD201の西側に沿うように検出された溝である。SD202は幅20cm、深さ7cmの細くて深い溝で、円弧の一部でもあるかのように整った弧を描いている。両者が一対のものとして機能していた可能性も考えられる。両者ともに埋土は淡灰白シルト質極細砂である。遺物は出土していない。

SD203は第1造構面のSD03の下層で確認できた幅2.5m、深さ80cm溝で、南北方向に流れている。埋土はシルト質極細砂と細砂の互層からなる。

10・11はSD203から出土した須恵器坏身で、10は口径13.0cm、器高4.7cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。11は復元口径13.4cm、復元器高5.5cmを測る。どちらもたちあがりは内傾し、端部は丸くおさめる。底部の回転ヘラ削りの範囲は小さい。6世紀後半頃の時期が考えられる。

SD204はSD203と方向を同じくする幅1.1m、深さ30cm溝である。埋土は灰褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。

SD205はトレントの北端部で検出した溝である。溝の幅は1.5m、深さ30cmである。埋土は灰褐色シルト質極細砂である。古墳時代初頭の遺物が出土している。

SR201はトレントの北端部で調査区を東西方向に横切る、最大幅5.6m、深さ80cmの自然流路である。埋土は砂質シルトと極細砂が中心で、流路の形状は肩部から逆台形状に落ち込み、中央の最深部に向けて緩やかに下がっている。流路の中層から下層では完形の須恵器が数点出土している。

12は須恵器坏蓋で復元口径13.8cm、器高5.1cmを測る。外面ともに回転ナデで成形し、天井頂部は回転ヘラケズリで調整を施す。天井部と口縁部の境は凹線状になっている。

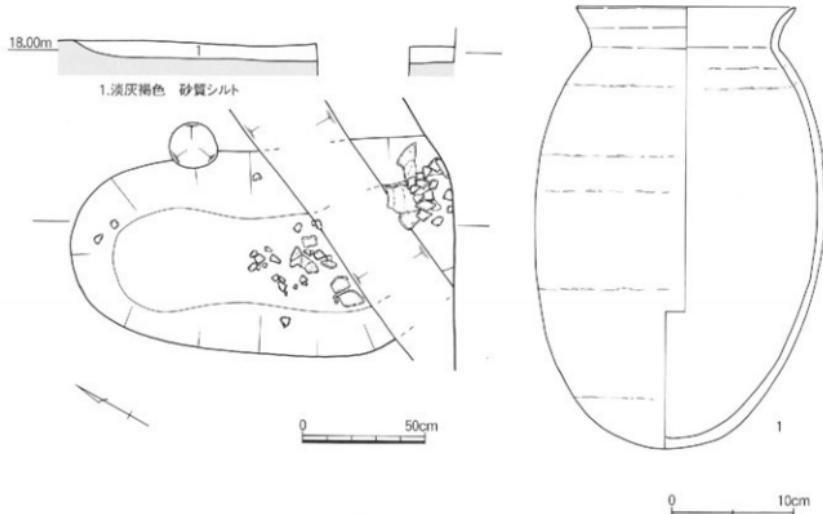


fig8. 1トレント SK204 遺物出土状況平面・断面図・出土遺物

13~15は須恵器坏身である。13は口径12.4cm、器高5.0cmを測る。たちあがりはやや内湾し、口縁端部は丸くおさめる。底部は回転ヘラケズリ調整を施す。14は口径13.6cm、器高4.9cmを測る。たちあがりはやや内湾し、口縁端部はやや尖らせ気味におさめる。口縁部の一部で、故意と思われるような打ち欠きがある。15は口径12.2cm、器高4.6cmを測る。たちあがりはやや内湾する。内外面とも丁寧な回転ナデで成形し、底部は回転ヘラケズリを施している。



写真6 1トレンチ SK204



写真7 1トレンチ SR201遺物出土状況

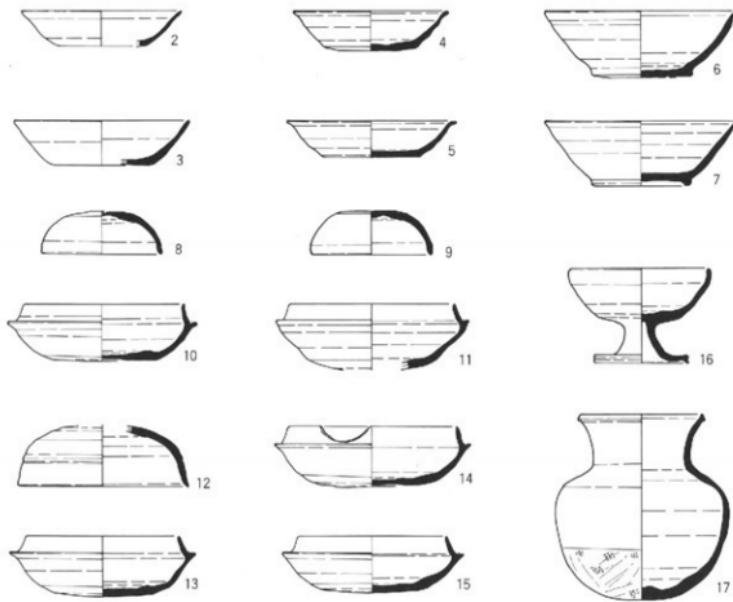


fig9. 1トレンチ 遺構出土遺物

16は無蓋高壺である。口径11.3cm、底径7.6cm、器高7.8cmを測る。

17は須恵器の壺で、口径10.0cm、器高15.2cmを測る。やや肩の張る体部から頸部が外反して立ち上がり、口縁端部はやや内傾し、面を持つ。体部下半部は格子目状タキの後に板ナデで調整している。体部上半部から口縁端部にかけては回転ナデ調整を施している。これらの遺物は6世紀後半から7世紀にかけての時期が考えられる。

1トレンチでは13世紀代の掘立柱建物が確認されたことは、周辺に当時の集落跡が存在することを示すものと言えよう。建物としてのまとまりは1棟のみであるが、SD02とSD03の間にはピットが多く検出されており、土師器の皿などが出土したピットもあった。丘陵裾の平坦部に数棟の建物の存在したことが伺いしれる。柱穴から焼土や炭化物が出土しており、焼失したと考えられるが、その後には水田としての土地利用が現在まで続いている。

SR201は丘陵裾に沿うように南に向かって流れていると考えられるが、出土した完形の須恵器は、そのどれもが摩滅しておらず、そう遠くない所から流入したものと思われる。例えば、それは丘陵上の古墳の存在を考えることも可能性としては残るだろう。

第2節 2トレンチ

1トレンチの南側に位置する天神池の東側に設定された、排水路部分の約60mの調査区である。検出した遺構は溝8条、ピット3基である。

溝

SD01はトレンチの西端部で検出した、幅1.2m以上、深さ82cm以上の南北方向の溝である。埋土はシルト質極細砂と砂層の互層で、下層は砂礫混じりとなる。須恵器・土師器が出土している。他の溝に比べ、深くなるので、西側の谷地形の落ち際に当たるような部分である可能性も考えられる。

SD02はSD01の東側に位置し、幅1.8m、深さ50cmの南北方向の溝である。埋土は灰褐色シルト質極細砂で断

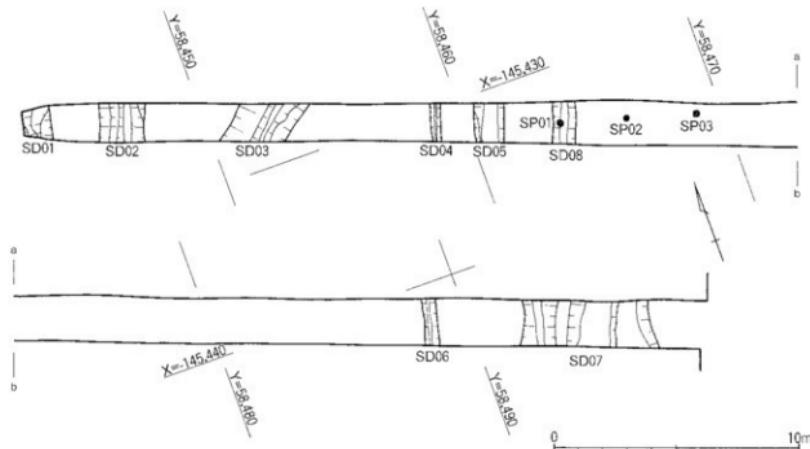


fig10. 2トレンチ 遺構平面図

面は緩やかなV字状を呈する。溝からは18・19の遺物が出上している。18は須恵器の壺蓋である。口径9.9cm、器高3.4cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で、天井頂部は回転ヘラ切り後ナデで調整している。19は須恵器の壺身で、底部に端部が外に突き出るような高台が貼り付く。体部は底部から口縁端部にかけて直立し、口縁端部はやや外反し丸くおさめる。口径15.8cm、器高4.3cmである。7世紀後半頃の時期が考えられる。

SD03は他の検出された溝と方向が異なり、北東から南西方向の溝である。溝の幅は2.4m、深さは56cmである。埋土は淡灰褐色砂質シルトで、下層は砂層となる。埋土から20の須恵器が出上している。口径11.8cm、器高3.8cmを測る。たちあがりはやや内湾し、口縁端部は外反する。内外面とも回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切りである。口縁部の一部で、故意と思われるような打ち欠きがある。6世紀後半頃のものであろう。

SD04は幅34cm、深さ5cmの南北方向の溝である。

SD05は幅1.2m、深さ28cmの南北方向の溝である。埋土は灰褐色シルト質極細砂で、肩部から丸みを持って落ち、底面はやや平らである。遺物は中世の須恵器・土師器の細片が出上している。

SD06は幅62cm、深さ15cmの南北方向の溝である。埋土は灰褐色シルト質極細砂である。遺物は中世の須恵器・土師器の細片が出上している。

SD07はトレンチ東端部で検出した、幅5.6m、深さ34cmの南北方向の溝である。溝の中央部で一部高まる部分があり、2条の溝が最終的には同一の埋土で埋没しているようでもある。埋土は上層は淡灰褐色砂質シルト

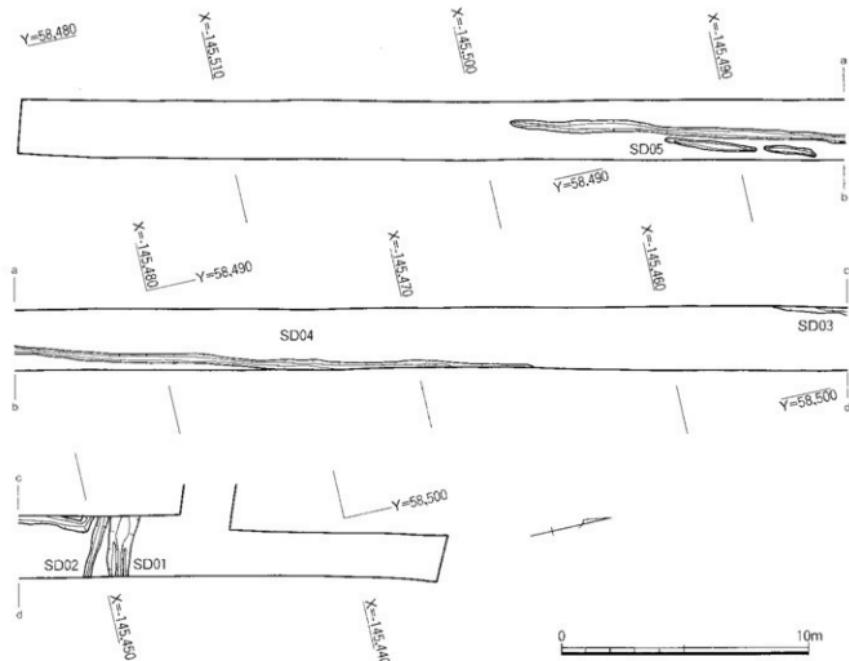


fig11. 3 トレンチ 遺構平面図

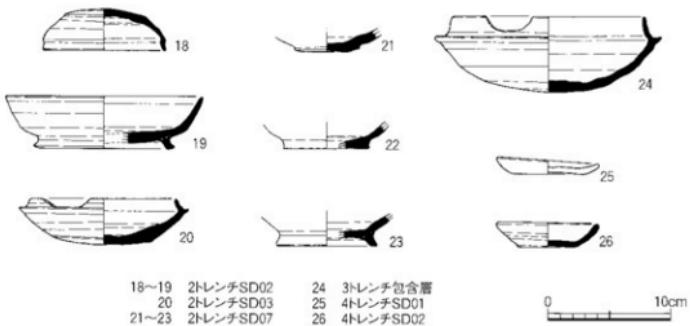


fig12. 2~4トレンチ 出土遺物

ト層で、下層は細砂混の灰褐色砂質シルト層である。溝の底面は凹凸があり、細砂で埋まっている。細砂層には中世の須恵器、土師器の細片が比較的多く含まれていた。21~23は出土遺物である。いずれも須恵器の壺の底部である。

SD08はトレンチの中央辺りで検出した幅1.2m、深さ61cmの南北方向の溝である。埋土は淡灰色シルト質細砂で、断面はU字状である。

ピット

トレンチの中央部で、ほぼ等間隔で並ぶ3基のピットを検出した。SP01は直径22cm、深さ42cm。SP02は直径22cm、深さ55cm。SP03は直径22cm、深さ62cm。SP02・03の断面では柱痕が認められた。ピットの間隔はSP01~02が2.6m。SP02~03が2.8mである。1列にほぼ等間隔に並ぶことから掘立柱建物とも考えられる。出土遺物から鎌倉時代頃のピットである。

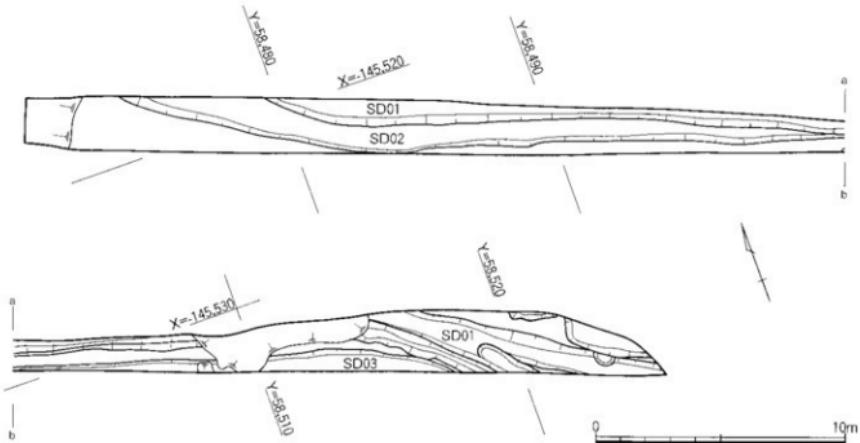


fig13. 4トレンチ 遺構平面図

第3節 3トレント

2トレントの東端部が3トレントの北端部で接点を持つ、南北方向の約86mの調査区である。溝を5条検出した。

基本層序は耕作土・床土・数枚存在する旧耕作土の下層に淡灰色シルト質細砂の遺構面となる。その下層は厚い灰褐色系のシルト層が数層存在する。

溝

SD01はトレントの北端部で検出した、幅1.2m、深さ14cmの東西方向の溝である。埋土は淡灰色シルト質極細砂である。

SD02はSD01の南側で近接して検出した、幅36cm、深さ5cmの東西方向の溝である。埋土は淡灰色シルト質極細砂である。トレントの西壁付近でSD01と合流する。

SD03はSD02の南側でSD02と同方向であった溝が、直角に南に折れて流れている。幅44cm、深さ10cm。埋土は淡灰色シルト質極細砂である。

SD04はトレントの中央部で検出した南北方向の溝で、幅35cm、深さ18cm、検出した長さは34.4m。埋土は淡灰色シルト質極細砂である。SD03と同一方向で、ほぼ平行していると考えられる。SD03との間は約3mである。

SD05はSD04に隣接して検出した溝で、幅36cm、深さ8cm。埋土は淡灰色シルト質極細砂である。

これらの溝は方向性に統一性があり、埋土も同一であることから、同時に存在していた水田に伴う勤溝と考えられる。2トレントで検出した溝とも方向性が同一であることから、周辺一体には同様な溝が縱横に存在するものと考えられる。若干の誤差はあるものの、現代の水田区画の方向も同一であると言える。

3トレントの溝からは12世紀後半～13世紀の遺物が出土している。

24は包含層より出土した須恵器の坏身である。口径15.5cm、器高6.2cmを測る。たちあがりはやや内済し、口縁端部はやや尖らせ気味に丸くおさめる。内外面とも回転ナデ調整で、底部は回転ヘラケズリである。20の須恵器にもあったような、口縁部の一部に故意と思われるような打ち欠きがある。6世紀後半頃の時期が考えられる。

第4節 4トレント

3トレントの南端部で接点を持つ、東西方向の約60mの調査区である。溝を3条検出した。基本層序は耕作土・床土・数枚存在する旧耕作土の下層に灰色シルト質細砂の遺構面となる。

溝

SD01はトレントの北壁際で検出した溝で、調査区外に延びるため全体の規模は不明確であるが、検出した幅は2.0m、深さ20cmの東西方向の溝である。埋土は淡灰色シルト質極細砂である。SD02の最終堆積土の可能性も残る。

SD02はSD01の南側で検出した、幅1m、深さ11cmの東西方向の溝である。溝の大部分はSD01によって切られている。埋土は淡灰色シルト質極細砂である。

SD03はトレントの南壁際で検出した溝で、検出した幅は90cm、深さ6.5cmである。埋土は淡灰色シルト質極細砂である。

SD01・02からは中世の遺物が出土している。これらの溝の時期は3トレントで検出した溝と同時期であり、同様な性格の溝であると考えられる。

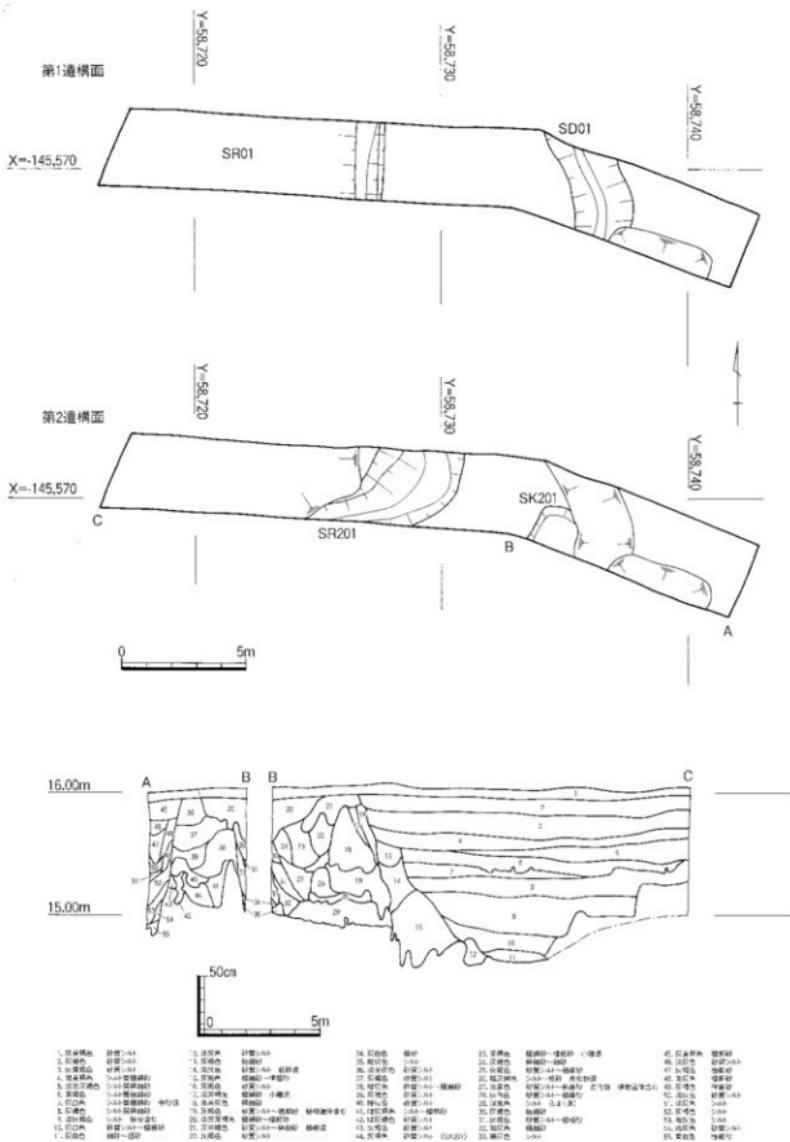


fig14. 5トレンチ2区 遺構平面図・南壁土層断面図

第5節 5トレンチ

5トレンチは、県道野村明石線と明石川に挟まれた地区の圃場に新設される水路部分の調査区で、明石川の堤防沿いにあたる。調査対象となるトレンチは全長350mに及び、現在の圃場の区画や農道・水路によって分断されており、便宜上、トレンチを分割して小調査区名を付した。調査区は北西より順に1区～8区を設定した。

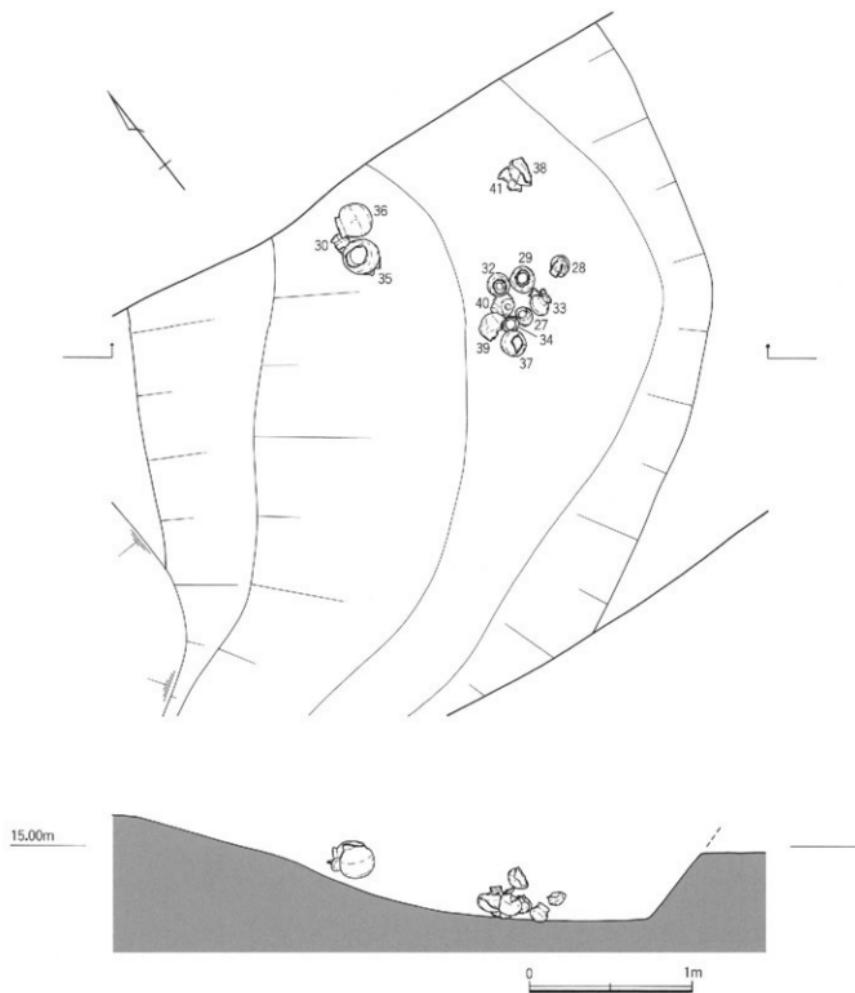


fig15. 5トレンチ2区 SR201遺物出土状況平面・立面図（数字は遺物番号）

1 区

トレーナーの最西北端の調査区である。遺物包含層の下層で遺構面を確認したものの、遺構の確認は出来なかつた。遺物包含層も北端では希薄となる。

遺構面の下層は礫層の河道が存在することが確認されている。

2 区

1区の南東方向の調査区で2面の遺構面を確認した。基本層序は耕作土・床土の下層に数枚の旧耕作土・床土となり、第1遺構面の基盤層となる。

第1遺構面

溝1条、河道を検出した。

SD01は調査区の東半部で検出した、幅2.4m、深さ1.1mの南北方向の溝である。埋土は灰褐色系の極細砂層が数層堆積しており、断面はV字状である。

SR01は調査区の西半部で検出した河道で、東端部の肩は検出したが、調査区外に延びるため規模は明確ではない。1区の下層で確認した旧河道の上層にあたるものではないかと考えられる。検出した幅は11m、深さは1mである。埋土は上層は茶褐色系のシルト質極細砂で下層は灰褐色系の極細砂層となる。埋土からは古墳時代から中世までの遺物が出土している。

第2遺構面

自然流路1条、土坑1基を検出した。

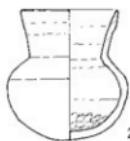
SR201は調査区の中央部で検出した自然流路で、幅3.5m、深さ96cmである。流路の西肩部はSR01によって削平を受けている。流路は北側から流れ、調査区内で西方向にカーブしている。埋土の上層は砂質シルトで、下層は砂層である。流路の底は暗褐色のしまりの良いシルト層である。

流路の底からは古墳時代前期の土師器が数点出土している。土師器の器種は壺、壺、高杯である。遺物はまとまって出土しており、正立のものが多く、流入してきたものではなく、意図的に流路底に置かれたような様相を示している。いわゆる祭祀的な行為があった可能性があると考えられる。

27は直口壺である。胴部最大径を中位にもつ球体を呈し、頭部から口縁部にかけてやや開き気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に丸くおさめている。口径7.6cm、器高10.7cmである。内外面ともナデ調整を行い、底部内面には指頭圧痕が残る。また、上半部の内外面ともに粘土接合痕が残る。胴部から口縁部には黒斑がある。

28~30は小型丸底壺である。28は体部中位に最大径をもつもので、算盤玉状の形状を呈す。胴部最大径で器壁はいったん薄くなり、肥厚ながら頭部へ繋がる。底部はやや尖り気味である。くの字状の口縁部は頭部から短く開き、口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。内外面ともにハケ調整で、胴部上半から口縁部にかけての外面はハケ後にナデで調整をしている。口径10.2cm、器高9.7cmである。29は小型丸底壺とするにはやや不適切な印象も残るが、小型丸底壺として取り扱う。口縁部は欠損している。丸底の底部から緩やかに聞く球体の胴部はやや横長の感がある。外面はハケ調整で、底部内面には指ナデの痕跡が強く残っている。胴部内面には粘土接合痕が明瞭に残る。外面は全体がスヌで覆われている。30は口縁部を欠損している。丸底の底部から球体を呈し、内外面ともにナデ調整である。胴部に黒斑がある。

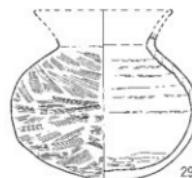
31・32は二重口縁壺である。31は頭部と口縁部のみが残存している。頭部で強く屈曲し口縁部はS字状に立ち上がる。口縁端部はやや外傾し丸くおさめる。胴部は内外面ともにハケ調整を施している。復元口径は13.6cmである。32は平底の底部から球体の胴部となり、口縁部は、くの字状に屈曲する頭部からS字状に立



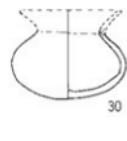
27



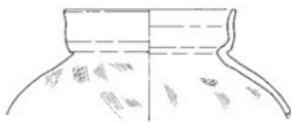
28



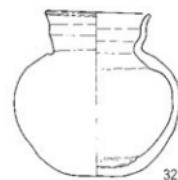
29



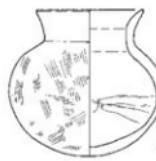
30



31



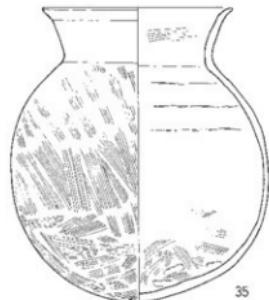
32



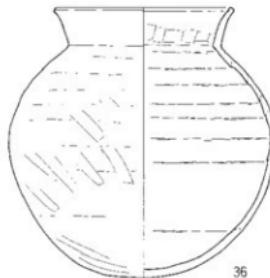
33



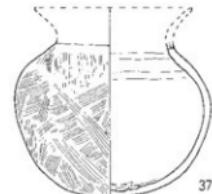
34



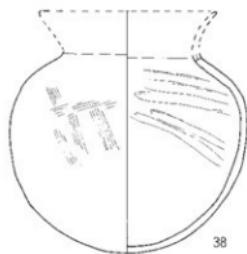
35



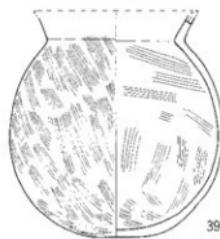
36



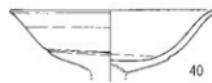
37



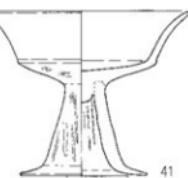
38



39



40



41



42

27~41 SR201
42 SK201

fig16. 5トレンチ2区 造構出土遺物

ち上がる。口縁端部は外傾し、丸くおさめる。器壁はやや厚めである。口縁部は横方向のナデ、胴部内外面ともにナデ調整である。内外面共に胴部中位から下は粗いハケ調整である。口径8.3cm、器高13.5cmである。

33は短頸壺である。丸底の底部から球体の胴部をもつ。胴部の中位に最大径を有す。頸部から外反して口縁端部に至る。胴部外面はハケ調整で、内面は強いユビナデが残る。口縁端部は横方向のナデ調整を施す。口径8.8cm、器高12.1cmである。

34は小型の鉢である。平底から胴部が立ち上がり、口縁部がわずかに外反している。口縁端部は小さく丸くおさめる。器壁内外面ともに粘土接合痕が明瞭に残る。調整は指による粗いナデで調整している。口径8.3cm、器高9.0cmである。胴部に黒斑が残る。

35～39は壺である。35は丸底から立ち上がる胴部はやや継長で、頸部から緩く外反する口縁部が延びる。口縁端部付近で一旦屈曲して口縁端部になる。口縁端部はやや尖り気味で狭い端面を有する。胴部外面は細かいハケ調整が施されている。内面もハケ調整が施され、中位はハケの後にナデで調整している。内面には粘土接合痕が残る。胴部中位から下にはススが付着しており、黒斑がある。口径15.2cm、器高24.2cmである。36は丸底から胴部が球体を呈する。頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁端部は若干外傾し、端面を有する。口縁端部内面はわずかに内側につまみ出している。胴部外面は丁寧なイタナデ、内面はナデ調整である。内面には粘土接合痕が明瞭に残る。胴部には全面ススが付着し、黒斑がある。口径14.5cm、器高22.1cmである。

SK201は調査区の中央部で検出した方形の土坑で、調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。検出した長さは1.8m、深さ40cmである。土坑の一部は上層のSD01に切られている。埋土は砂質シルトである。土坑の底は平らで、土坑壁はオーバーハング気味である。土坑の底からは42のミニチュアの壺が1点出土している。底部は上げ底でズンクリした胴部が内済し、口縁部が小さく付く。器壁は厚く、ナデで調整している。胴部には黒斑がある。口径3.5cm、器高6.2cmである。古墳時代中期の時期が考えられる。

3 区

2区の東側に続く調査区である。基本層序は耕作土・床土の下層に数枚の旧耕作土・床土となり、暗灰褐色砂質シルト層が遺構面となる。確認された遺構は土坑1基、溝7条、ピットである。

SK01は中央部で検出した、直径1.1m、深さ50cmの隅丸方形の土坑である。溝はSD01～03・06がほぼ南北方向で、SD04・05は方向が異なる。SD07についてはそれ以外とは全く違う方向を取っている。深さは10cm～30cmであった。これらの遺構からは少量の遺物しか出土しておらず、時期の確定は困難であるが、中世期のものであると考えられる。

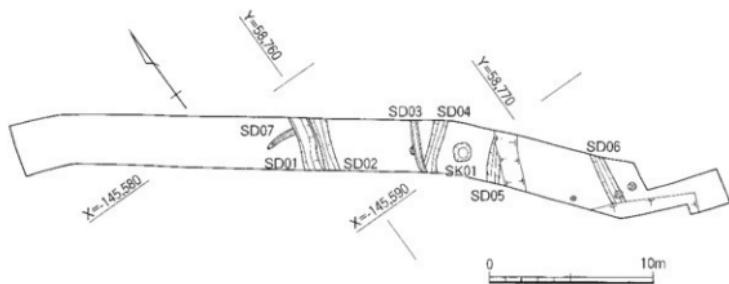


fig17. 5トレーナー3区 遺構平面図



fig18. 5トレーンチ4区 南壁土層断面図

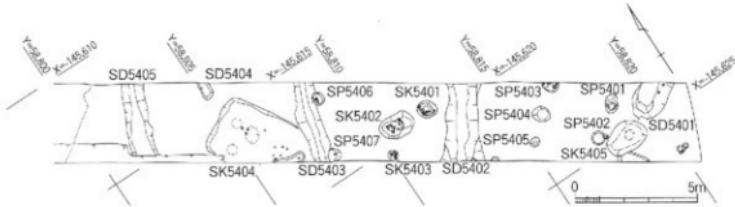


fig19. 5トレーンチ4区 SD5401平面・断面図

4 区

4区の基本層序は、現耕土、現床土、灰色粘質土（旧耕土層）の下に黄灰色シルトが0.2mの厚さで水平に堆積する。非常に軟弱な土壤で、この層の下面で畦畔状の隆起が認められた。下層でさらに古い水田層が確認されているが、いずれも遺物を全く含まず、時期は不明である。床土下0.5mに堆積する茶灰（褐）色シルトに弥生時代前期後半～中期初頭頃の遺物を含む。直下の灰色シルト質極細砂～灰白色極細砂上面が遺構面となる。溝5条、土坑5基、柱穴を検出した。

SD5401

調査区内での検出長1.5m、幅1.3m、深さ約0.5mを測り、調査区の東側へ延びる。断面の形状は緩やかな箱形を呈し、北側では底部がオーバーハングする。シルト層の埋土中に部分的に砂が挟まる。溝底に薄く堆積した砂を除き、一様に炭が混じる。壺や甕片などの土器、サスカイト片が埋土上層から出土している。

43は広口壺の口縁部で、復元口径22.4cmを測る。口縁端部には刻目を施す。内外面共にヘラミガキ調整で、外面の口縁下にナデを施す。内面にはヘラ描の平行沈線2条と2条の波状文で飾る。44・46～48も壺である。44は二重口縁壺の口縁部で混入か。46は無頸壺で、復元口径7.6cmを測る。口縁部は内傾し、端部に刻目を施す。体部外表面はヘラ描沈線と三角刺突文で飾

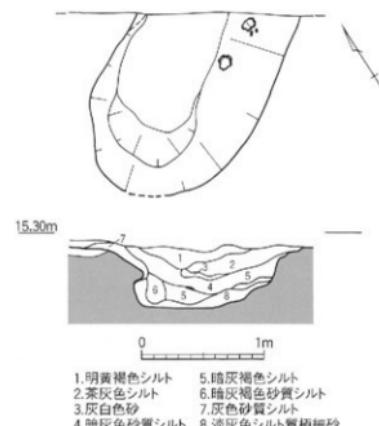


fig20. 5トレーンチ4区 SD5401出土遺物

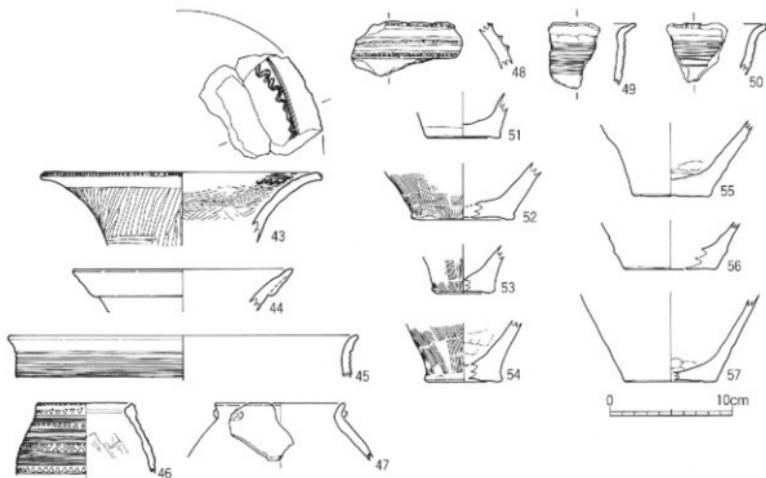


fig21. 5トレンチ4区 SD5402・5403出土遺物

る。45・49・50は壺の口縁部で、外反する口縁部で、50は端部に刻目を施す、外面には、多条のヘラ描沈線を施す。51～52は壺及び壺の底部である。52～54は外面にハケメを施す。

これらの遺物は第Ⅰ様式の新しい段階に併行する時期が考えられる。

SD5402・5403

SD5402は幅1.3m、西側はやや広く2mで、深さは0.4mで断面の形状は箱形を呈する。SD5403は幅1m、深さ0.5m、断面U字形の溝である。SD5401、5402を含めた3条の溝は約5mの間隔で並行して掘削されている。共に少量の遺物が出土している。fig.22-58～61はSD5402、62～64はSD5403からの出土遺物である。61は逆L口縁壺であり、これらの遺物は第Ⅰ様式後半～第Ⅱ様式にかけて併行する時期が考えられる。

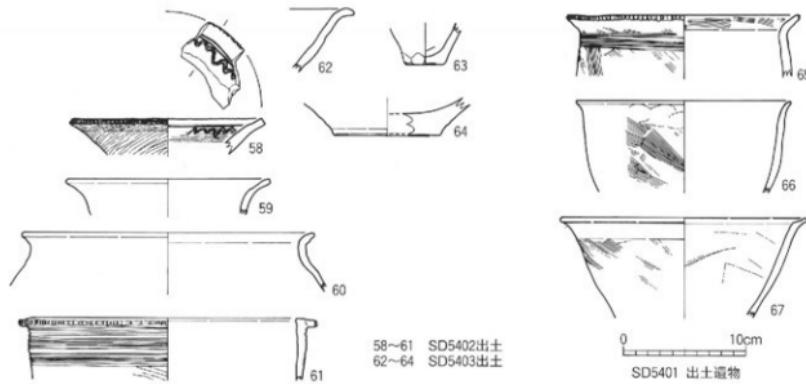


fig22. 5トレンチ4区 SK5402出土遺物

SK5401

SD5402とSD5403間で3基の土坑を検出した。SK5401は径約0.8m、深さ0.4mを測る円形の土坑である。底平で、北側の一部に径0.15mの杭状の掘り込みが認められる。遺物は埋土上層よりまとめて出土しており、壺や鉢が出上している。

65は壺の口縁部である。口縁端部に刻目、体部に6条のヘラ描沈線を施す。66と67は鉢である。66は外面ハケメ調整である。第I様式末～第II様式前半頃に併行する時期が考えられる。

SK5402

長径1.5m、短径1m、平面梢円形の土坑である。深さは0.4mを測る。北側の底部は平たく、土坑壁も直立する。遺物は北側のやや深くなった部分からまとめて出土した。

68～71は壺である。70は、復元口径24.0cmを測る。口縁端部に刻目を施す。外面の口縁部下には、6条のヘラ描沈線を施している。72は壺の底部で、外面にヘラミガキを施す。73、74は鉢で、73は把手が付く。75～78は壺若しくは壺の底部である。これらは第I様式後半～第II様式前半頃に併行する時期が考えられる。

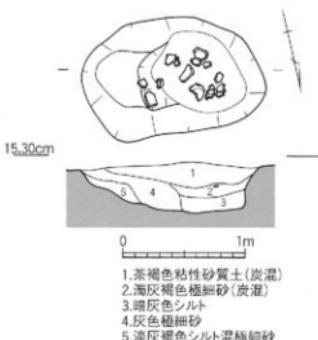


fig23. 5トレンチ4区 SK5402出土遺物

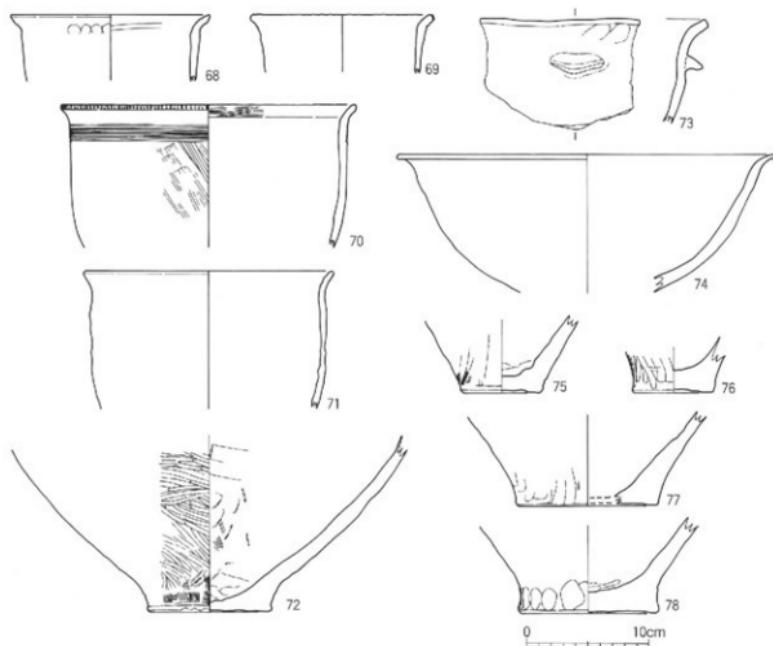


fig24. 5トレンチ4区 SK5402出土遺物

SK5403

径0.4m、平面調査では深さ0.1mほどしか確認できなかったが、調査区の土層を観察した結果、包含層上層より掘り込まれており、深さ0.3mを測る遺構であることが判明した。西側に延びるものと思われ、形状、規模については不明である。甕、鉢などが出土している。

79は、広口壺で、復元による口径14.4cmを測る。口縁端部は丸く取める。外面の頸部上半には、11条のヘラ描沈線を施す。80は壺の口縁部であろうか、口縁端部に刻目を施す。

81と82は鉢である。81は復元による口径22.8cmを測る。外反する口縁部を有し、外面の調整は摩滅により観察することはできないが、内面の頸部より下にハケメを施している。82は復元による口径39.2cmを測る。口縁部は外反し、端部は内側へ斜面を持つ。体部外面口縁部下に、舌状の把手が4ヶ所に付くと推定される。

これらの遺物は、第Ⅰ様式後半～第Ⅱ様式前半頃に併行する時期が考えられる。

SK5404

長辺4m、短辺2.5mほどの長方形を呈する。深さは0.1mほどで、部分的に円形の柱穴状や細い溝状の掘り込みが認められる。遺構精査の段階で土坑周辺も含め、比較的の遺物が多く出土していたが、底部近くでの出土土は少量である。

83は壺の口縁部と考えられる、口縁端部に刻目を施す。

84～86は壺の口縁部で、逆L字状の口縁を有する。84は外面の口縁部下に4条のヘラ描沈線を施し、85では12条のヘラ描沈線を施し、その下に円形の浮文を1帯貼り付けて飾る。86は復元による口径18.0cmを測る。口縁端部に刻目を施し、外面の口縁部下に6条以上になると推定されるヘラ描沈線を施している。

87と89は鉢である。小片のため、口径については不明である。共に舌状の把手を有する。88は甕の底部であろうか。外面にハケメを施す。これらの遺物は、第Ⅰ様式後半～第Ⅱ様式に併行する時期が考えられる。

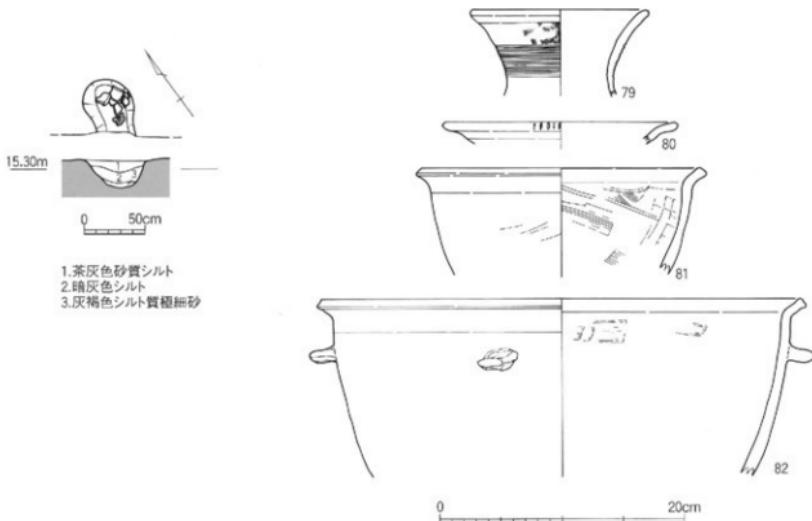


fig25. 5トレンチ4区 SK5403平面・断面図・出土遺物

SK5405

SD5401の南側に位置する。長径1.7m、短径1.2mの楕円形の範囲で、灰色砂質シルトが浅く皿状に堆積するが、底面に凹凸があり、径0.1mの杭状の痕跡や径0.3mの柱穴状の窪みが存在する。埋土中からは弥生土器が出土した。

90は壺の体部である。破片であるため全体の形状は不明だが、肩部の外面に5条の貼り付け帯で飾られ、端部には刻目が施されている。突帯の下にはヘラミガキが観察される。

91は鉢で、復元による口径20.7cmを測る。外方へと立ち上がった体部から、外反気味に口縁部が延び、口縁端部は丸く収める。内外面共、摩滅が著しく調整痕は観察することができない。92は壺である。復元による口径は22.6cmを測る。内湾しながら直立する様に立ち上がった体部から、外反する口縁部が延び、端部は丸く収める。外面の体部はハケメ調整を施し、口縁部下にはナデを施している。93は外側へと延びる体部から、壺或いは鉢の底部であると考えられる。

これらの遺物は、第I様式後半～第II様式前半の時期（弥生時代前期後半～中期初頭）が考えられる。

柱穴

SD5401、SK5405とSD5402間で建物を構成する可能性のある柱穴を検出した。調査区内では東西2間、南北1間である。埋土は大半が暗灰色シルトの單一層である。北側に位置するSP5403から壺などの遺物がまとまって出土しているが、その他の柱穴からは小片の土器の出土に留まる。また、SD5403の南辺に沿って溝を切り込む柱穴を2基検出しており、壺などの上器片が出土している。fig.29は、4区の柱穴からの出土遺物で95、97がSP5406、96はSP5403、98はSP5408からの出土である。95、96は壺の底部と考えられる。95の底部中央は穿孔されている。96は外面にハケメ調整が施されている。内面にはわずかにハケメが確認でき、底部にはユビナデ痕が施されているのが観察できる。

97は壺の口縁部である。復元による口径は14.0cmを測る。逆L字状の口縁部を有し、端部には刻目を施す。体部はやや丸みを持ち、内湾しながら立ち上ると考えられ、外面の口縁部下には、現状では10条のヘラ描沈線を施しているのが確認できる。98は小型の鉢であろうか、逆L字状でやや下方に下がる口縁部を有している。復元による口径は7.2cmを測る。口縁端部には刻目を施し、口縁部下にナデを施す。

これらの出土遺物は、97などから第I様式後半～第II様式（弥生時代前期後半～中期前半）に併行する時期が考えられる。

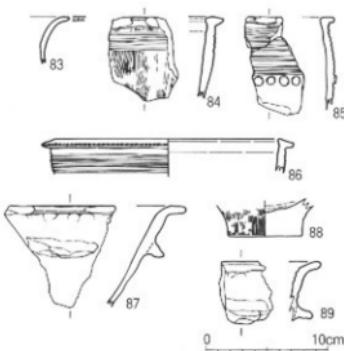


fig.26. 5トレンチ4区 SK5404出土遺物

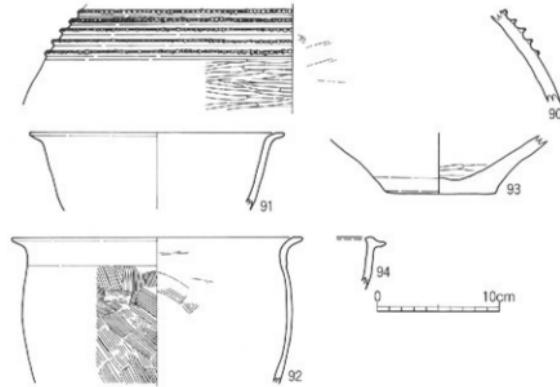


fig.27. 5トレンチ4区 SK5405出土遺物

石 器

4区の調査では、弥生時代前期後半～中期前半にかけての土器と共に、石器が出土している。103がSD5401からの出土である以外はすべて遺物包含層からの出土である。

99～101は石錐である。99は凹茎式で、現存長3.9cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm、重量4.4g以上で、一部を欠損する。100は平茎式と考えられる。

長さ3.4cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、重量1.2gを測る。101は平茎式で長さ3.0cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重量1.7gを測る。すべてサスカイト製である。

102、104は削器と考えられる。102は長さ4.0cm、幅5.4cm、厚さ0.7cm、重量16.4gを測る。104は長さ2.2cm、幅2.7cm、厚さ0.5cm、重量2.2gを測る。共にサスカイト製である。

103は削器の可能性が考えられるが全体的に欠損しており、全体の形状は不明である。現存長4.0cm、幅5.4cm、厚さ0.7cm、重量16.4g以上を測る。サスカイト製である。

落ち込み

調査区北側で、急激に落ち込む地形を確認した。工事による影響範囲まで断ち割り調査を行なった結果、遺構面から0.6m下がりで底部となる流路の一部を検出した。出土遺物は弥生土器壺の口縁が1点出土している。下層には、さらに古い段階の流路状堆積が続く。

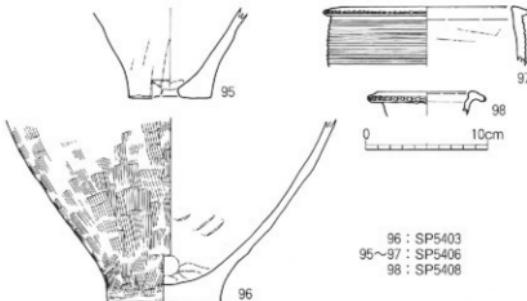


fig28. 5トレンチ4区 ピット出土遺物

96 : SP5403
95~97 : SP5406
98 : SP5408

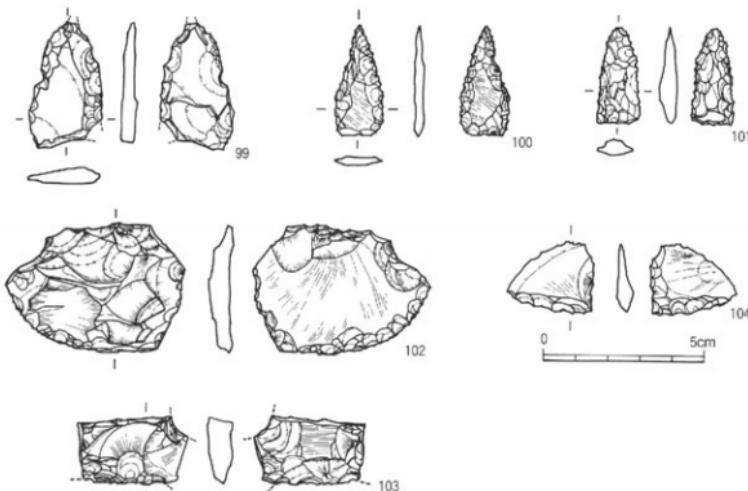


fig29. 5トレンチ4・6区 出土石器

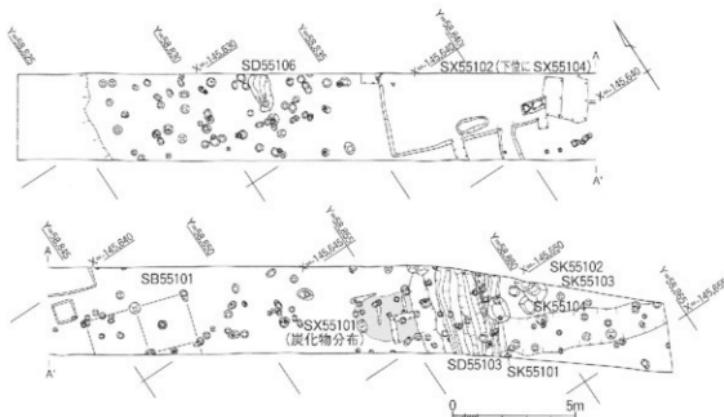


fig30. 5トレーンチ5区 第1遺構面平面図

5 区

現水路を挟み4区の東側に続く調査区である。床土直下で12~13世紀代の遺物を含む暗灰色シルトの遺物包含層を検出し、その下層、灰黄色シルト（第1遺構面基盤層）面で多くの遺構を検出した。調査区の北側は緩やかに落ち込み、4区で検出した黄灰色シルトが堆積し水田を形成する。第1遺構面の下層は4区と同様水田層が続き、その下で灰白色極細砂を基盤層とする弥生時代前期後半の遺構面（第2遺構面）を検出した。

第1遺構面

灰黄色シルト層面で掘立柱建物、溝、柱穴、土坑を検出した。

SB55101

東西2間、南北1間分を検出した。南側へ続く建物で、全体の規模は不明である。柱穴は直径0.3~0.4m前後、深さは0.25~0.37mである。105はP3から出土した須恵器塊で、12世紀前半頃の時期が考えられる。

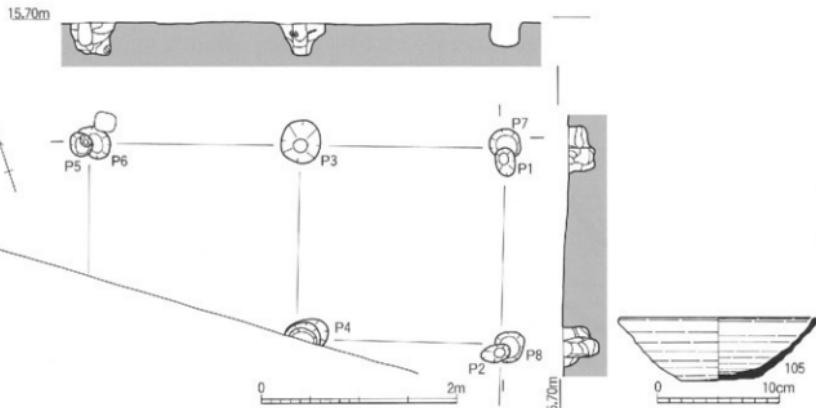


fig31. 5トレーンチ5区 SB55101平面・断面図・出土遺物

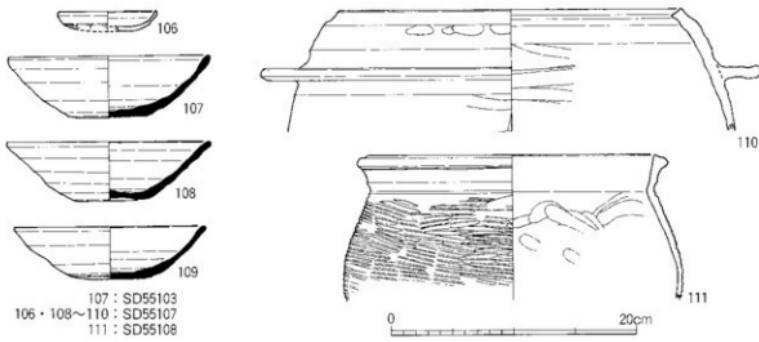


fig32. 5トレング5区 出土遺物

SD55103

幅0.6m～0.8m、深さ0.2m、北辺西側は浅く二段に掘削されている。須恵器、土師器片が出土した。

107は須恵器の塊で復元口径16.2cmを測る。内面見込み部の窪みは痕跡を留めるのみである。12世紀半ば頃の時期が考えられる。

SD55107・55108

SX55104付近で検出した溝である。SD55107は北東から南西方向の溝で、幅1.3m～1.5m、深さ0.1m～0.18mでSX55104と重なる付近で浅くなり消滅する。土師器、須恵器が出土した。

106は土師器皿で口径7.8cm、器高1.6cm、体部外面上半は強いヨコナデを施し、下半はユビオサエである。107～109は須恵器塊である、共に内面の見込み部はわずかに窪む。110は上師器羽釜で復元口径26.8cmを測る。これらの遺物は12世紀半ば頃の時期が考えられる。

SD55108は0.3m～1.0m、深さ0.2mで北から東へ屈曲し、SX55104に切られている。111は、SD55108からの出土遺物の土師器皿で、復元口径23.4cmを測る。口縁部は外方へ延びる。体部外面はタタキを施す。

柱穴

調査区内で多くの柱穴を検出している。分布傾向はSX55102を挟み、大きくは東西に二分できる。柱穴の規模は径0.3m～0.5m、深さ0.3mの円形のものを中心とするが、深さ0.6m～0.7mに及ぶ柱穴も多い。

柱穴の出土遺物には土師器皿、須恵器塊、皿、鉢などがある。115の見込み部が詳み、明瞭な平高台をもつもの、116の見込み部窪みが少なく、器高の低いものなど11世紀後半～13世紀初頭頃の遺物が出土している。

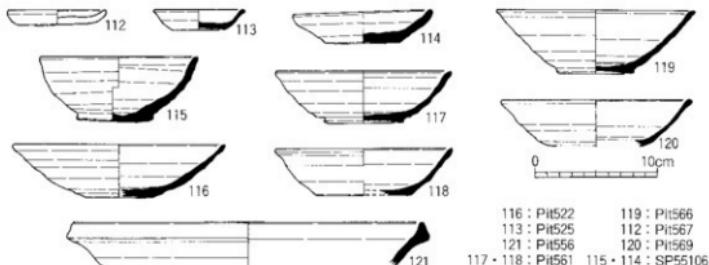


fig33. 5トレング5区 ピット出土遺物

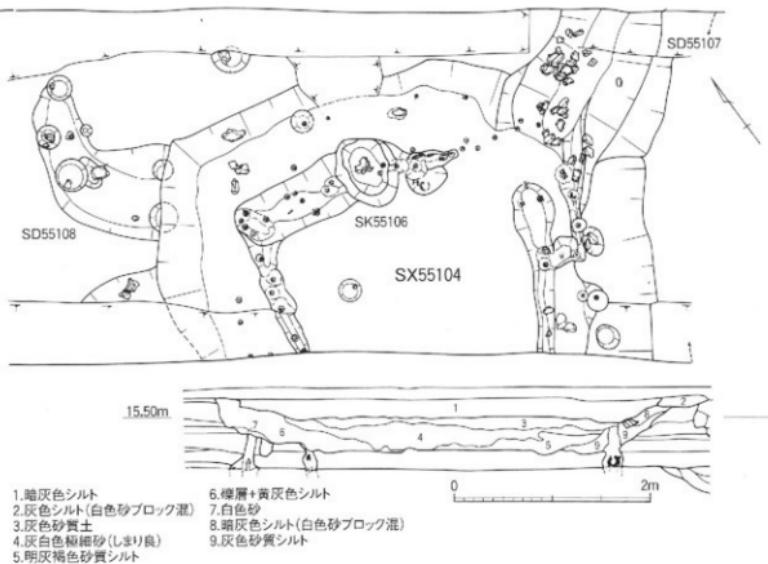


fig34. 5トレンチ5区 SX55104平面・断面図

SX55102・55104

SX55102は、調査区の中央で検出した大型の落ち込みで、東西長約8m、調査区内での最大幅は南北3.5mを測る。北側に拡がるものと思われ、全体の規模、形状は不明である。須恵器甕、土師器壺の破片が出土しており、これら出土遺物から13世紀代の時期が考えられる。

SX55104は大型の落ち込みSX55102の下層から検出された池状遺構で、南北5m、東西2.7m以上、西側に拡がるものである。深さ0.4mを測る。床面に西、北、東の「コ」の字状に巡る幅0.2mの溝があり、板材や杭が多数打ち込まれている。南東部のSD55107から水を引き込み、溝と落ち込みの境に集積した疊でろ過する構造となるようである。「コ」の字状の溝、北辺の中心に長辺0.7m、短辺0.6mの楕円形の土坑があり、水溜めと考えられる。埋土最上層から漆で皮膜した鳥帽子が出土した。SX55102はSX55104の最終埋土と考えられる。鳥帽子については第9章を参照されたい。

fig.33はSX55102からの出土遺物である。

122、124は土師器の鍋で、甕形のタイプのものである。共に破片で口縁端部はやや下方に延びる。体部にタキを施している。123は須恵器の甕で、125の須恵器鉢の口縁部は、上下に肥厚させ、端部は丸く收める。

これらの出土遺物は13世紀後半代の時期が考えられ、この時期には埋没した遺構であると考えられる。

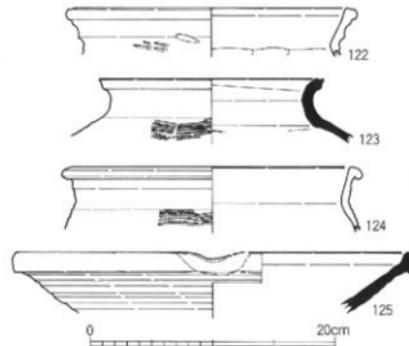


fig35. 5トレンチ5区 SX55102出土遺物

第2遺構面

灰白色極細砂面で溝1条、土坑3基、柱穴を検出した。遺構からは弥生時代前期後半～中期前半に属すると考えられる遺物が出土している。

SD55201

南北方向の溝で、幅2.4m前後、深さ0.35m前後を測る。埋土からは壺や甕の破片が出土している。

126、127、131は壺である。126は広口壺の口縁部で、口縁端部内面に粘土紐を貼り付け、棒状工具で押圧して波状に飾っている。口縁端部外面は内側への傾斜面を持ち、ヘラ描により刻目後、一条の沈線を巡らしている。127は広口壺の頸部で、上下を欠失する。口縁部下を長方形状の貼り付け突帯で飾り、頸部には凹線により9条以上の突帯を施し、垂直に貼り付け突帯2条を施し、頸部の凹線の部分は押圧して飾る。131も広口壺の口縁部と考えられ、口縁端部は上下方向から刻目を施し、2条のヘラ描沈線で飾る。

128、129、132は甕の口縁部である。128は逆L字状の口縁部で、口縁部下に5条のヘラ描沈線を施す。体部外面はハケメ調整である。129は外反する口縁部である。破片であるため下部は不明だが、口縁部下に9条のヘラ描沈線が施されている。132は逆L字状の口縁部を有する。口縁端部には刻目を施す。破片のため下部は不明であるが、口縁部下に10条のヘラ描沈線を施している。

130は鉢でやや下方に延びる口縁部で、体部外面はハケメ調整。133～137は壺及び甕の底部と考えられ、133と134は外面にハケメを施している。135は底部付近に指頭圧痕、136、137は横方向にナデを施している。

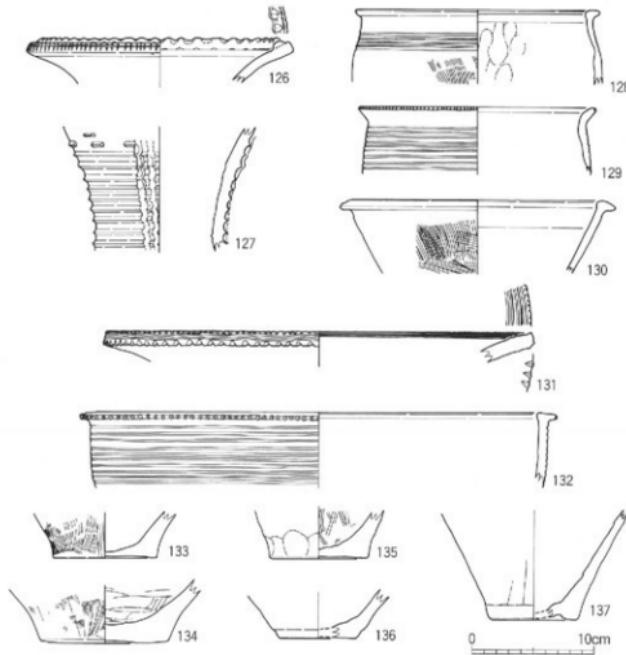


fig36. 5トレーンチ5区 SD55201出土遺物

SK55202

径約1m、深さ0.35mの円形の土坑と考えられる。遺構はさらに南側に延びる。完形に近い壺や甕が出土している。埋土に炭を含み、底部の炭は土坑の壁に喰い込み、断面形態としてわずかながら袋状を呈する。138は広口壺である。口縁部は大きく外反して延び、端部は丸く收める。外面はハケメ調整で、口縁部下付近と内面にヘラミガキを施す。139は大部分が剥離しているが、頸部に突帯状の貼り付けが確認できる。

140～142は甕である。140は復元による口径17.0cmを測り、器高24.5cm、底径6.4cmを測る。口縁部は逆L字状を呈し、内傾する。外面の口縁部下に上に5条と下に6条の2帯のヘラ描沈線を施している。内外面共に摩滅が著しいが、体部外面にヘラミガキ、底部付近にハケメがわずかに確認できる。141は口径21.5cm、器高25.1cm、底径6.5cmを測る。口縁部は小さく外反してやや上方に延びる。外面の口縁部下には8条のヘラ描沈線を施している。内外面共に摩滅が著しいが、体部外面にハケメ、底部付近に指頭圧痕がわずかに確認できる。142は復元による口径18.0cmを測る。口縁部は小さく外反し、端部は丸く收める。外面の口縁部下には上に6条、下に7条のヘラ描沈線を施している。内面は摩滅が著しいが、口縁部付近にわずかにハケメが確認できる。

143は壺或いは甕の底部と考えられる。外面にはヘラミガキ、内面には指頭圧痕が認められる。

144は小型の壺であろうか、肩部にヘラ描沈線2条を施し、その上下に三角形の刺突により、鋸歯文状に飾る。

145、146は鉢である。145は復元による口径12.2cm、底径は5.8cmを測り、器高は14.5cmである。底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部は外反して外方へ延び、端部は丸く收める。内外面共に摩滅が著しいが外面にはハケメ、内面底部付近に指頭圧痕がわずかに確認することができる。146は復元による口径18.0cmを測るが、底部を欠失する。やや内湾気味に外方へと立ち上がる体部で、口縁端部を丸く收めている。外面の口縁部下には横方向のナデを2条施す。外面調整はハケメ、内面は板ナデ及びユビナデを施している。

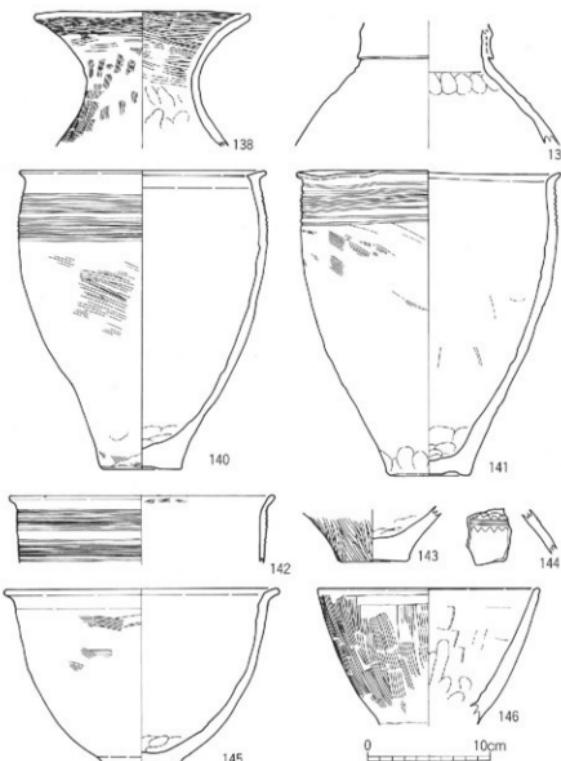


fig37. 5トレンチ5区 SK55202出土遺物

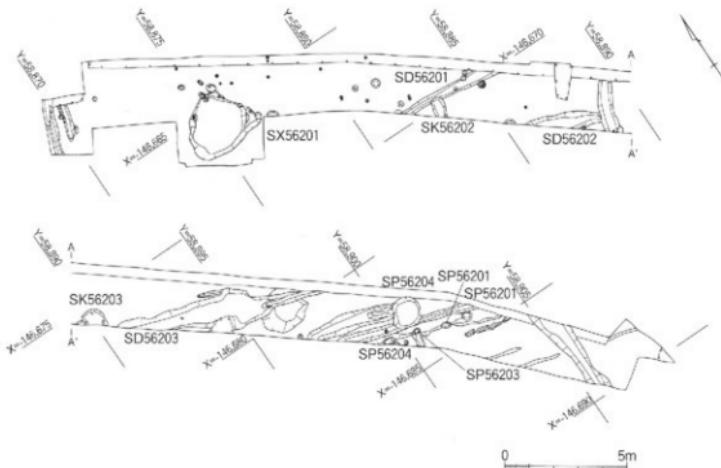


fig38. 5トレンチ区 第2遺構面平面図

6 区

農道を挟み 5 区の東に位置する調査区である。黄褐色粘質土（床土）の下に、複数の耕土層があり、わずかな厚みで酸化、土壤化を繰り返している。基本的には灰黄色粘質土（旧耕土）、灰黄色～灰色砂質シルト（第1 遺構面基盤層、第2 遺構面遺物包含層）が堆積し、灰色シルトの薄い土壤化層を取り除いた黄灰色シルト面が第2 遺構面となる。

第1 遺構面

水田耕作に伴う鋤溝と鋤溝よりやや幅広の溝を検出したに留まる。南半で検出した溝は幅0.8m、深さ0.15mで、灰色極細砂を埋土とする。13世紀代の遺物が出土している。

第2 遺構面

溝、土坑、柱穴を検出した。

SK56201

調査区西側で検出した土坑である。一辺約2.5mの重な隅丸方形で、深さは0.3mである。掘形内からは須恵器塊、瓦器塊を中心に土師器塊、皿、甕、羽釜、須恵器鉢などがまとまって出土している。尚、瓦器塊は中央部や北東寄りにまとまる状況で検出された、また、その南東に接する様に炭が東西0.4m、南北0.25m前後の範囲で検出されている。南東隅に若干張り出す部分があり、別遺構が重なる可能性もある。北壁際で柱穴を7基確認したが、その他の部分では検出されておらず、土坑に伴うものは判然としなかった。

SK56201では、多くの遺物が出土した。

147、148は土師器皿である。147は復元による口径9.6cm、器高は1.0cmを測る。148は口径7.8cm、器高1.4cmを測り、底部外面は回転糸切りである。

149は土師器の塊である。復元による口径17.0cmを測る。口縁端部は丸く收める。

150～156は瓦器塊である。口径は150が15.3cm、152は15.5cmである以外151、153、154は15.2cmである。155と157は破片のため、復元による口径はそれぞれ15.4cm、14.4cmである。器高は151が5.0cmで最小、152が最大

で6.1cmを測る。150は5.4cm、151が5.2cm、153で5.5cmとなっている。これらの瓦器塊はすべて「和泉型」に分類されるもので、外面の口縁部下に一段若しくは二段の横方向のナデを施し、口縁端部は丸く收める。体部外面は指頭圧痕が顕著である。内面は疎らな圓線状のヘラミガキが施され、見込み部には平行線状のヘラミガキが施されている。外面にヘラミガキは施されていない。底部の貼り付けによる高台は断面三角形を呈する。これらの瓦器塊は口径15cm、器高が5cmを超えるが、外面のヘラミガキが省略され、強いヨコナデによる外反気味の口縁部、内面の形骸化されたヘラミガキなどの特徴から、12世紀第4四半期頃の時期が考えられる。

157～177は須恵器塊である。須恵器の塊は、外面回転糸切りの底部からほぼ直線的に外方へと立ち上がる体部で、口縁端部は丸く收めるものである。内面見込み部はわずかに名残を留めるもので占められている。口径は165の15.8cmが最小で、161と162の17.2cmが最大であるが、復元によるものでも168の口径17.3cmが最大で、概ね16.0cm～17.2cmの範囲に収まる。器高は判明しているものでは160の4.4cmが最小で、175では5.4cmを超えている。口縁部断面の形態には157、163、165、169、170の様に内湾気味で端部を丸く收めるものや、158、164、168、169、172、174、177の外方へ引き出す様で、端部を丸く收めるもの、160、161、166、167の口縁端部をそれ程肥厚させず、丸く收めるものなど、いくつかのバリエーションが見出せる。尚、165～168の外面には、墨書が行なわれている。字体の形状から同一のものと考えられるが、文字としては判読することは困難である。一種の書き判、花押の様な性格をもつ文字である可能性も考えられる。

これらの須恵器塊は、12世紀後半～13世紀初頭の頃の時期に相当するものと考えられる。

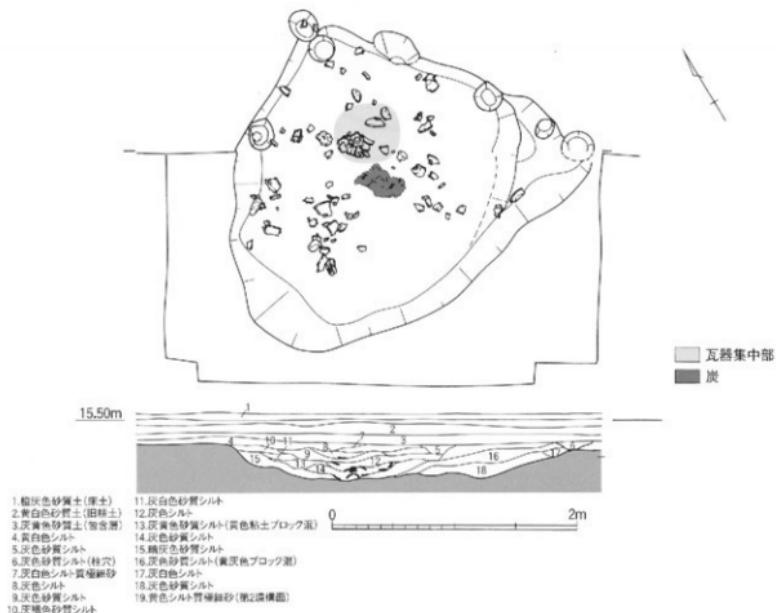


fig39. 5 ブレンチ6区 SK56201平面・断面図

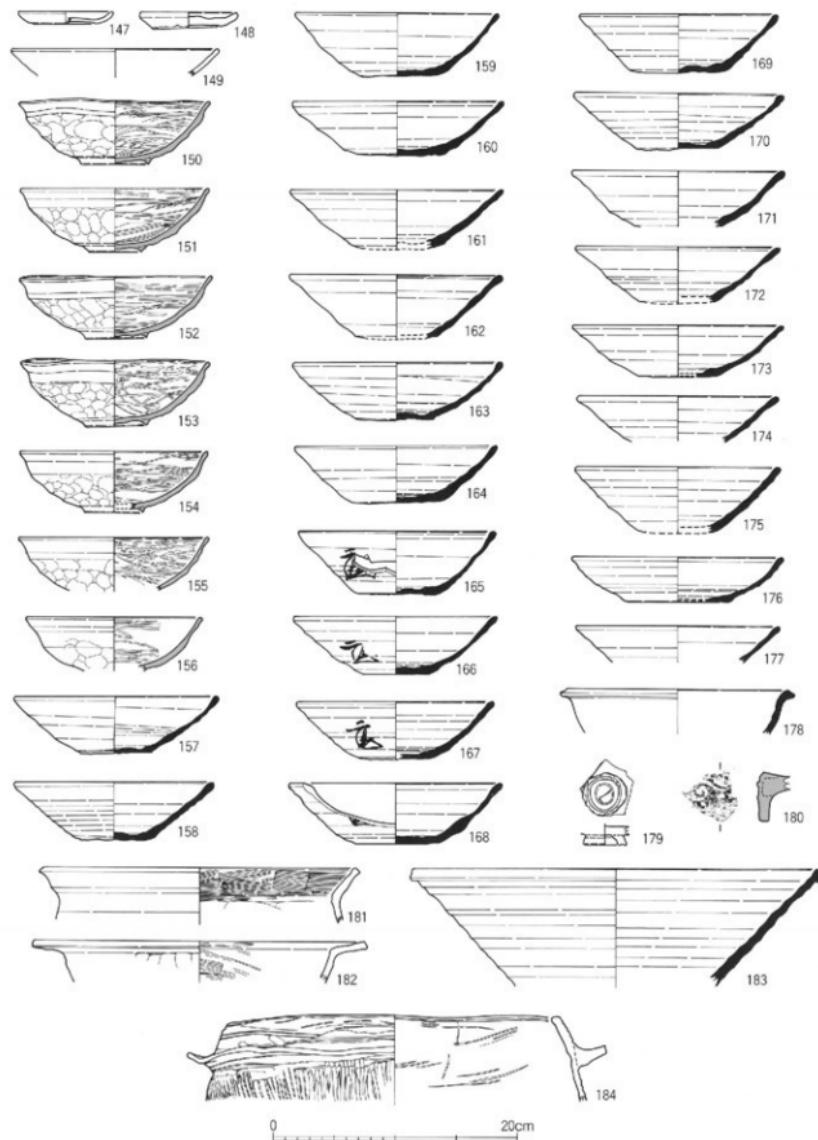


fig40. 5トレーナー6区 SK56201出土遺物

178は境であると考えられる。破片であるため全体の状況は不明であるが、須賀質で、外方へと延びる口縁部を有する。内外面共に黒灰色を呈する自然釉？の付着が認められる。復元口径18.0cmを測る。

179は底部であると考えられるが、小破片であり、全体の状況は明らかではない。復元径は3.5cmを測り、内面に記号状の墨書がある。180は軒平瓦の瓦当である。

181は土師器甕の口縁部である。復元口径15.4cmを測る。「く」の字状に屈曲した頸部から、口縁部が外方へと直線的に延びる。口縁端部外側は内傾する面を有する。内面にハケメを施している。

182は土師器鍋である。復元口径27.0cmを測る。体部から屈曲して、わずかに上方にL口縁部が大きく外方へと延びる。体部外面に指頭圧痕、内面にはハケメが施されている。

183は須恵器の鉢である。復元口径33.0cmを測る。直線的に外方へ延びる体部で、口縁端部は上下に肥厚させる。12世紀末葉～13世紀初頭頃の時期に相当すると考えられる。

184は土師器羽釜で口径25.8cmを測る。口縁端部は内傾する、貼り付けによる鋤は上方へと外半する。外面は鋤より上は粗いハケメを施し、鋤より下はカキメである。内面は粗いハケメ後に、板ナデによりナデ消している。焼成は良好であるが、全体的に焼け歪みが大きい。

SK56201は多くの遺物を伴うが、その出土状況に全体的には規則性や配列などの痕跡や性格は見られない。しかし、中央部に瓦器塊が集中している点は注目される。また、炭などを伴う埋土の状況や墨書き土器の存在などから祭祀に関連する遺構である可能性も考えられる。

播磨南東部に位置する明石川流域では、中世的一大須恵器生産地である神出古窯址群に近接し、瓦器塊・皿が須恵器塊・皿よりも卓越する摂津西部に対して、瓦器塊・皿の出土が極めて少ない。その中でSK56201の瓦器塊の存在は注目されるものである。旧明石郡では垂水区垂水日向遺跡や西区居住、居住小山、玉津田中、新方などの各遺跡でわずかに和泉型瓦器塊が確認されているが、今回の調査地点と明石川を隔てて近接する居住遺跡や居住小山遺跡、玉津田中遺跡を含めた、和泉型瓦器塊の集中的な分布は注意を要する。

SK56201の時期は出土遺物から概ね12世紀後半～末葉（平安時代末～鎌倉時代初頭）頃と考えられる。

SK56202・56203

SK56202は長径0.8m、短径0.05m、深さ0.1mの平面橢円形を呈する土坑である。SK56203は長径0.8m、深さ0.1mの橢円形を呈する土坑と考えられるが、調査区外に延びるため全体の規模については不明である。共に出土遺物はなかった。

SK56204

SK56204はSD56201に切り込む土坑である。長径1.4m、短径1.1m、深さ0.3mで平面橢円形を呈する。埋土は灰白色シルト質極細砂で、埋土から須恵器片が出土した。

185と186は須恵器の皿である。185は口径8.2cm、器高1.5cm、底径5.4cmを測る。186は復元による口径8.2cm、底径5.4cmを測り、器高は1.6cmである。共に底部外側は回転糸切りである。187は須恵器の碗である。復元による口径15.8cmを測る。体部はやや丸みを持ち、口縁端部は丸く取める。

溝

調査区の東半を中心に、多数の溝を検出した。溝には大別して東西方向と南北方向の二者が存在する。以下、主なものについて記述する。

SD56201

SD56201は幅0.5m、深さ0.1m、SD56202は幅0.8m、深さ0.1mを測る。東西方向の溝である。



fig41. 5 トレンチ6区 SK56204出土遺物

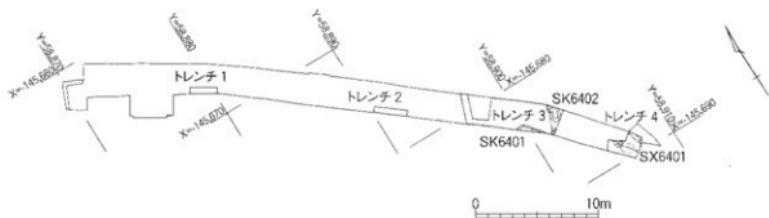


fig42. 5トレンチ6区 下層断面状況図

SD56202

SD56202は幅0.8m、深さ0.1mを測る、東西方向の溝である。須恵器、土師器片が出土している。

SD56203

最大幅1.0m、最小幅1.5m、深さ0.1m～0.2mの東西方向の溝である。埋土は灰褐色シルトである。須恵器、土師器片が出土している。出土遺物から13世紀代の時期が考えられる。

SD56204

最大幅1.5m、深さ0.05～1.0mである。同位置に重複するように溝が掘られた痕跡で、3条ほどに分けられる可能性がある。また、溝の東辺で長径0.3m～0.5m、深さ0.1m～0.2mの柱穴を4基検出した。埋土は灰白色砂である。検出状況から杭や構の痕跡と考えられる。須恵器、土師器片が出土している。

SD56205・56206

SD56205は、調査区東端で検出した最大幅1.1m、深さ0.3mの溝で、埋土は明灰色シルトである。SD56206は調査区西端で検出した溝で、幅0.4m、深さ0.3mを測る。遺物の出土はなかった。共に南北方向である。

下層断面

下層確認のため4ヶ所で断面トレンチを設けたところ、調査区の南端に近い部分で遺構面を確認した。遺構面上の堆積層からは遺物の出土は少なく、土坑内出土の遺物と遺構面上に広がる土器から、弥生時代前期末の時期の生活面と判断される。南端は急激に落ち込み、その肩部に土器が広がる。微高地端部と考えられる。その他のトレンチでは、軟弱な地盤が確認されたのみであり、若干の遺物の出土はあるものの、遺構は確認されなかった。大きな落ち込み状の地形になるものと考えられる。

断面トレンチからの出土遺物は、いずれも微細な土器片で固化することはできなかった。188はSK56402から出土したサスカイト製石鏃である。凹茎式と考えられ、長さ2.0cm、1.8cm、厚さ0.3cm、重量は1.0gである。

7・8区

6区と7区との間には現況で約0.5mの段差が存在し、周辺の地形とも考え合わせると明石川の氾濫・浸食によるものと判断され、遺構面が既に削平されている可能性が考えられた。そのため、試掘調査を行った結果、7・8区ともに耕土あるいは床上の直下で砂あるいは砂礫から構成される土層が検出された。6区で検出された遺構面は検出されなかったことから、明石川の氾濫原であると判断される。

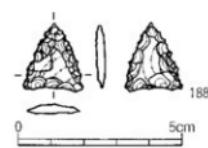


fig43. 5トレンチ6区
SK56402出土遺物

第6節 6トレンチ

4トレンチの南側約100mに位置する圃場に新設される水路部分の調査で、大池の北側でほぼ南北方向の全長約100m調査トレンチである。基本層序は耕作土・床土・数枚存在する旧耕作土の下層にマンガンを含む黄灰褐色砂質シルトの遺物包含層、淡黄灰色極細砂・中砂の遺構面となる。遺物包含層は調査区の中央辺りから北半部には存在しない。遺構面は、中央部から北東に向けて、緩やかに低くなっていく。

確認できた遺構は土坑4基、ピット、河道である。

土坑

SK01は直径70cm、深さ15cmの円形の土坑である。ほぼ半分が調査区外に延びるため全容は不明である。埋土は淡茶褐色砂質シルトで、土坑からは遺物の出土はない。

SK02は調査区外に延びる土坑であるが、検出できた規模は長径1.5m、短径45cm、深さ18cmの長楕円形の土坑である。土坑は舟底状の形状で、埋土は淡茶褐色砂質シルトである。出土遺物は須恵器や土師器が出土している。

SK03は半分が調査区外に延びる土坑であると思われるが、検出できた規模は直径1.2m、深さ20cmの円形の皿上の土坑である。埋土は淡茶褐色砂質シルトである。土坑からは須恵器・土師器が出土している。

SK04も調査区外に延びる土坑である。検出できた規模は長径1.2m、短径50cm、深さ25cmの不整形な土坑である。埋土はマンガンを含んだ淡茶褐色砂質シルトである。土坑からは須恵器の壺201が出土している。201は底部が欠損しているが、胴部下半より上位については残っていた。胴部の最大径が上位にある球体である。頸部で、くの字上に屈曲する口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は外方に拡張して肥厚する面をも

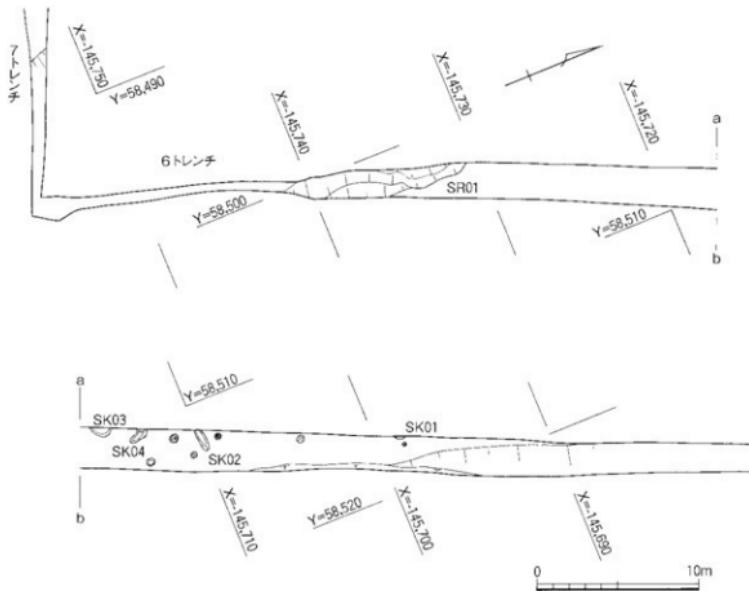


fig44. 6トレンチ・7トレンチ 遺構平面図

つ。端部は上方につまみ出す。胴部外面は格子状の平行タタキの後、細い板状の工具で不規則にナデ調整を施している。内面は工具痕の青海波文が明瞭に残る。焼成は悪く、くすんだ灰色をしている。口径は16.5cmである。

これらの上坑は出土遺物から、6世紀の時期が考えられる。

ピット

上坑の周辺で検出したピットで、直径40cm内外、深さ35cm内外である。埋土は灰褐色砂質シルトで柱痕の残るものもある。掘立柱建物としてのまとまりは確認できなかった。

SR01

調査区の南端で検出した河道で、遺構面が西方向に低くなり、河道の肩からの落ち込みを確認した。河道の埋土は砂礫とシルト質極細砂層である。6トレンチで検出した河道の反対岸から、この河道は幅が約16mあることが推定できる。

河道の肩から落ち際では須恵器や土師器が数点出土している。189・190は須恵器坏蓋で、189は天井部の回転ヘラケズリの範囲は小さく、それ以外は内外面ともに回転ナデを施す。天井部と口縁部を分ける稜は鈍い。口縁端部は丸くおさめる。器高は3.9cmである。190は天井部を一部欠損している。天井部の回転ヘラケズリの範囲は小さく、扁平となる。それ以外の内外面はともに回転ナデを施している。天井部と口縁部の境の稜はほとんどなく、天井部からそのまま口縁端部に屈曲する。口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめ、段はない。

191～194は須恵器坏身である。191は尖り気味の底部から緩やかに立ち上がる。口縁部は内傾しながら上方に立ち上がる。底部外面のヘラ切りは底部付近の小さい範囲である。それ以外の内外面は回転ナデで調整している。口縁端部はやや尖らせる気味である。焼成は悪い。口径は12.9cm、器高4.0cmである。192は平坦を有する底部から緩やかに立ち上がる。口縁部はやや強く内傾して短く立ち上がり、端部はやや尖り気味である。底部はヘラ切り後にナデで調整している。それ以外の内外面は回転ナデ調整を施している。焼成は悪い。口径は12.3cm、器高4.0cmである。193は底部ヘラ切り後に粗くナデ調整を施す。体部は大きく歪む。口縁端部は内傾しながら短く立ち上がる。底部以外は回転ナデ調整を施している。器高3.6cmである。194も大きく歪んでいる。口縁部の平面形は椭円形をしている。底部は回転ヘラ切りで、それ以外の内外面ともに回転ナデ

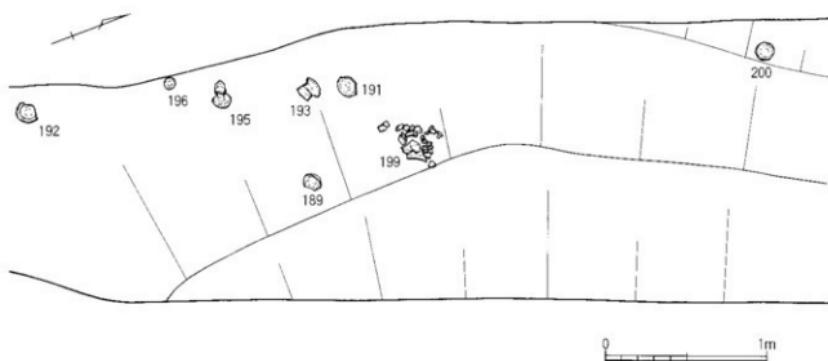


fig45. 6トレンチ SR01遺物出土状況平面図（数字は遺物番号）

調整である。

195・196は脛である。195は口縁端部を欠損している。体部は肩部がやや張った球形で扁平な感がある。最大径は体部の上方に求められる。口縁部に櫛描列点文の文様帯が2条巡り、文様体の間には凹線が巡る。体部下半にはカキメを施し、最大径の部分にも櫛描列点文が巡っている。また、最大径に円孔が外から内側に向けて穿たれている。内面は回転ナデ調整である。196も口縁端部を欠損している。体部はやや肩が張った球形である。口縁部には凹線が2条巡っているのみで、文様帯はない。体部最大径に円孔が外側から内側に穿た

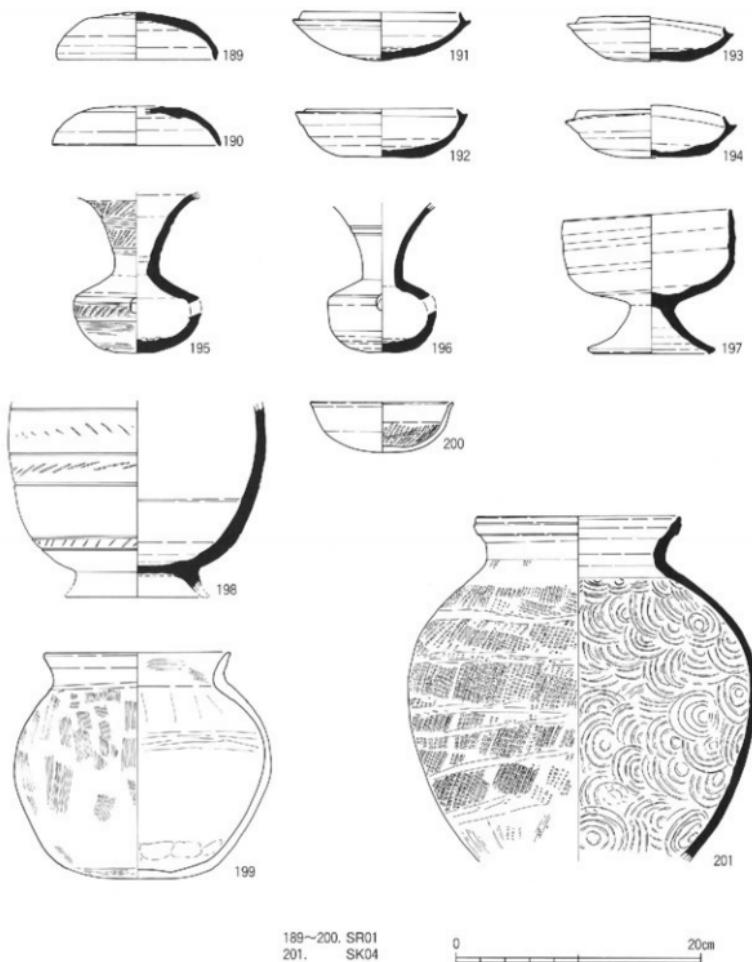


fig46. 6トレンチ 遺構出土遺物

れている。内面は回転ナデ調整である。

197は高坏である。河道の南端部から出土し、他の遺物とはやや離れて出土している。坏部が比較的大きく深く仕上げている。脚部は小さく低く、ラッパ状に開く。脚端部は面となる。坏部は底部からまっすぐ立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は尖らせ気味におさめる。脚部、坏部ともに丁寧な回転ナデ調整を施し、文様はない。脚と坏部の接合点は回転ヘラ切りである。焼成は堅緻で、暗灰褐色を呈する。口径は13.7cm、底径は9.6cm、器高は11.4cmである。

198は口縁部を欠損しており全体形が不明であるが、須恵器の台付鉢と考えられる。台部の端部は欠損している。体部は緩やかに立ち上がり若干内湾して口縁端部に続くと考えられる。器壁はやや厚めである。体部外面には沈線が5条めぐり、沈線の間には斜め方向の刻み目がある。最上段の刻み目は浅く、残りが良くなない。焼成は悪く、表面は白い。内面底には小さくススが付着している。

199は土師器の壺である。平底の底部から緩やかに立ち上がり、頭部で、くの字状に屈曲して口縁部に至る。屈曲はあまい。口縁部は短めで、口縁端部は丸くおさめている。胴部外面は細かい縱方向のハケ調整である。口縁部は横方向のナデ調整である。口縁部内面は横方向のハケの後にナデ調整を施す。体部内面は底部に指頭圧痕が残り、胴部下半はナデ調整、上半は板ナデで調整している。頭部内面の稜はあまい。口径は15.0cm、器高は18.5cmである。

200は土師器の壺である。丸みを帯びた底部からそのまま口縁部に至る。口縁部は外反し、口縁端部を外側につまみ出している。外面はナデ調整を施す。内面は下半に細かいヘラミガキを施している。口径は11.7cm、器高は4.1cmである。

上記の遺物は197を除いて、河道の肩から少し下で出土しており、祭祀的な行為のあったことを窺わせるに足るものである。遺物の時期は6世紀末と考えられる。

第7節 7トレンチ

6トレンチと直交する東西方向の調査区で、大池に隣接する全長約85m調査トレンチである。新設される水路部分にあたる。基本層序は耕作土・床土・数枚存在する旧耕作土・床土である。

調査区の東端部では6トレンチで確認した河道の続きを検出した。旧水田層の下層に砂礫層があり、河道の続きを確認することを確認した。河道の西側については遺構は存在せず、水田土壤の堆積のみとなる。地形は緩やかに西側に高くなっている。



写真8 6トレンチ SR01遺物出土状況

第3章 第35次調査

第1節 8トレンチ

第35次調査は現在の上津橋の集落の南側で、大池の東側の圃場に新設される、水路及びバイオラインの位置である。トレンチの番号は、調査の順に8トレンチから19トレンチまでである。

8トレンチは第35次調査のはば中央部で東西方向の約50mの調査区で、現在の水路と重複するためトレンチの形状は細くなつて収束する。新設される水路部分の調査区となる。

基本層序は現水田耕作土・床土の下層に灰褐色砂質シルト、黄褐色砂質シルト、黄灰褐色砂質シルト、黄褐色砂質シルトと数層の旧水田土壤層が堆積し、マンガンを含む暗灰色シルト質極細砂が第1遺構面の上層水田層である暗灰色シルト質極細砂層を覆っている。さらに下層に灰褐色極細砂、暗灰褐色シルトの第2遺構面の水田層となる。

第1遺構面

溝1条、水田層を検出した。

SD01

調査区の西端部で検出した東西方向の溝で、調査区外に延びるため全体の規模は不明であるが、検出した長さは6.0m、幅1.5m以上、深さ95cmである。埋土は大きく3層に分けられ、上層は青灰色系の砂質シルト、中層は青灰褐色系のシルト層の厚い堆積である。下層は小礫混じりのシルトから極細砂層となる。溝からは須恵器、土師器、瓦が出土している。12~13世紀頃のものである。

上層水田



fig47. 第35次調査トレンチ配置図 (S=1:5,000)

調査区に沿うように東西方向の畦畔を検出した。調査区内では畦畔の南側の落ちが検出できたのみで、北側の落ちは調査の北に存在するものである。したがって畦畔の幅等については不明である。検出した範囲では、畦畔は直線的に延びているのではなく、微妙に湾曲している。畦畔の高さは18.0cmである。灰褐色砂質シルト～細砂に覆われている。

第2遺構面

下層水田

上層水田同様、調査区に沿うような東西方向の畦畔を検出した。下層畦畔は調査区内でその規模が判断できるように検出された。検出した長さは34m、畦畔の幅は62cmであった。畦畔は調査区の西端部で北西方向に折れ曲がるように延びている。畦畔を覆う埋土は暗灰色シルト質細砂～極細砂層である。上層水田の畦畔上場から下層水田の畦畔上場までの間層は、東では厚く26cmであり、西では薄く8cmであった。下層水田では畦畔及び水田面上に偶蹄目動物のヒヅメが多く観察された。下層水田の土壤である暗灰褐色シルトが軟弱であったためと考えられるが、水田面には細かい起伏があることが断面観察で判明している。

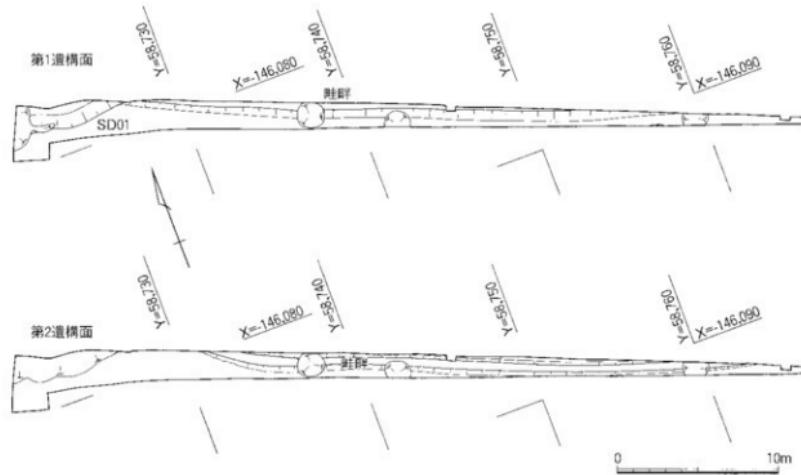


fig48. 8トレンチ 遺構平面図

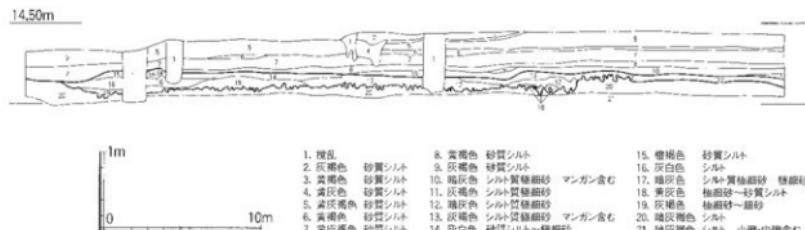


fig49. 8トレンチ 南壁土層断面図

上層水田を覆う埋土からは12~13世紀の遺物が出土している。下層水田を覆う埋土からは12世紀の遺物が出土している。中世から現在まで水田域としての土地利用がなされていることが明らかになった。

第2節 9トレンチ

8トレンチの東側、県道明石国包線を挟んだ位置に設定したトレンチで、東西27mの調査区である。水路の新設部分にあたる。基本層は現水田耕作土・床土の下層に黄灰褐色砂質シルト、黄褐色砂質シルト、灰黃褐色砂質シルト、黄褐色砂質シルトと数層の旧水田土壤層が堆積し、マンガンを含む暗灰褐色シルト質極細砂の遺物包含層となる。遺構面になる基盤層は茶褐色シルト質極細砂である。土層の堆積は8トレンチと同様なものである。

調査区の西側は北西方向に緩やかに傾斜する地形を検出したが、溝か河道などが存在する可能性が考えられる。遺構面では遺構は確認できなかったが、遺物包含層からは弥生時代後期の土器片が出土しており、調査区の周辺に当該期の遺構の存在が考えられる。



写真9 8トレンチ 上層水田

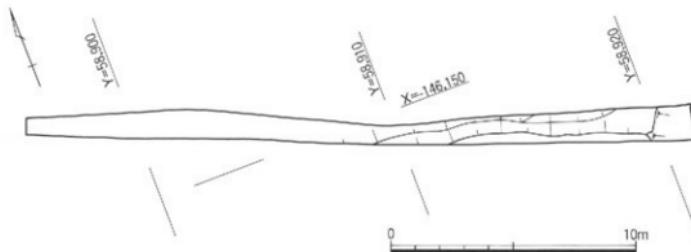


fig50. 9トレンチ 遺構平面図・南壁土層断面図

第3節 10トレンチ

東西100mの調査区である。基本層序は現水田耕作土の下層に旧耕作土層が数層堆積している。水田に伴う畦畔は確認できなかったが、土壤の観察や周辺の調査成果と併せて、水田であると判断できる。出土遺物は12~13世紀のものと考えられる。

第4節 11トレンチ

8トレンチの南側で新設される水路部分である。トレンチは東西方向に72mである。上下2層の水田面を確認できた。基本層序は現水田耕作土の下層に旧耕作土が数層あり、黄褐色シルト質極細砂の上層水田となる。また、直下は鉄分を含む灰白色シルト層の下層水田となる。

水田畦畔は上層下層水田ともに、調査区に直交するように南北方向に6条検出した。畦畔の位置はほぼ上下とも同じである。また、西端と東端の畦畔を除いて、4条の畦畔については、現在の水田畦畔のやや東よりではほぼ一致する。上下の水田層からは12~13世紀の遺物が出土している。上下の水田層の時期差は明らかにはできなかった。



写真10 11トレンチ 下層水田

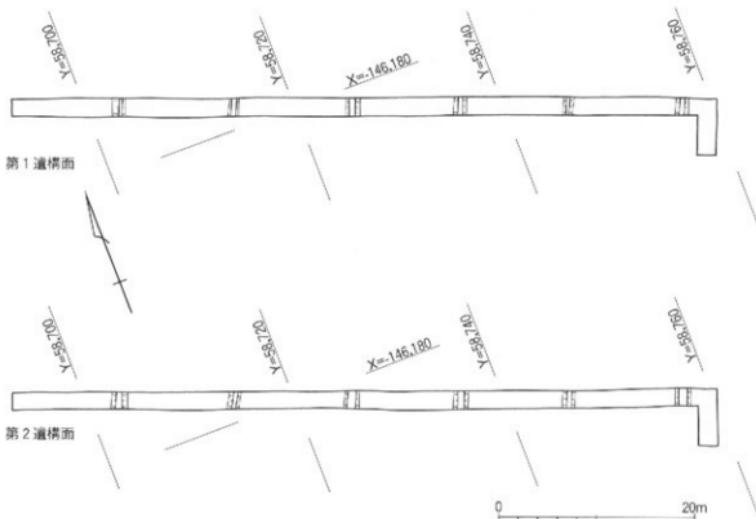


fig51. 11トレンチ 遺構平面図

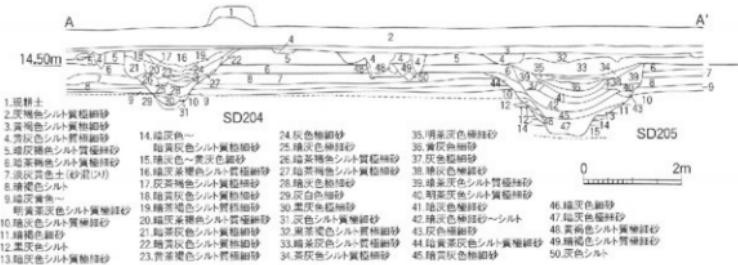


fig52. 12トレンチ 南壁土層断面

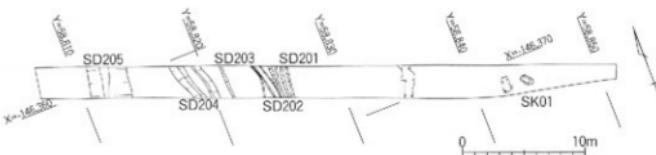


fig53. 12トレンチ 第1造構面平面図

第5節 12トレンチ

大池の東に位置し、新設水路部分の調査地である。12トレンチの調査終了後に、工事により文化財に影響を及ぼす範囲が西に広がったので、再度調査を実施し、便宜的に12トレンチ西拡張区とした。

基本層序は、現耕土、現床土を除去すると、灰褐色シルト質極細砂の旧耕土層が数層存在し、暗灰褐色シルト質極細砂（第1造構面基盤層）、暗茶褐色シルト質極細砂（第2造構面基盤層）となる。

第1造構面

第1造構面は、溝15条、上坑1基、ピット約10基を検出した。

SD203・204

SD203と204は調査区西半で検出した南北方向の溝である。

SD203は幅2.5m前後、深さ0.2m前後の浅い溝で、SD204は、SD203の西側に位置する幅2.4m、深さ1.2mの断面がV字状を呈する溝である。両者共、埋土中から弥生時代後期後半～庄内式期の土器が出土している。

202～204はSD203、205～207はSD204からの出土遺物である。

202は広口壺の口縁部で、復元による口径15.8cmを測る。口縁端部外面に竹管円形浮文と円形浮文を交互に貼り付けて加飾している。外部は縦位のヘラミガキ、内面に横位のヘラミガキを施している。203は二重口縁壺で、復元による口径16.7cmを測る。204は高杯の杯部と考えられる。

205は器台の杯部と考えられ、口径16.9cmを測る。脚部を欠失するが、屈曲して外上方へ外反する口縁部の特徴からいわゆる「淡路型器台」に分類されものであると考えられる。204は小型の壺である。207は壺で、外面はハケメ調整である。

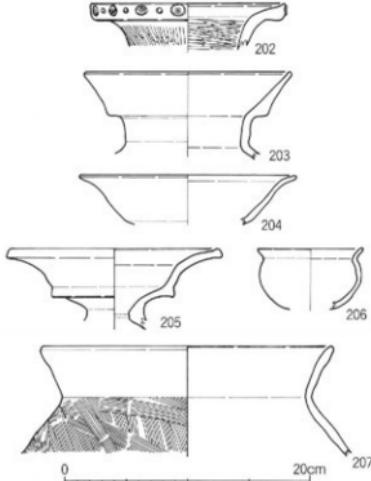


fig54. 12トレンチ SD203・204出土遺物

これらは庄内式併行期の時期に相当するものと考えられる。

SD205

SD205は、幅3.3m、深さ1.45mの南北方向の大きな溝で、埋土中から弥生時代後期末～庄内式併行期頃と考えられる時期の、完形に近い土器が多量に出上した。土器は流されて埋没したようなものは見当たらず、近接して存在する集落で使用されたものが、ここに廃棄されたと考えられる。

208～213は壺である。208は短頸壺で口径11.2cm、器高30.3cmを測る。頸部は外面は縦方向のヘラミガキ後、口縁部及び肩部との境界に横方向のナデを施す、内面は横位のハケメ調整を施している。209は壺の底部で、外面はヘラミガキを施す。210は大型の二重口縁壺で、口径33.0cmを測る。垂直に立ち上がる頸部から外反する1次口縁の上方にわずかに外反する2次口縁が付く。2次口縁の外面には櫛搔による波状文2帯が巡らされ、2次口縁外面の上端と下端に2個1組の竹管円形浮文が交互になる様に、それぞれ四方に貼り付けられている。2次口縁内面には1帯のヘラ掻波状文が巡らされている。頸部と肩部の境には1条の突帯が貼り付けられ、刻目が施されている。211は直口壺と考えられる。212～214は二重口縁壺の口縁部である。212は外面ハケメ調整で、頸部にヘラミガキを施している。

215～226は甕である。口縁部は218と223が直線的に外方へ延び、226は立ち上がる角度がやや急である。これ以外は外反気味に立ち上がるタイプである。216はやや歪みがあり、口径14.2cm～16.2cmを測る。外面は右上がりのタタキを施すが、224、225はタタキ後にハケメを施している。内面は217、223、225がヘラケズリで、216ではヘラケズリに一部ハケメが確認できる。222、227は内面ハケメ調整である。

この他、高环、器台、小型の鉢（写真図版18）などが出土している。

これらの出土遺物は庄内式併行期頃の時期に相当するものと考えられる。

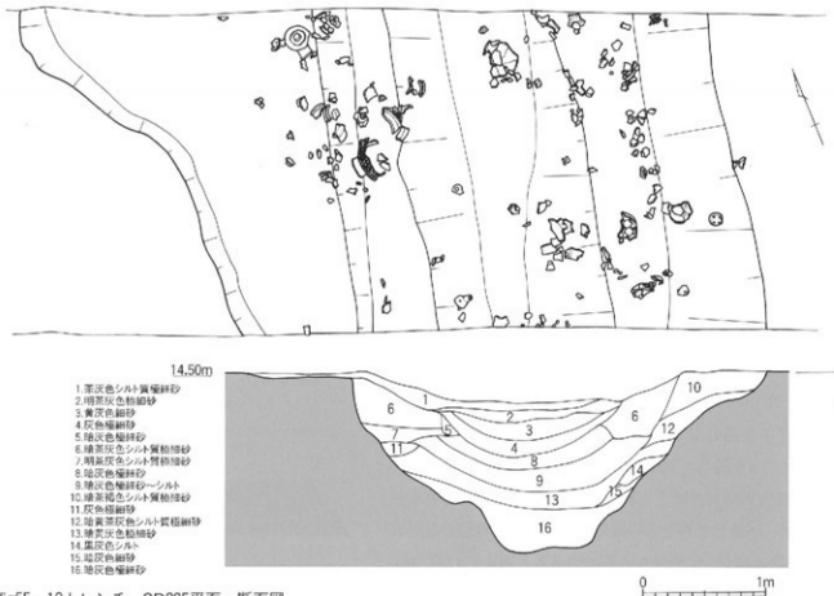


fig55. 12トレンチ SD205平面・断面図

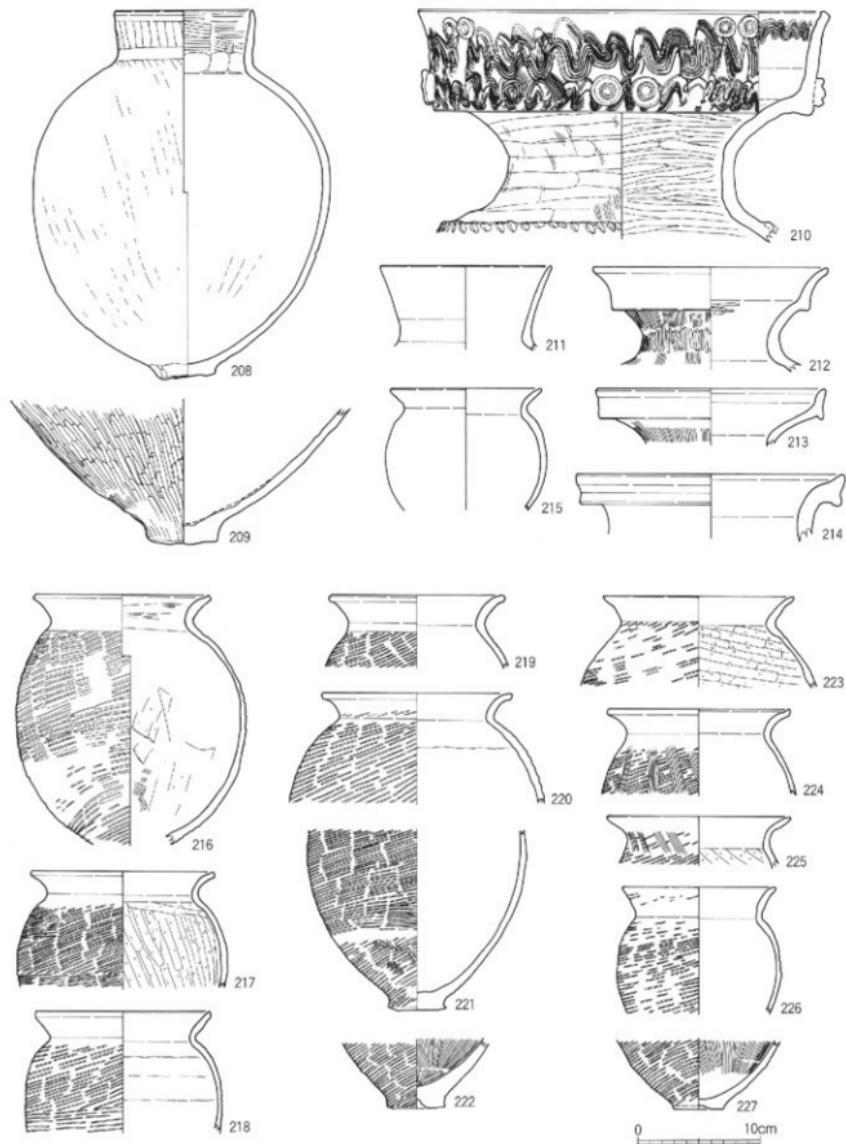


fig56. 12トレンチ SD205出土遺物

第2造構面

第2造構面では溝2条を検出した。また、西側へ拡張した範囲で溝1条とピット4基を検出した。

SD206

西側へと拡張した部分の東端付近で検出した幅2.6m、深さ0.75mの北東～南西方向の溝である。埋土中から弥生時代後期後半～庄内式併行頃のほぼ完形の土器が多数出土した。

228は広口壺である。小径な底部で、やや扁平な算盤玉状の体部から直立して頸部が立ち上がり、外反する口縁部である。口径4.0cm、器高11.9cmを測る。外面の全体と内面の頸部から上はヘラミガキ、内面の頸部から下はハケメを施す。229は広口壺と考えられるが、口縁部を欠失する。小径な底部から無花果形の体部が立ち上がる。外面はヘラミガキである。

230～236は甕である。230は口径17.0cmを測る。底部を欠失するが、28.5cm前後の器高が推定される中形の甕である。器壁は0.3cm～0.5cmと薄く、「く」の字状に屈曲した頸部から外方へ延びる口縁部は、口唇部内側がナデにより内消する。体部外面は右上がりのタタキで、内面はハケメ後にユビナデで粗くナデ消している。

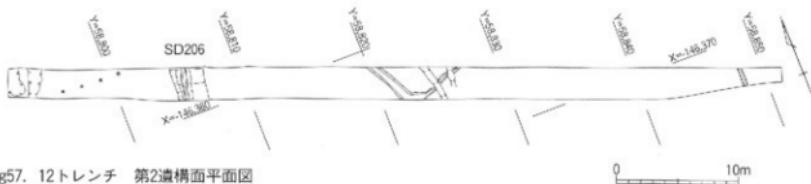
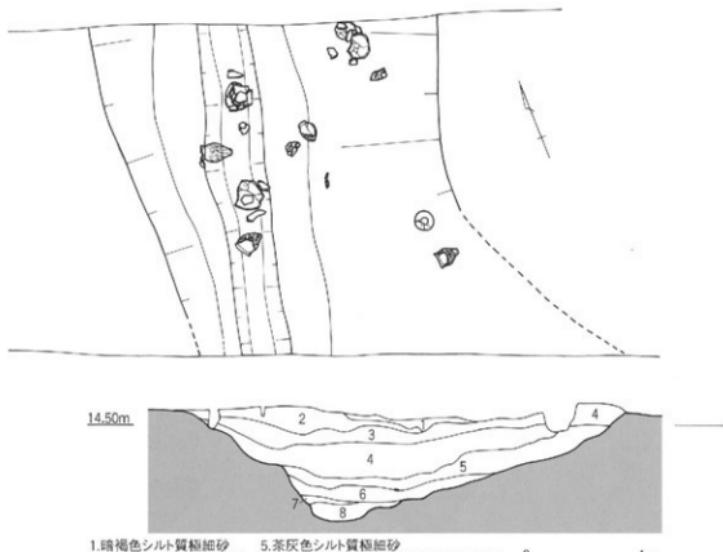


fig57. 12トレンチ 第2造構面平面図



- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1.暗褐色シルト質極細砂 | 5.茶灰色シルト質極細砂 |
| 2.淡茶灰色シルト質極細砂 | 6.暗灰色シルト(灰白色極細砂ブロック含) |
| 3.茶灰色シルト質極細砂 | 7.暗灰色シルト |
| 4.暗茶灰色シルト質極細砂 | 8.暗灰色シルト(灰白色極細砂ブロック含) |

fig58. 12トレンチ西拡張区 SD206平面・断面図

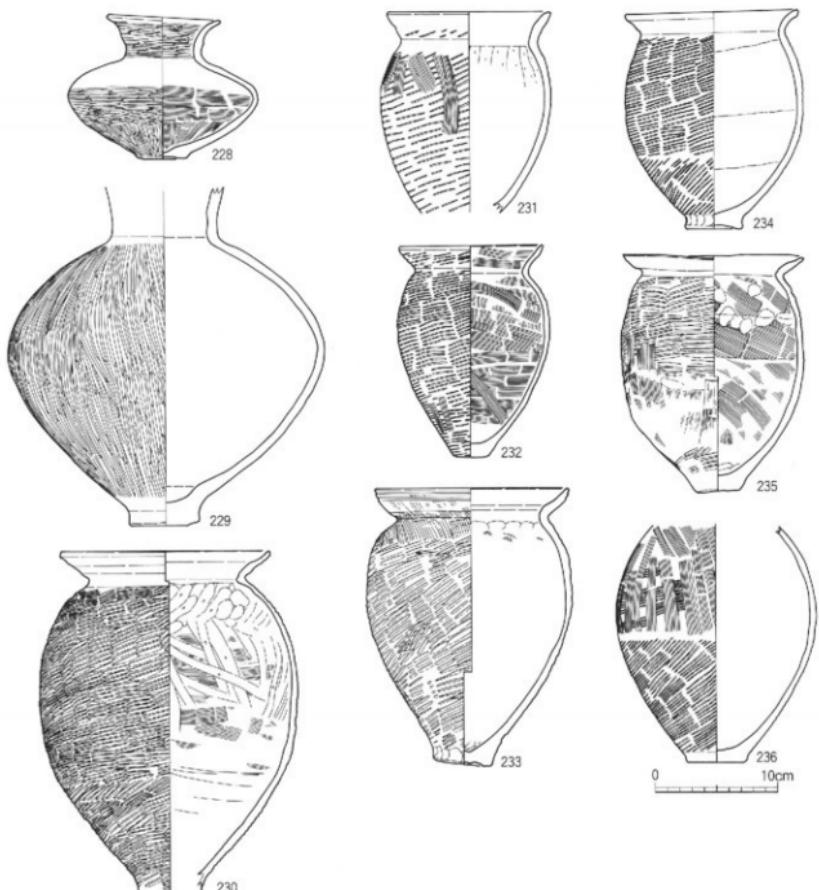


fig59. 12トレンチ西拡張区 SD206出土遺物

231はわずかに外反するやや高い口縁部である。外面は右上がりのタタキ後にハケメ調整を粗く施している。内面の頸部から下はヘラケズリである。232はやや内湾する口縁部である。口径11.7cm、器高17.4cmを測る。外面は右上がりのタタキ後、底部付近にハケメが確認できる。内面はハケメ調整である。233は口径15.7cm、器高22.7cmを測る。内湾する口縁部で、端部はわずかに上方へつまみ上げた様な形状を呈する。口縁外面に2条のヘラ描沈線を巡らす。外面は右上がりタタキ後、頸部付近にハケメを施す。234は口径14.1cm、器高18.0cm、外反する口縁部を有する。235は口径14.8cm、器高19.5cmを測る。短い口縁部で、口縁端部はわずかに上方へつまみ上げた様な形状を呈する。236と共に体部外面は、タタキ後にハケメを施す。

これらの遺物は第V様式末葉～庄内式併行期頃の時期が考えられる。

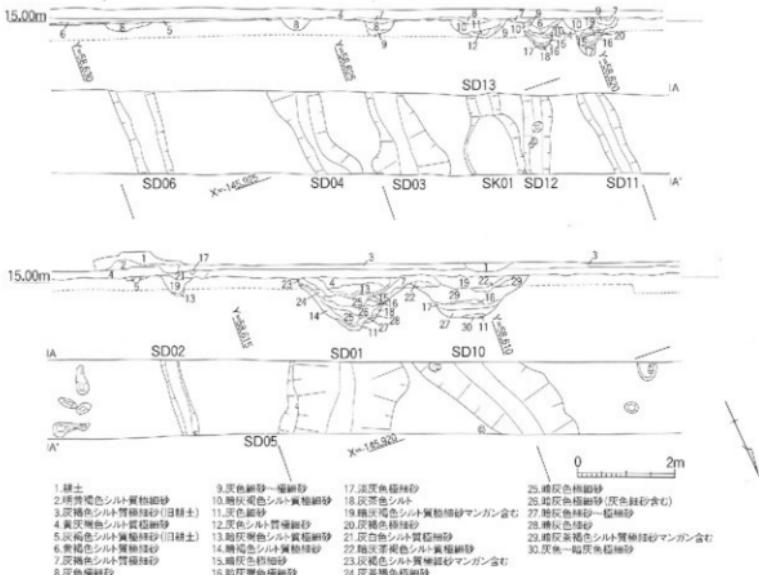


fig60. 13トレーニー 遺構平面図・南壁土層断面図

第6節 13トレーニー

大池の堤の東、東西方向に延びるバイオライン部分の延長約200mの調査区である。

旧耕土を除去すると、暗灰褐色シルト質粘細砂があり、その上面で遺構を検出した。遺構は調査区中央より西側の限られた範囲で検出し、遺構を検出しなかった範囲については、地形が東へ下がっていく状況を確認した。検出した遺構は、溝12条、土坑1基、ピット約10基である。溝は、いずれも南北方向に流れる溝である。

SD01・10

調査区中央西寄りで検出したSD01とSD10は大きな溝で、SD01は幅2.2m、深さ1.0m、SD10は幅1.6m、深さ0.85mの規模である。どちらも埋土から古墳時代前期の土器が出土しており、SD10では溝の底付近から、ほぼ完形の土師器小形丸底壺1点が出土した。

237の小型丸底壺は口径7.3cm、器高は8.3cmを測る。内面に赤色顔料の付着が認められる。238は上部器高部の坏部、239は上部器窓で球形の体部に外反する口縁部で、外面はハケメ調整である。

SK01

南半部を検出したもので、北半は調査区外である。短径1.2m、長径1.2m以上、深さ0.35mの楕円形の土坑で、掘形内から鎌倉時代前半頃の須恵器塊2点と土師器羽釜1点が出土した。

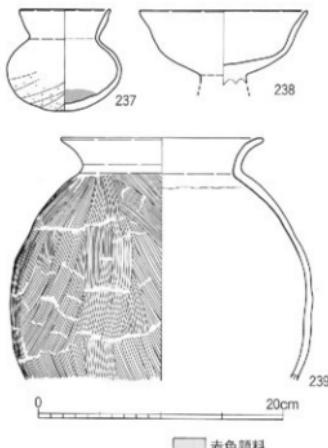


fig61. 13トレーニー SD01出土遺物

第7節 14トレンチ

大池の堤の東、13トレンチの西側で実施した調査区である。既存の水路が流れており、その堆積を除去すると暗灰色砂礫、暗灰色シルト混じり細砂、黄灰色砂質シルトの順に堆積しており、暗灰色シルト混じり細砂中には近世以降の陶磁器、瓦を多数含んでいた。また、調査区北壁の断面を観察すると、既存の水路以前の水路断面を確認することができ、このことより近世よりこの場所は水路であり、そこに陶磁器、瓦を廃棄したものと考えられる。

なお、それ以前の遺構は存在しなかった。

第8節 15トレンチ

新設の水路部分の調査で、既存の道路と畑にまたがった調査区である。複数の旧耕土を除去し、暗灰褐色細砂上面で溝1条、路路1条を検出した。

SD01

調査区南半で検出し、幅約0.7m、深さ約0.25mの規模の東西方向の溝である。遺物は出土していないが、埋土の特徴から中世のものと考えられる。

SR01

調査区北半で、北から南に流れる河道状の落ち込みを検出した。工事影響深度を超えるため、完掘は実施しておらず、深さ約0.6mまでしか確認していない。遺物は弥生時代～古墳時代にかけての土器が出土した。

第9節 16トレンチ

民家と水田に挟まれた東西方向のパイプライン部分の調査区である。表上、旧耕土を除去し、暗灰褐色シルト質極細砂上面で遺構を検出した。検出した遺構は溝3条である。

SD01

幅約0.4m、深さ0.3mの東西方向の溝で、調査区を縱断している。埋土の特徴から中世のものと考えられる。

SD02

調査区東端で検出した東西方向に延びる溝で、北側の肩のみ検出し、南側の肩は調査区外のため検出できなかった。深さは約0.4mである。弥生時代後期の土器が少量出土した。

SD03

調査区東半部で検出した南北方向の溝で幅約2.5m、深さ0.1～0.15mを測る。弥生時代後期頃の土器が出土した。



fig62. 15トレンチ 遺構平面図・南壁断面図

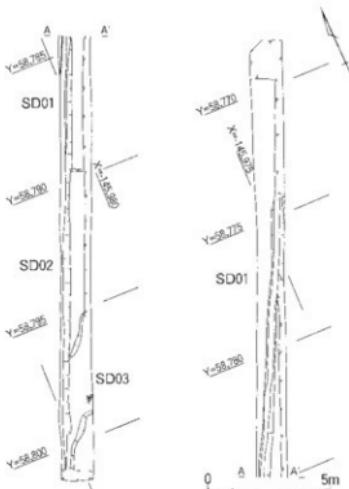


fig63. 16トレンチ 遺構平面図

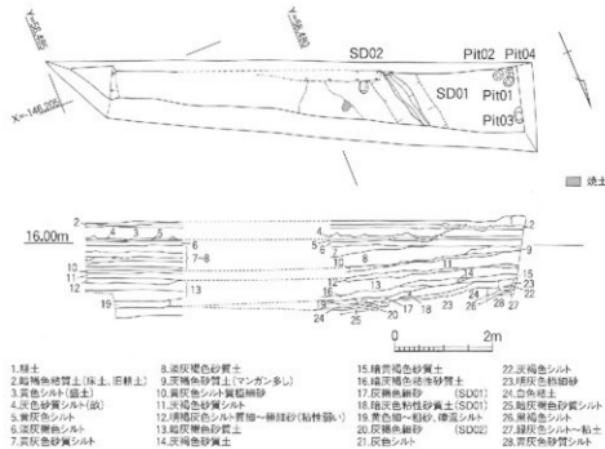


fig64. 17トレーナー 遺構平面図・南壁土層断面図

第10節 17トレーナー

大池の堤から南に続く段丘裾部の現況、畠地の調査地である。新設される水路部分の、幅約1.5m、長さ約10mの範囲について調査を実施した。調査区内には段丘上から流れ込んだ砂礫層（流上層）が3層あり、その間に灰褐色系の砂質土～シルト層が繰り返し堆積する。2層目の流土層より上層の灰色系粘質土は中世の遺物を含み、調査区東半ではこれらの層が水平に堆積する状況が認められる。中世以降に耕作地となったものと考えられる。現地表面から約1.5m下の灰色シルト層及び黄色細～粗砂、疊混じりシルト層上で溝2条と柱穴4基を検出した。

SD01

幅約70cm、深さ約20cmの溝である。埋土上層に細片となった土器が多く含み、下層では器形の判明する遺物が出土した。古墳時代の須恵器甕、土師器を中心とするが、平安時代後期の須恵器塊や瓦片が出土しており、当該期の遺構と考えられる。

240は須恵器甕である。器形は大きく歪み、楕円形を呈する。口径9.5cm～11.9cm、器高5.5cmを測る。底部外面は回転ヘラ切りである。241は土師器甕で復元口径22.2cmを測る。

242は土師器長胴甕の体部と考えられる。外面はハケメ調整で、内面には指頭圧痕が認められる。

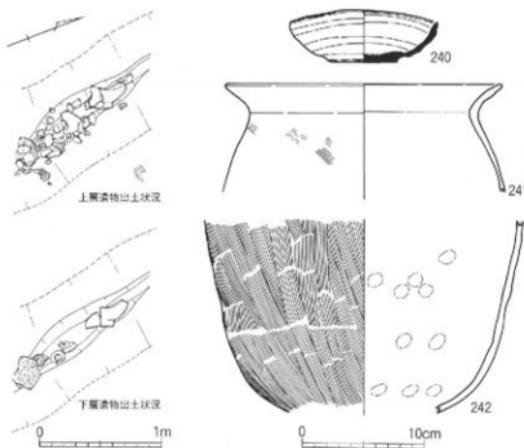


fig65. 17トレーナー SD01平面図・出土遺物

第11節 18トレンチ

上津橋の集落の南側、大池と県道明石国包線に挟まれた現況水田部に設けた幅1.5~2m、長さ約90mの調査区である。

現耕土下の床土は、近世の遺物を含む旧耕土層で、その下にマンガンを多く含む灰色を呈する粘質土～シルト層の2層を確認した。いずれの層からも中世の遺物が出土しており、中世の水田層と考えられる。調査区北側から3分の1ほどの位置で段落ちを形成するが、これ以外に田圃を画する畦畔などの痕跡は確認していない。水田層の下には淡灰色を呈する複数の軟弱なシルト層の堆積があり、厚さは40~70cmを測る。その下に暗灰色シルト層の薄い堆積があり、水田層と考えられる。下面是灰白色のややシルト質ではあるが、しまりの良い極細砂層の堆積となり、この面で遺構が確認された。調査区の北側で溝3条、中央部で河道、ピット2基の遺構を検出した。

SD01~03

SD01は幅50cm、深さ20~30cmの溝で、遺物は出土していない。SD02と03は幅20~40cm、深さ5cmの直交する浅い溝としたが、あまり明確ではない。調査区壁面での観察からこの上の水田層に作られた畦下の溝、もしくは耕作痕の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

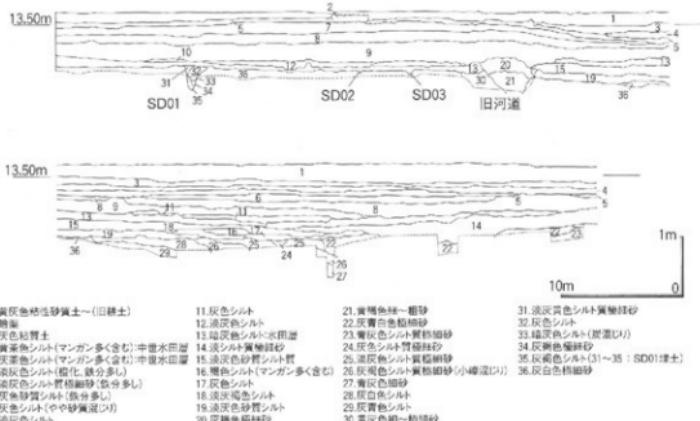


fig66. 18トレンチ 東壁土層断面図

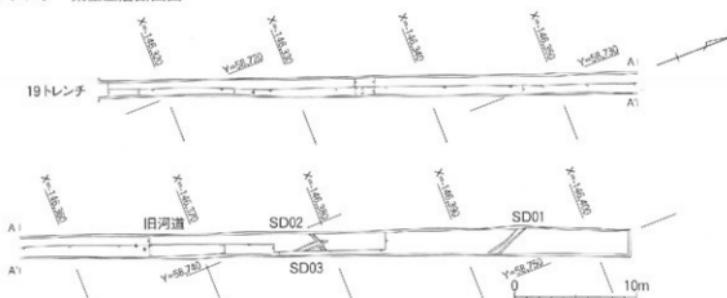


fig67. 18トレンチ 遺構平面図

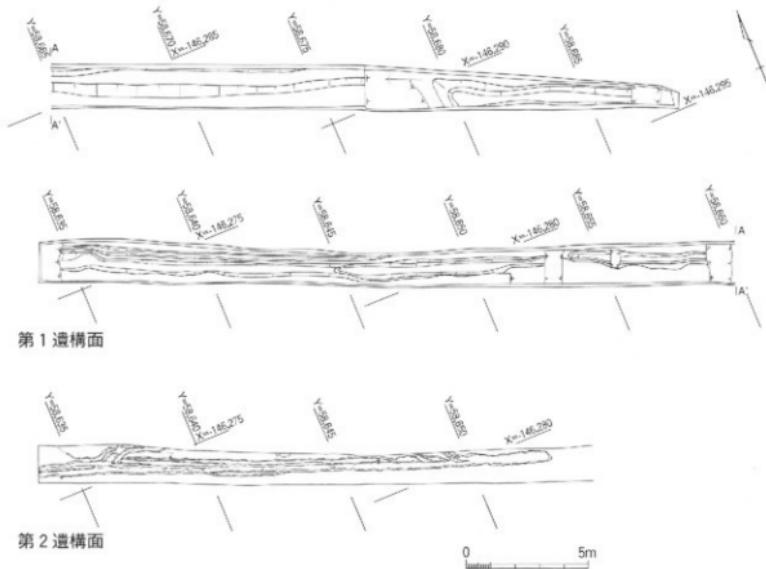


fig68. 19トレンチ 西半・遺構平面図

第12節 19トレンチ

上津橋の集落南側に広がる圃場域の南端近く、県道明石国包線の西側に位置する調査区である。現況は水田で、東と西で約0.5mの高低差がある。現在の床土層まで重機により除去した後、人力により調査を行った。東、西いずれの調査区でも2面の水田層を検出した。

東半

2面の水田層を検出した。耕土層に含まれるのはいずれも中世までの遺物である。現況の水田に伴う畦畔とほぼ位置を同じくして畦畔が作られている。残りのよい部分で天端幅約30cm、下端幅約60cm、高さは約20cmである。中世以降、現在までに区画に大きな変化がなかったことが分かる。また南北の畦間には、やや高さが低く細い畦畔があり、現在でも幅の狭い区画が見られるのと同様に、より細かな区画をもっていた可能性がある。畦畔下の溝が検出されており、溝の周辺では偶蹄目類の足跡が多く観察できる箇所がある。

西半

2面の水田を検出した。1面目の水田面では現況の畦畔から50cmほど南に並行する位置で畦畔を検出し、西端では畦畔の南に沿う溝を1条検出した。溝は幅約80cm、深さ約30cmである。2面目では畦畔は検出されなかったが、畦下にあったと思われる2条の溝を検出した。上層と同じく西側で残りがよく、幅約0.2~0.3mの溝が交錯している。溝は凹凸が激しく、鋤の痕跡が残るものと思われる。また最も古い南側の溝は、現況の畦畔に並行しながら、西端でやや南に振っており、方向軸の異なる水田の存在が推測される。

中世以降、ほぼ現在まで付近の圃場が同じ姿を踏襲することが明らかになった。それ以前の状況は明らかでないが、やや南に振る、方向の異なる溝の存在は興味深いものである。

第4章 第37次調査

第1節 20トレンチ

第37次調査は大池の西側段丘上に位置する調査区で、圃場整備事業の西端部である。調査は新設される水路やパイプラインの工事によって埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について行った。調査を実施した場所は北側から延びる丘陵裾部の平坦地で、標高が34m内外である。ここから南西方向の明石市の方に緩傾斜地が続く。南側には明石市の水堀、野々池が横たわり、西方向には明石市大久保町の町が見通せ、さらに西方向には播磨灘の向こうの小豆島がその島影を見せている。

調査トレンチは、第35次調査のトレンチに続く番号で、20トレンチから順に29トレンチまで、西北方向に付した。

20トレンチは南北方向の全長65mの調査区である。耕作土の直下で黄灰褐色の礫混じりの砂質シルト層の遺構面となる。検出した遺構はピット5基である。

ピット

トレンチの北半部で3基、南端部で2基を検出した。ピットの直径は25~28cmで、深さは浅いもので6cm、深いもので40cmであった。SP02は浅いピットで、底近くから古墳時代の須恵器が出上している。これらのピットは、畑としての造成時に削平を受けているものと考えら、浅い遺構は消失し、深い遺構のみがかろうじて、その痕跡を留めているものと思われる。

第2節 21トレンチ

21トレンチは南東から北西方向に延びる全長230mの調査区である。溜池や耕作地の形状により、便宜的に5区に分けて調査区の呼称とした。

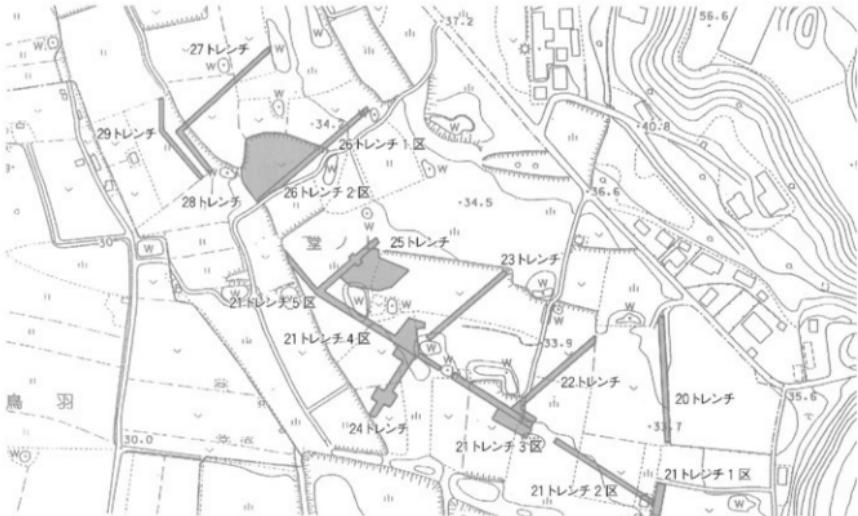


fig69. 第37次調査トレンチ配置図 (S=1:2,500)

1 区

トレンチ最南東に位置する南北方向の、19mの調査区である。検出した遺構は土坑1基、溝1条、ピットである。基本層序は耕作土の下層に厚い黄灰褐色極細砂の流土と考えられる堆積がある。地形は北からなだらかに落ち、調査区の南端でさらに南側に傾斜が急になっている。遺構の番号は、トレンチごとに通し番号を付した。

SK01

北半部で検出した長径62cm、短径40cm、深さ5cmの楕円形の土坑である。埋土は淡茶褐色極細砂である。土坑の形状は浅い皿上に座むものである。須恵器・土師器の細片が出土している。

自然流路

調査区の南端部で検出した長さ3.3m、幅80cm、深さ6cmの溝で、調査区の南側に延びている。溝の埋土はSK01と同様である。流路は地山面を削って流れているようで、流路の底は礫混じりの地山となる。検出状況等から、地形に沿った自然の流路であると考えられる。流路内よりの遺物の出土はないが、調査区の南端部の、南側に低くなっていく所からは遺物が出土している。

ピット

7基のピットを検出した。どれも直径20cm内外で深さは10cm程度のものである。建物としてのまとまりはなく、掘立柱建物にはならない。

これら、土坑やピットからは時期を判断し得る遺物の出土はなかったが、遺構面直上の流土からは奈良時代～平安時代前期頃の遺物が出土している。

2 区

1区に続く調査区で、全長61mの調査トレンチである。基本層序は耕作上、床上の下層には淡茶褐色極細

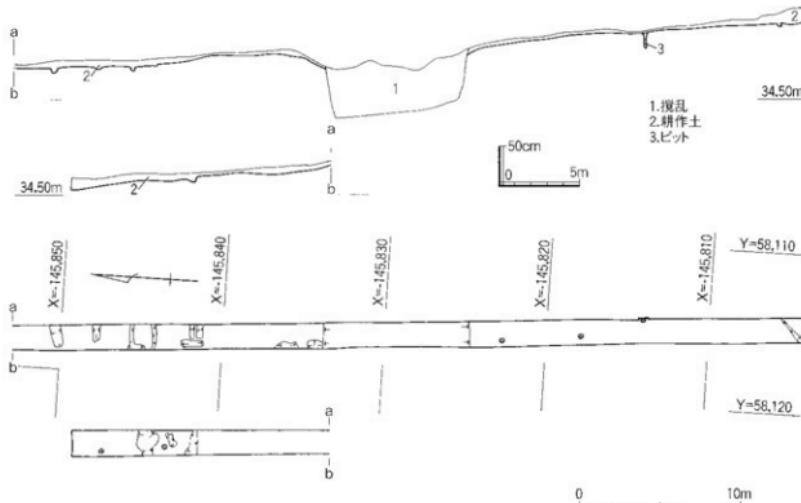


fig70. 20トレンチ 遺構平面図・西壁土層断面図

砂、茶褐色極細砂の遺物包含層があり、黄褐色極細砂の遺構面となる。検出した遺構は土坑2基、溝3条、ピットである。

SK02

1区との境界から少し入ったところで検出した土坑である。調査区外に延びるため全体の規模については不明確である。検出状況からは、方形の土坑のコーナーの1箇所を検出したように考えられる。土坑の形状は、上層ではすり鉢状に窪み、中層からまっすぐ下に落ち込む。中層以下の土坑の壁面は垂直に近い。底面はほぼ平坦である。土坑の深さは96cmである。埋土は極細砂層で、最下層のみ中砂を含み、地山の掘削土がブロック状に混入している。上層から、土坑の埋土は非常に固く締まっている。土坑の南には、調査区外

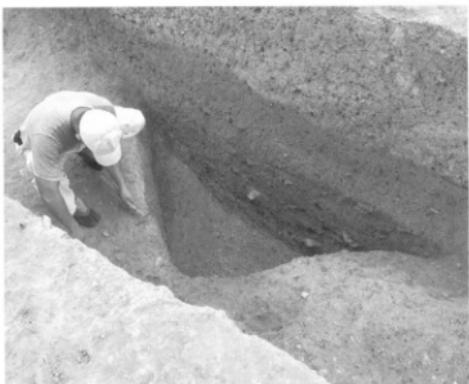


写真11 SK02完掘状況（南から）

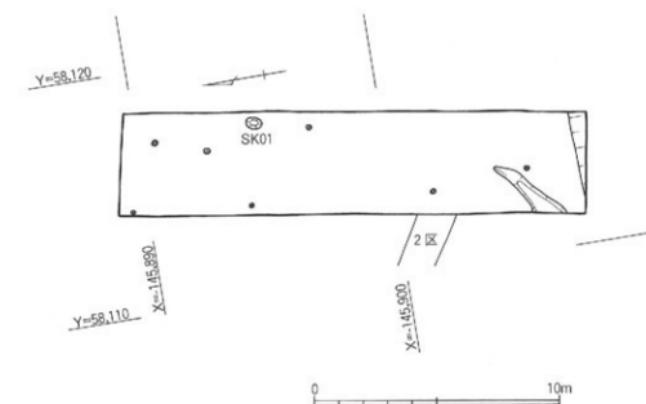
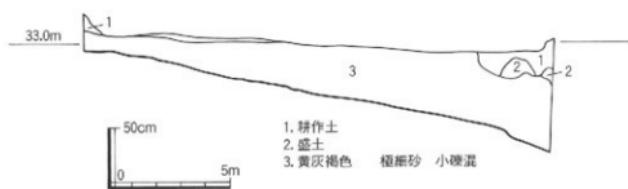


fig71. 21トレンチ1区 遺構平面図・東壁土層断面図

から溝が土坑に取り付いており、土坑に集水するような機能があった可能性も考えられるが、土坑の用途は不明と言わざるを得ない。

土坑からは多くの遺物が出土した。上層から下層まで、ほぼ均等に遺物が出土している。出土した遺物は須恵器の环、土師器の皿、製塙土器などである。

243は土師器皿で、復元口径16.3cmを測る。244は須恵器壺と考えられる。復元口径17.8cmを測り、頸部から外反した後に内湾する口縁部である。245は須恵器壺身で、復元口径9.2cm、器高3.0cmを測る。底部は回転ヘラ切りである。

246と247は製塙土器と考えられる。246は口径13.0cm、器高20.0cmを測る。頸部にはヨコナデが施され、外反気味に口縁部が立ち上がる。体部外面には指頭圧痕、内面にはユビナデが認められる。247は、体部下半を欠失する。口径12.4cm、現存高16.6cmを測る。246と同じく頸部にはナデが施され、やや外反気味に口縁部が立ち上がる。外面はハケメ調整、内面はユビナデとヘラミガキである。

出土遺物の時期は奈良時代頃と考えられ、土坑は同時期には廃絶されたものと考えられる。

SK03

調査区の中央部で検出した長径86cm以上、短径50cm、深さ16cmの楕円形の土坑である。埋土は2層で、上層が淡茶褐色極細砂、下層は暗灰褐色極細砂である。

SD01

1区との境界で検出した、長さ1.4m、幅70cm、深さ7cmの溝である。トレーナーを横断するように、ほぼ南北方向に流れる。溝は北から南に向けて低くなる。

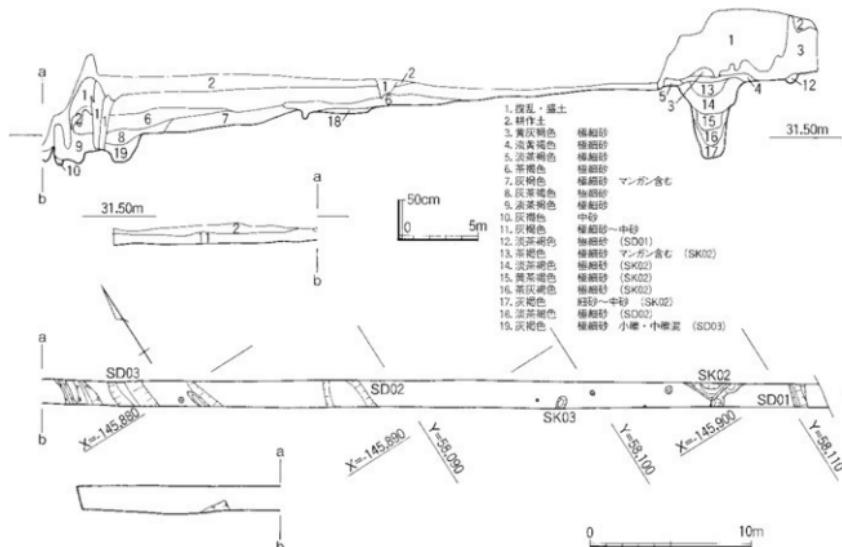


fig72. 21 トレーナー2区 遺構平面図・北壁土層断面図

SD02

調査区の中央部検出した、長さ2m、幅2.4m、深さ8cmの溝である。溝底はほぼ平坦である。埋土は茶褐色極細砂である。溝底で6世紀の須恵器が数点出土している。

SD03

調査区の西端部で検出した溝で、南北方向に延びる。確認した溝の長さは1.8m、幅2.0m、深さ40cmである。埋土は細かく分けると3層になるが、基本的には灰褐色で小礫混じりの極細砂である。溝の断面形はU字形で、底の部分は狭い。溝からは須恵器、土師器、瓦片が出土している。

3 区

2区の西北方向の調査区で、間に溜池を挟んでいる。全長は40mである。耕作土の直下で黄褐色砂質シルト層の遺構面となる。調査区の東端部で比較的大きいピットを検出した。そのため、遺構の性格を明確にするため、調査区を一部拡張して遺構精査を行った結果、掘立柱建物1棟を確認することができた。

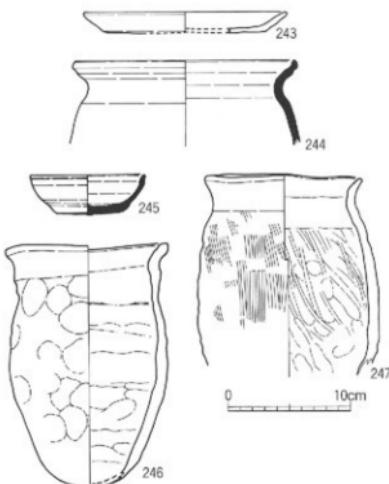


fig73. SK02出土遺物

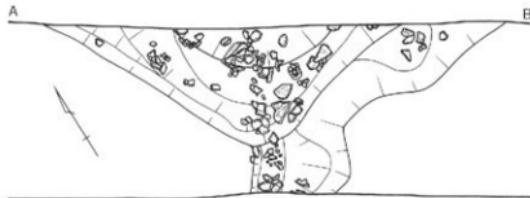


fig74. 21トレンチ2区 SK02平面・断面図

SB01

南北3間(6.2m)、東西2間(4.1m)の側柱の掘立柱建物である。主軸は真北方向である。柱間は南北方向が1.9m~2.2m、東西方向が2m~2.2mである。柱穴の平面形は隅丸方形のものと円形に近いものがある。堀形の埋土は砂質シルトやシルト質極細砂で、暗灰褐色であった。SP09を除いて全ての柱穴からは柱痕が確認できた。柱痕はどれも10cmから20cmほどである。南西角の柱穴SP10が最も規模が大きく、掘形の長径80cm、短径60cm、深さ44cmであった。柱痕は直径16cmである。建物の四隅の柱穴は掘形が他のものに比べて深くてしっかりしている。SP02・06・10の柱痕には焼土や炭化物が含まれていた。出土遺物はSP04からのみ須恵器・土師器の細片が出土している。SB01からは時期を特定できる遺物の出土はないが、遺構面から出土した遺物から奈良時代後期～平安時代前期頃の掘立柱建物と考えられる。SP04近くの遺構面直上からは瓦片が1点出土しており、SB01が瓦葺きの建物であった可能性を示唆している。

検出できたのは掘立柱建物が1棟だけであったが、東側の丘陵上で同時期の多くの掘立柱建物が見つかっていることから判断すると、おそらくSB01の周辺にも数棟の建物が存在し、居住域の一つを構成しているものと考えられる。

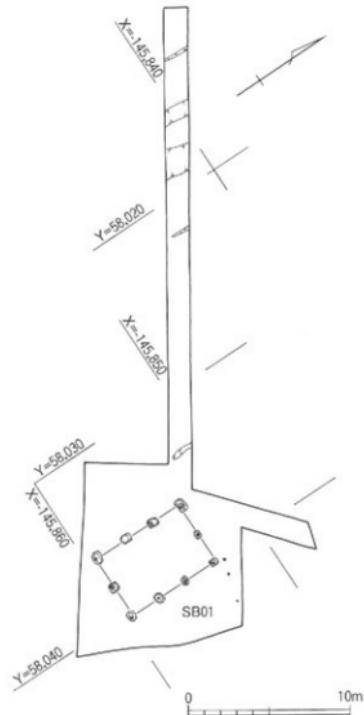


fig75. 21トレンチ3区 遺構平面図

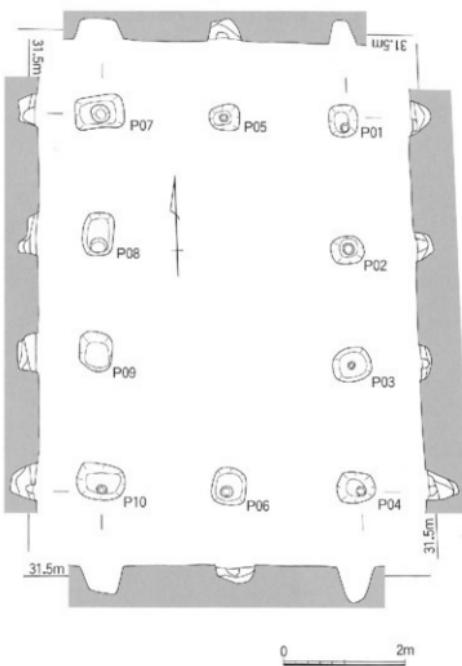


fig76. 21トレンチ3区 SB01平面・断面図

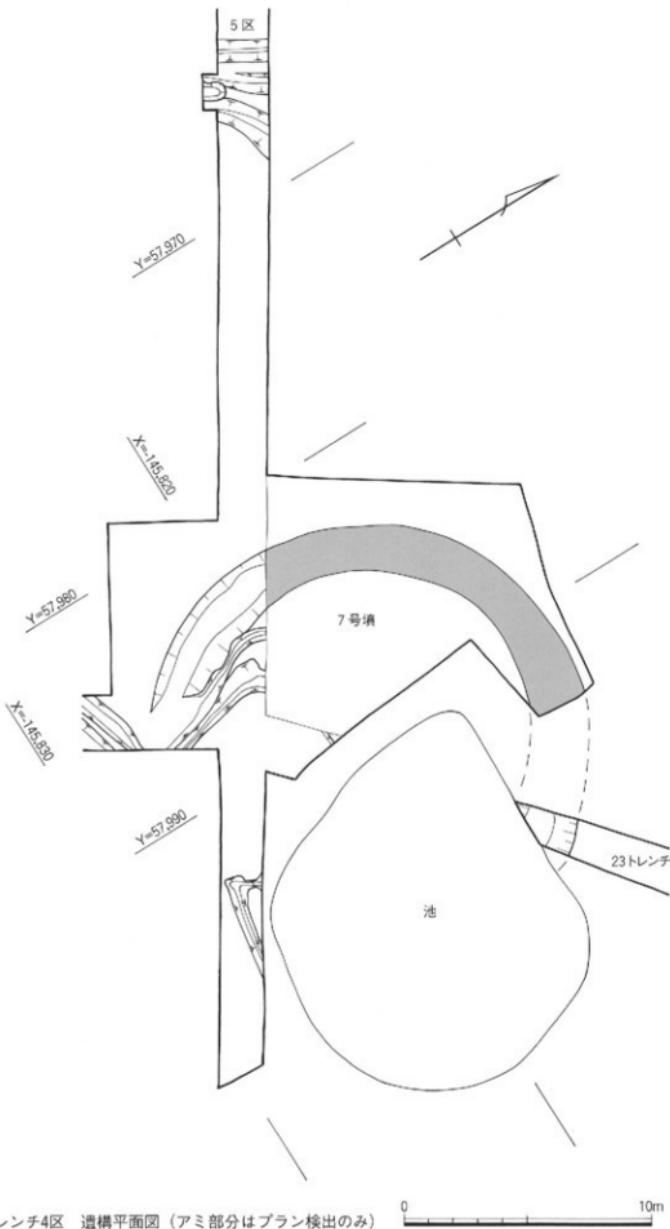


fig77. 21 トレンチ4区 遺構平面図（アミ部分はプラン検出のみ）

4 区

3区と溜池を挟んで西北側に続く調査区で、トレンチの全長は40mである。調査区の東半部の溜池の南側にあたるトレンチは、遺構面が大きく削平を受けており、遺構は存在していなかった。西側についても後世の畑造成時の削平はあるものの、基盤層である黄橙褐色極細砂上面で溝を検出した。包含層は存在していない。

溝は調査区内で弧を描くように検出でき、残土置き場を確保するために、広めに北側の耕作土を除去した段階で、調査区外ではあったが、そこでも検出した溝に続く円弧状の溝が確認できた。このため、4区の調査に先立って実施していた、25トレンチの調査で検出した古墳の周溝と同様のものであることに気づくのに、そう時間は必要ではなかった。

古墳の存在が明らかになったため、その規模を確認する必要から、調査区の南側もトレンチを拡張して、古墳の検出を行った。

古墳の掘削は最小限の調査を行い、工事の影響が及ばない範囲については、周溝を確認したのみで、写真と図面で記録することに留め、地下に保存される。

7号墳

4区で確認した古墳は出合古墳群の7号墳と呼称する。確認された周溝は全体のほぼ半分にあたる西側と北側である。南側は後世の削平を受け残存せず、東側は溜池で消滅している。溝の幅は最大2.3m。深さは12

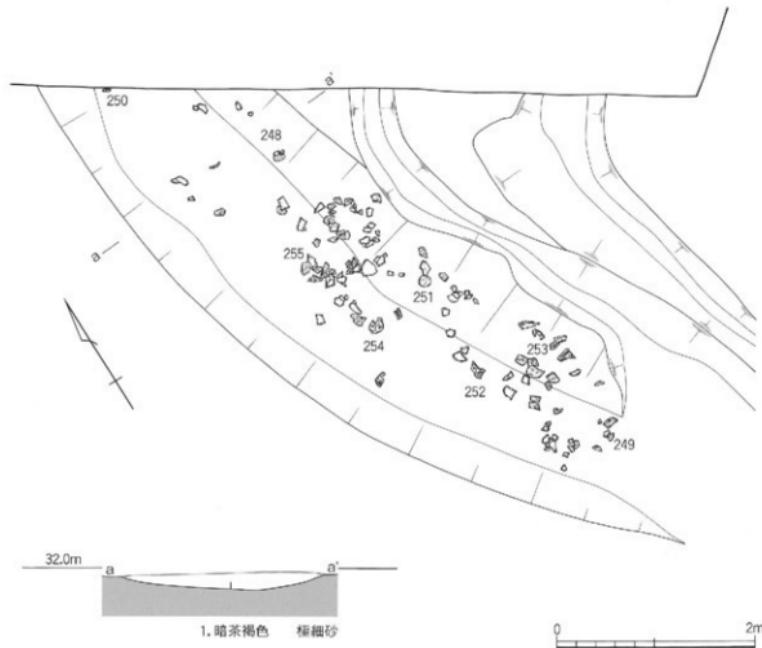


fig7B. 7号墳遺物出土状況平面図（数字は遺物番号）・周溝断面図

~19cmである。浅い皿状の形状を示す。上部の削平が著しく、周溝の底の部分しか残存していない。埋土は暗茶褐色極細砂である。

墳丘は既になく、主体部についても残存していない。検出した周溝から復元した古墳の規模は直径13mの円墳である。周溝までを含んだ直径は17.5mである。

調査区で掘削した周溝からは多くの須恵器や土師器が出土した。器種は壺・短頸壺・器台・甕などである。埴輪は出土していない。

7号墳からの出土遺物の中で、図化することができたのがfig.79である。すべて須恵器である。

248は壺蓋である。口径9.7cm、器高5.1cmを測る。内外面及び口縁部は回転ナデにより成形し、天井部約1/4は回転ヘラケズリで調整を施す。口縁端部には段が存在する。

249は壺身で、口径10.6cm、器高4.3cmを測る。たちあがりは内傾し、端部は丸く收める。

250は頸部から上を欠失している、甕であろうか。現存高7.2cmで、肩部より下の体部上半にはカキメを施し、下半は格子目風のタタキ成形である。底部付近に1条のヨコナデを施している。

251は短頸壺で口径8.0cm、器高6.1cmを測る。肩部からやや内湾気味に頸部が立ち上がり、垂直に口縁部へと延びる。口縁端部は丸く收める。

252~254は器台で、252と254は脚部、253は壺部である。253は丸みを持つ体部下半から直線的に外方へと体部が延びる。体部外面の上半は2条の沈線による突帯の間に、5帯の櫛描波状文を施す。下半には平行タタキが施されている。口縁は強いナデにより外方へ引き出された後に、上方に垂直に立ち上がり、端部は丸く收める。252の脚部は復元底径14.4cm、現存高8.3cmを測る。外方へ直線的に広がる底部から、上方へと垂直に立ち上がる。外面には2条の平行沈線により造り出された突帯の間に、1帯或いは2帯の櫛描波状文を施す。底から3段目と4段目の区画には、ヘラ切りによる長方形スカシが造られる。3段目には貼り付け粘土紐による装飾状の痕跡が存在する。254の脚部は復元底径10.4cm、現存高20.6cmを測る。やや踏ん張る底部か

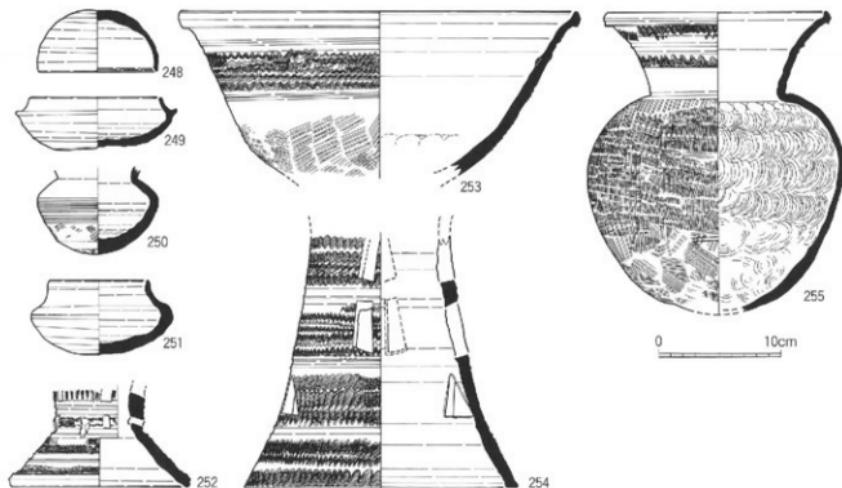


fig79. 7号墳出土遺物

ら、わずかに内湾気味に立ち上がる。2条の平行沈線により造り出された突帯の間に3帯の櫛描波状文を施す。下から2段目には三角形、3・4段目には長方形のヘラ切りによるスカシを造る。

255は壺である。口径17.8cm、現存高は24.6cmを測る。やや肩の張る球状の体部から外反気味に頸部が立ち上がり、口縁部は上方へつまみ上げる。頸部外面は突帯を境に上下に1条の櫛描波状文を施し、頸部と体部の境には1条の沈線を巡らす。体部外面は格子状タタキ、内面は同心円状のタタキ成形である。

これら出土遺物の時期は器台、255の壺はやや古い要素が認められるが、概ね6世紀前半頃と考えられる。

5 区

4区の西北に続く調査で、全長は50mである。ここでも、耕作土を除去すると、黄橙褐色極細砂の遺構面となる。調査区が屈曲する辺りから西については、現耕作面が一段高くなり、その間については、約50cmの黄灰褐色極細砂の土層の堆積がある。5区で検出した遺構は土坑が1基のみである。

SK04

4区との境界で検出した土坑で、削平が著しいトレンチで、ちょうど現耕作土の畦畔が存在する場所で、削平を免れたために残っていたものである。土坑の肩部は両側ともに一部が削平されている。土坑からは須恵器の壺(256)がまとまって出土した。トレントの壁面で土器が出土したため、調査区を一部拡張して調査を行った。土坑の規模は長径86cm、短径71cm、深さ6cmの楕円形の上坑である。埋土は淡茶灰色極細砂である。

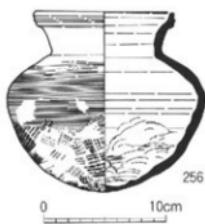


fig80. SK04出土遺物

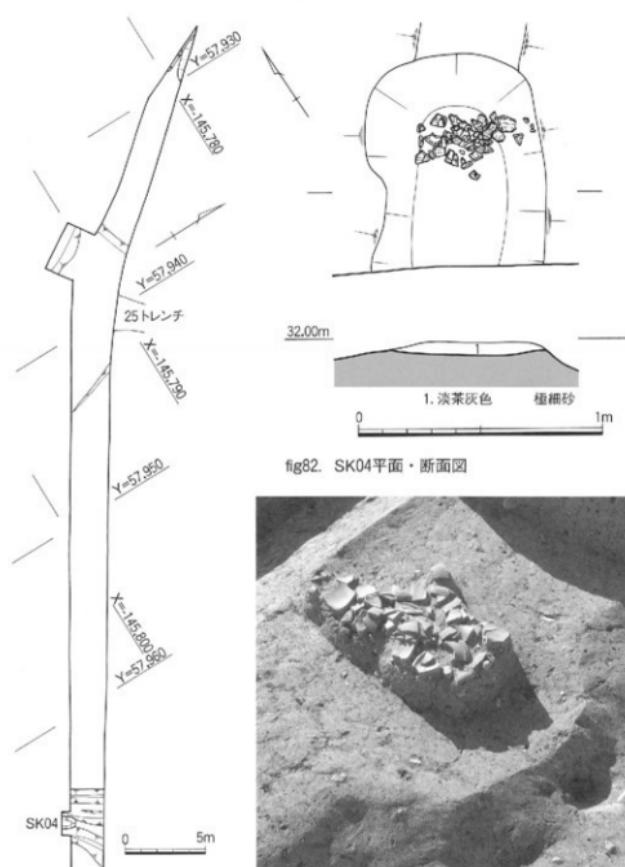


fig82. 5区 遺構平面図

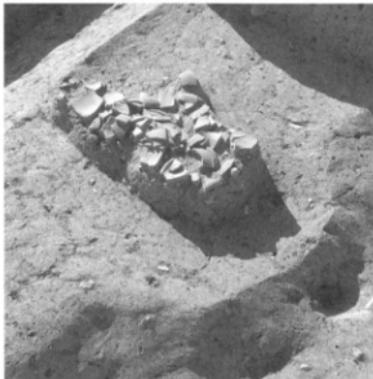


写真12 SK04遺物出土状況 (北から)

壺は、土坑の一方に片寄って、土坑底からやや浮いた状態で出土している。古墳に伴う土坑である可能性が考えられる。

256は須恵器の壺で口径11.2cm、器高14.8cmを測る。やや肩の張る体部から外方へ頸部が立ち上がり、口縁端部は外方に拡張し、大きな端面をつくる。体部外面上半はカキメ、下半には格子目状タタキが施されている。内面下半には同心円状タタキが認められるが上半はナデ消されている。

出土遺物の時期は概ね6世紀前半頃の時期が考えられる。

第3節 22トレンチ

トレンチの南西端部で21トレンチ3区と接する調査区で、南西から北東方向のトレンチの全長は42mである。北東端部と南西端部の高低差は1.2mである。耕作土の下層には、調査区の北東部で灰褐色砂質シルト、南西部では淡黄茶褐色砂質シルトが遺構面までの間層として存在するが、調査区のほとんどは、耕作土を除去すると遺構面になる。検出した遺構は土坑1基である。

SK01

調査区の北東端部で検出した土坑である。土坑は調査区外に延びるため、全体の規模については不明確である。検出した平面形から推測すると、一辺約3mの方形の土坑であると考えられる。深さは26cmである。土坑の壁はほぼ垂直に近く、まっすぐ掘り込まれている。埋土の上層は淡灰褐色シルト質極細砂、下層は灰黃褐色砂質シルト層である。埋土からは須恵器・土師器の細片が出土している。



写真13 22トレンチ全景（北東から）



fig83. 22トレンチ 遺構平面図・西壁土層断面図

第4節 23トレンチ

22トレンチの西北約50mの位置で、南西端部で21トレンチ4区と接する調査区である。トレンチは南西から北東方向の水路部分の調査で、トレンチの全長は62mである。22トレンチ同様、北東端部と南西端部には高低差があり、1.0mである。調査区の北東半部では耕作土を除去すると直下で遺構面となり、南西半部では黄灰褐色極細砂が遺構面までの間層として存在する。

検出した遺構は土坑1基、溝2条、古墳周溝である。

SK01

調査区の南西部で検出した長径70cm、短径38cm、深さ18cmの楕円形の土坑である。埋土は淡黄褐色極細砂で炭化物が含まれていた。遺物は出土していない。

SD01・02

調査区の中央部で検出した南北方向の溝で、SD02はSD01に先行するものである。SD01の幅は40cm、検出した長さは2.7m、深さは4cmである。溝は西方向から流れ、調査区内で直角に屈曲し、南側に流れている。SD02の幅は80cm、検出した長さは2.9m、深さは6cmである。北から南に向けて流れる溝である。埋土はSD01が淡黄褐色極細砂、SD02がマンガンを含んだ灰褐色極細砂である。両者から須恵器が出土し、SD01からは布目のある平瓦片が出土している。奈良時代後期から平安時代前期頃の遺構と考えられる。

溝の方向が南北方向で、21トレンチで検出したSB01と同様であり、出土遺物も同時期であることから、溝の周辺にも掘立柱建物が存在する可能性が考えられる。

周溝

調査区の南西端で検出した幅2.5m以上、深さ22cmの溝である。21トレンチ4区で確認した7号墳の周溝の続きである。墳丘側の周溝肩部は溜池によって失われている。

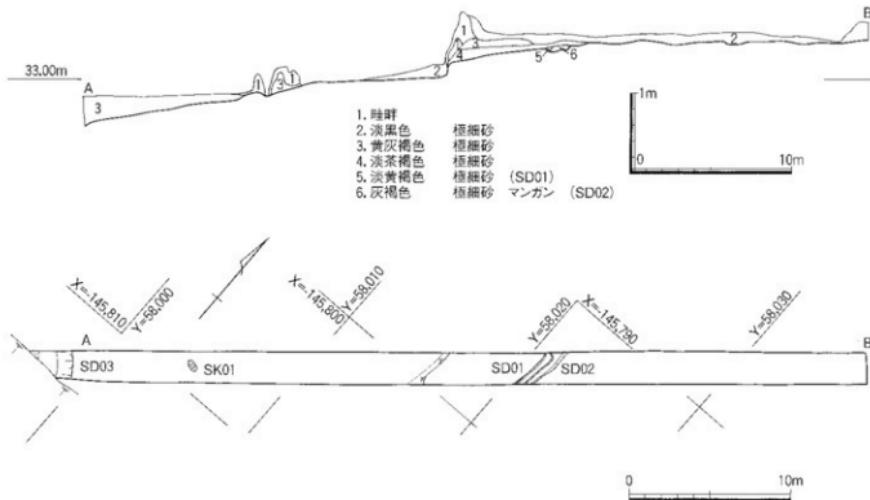


fig84. 23トレンチ 遺構平面図・西壁土層断面図

第5節 24トレンチ

トレンチの北東端部で21トレンチ4区と直角に接する調査区で、南西から北東方向のトレンチの全長は33mである。北東端部と南西端部の高低差は80cmである。調査区の北東部では耕作土の直下で遺構面となり、南西部では耕作土の下層にマンガンを含む黄茶褐色極細砂の間層を挟んで黄褐色極細砂層の遺構面となる。検出した遺構は古墳の周溝である。

8号墳

調査区の中央部で古墳の周溝を確認することができたため、調査区を一部拡張して、周溝の規模を明確に

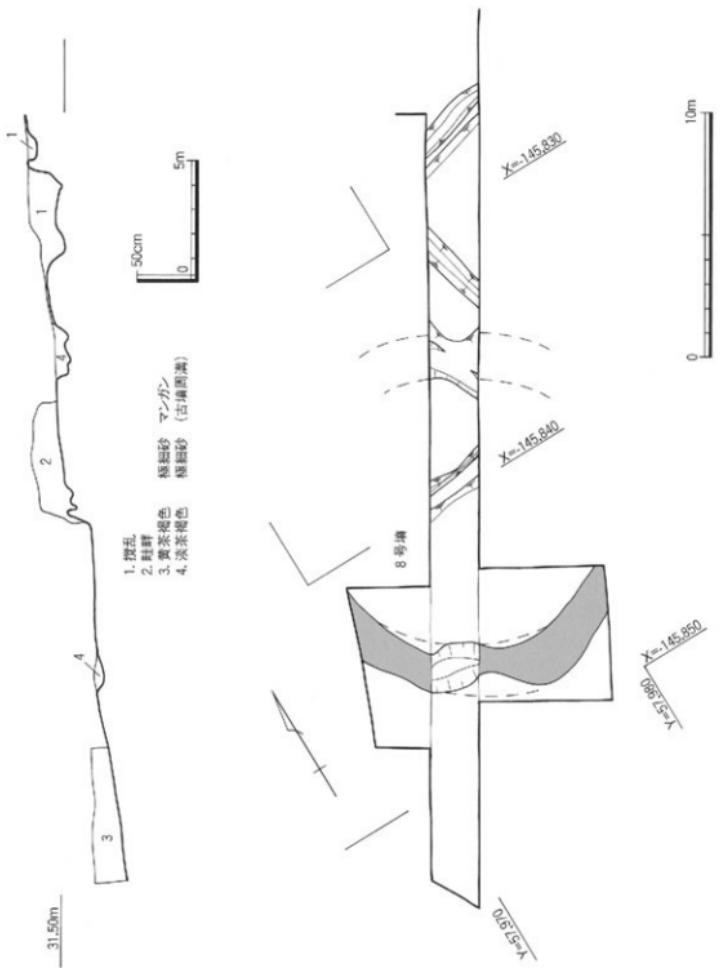


fig85. 24トレンチ 遺構平面図（アミ部分はプラン検出のみ）・西壁土層断面図

するための調査を実施した。検出したのは周溝の南側約1/4にあたる部分と周溝の北側の一部である。周溝は円弧を描くものであると考えられ。円墳であることが判明した。掘削した周溝は工事の影響範囲に留め、それ以外は規模を記録した後に埋め戻して保存している。古墳は出合古墳群8号墳とした。

墳丘は既に削平されており、周溝のみを検出した。削平が著しく、検出した周溝の幅は1.9m、深さ8cmである。埋土は小礫混じりの淡茶褐色極細砂である。周溝内及び周溝の周辺からは焼土や炭化物が出土している。

周溝の北側部分も調査区内で確認することができた。搅乱で残存状態が良くなく、復元すると周溝が歪んでいるような印象を受ける。

検出した周溝の最大幅は2.0mである。検出した周溝から復元した古墳の規模は直径11.2m、周溝までを含んだ直径は15.3mである。この復元規模からすると、すぐ北で検出した7号墳との間は約10mである。

周溝からは土師器片が出土しているのみである。

第6節 25トレンチ

調査区は23トレンチの西北約50mの位置で、南西端部で21トレンチ5区と接する。トレンチの全長は42mである。トレンチの北東端部と南西端部では1.2mの高低差がある。調査区の北東半部では耕作土を除去すると直下で遺構面となり、南西半部では極細砂と砂質シルトの堆積となっている。検出した遺構は土坑2基、溝4条、ピットである。

土 坑

調査区の南西部で2基の土坑を検出した。SK01は長径95cm、短径55cm、深さ20cmの楕円形の土坑である。埋土は淡黄白色砂質シルトである。SK02はその一部が調査区外に延びるが、長径90cm、短径50cm以上、深さ25cmの楕円形の土坑である。肩部から一段下がり、さらに一部が深くなっている。埋土は淡黄白色砂質シルトである。須恵器・土師器片が出土している。

溝

SD04は調査区の南西部でトレンチを横切るように検出した溝で、幅1.1m、深さ15cmである。埋土は淡黒色極細砂である。

調査区の中央部で東方向に落ちる遺構を検出した。当初は弧を描くように検出したため、埋没した池か円弧状の溝、それは古墳の溝になるか不明であるが、何かそういうものが調査区の東側にあると考えられた。



fig86. 25トレンチ 東壁土層断面図

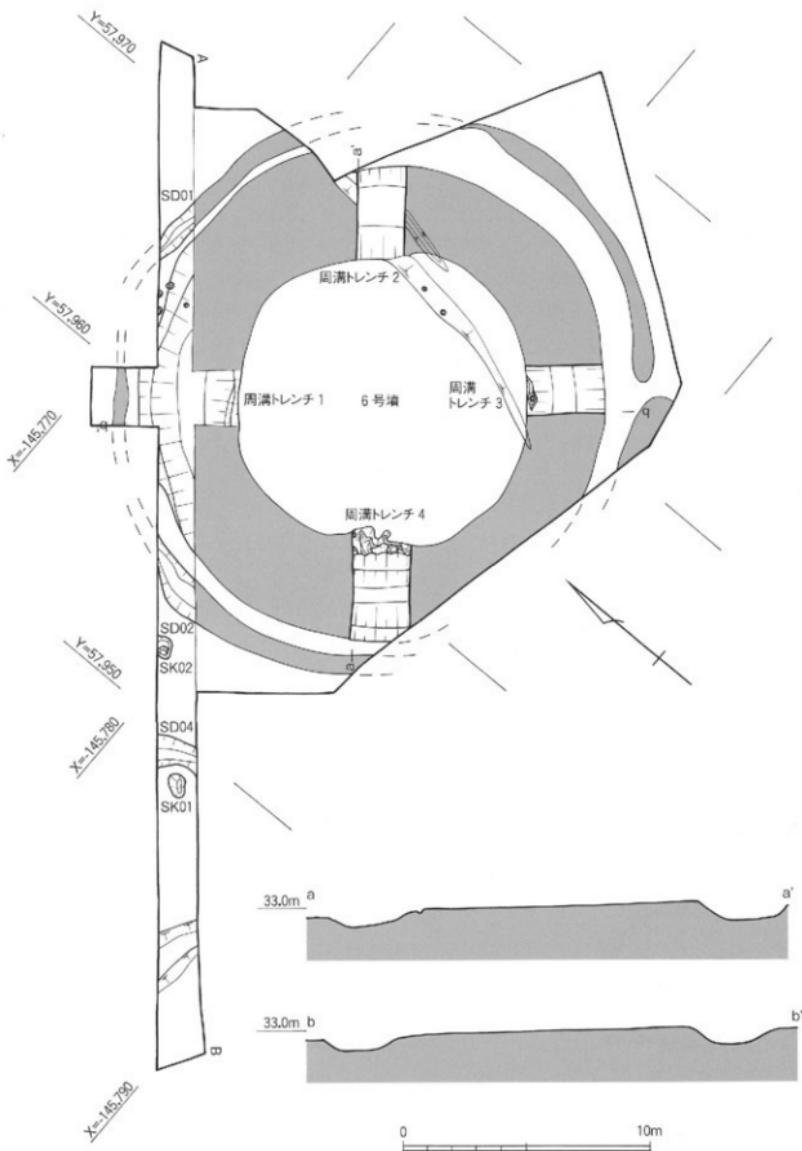


fig87. 25トレンチ拡張 遺構平面図 (1) (アミ部分はプラン検出のみ)

そこで、調査区に直交する方向のトレンチを設定して、遺構の性格を明らかにすることにした。その結果、検出した落ちは立ち上がり、溝であることが判明したため、古墳の周溝である可能性が増し、調査範囲を拡張して全容を明らかにすることとなった。

灰黄褐色砂質シルトの遺構面を検出しながら、掘削を進めると、黄白色砂質シルトの地山の盛土と暗黄灰褐色砂質シルト（周溝の埋土）が円形に巡って検出でき、古墳の周溝であることが判明した。

6号墳

古墳の周溝と判明したため、出合古墳群6号墳と呼称することにした。この6号墳が今回の圃場整備事業に伴う発掘調査によって見つかった最初の古墳である。発見された当時は、字名から「堂ノ上古墳群」と呼んでいたが、後述する第40次調査において古墳群を検出するに至り、出合古墳群との間隙を埋めることとなつたため、一帯の古墳を「出合古墳群」として認識することとし、既に発見されている5基の古墳に次ぐ番号を付した。古墳の掘削は工事で文化財に影響の及ぶ範囲と、最低限の記録のための掘削に留め、ほとんどは埋め戻し、地下に保存している。

6号墳の周溝は最小幅2.9m、最大幅4.5m、深さは最大78cmである。埋土は、上層では後世に埋められた地山の土が周溝の半分ほどを埋めている。下層は黒色シルト質極細砂である。溝の断面形は逆台形状で、底は平らである。古墳の規模は直径が12.5mの円墳で、周溝までを含んだ直径は19.5mである。墳丘部は既になく、主体部は存在しない。

周溝の外にはさらに1重の溝が巡っていることが確認できた。溝の幅は70cm~11mで、深さは8cmである。この溝の機能については

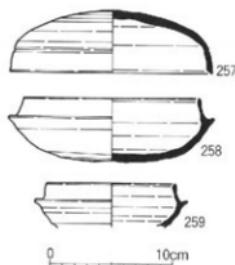


fig.88. 6号墳出土遺物

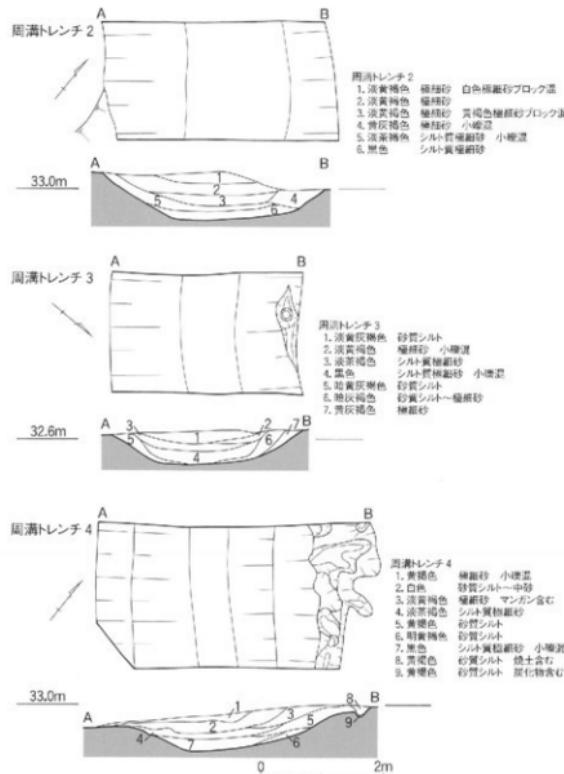


fig.89. 6号墳 周溝トレンチ2~4 平面・断面図

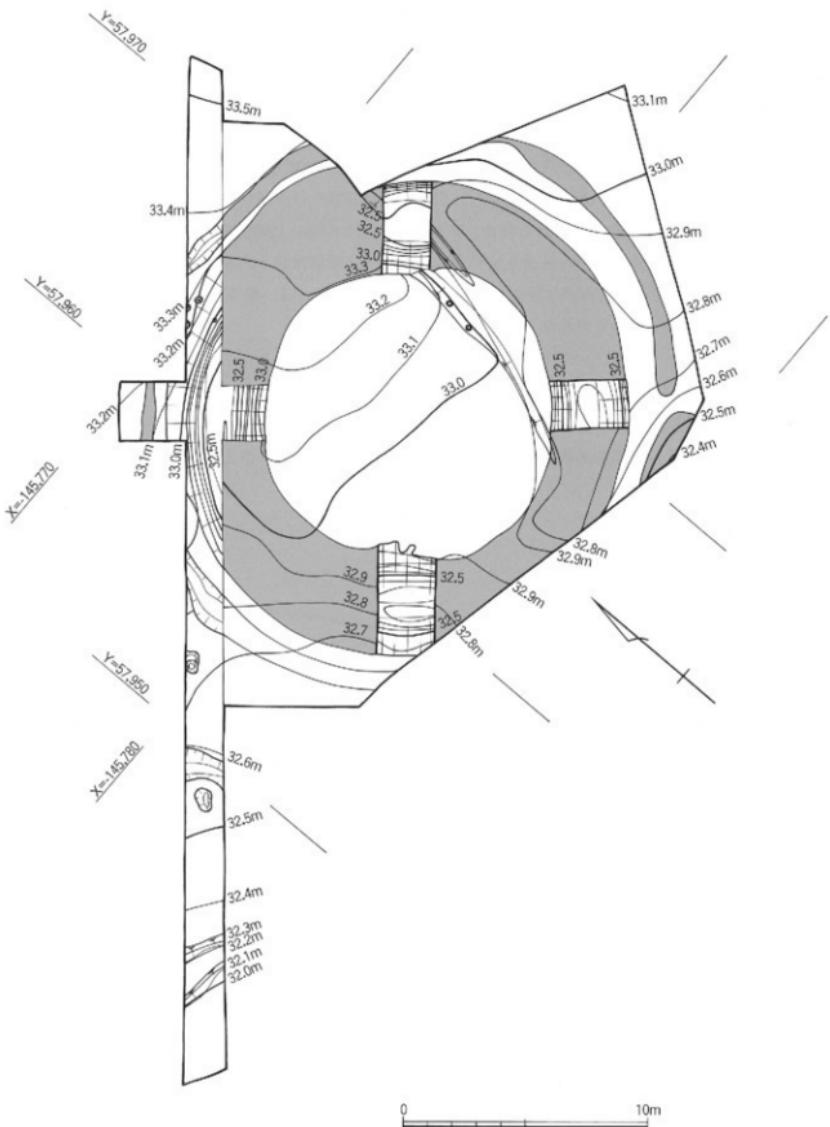


fig90. 25 トレンチ拡張 遺構平面図 (2) (アミ部分はプラン検出のみ)

不明確であるが明らかに周溝の周りを巡っていることは確かである。検出面が削平されていなければ、2本の溝は接していた可能性も残る。

古墳の周溝には4箇所のトレンチを設定して、記録のための調査を行った。西北部の最初に確認したトレンチを周溝とレンチ1とし、時計回りに順に2、3、4とした。周溝トレンチ4では、墳丘側の周溝肩部のラインが乱れていた。そして肩部から少し溝内では焼土や炭化物がまとまって出土している。周溝外側の小溝や肩部の焼土は、古墳築造時に必要な行為の証であろうか。

出土遺物は少なく、須恵器が数点出土しているのみである。257は須恵器壺蓋で口径16.4cm、器高5.1cmを測る。内外面及び口縁部は回転ナデにより成形し、天井頂部は回転ヘラケズリで調整を施す。口縁端部には段が存在する。天井部と口縁部の境となる稜は、凹線状になっている。258と259は須恵器壺身である。258は口径14.1cm、器高5.2cmを測る。たちあがりはやや内湾し、口縁端部は緩く内傾する。259は下半を欠失する。復元口径は10.4cmである。たちあがりはやや内湾する。口縁端部には緩い段を有する。

これらの出土遺物は、概ね6世紀前半頃の時期が考えられる。

第7節 26トレンチ

25トレンチの西北約50mに位置するトレンチで、全長は70mである。調査区は北東半部の一段高い圃場に設定した調査区を1区、南西部の調査区を2区として調査を実施した。1区と2区では現在耕作面で約80cmの高低差がある。

1 区

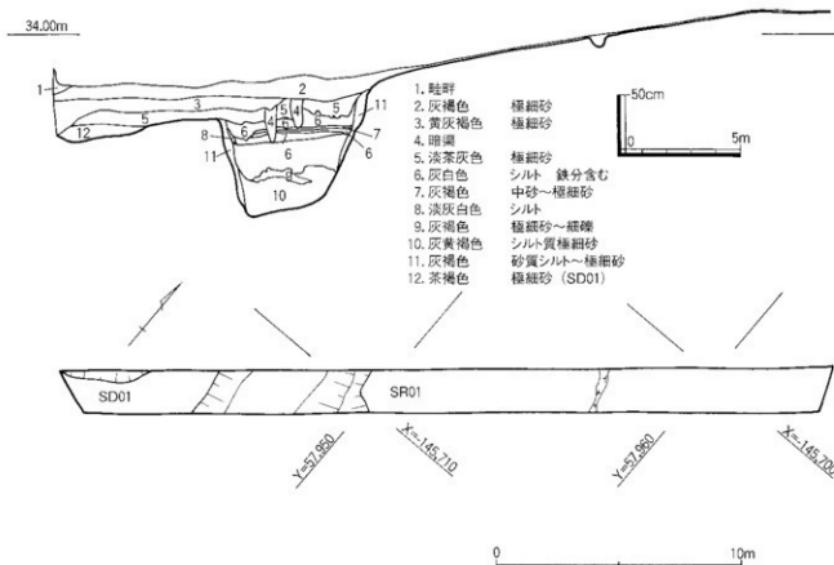


fig91. 26トレンチ1区 遺構平面図・西壁土層断面図

調査区の北東半部は耕作土直下で淡黄褐色極細砂の遺構面となるが、遺構は検出されなかった。既に削平を受けている可能性も考えられる。南西半部は遺構面までの間に黄灰褐色や淡茶灰色の極細砂の堆積がある。検出した遺構は溝2条である。

溝

SD01は幅6m、深さ80cmの南北方向の大溝である。北から南へ低くなっている。埋土は上層は鉄分を含む灰白色のシルトと砂層の互層で、下層は灰黄褐色シルト質極細砂である。堆積は水平堆積で、緩やかな水の流れがあったことが伺える。この規模の溝はここまで調査では検出されていない。出土遺物から12世紀頃の溝であると考えられるが、水田開発に伴うものと考えられる。

SD02は調査区の南端部で検出した溝で、調査区にその一部がかかっていた。これは、後述する2区で検出された古墳の周溝であると考えられる。

2 区

新設される水路部分のトレンチ調査を実施したが、調査区の南西部で円弧上に巡る溝を検出した。掘削を進める内に、溝内から須恵器に混じて埴輪片が出土し、古墳であることが判明した。そこで、古墳の規模を確認するため調査区を拡張して耕作土を除去したところ、近接して古墳の周溝を確認するところとなった。検出した遺構は古墳4基である。調査区の中央部から北部では、耕作土を除去した段階で、古墳の周溝が不明瞭ながら認められた。

9号墳

1区の調査区のすぐ西側で周溝を確認した古墳である。検出した周溝は全体のはば1／5程度である。周溝の一部を掘削したのみで残りは地下に保存している。周溝の幅は2.4mで深さは18cmである。周溝から復元した古墳の直径は9.8m、周溝まで含んだ直径は14.5mの円墳である。埋土は2層に分かれ、上層が暗茶褐色砂質シルト、下層が暗灰褐色砂質シルトである。溝からは5世紀後半頃の須恵器が出土している。

10号墳

2区拡張区の西北部で検出した古墳である。周溝の一部を検出したのみで掘削はしておらず、平面形のみを確認して、地下に保存をしている。そのため、全容は不明であるが、周溝の幅は1.3m以上である。周溝を含んだ古墳の直径を復元すると14.5mの円墳になる。周溝の検出面では埴輪片が出土しており、墳丘上には埴輪が樹立していた可能性がある。

11号墳

調査区の中央部で検出した規模の小さい古墳で、地形が低くなっている南側では周溝の一部が削平されているものと考えられ、検出した周溝はU字状に残存しているのみである。周溝の幅は最大幅1.1m、最小幅80cmで、深さは8cmである。埋土は茶褐色砂質シルトである。

周溝から復元した古墳の直径は4.0m、周溝までを含んだ直径は6.0mの円墳である。遺物は出土しておらず、詳細な時期の判別はできない。9・10・12号墳に開まれるような場所に築造されているが、築造の順は不明である。



写真14 12号墳遺物出土状況

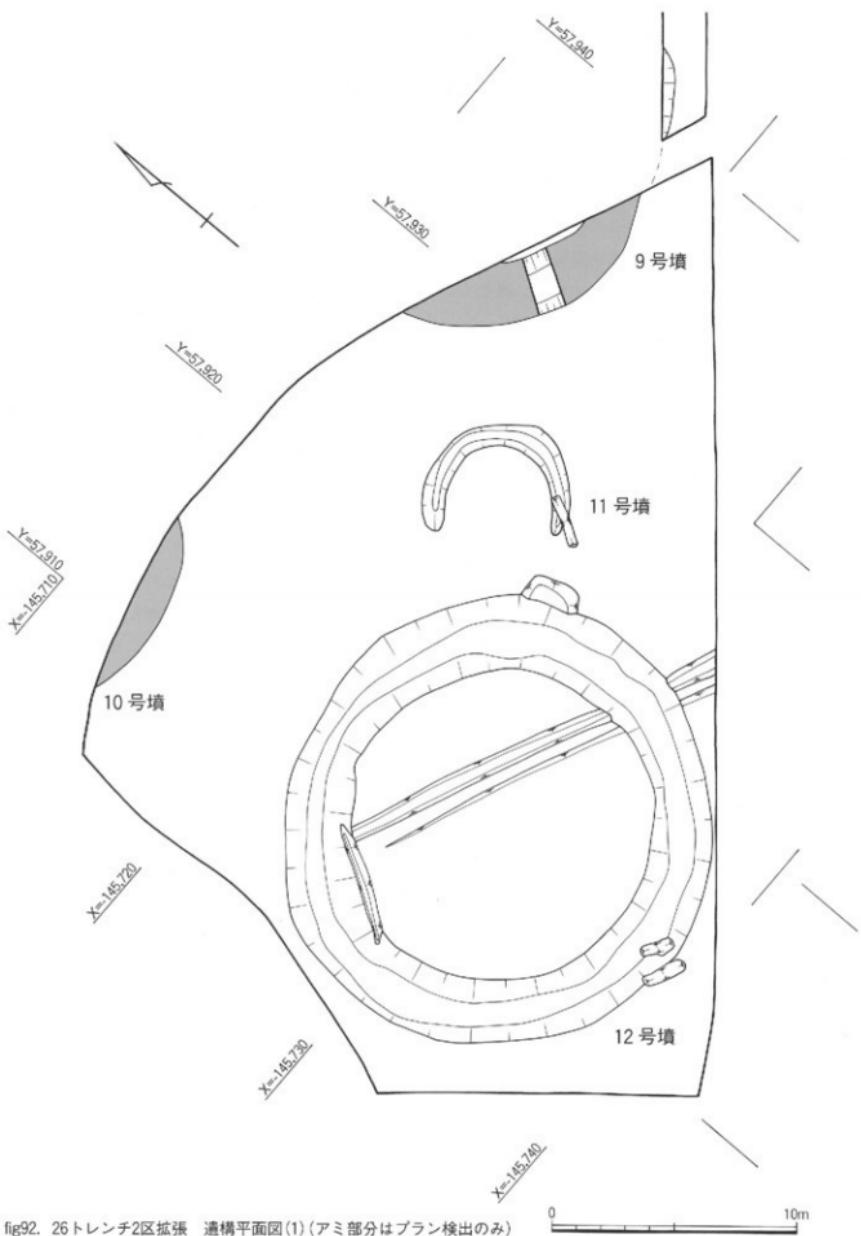
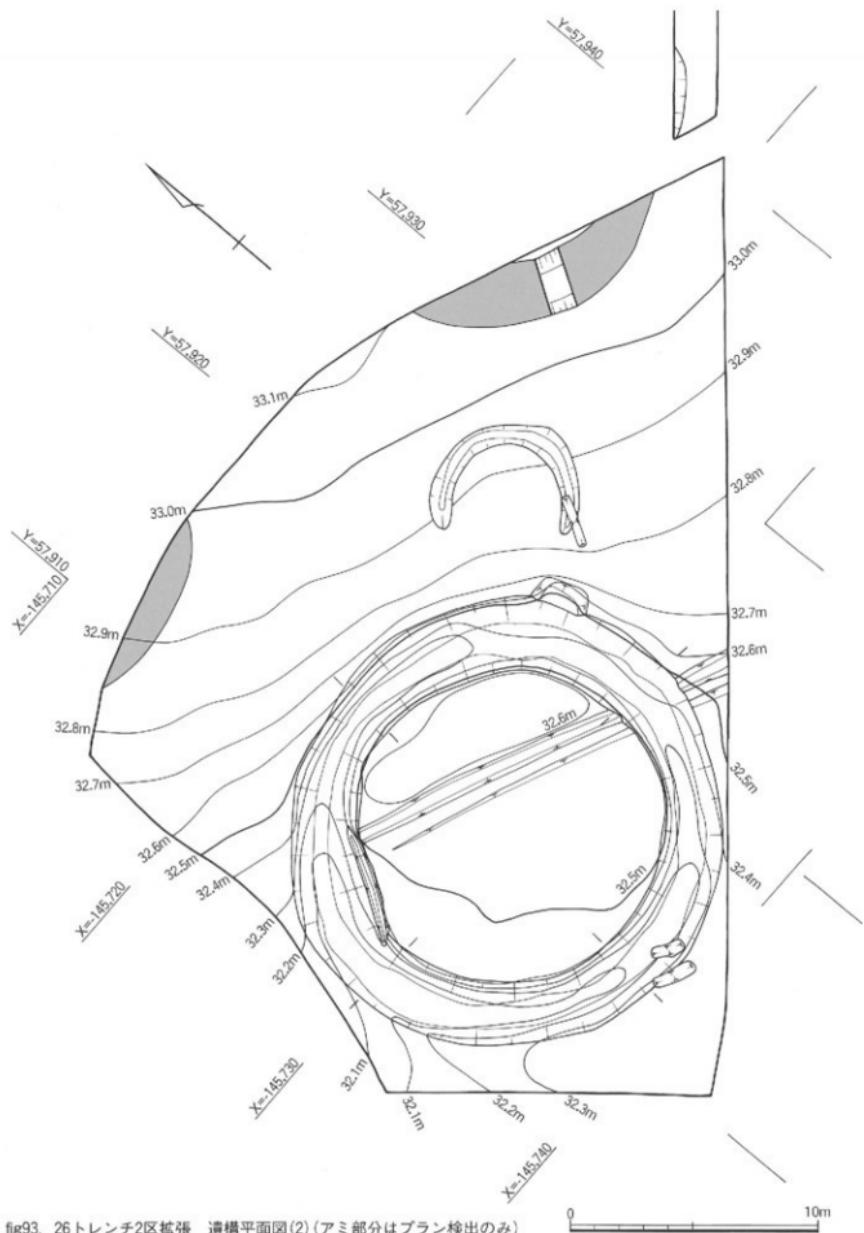


fig92. 26トレンチ2区拡張 遺構平面図(1) (アミ部分はプラン検出のみ)



12号墳

調査区の南部で検出した古墳で、拡張する前のトレンチ調査で周溝の一部を確認したため、調査範囲を拡張して、古墳の全体規模の調査を実施した。古墳は周溝が円形に巡る円墳で、周溝の幅は2.8m、深さは21cm～31cmである。埋土の上層は淡茶褐色や黄灰褐色の極細砂や砂質シルトで、下層は茶褐色砂質シルトが基本となる。古墳の南西部の、地形が低くなっている範囲については周溝の残りが悪く、浅い溝となる。

墳丘部で埋葬施設の確認に努めたが、検出するに至らなかった。検出した周溝肩部と同レベルの墳丘しか残存しておらず、既に削平を受けているものと考えられる。古墳の全体規模は直径13m、周溝まで含んだ直径は18.5mである。

周溝内からは、多くの埴輪や須恵器坏・壺・甕などの遺物が出土している。埴輪は周溝内側の肩部から下がった所からの出土が多く、墳丘の外周に樹立されていたことが判断される。埴輪は朝顔型埴輪、円筒埴輪、形象埴輪である。埴輪は周溝底から若干浮いた状態で出土しており、周溝がやや埋まつた時点で周溝内に崩れ落ちたことが伺える。

古墳の東側の周溝からは須恵器の坏がまとめて出土しており、古墳の北西部の周溝からは須恵器の大甕が意図的に破碎されたような出土状況を示している。

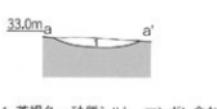
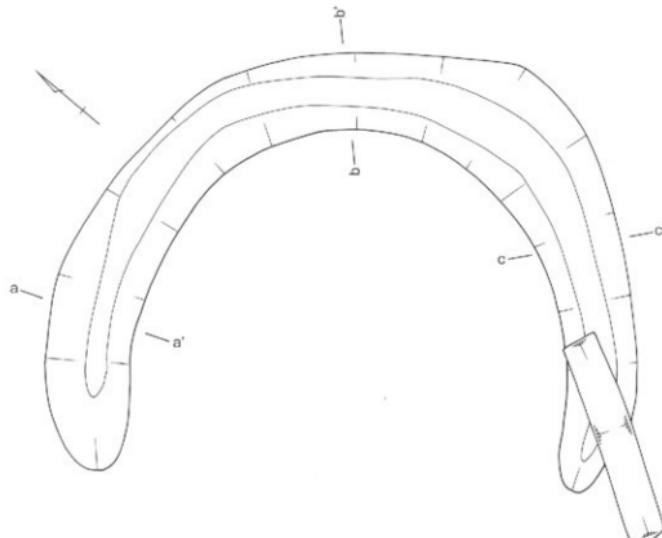


fig94. 26トレンチ2区拡張 11号墳平面図・周溝断面図



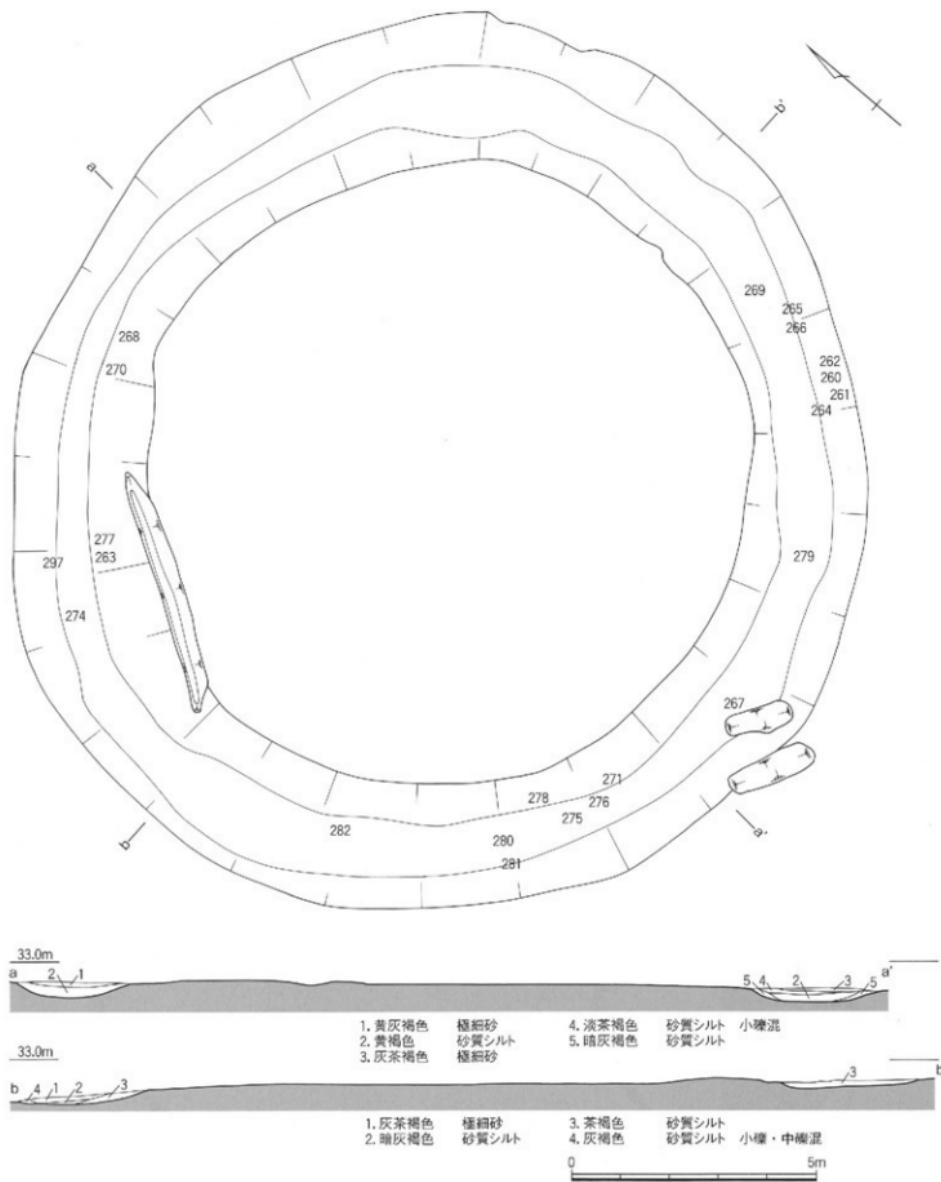


fig95. 26 トレンチ2区拡張 12号填平面図（数字は遺物番号）・周溝断面図

12号墳出土遺物

須恵器

260は須恵器壺蓋で、口径13.0cm、器高4.8cmを測る。天井部の約 $1/2$ は回転ヘラケズリ調整を施す。天井部と口縁部の境となる稜は鋭さを有している。口縁端部はやや外反し、凹状を呈する。

261～263は須恵器壺身である。261は口径11.1cm、器高5.8cmを測る。たちあがりは内湾し、端部は丸く取める。262は口径10.3cm、器高4.7cmでたちあがりは内傾しやや低い。端部は段を有する。263は口径10.6cm、器高4.7cmを測る。たちあがりは内傾するが、262に比べて直立気味に立ち上がる。端部はやや内傾し凹状である。260と261はやや焼成が悪く、茶褐



写真15 12号墳遺物出土状況

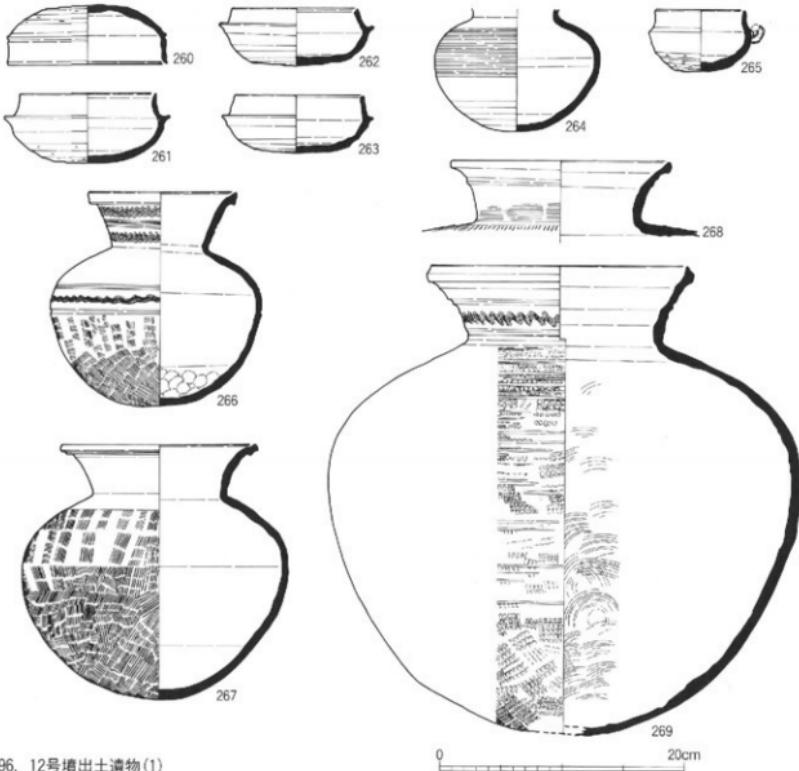


fig96. 12号墳出土遺物(1)

色を呈している。

264は須恵器の小型壺で口縁部を欠失する。体部外面上半はカキメ調整を施している。

265は須恵器把手付壺で、口径7.5cm、器高5.0cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がった後に、直立する。肩部は丸く收める。

266～269は須恵器壺で、269は中型壺、その他は小型壺である。268は口縁部のみで、口径17.8cmを測る。266は口径12.1cm、器高17.5cmを測る。頸部は中央の突帯の上下に、1帯の櫛描波状文、体部外面の肩部に2条、1条の沈線の間に、1帯の櫛描波状文を施す。体部下半は縦位の平行タタキ成形を行ない、ナデ消している。267は口径16.0cm、器高20.8cmを測る。口縁部下に1条の沈線を施す。体部外面は平行タタキ成形を行

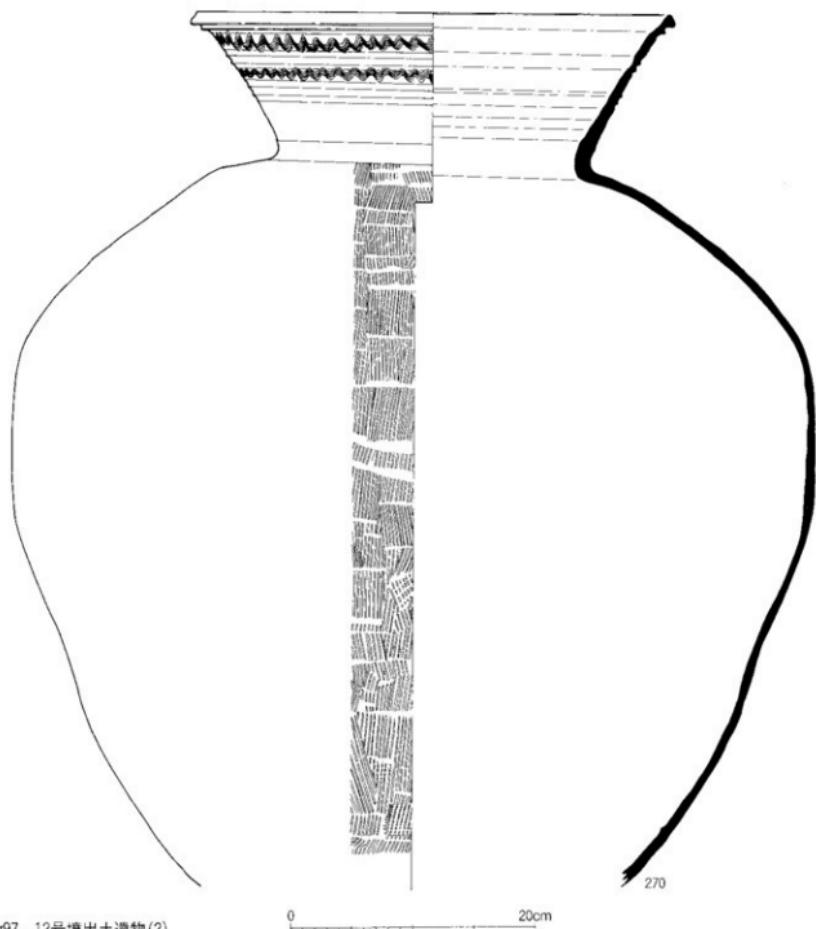


fig97. 12号墳出土遺物(2)

なう。269は口径20.8cm、現存高38.4cmで、口縁端部は外方に拡張し、大きな端面をつくる。頭部外面は2条の沈線による突帯2条の間に、1帯の櫛描波状文を施す。体部外面は格子目風タタキ成形後、粗いカキメ調整を施し、内面は同心円状タタキ成形である。

270は須恵器大型甕である。口径38.5cm、底部を欠失しており現存高71.3cmを測る。口縁端部は斜下方へ拡張され、口唇部は丸みを帯びている。口縁部下に1条の突帯を有し、頭部外面は2条の突帯を施した間に1帯の櫛描波状文で飾る。体部外面は継位の平行タタキを施し、内面は丁寧にナデ消している。

埴輪

12号墳の調査では、周溝内から多くの埴輪片が出土した。しかし、その多くは小破片で、接合復元作業の結果、完形品となるものは存在しなかった。従って、12号墳に使用された埴輪の全体的な様相については、不明であると言わざるを得ない。しかし、出土した埴輪の器形などから、2条突帯で円形のスカシを2ヶ所に有するものであると考えられる。スカシはやや歪な円形を呈する。埴輪の器種には円筒埴輪、朝顔形埴輪の他、形象埴輪と考えられる破片も存在する。尚、胎土は石英、長石、チャートの細砂及び細礫を含み、やや粗く、淡褐色～淡茶褐色を呈するものが多いが、一部に胎土が精良で、やや焼成が硬質なもののが存在する。

12号墳から出土した埴輪の大きな特徴に、タタキの使用がある。タタキ痕は口縁部、突帯端部を中心に認められ、すべて平行タタキである。埴輪表面の観察から、口縁部ではタタキ成形（調整）後にヨコハケが加えられており、朝顔形埴輪ではタテハケによりタタキ痕が消されている状況が確認できる。突帯端部には各突帯にタタキ痕が確認でき、タタキ後中央部をナデ消している。口縁部と突帯のタタキとの間には、両者を横断する同一のタタキ痕の存在などの連続性は認められない。また、縁部



写真16 12号埴輪出土状況

276：口縁部外面→



281：朝顔外面→



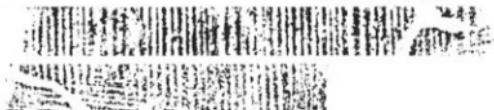
280：朝顔外面←



273：外面←



277：2段目外面↑



282：2段目外面↑

fig98. 12号墳出土埴輪ハケメ S=1:1 (矢印は埴輪の上方を表す)

のタタキの幅に比べて、突帯端部のタタキは細かいことが確認できる。体部は摩滅や剥落が著しい個体が多く、観察が困難である。わずかに確認できた例からは現状ではタタキ痕は認められないが、タタキ成形（調整）が口縁部と各突帯付加にのみ使用されたものであると言えない。尚、突帯付加時の突帯間設定痕などは確認されていない。

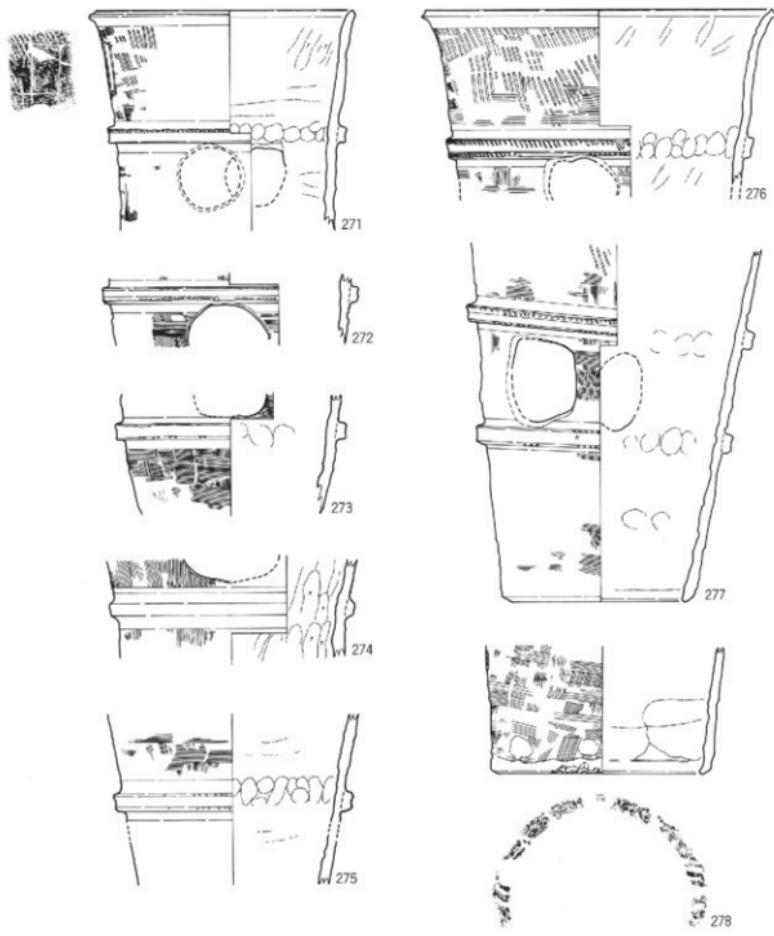


fig99. 12号出土土遺物(3)

円筒埴輪は基本的に外面をハケメ調整で仕上げており、内面へのハケメ調整は認められない。内面はユビナデによる仕上げである。朝顔形埴輪では口縁部内面へのハケメ調整が行なわれている。ハケメはタテハケの後にヨコハケを加えているが、突帯本体及び突帯上下のナデを切るハケメは確認できず、このことからハケメ調整の観点からすれば、突帯を付加した後にハケメを施す、いわゆる「二次調整」は存在しない。

ハケメ原体はfig.97である。確認されたハケメには共通性は認められたものの、破片の小片化と表面の著し

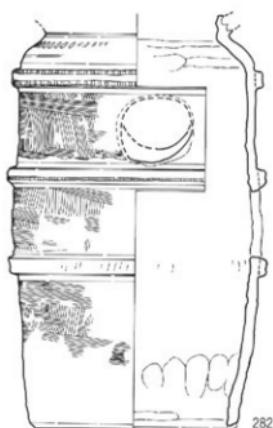
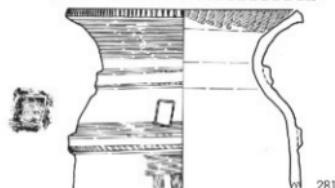
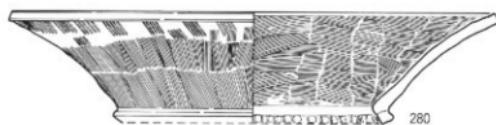
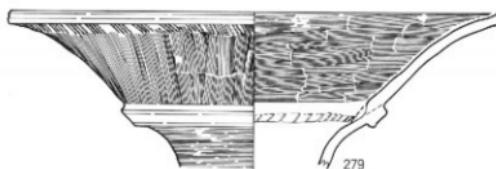


fig100. 12号埴出土遺物 (4)



い摩滅と剥落から、分類するまでには至らなかった。

焼成については、確認できた範囲では先に指摘した様に、出土した埴輪の一部の個体にやや硬質のものが見受けられるが、いわゆる須恵質のものは存在しない。すべて土師質である。外面に黒斑状の焼きムラ⁽¹⁾が存在する個体がある。

円筒埴輪の中で、口径が判明している271は口径21.6cmで、276は28.0cmに復元される。271と276の口縁部はやや斜下外方へ拡張され、口縁部下に横方向のナデを施す。口縁部と突帯端部には平行タタキが施され、タタキ後271ではタテハケ、273はヨコハケが施される。突帯端部はタタキ後ナデ消されており、内面には指頭を押した圧痕がある。突帯の上下はナデ調整である。突帯断面は緩いM字形を呈している。体部の調整は外側がタテハケ後ヨコハケで、内面はユビナデ調整。274は焼成がやや硬質で、突帶は低い。

朝顔形埴輪は、口縁部はやや外反気味に大きく延びる。279は口径40.0cm、280は口径39.8cmに復元される。



fig101. 12号出土遺物(5)

口縁部外面の上半には平行タタキ痕が認められ、タタキ後タテハケ調整を施していることが観察できる。279～281の端部に見られる接合部にはハケ原体の押圧により刻目が施されている。体部の突帯には、円筒埴輪と同じく平行タタキ痕が認められ、タタキ後にナデ消されている。体部の調整はタテハケ後、ヨコハケである。尚、281の長方形記号状のヘラ描は、271、285も含めて、いくつか認められる。

277の底径は14.0cm、278は16.2cm、282は底径14.8cmを測る。3者共、底部の設地面は外方へと斜面を有しており、底部内面に1条の横位のナデを施す。278の底面にみられる、植物類のものと推定される棒状の圧痕は282では確認されていない。

283～297は出土した埴輪片の一部である。284、285は口縁部で、やや斜下外方へ拡張され、口縁部下に横方向のナデを施す。口縁部と突帯端部には平行タタキが施される。これ以外の破片については体部と突帯端部の平行タタキの存在から、口縁部付近の破片である可能性がある。外面調整はタテハケ後、ヨコハケ、内面はユビナデである。突帯断面は緩いM字形を呈する。284は275、276、285、287、295などと共に外面に焼きムラが認められる。297は形象埴輪の一部と考えられる。12号墳の出土遺物は須恵器が壺や把手付壺などに

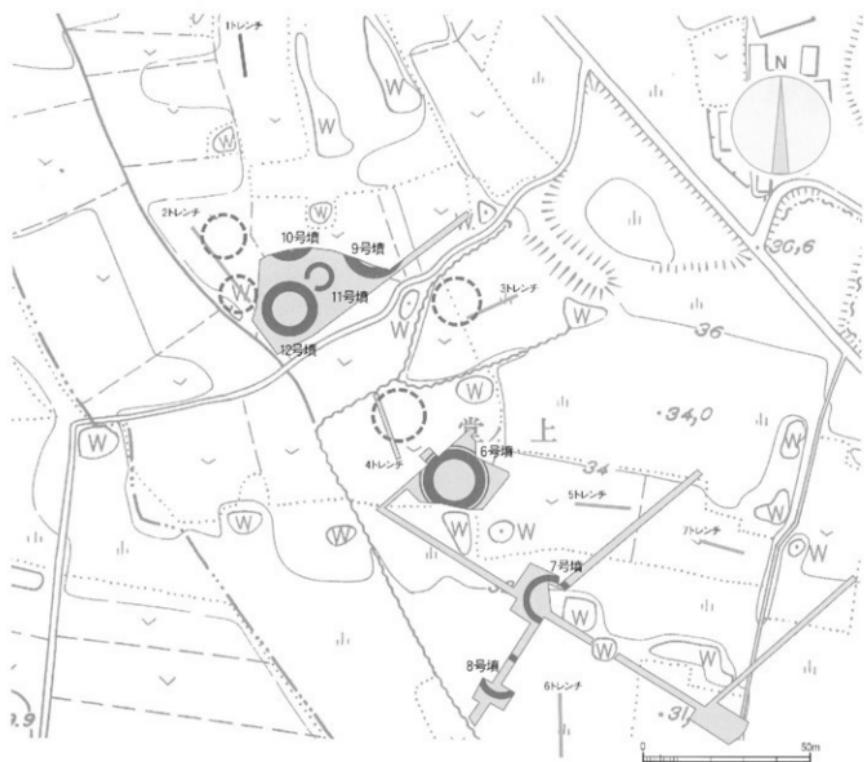


fig102. 古墳群範囲確認調査トレンチ配置図^②

古い要素が存在するが、260～263の須恵器壺蓋、坏身から、須恵器は5世紀後半～6世紀初め頃、埴輪は川西宏幸氏の分類IV期に併行する時期が考えられる。

古墳群範囲確認

古墳が確認された一帯で、古墳群の拡がりを確認するための調査を実施した。トレンチは12号墳のさらに北方向50mの位置に設定した試掘1 トレンチから南東方向にかけて、7本のトレンチを設定した。

試掘2 トレンチは12号墳のすぐ西側の調査区であるが、トレンチ内の2箇所で円弧状の土壤の色の違いを確認できた。2基の円墳の可能性がある。また、9号墳の東の試掘3 トレンチでも1基の円墳、6号墳の西側の試掘4 トレンチでも1基の円墳を確認した。周辺にはさらに何基かの古墳が存在することはおそらく間違いないだろう。

24トレンチで確認した8号墳の南側50mの、吉田池の北西端部に古墳状の隆起が存在する。試掘調査を実施しておらず詳細については不明であるが、可能性を記しておく。

第8節 27トレンチ

26トレンチの西北約50mに位置する調査区である。トレンチの全長は64mである。北東端部と南西端部には1.2mの高低差がある。調査区のほとんどは耕作土を除去すると直下で橙褐色砂質シルトの遺構面となる。

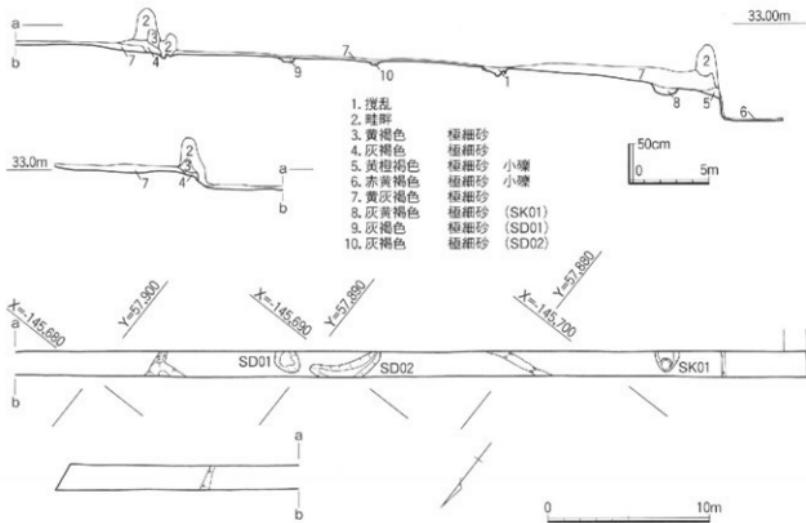


fig103. 27トレンチ 遺構平面図・東壁土層断面図

現開場の段差が生じる所は黄灰褐色極細砂の堆積が厚い。検出した遺構は土坑1基、溝2条である。

SK01

調査区の南西部で検出した土坑で、調査区外に延びるため全容は不明であるが、長径1.3m以上、短径1.4m、深さ19cmの規模である。土坑底は平坦であるが、一部がさらに深くなっている。埋土は灰黄褐色極細砂である。出土遺物はなく、時期は不明である。

SD01・02

調査区の中央部で検出した溝で、SD01の幅は1.3m、深さ10cmである。SD02は幅1.1m、深さ15cmである。埋土は両者ともに灰褐色極細砂である。

この2条の溝は、本来同一の溝であったものが、削平を受けて別々の溝のようになっている可能性が考えられるが、断定はできない。

第9節 28トレンチ

27トレンチの南西端部で接し、直角に屈曲する調査区である。トレンチの全長は27mである。耕作土直下で遺構面となるが、後世の削平が著しく、遺構は存在していなかった。

第10節 29トレンチ

28トレンチに隣接する調査区で、トレンチの途中で屈曲している。調査区の全長は47mである。28トレンチ同様、耕作土の直下で遺構面となる。調査区の北端部は徐々に地形が下がっていくようである。検出した遺構は土坑が1基のみである。

SK01

調査区南東端部で確認したが、調査区外に延びているため全容は不明である。検出した長径は1.1m、短径50cm、深さ6cmである。埋土は淡灰褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。

註 (1) 河内一浩氏(羽曳野市教育委員会)からご教示を頂いた。

この時期の埴輪に見られる黒色斑は、窯窓導入以前の技法に見られる「黒斑」とは区別する必要があり、すでに窯窓を導入して焼成が行なわれたものの低温により黒色斑のついた可能性からも「焼きムラ」とする指摘がある。

(2) 作図は文化財課 丸山潔の協力を得た。

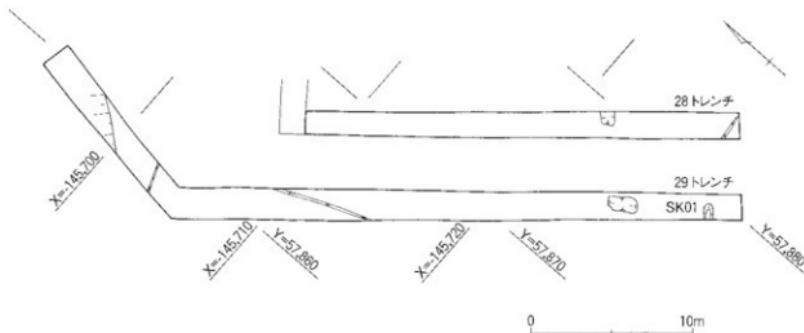


fig104. 28・29トレンチ 遺構平面図

第5章 第39次調査

第1節 30トレンチ

第39次調査は大池の南側段丘上に位置する調査地区で、新設される水路やパイプラインの工事によって埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について行った。調査トレンチは、第37次調査のトレンチに続く番号で、30トレンチから33トレンチの番号を付した。

調査地区のある段丘は標高が31m内外で、西端に設定した30トレンチ辺りからは東側に明石川の沖積地が広がり、彼方に須磨の鉢伏山が見通せる。北側は神出まで視界を妨げるものはない。

30トレンチは東西方向の調査区で、上津橋の集落から大池東側の堤沿いに上った所に位置する。トレンチは東半部の一部が溜池であるが、平面的な広がりを有し、西半部は幅1.2mのトレンチである。トレンチの全長は50mである。耕作土・床土を除去した段階で遺構面となる。検出した遺構は土坑8基である。

土 坑

SK01は調査区の中央部で検出した長径1.3m、短径70cm、深さ13cmの楕円形の土坑で、埋土は黄茶褐色シルト質極細砂である。土坑からは12世紀頃の須恵器片が出土している。

SK02は調査区外に延びる土坑であるが、一辺75cm、深さ30cmの方形の土坑であると考えられる。埋土は上層が黄褐色シルト質極細砂、中層は粗砂混じりの黄灰色シルト、下層は粗砂混じりの黄灰褐色シルト質極細砂である。

SK03も調査区外に延びる土坑で、一辺65cm、深さ19cmの方形の土坑である。埋土は上層が黄褐色シルト質極細砂、下層は灰褐色シルトである。



fig105. 第39次調査トレンチ配置図 (S=1:2,500)

SK04は直径1.1m、深さ28cmの円形の土坑である。土坑の半分は調査区外に延びる。埋土の上層は粗砂混じりの灰褐色砂質シルト、下層は暗灰褐色シルト質極細砂である。土坑の形状は播鉢状である。

SK05は長辺2.4m以上、短辺1.5m、深さ45cmの隅丸方形の土坑である。長辺側の土坑壁の片方は、中位から上はやや緩やかになる。埋土は上層から順に黄灰褐色シルト質極細砂、粗砂混じりの暗灰褐色シルト質極細砂、中砂混じりの灰褐色シルト質極細砂、茶灰褐色シルト質極細砂となる。土坑からは12世紀頃の須恵器、土師器片が出土している。

SK06は直径1.3m、深さ80cmの円形の土坑である。埋土は上層より灰褐色シルト質極細砂、黄褐色シルト質極細砂、黄茶褐色シルト、明黄褐色シルト質極細砂、黄灰色シルト～シルト質極細砂、中砂混じりの灰褐色シルトとなる。土坑の底は平らで、断面逆台形状である。

SK07は直径1.6m、深さ66cmの円形の土坑である。埋土は灰褐色シルト質極細砂、黄茶褐色シルト、黄灰色シルト～シルト質極細砂、中砂混じりの灰褐色シルトとなる。SK06同様、土坑の底は平らで、断面逆台形状である。

SK08は長辺2m以上、短辺1.3m、深さ40cmの隅丸方形の土坑である。一方の長辺は、中位から上はやや緩やかである。埋土は粗砂混じりの灰褐色シルト質極細砂、黄灰褐色シルト質極細砂、暗灰褐色シルト質極細砂、灰褐色シルトである。形状・規模ともにSK05に類似する。埋土からは12世紀頃の須恵器、土師器が出土している。

これらの土坑は類似したもので、近接して、密接な位置関係にあるのだが、用途は不明である。

第2節 31トレンチ

30トレンチの西北約350mに位置する調査区で、全長88mである。調査区は途中で屈曲する。その屈曲部から北側を1区とし、南側を2区とした。1区の北端部は林崎疊水に近接している。

1区

1区は全長35mの調査区で、耕作土を除去すると、淡黄灰色シルト質極細砂の遺構面となる。検出した遺構は溝1条のみである。

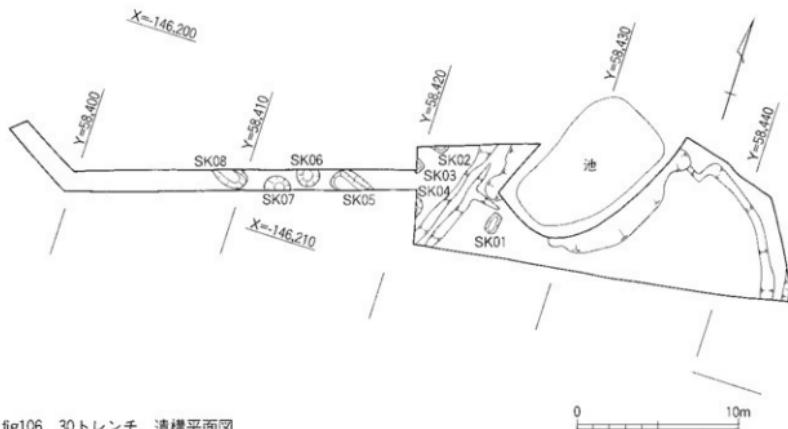


fig106. 30トレンチ 遺構平面図

SD05

調査区の北端部で検出した東西方向の溝である。幅1.2m、深さ17cmである。検出した溝の長さは2.2mである。埋土は上層が淡茶褐色砂質シルト～極細砂、下層が暗灰褐色シルト質極細砂である。溝からは瓦（299）と須恵器の塊（301）が出土している。

2 区

2区は1区に続く調査区で全長53mである。北端部と南端部では約1mの高低差がある。北半部では灰褐色極細砂、南半部では灰黄褐色砂質シルト～極細砂の間層があって、遺構面の黄褐色シルト質極細砂の遺構面となる。検出した遺構は溝4条、ピットである。

溝

SD01は調査区の南半部で検出した幅2.8m、深さ50cmの溝である。ほぼ東西方向で西から東に流れる溝である。埋土は上層から淡茶灰色極細砂～中砂、細砂交じりの灰褐色シルト質極細砂、小礫を含む茶灰褐色極細砂～中砂というように、砂層が主となる。出土遺物は12世紀頃の瓦片や捏鉢等である。

SD02はSD01の北側で検出した溝である。溝は南東から西北方向に流れているが、南側の肩部を上記のSD01に切られている。溝の幅は4.5m以上で深さは45cmである。溝の北側は緩やかに落ち込み、肩部から約1mのところで、さらに一段急に下がっている。溝の底は平坦である。埋土は最上層が淡茶褐色砂質シルト～極細砂で、中

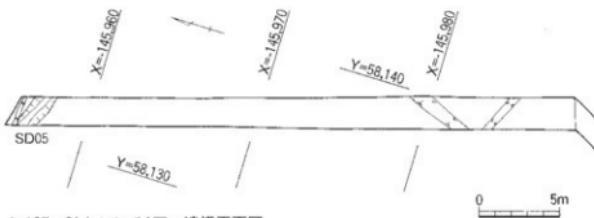


fig107. 31トレーンチ1区 遺構平面図

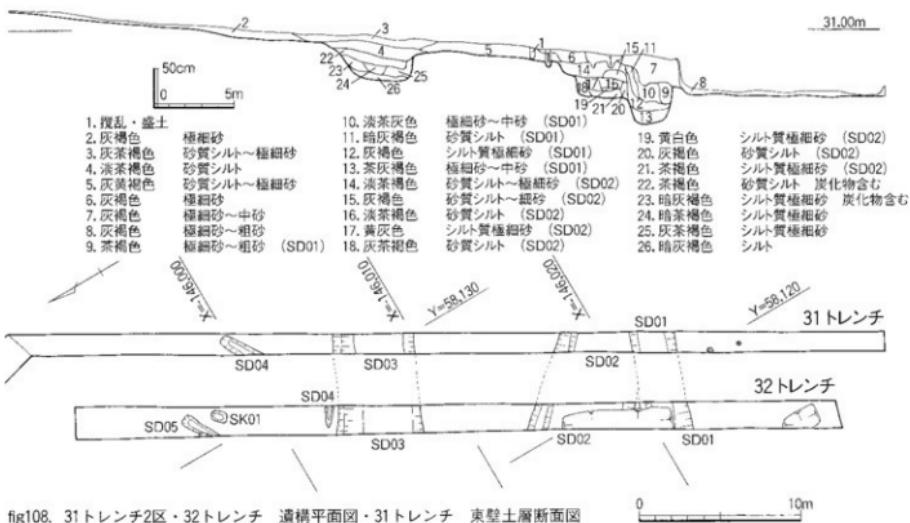


fig108. 31トレーンチ2区・32トレーンチ 遺構平面図・31トレーンチ 東壁土層断面図

層以下には砂質シルトやシルト質極細砂の土層が堆積している。明らかにSD01とは違ひのある埋土である。11世紀末頃の遺物が出土している。

SD03は調査区の中央部で検出した幅5m、深さ30cmの溝である。東から西方向に流れる。埋土は上層が茶褐色砂質シルト、中層は灰茶褐色シルト質極細砂、暗茶褐色シルト質極細砂、下層は暗灰褐色シルト層となる。溝の北側の落ちは緩やかに低くなっていく。溝の底は平らで、上層と中層からは炭化物が出土しており、埋土から11世紀頃の遺物が出土している。

SD04は調査区の北半部で検出した、長さ2.6m以上、幅80cm、深さ8cmの溝である。埋土は淡灰茶褐色砂質シルト～極細砂である。溝の方向は他のものとは一致しない。遺物は出土していない。

第3節 32トレーニチ

31トレーニチ2区に平行する全長47mの調査区である。検出した遺構は上坑1基、溝5条である。遺構面は北から南の緩やかな傾斜地である。

SK01

調査区の北端部で検出した長径95cm、短径65cm、深さ15cmの楕円形の土坑である。埋土は淡灰褐色砂質シルトである。

溝

SD01は調査区の南端部で検出した、幅2.9m、深さ50cmのほぼ東西方向の溝で、東から西に向かって流れている。溝の大半は後世の擾乱によって消滅している。検出した溝は31トレーニチ2区のSD01から続くものであると考えられる。埋土も同様で砂層が主体となる。上層の堆積状況から、最終埋没の前に規模の小さな溝が存在していたようである。

SD02はSD01の北隣の溝で、その大半は擾乱で消滅している。残存している幅は5.9m、深さ40cmである。31トレーニチ2区のSD02から続くものであると考えられる。溝の北側の落ちは、途中で小さな平坦面が存在する。埋土はシルト質極細砂である。須恵器の塊が出土している。

SD03は調査区の中央部で検出した、幅5.1m、深さ30cmの溝である。31トレーニチ2区のSD03に続くものと

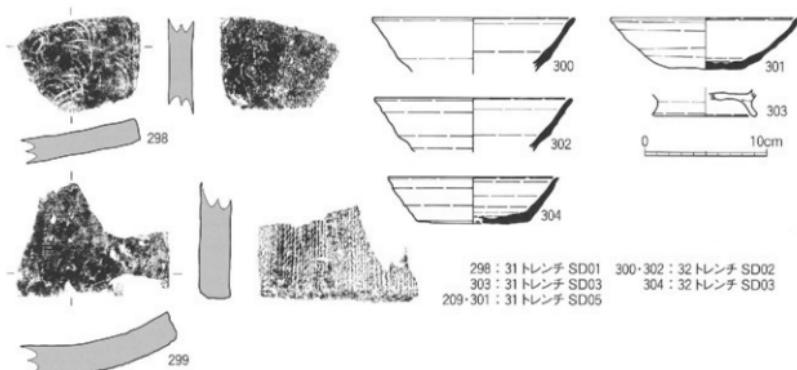


fig109. 遺構出土遺物

判断される。溝は東から西方向に流れるものである。埋土は上層は砂質シルト、下層はシルト質極細砂である。溝の底面で須恵器の壺（304）と土師器が出土している。

SD04はSD03の北側で近接して検出した溝で、SD03に並行する。長さ1.3m以上、幅65cm、深さ8cmである。SD05は北端部で検出した、長さ2.5m以上、幅60cm、深さ16cmの溝で、31トレンチ2区のSD04と方向性が一致する。

これらの溝は、時期が異なるものの、後述する、段丘上に展開する建物群に関連する造構と考えられ、単なる溝ではなく、屋敷地を区画するような機能を備えていたものであると考えられる。

出土遺物

298は31トレンチSD01からの出土遺物で平瓦である。厚さ2.0cmで凹面と凸面の両面に同心円状タキが認められる。303は31トレンチSD03から出土した土師器壺の底部で、貼り付け高台を有する。復元底径8.3cmを測る。299、301は31トレンチSD05からの出土遺物である。299は平瓦で、厚さ2.5cmを測る。凹面に布目痕、凸面に縄目のタキ痕があり、長辺部に当たる端面には凹面の布目痕が及び、短辺部に当たると考えられる端面はヘラ切りによる面取が行なわれている。301は須恵器の壺で口径15.4cm、器高4.2cmを測る。内面見込み部の窪みはわずかである。301は12世紀末～13世紀初頭頃の時期が考えられる。

300、302は32トレンチSD02から出土した須恵器壺である。復元口径は300が16.6cm、302が16.2cmである。

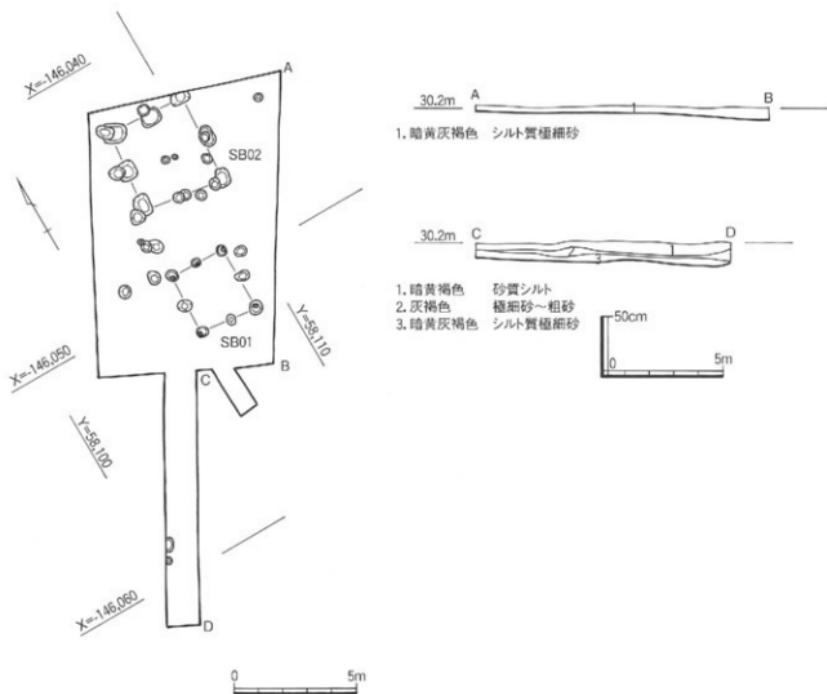


fig110. 33トレンチ 造構平面図・東壁土層断面図

304は32トレンチSD03から出土した須恵器環で復元口径14.0cm、器高9.0cmを測る。底部外面は回転ヘラ切りである。304は平安時代前期（9世紀前半）頃の時期が考えられる。

第4節 33トレンチ

31トレンチの南側約15mに設定した調査区で、トレンチの全長22mである。検出した遺構は掘立柱建物2棟である。建物としてのまとまりを確認するために、調査範囲を一部拡張して調査を行った。

SB01

調査区の中央で検出した東西2間（2.5m）、南北2間（2.5m）の側柱の掘立柱建物である。主軸は真北方向である。柱間は南北方向が1.3m、東西方向が1.1m～1.3mである。柱穴は円形で、直径は40cm～45cmである。深いもので38cmである。須恵器・土師器が数点出土している。

SB02

調査区の北端部で検出した東西2間（3.5m）、南北2間（3.5m）の側柱の掘立柱建物である。主軸はN-4°-Eである。柱間は南北方向が1.6m～1.9m、東西方向が1.5mである。柱穴は隅丸方形や楕円形の平面形で、長辺70cm～85cm、深さは30cm～45cmである。

ピット

SB02を切るピットは、SB02の柱抜き取り痕跡の可能性もあるが、断面観察によればSB02の掘形よりも深いものが存在することや、別のピットとして断面が確認されたこと、また、SB01の柱穴の規模や建物となる場合の全体の規模が類似することから、東列の柱穴が検出されなかった問題は残るもの、別の掘立柱建物である可能性が考えられる。

これらの建物の時期は、後述する掘立柱建物群を考慮して、SB01は11世紀頃、そしてそれに先行すると考えられるSB02は9世紀前半頃の建物と考えられる。

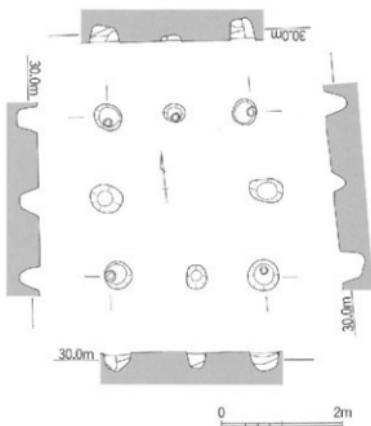


fig111. 33トレンチ SB01遺構平面・断面図

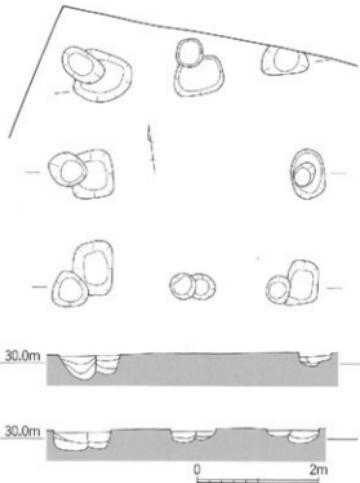


fig112. 33トレンチ SB02遺構平面・断面図

第6章 第40次調査

第1節 34トレンチ

第40次調査地は大池南側の段丘上に位置する。事業区域の南限に当たり、南側を住宅地と接する。調査は新設されるパイプラインと排水路及び造成により削平される範囲について実施したものである。調査地は、全般的に共通して畑地の造成時の削平が著しく、ほぼすべてのトレンチで耕土を除去すると黄灰色砂質シルトの基盤層となり、その上面で遺構が確認できる。但し部分的に盛土している部分では、暗灰褐色砂質シルトの遺物包含層が遺存している状況が確認された。

トレンチ番号については、昨年度に実施した第39次調査に継続して、34トレンチ～41トレンチの番号を付加して調査を実施した。

34トレンチは南北方向に長いトレンチで、後述する35トレンチと共に調査地の最も東側に位置する。現況では1枚の畑地である。耕作土を除去した段階で黄灰色砂質シルトの基盤層を検出し、この面が遺構面となつた。このため調査トレンチ外でも遺構の輪郭が確認できる箇所があり、このような箇所では主に遺構検出と記録のみにとどめ、必要に応じて最小限の掘削を行なつた。検出した遺構は掘立柱建物2棟、土坑8基、ピット約50基である。

SB01

調査区の南半で検出した、東西2間(4.2m)、南北3間(5.7m)の掘立柱建物である。主軸は南北方向でN-10°W、柱間は東西方向が1.9～2.3m、南北方向が1.8～2.0mである。柱穴の掘形は一辺0.4m～0.8mの円形及び梢円形を呈し、深さ0.1mを測る。柱穴の中には径0.1m～0.15mと推定される柱痕が確認できるものも存在する。

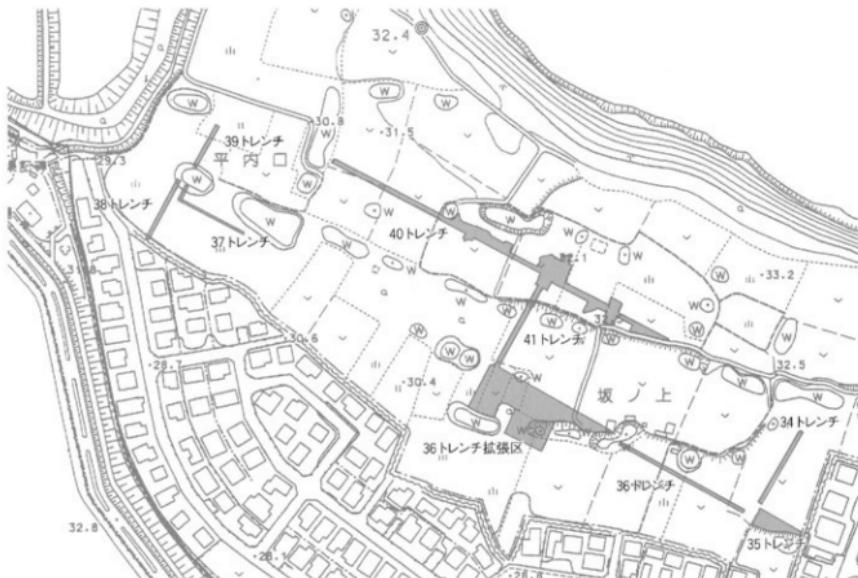


fig113. 第40次調査トレンチ配置図 (S=1:2,500)

出土遺物はごく少量で、柱穴から土師器、須恵器の小片が出土している。305はP7から出土した、土師器の壺と考えられる。復元口径15.4cmを測る。306はP8から出土した須恵器壺である。復元口径16.6cmを測る。

SB02

調査区の北半で検出した、東西2間(4.0m)以上、南北2間(4.5m)以上の掘立柱建物である。北東側へ続くため、全体の規模は不明である。南北方向に主軸をもつ建物と考えられ、主軸はN-11°-Wである。柱間は東西方向が2.0m、南北方向が2.2~2.3mである。柱穴の掘形は、径0.3~0.4mの円形もしくは楕円形で、深さ0.05m~0.2mを測る。柱痕は確認できなかった。

出土遺物はごく少量で、わずかにP2から土師器片が出土している。

遺構面が著しく削平されているため、どちらの建物の柱穴も遺存状況が悪かった。出土遺物も少なく、時期の特定は困難であるが、SB01は奈良時代後半~平安時代頃の時期が考えられる。SB02もSB01とはほぼ同じ頃の時期が考えられる。

土坑・ピット

SK02は調査区南半で検出した長さ2.15m、幅2.4m、深さ0.1mの不定三角形状の土坑である。土師器壺、須恵器壺、壺蓋などの奈良時代の遺物が出土している。また、SK06からも須恵器壺蓋、壺などの奈良時代前半の遺物が出土している。

ピットは直径0.2~0.3mの円形のものが殆どである。いずれも建物としては復元できなかった。須恵器、土師器片が出土している。

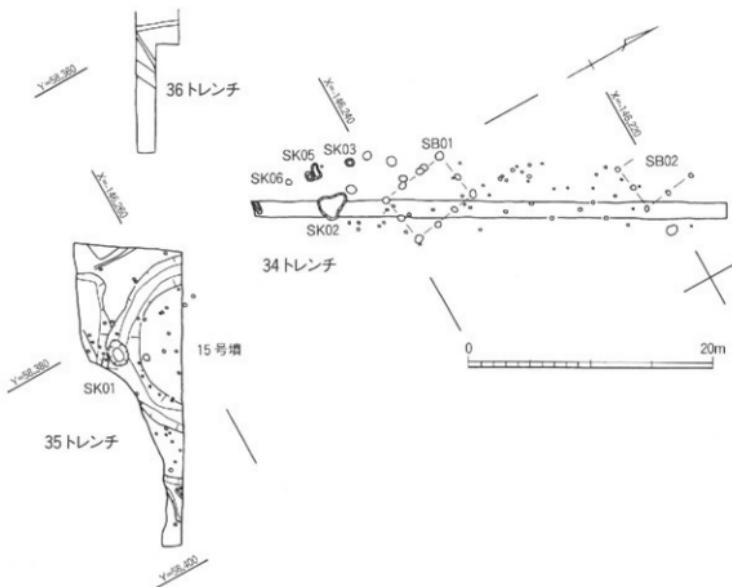


fig114. 34・35トレンチ遺構平面図

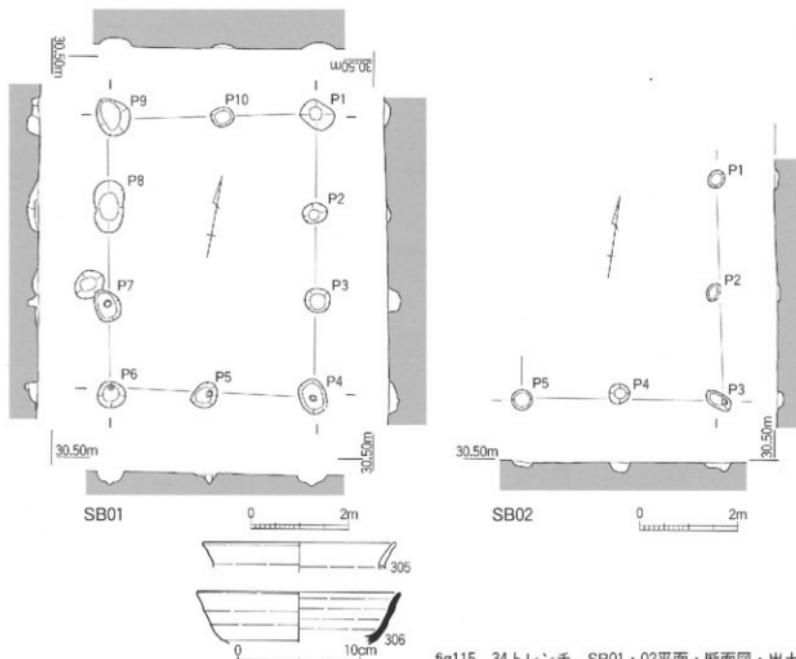


fig115. 34 トレンチ SB01・02平面・断面図・出土遺物

第2節 35 トレンチ

35トレンチは東西に長いトレンチで、34トレンチの南に位置する。

現況は2枚の畑地にまたがっており、南の畑地は北の畑地より約0.5m低い。この調査区も耕作土を除去した段階で黄灰色砂質シルトの基盤層を検出し、この面が構造面である。検出した遺構は、古墳1基、土坑1基、溝2条、ピット約40基、不明遺構2基である。

16号墳 (SD02・03)

調査区内で周溝の南半部を検出したもので、墳丘及び埋葬施設は遺存していない。検出した周溝から直径約10mの円墳に復元できる。周溝は検出面で幅約2.3m、深さ0.35mを測り、下から黒褐色砂質シルト、暗茶褐色砂質シルトの順に堆積している。埋土から埴輪片などと共に奈良時代～平安時代後期の須恵器、土師器が出土しており、奈良時代以降には周溝が埋没したものと考えられる。

307は須恵器壺で復元口径11.2cm、器高7.9cmを測る。貼り付け高台の底部から、わずかに内湾する高い体部が立ち上がる。焼成はやや軟質で、乳灰色を呈する。308は須恵器壺で復元口径16.4cm、器高6.2cmを測る。外面回転系切りの底部で、やや内湾する体部である。内面の見込み部は明瞭に窪む。

309は須恵器であるが、壺の体部状の形状を呈する。上部の頭部が取り付く部分は閉塞されており、内面には円形の頸部取り付け部分の痕跡が確認できる。下部は欠失しており、全体の形状、用途は不明である。

310は埴輪片である。内湾する形状と上方へと外反する突帯の形状から朝顔形埴輪である可能性もある。

309は11世紀後半～末葉頃と考えられる。

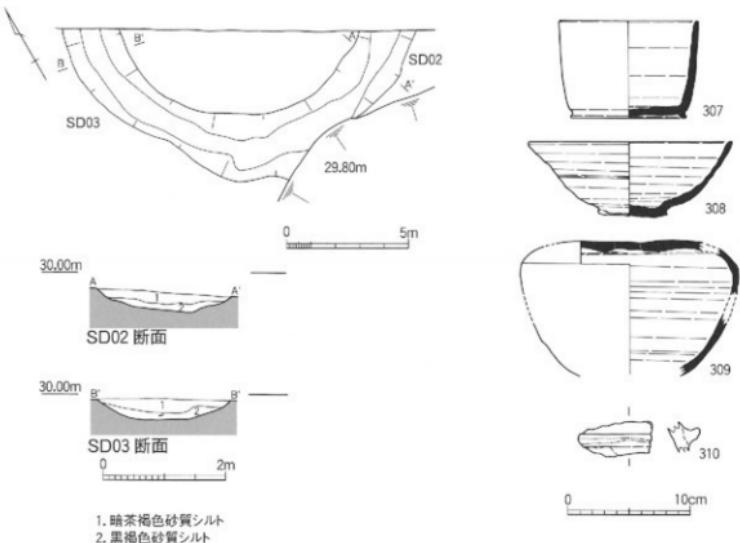


fig116. 35トレンチ SD02・03 (15号墳) 平面・断面図・出土遺物

SK01

SD03に切り込む土坑で長径2.25m、短径1.5m、深さ0.28mの楕円形を呈する土坑である。土師器、須恵器の塊が出土した。311～313は、底部外面が回転糸切りの土師器塊である。312は口径16.8cm、器高4.0cmを測る。314～317は須恵器塊で、315は口径15.2cm、器高6.0cmを測る。これらの須恵器塊は、丸みを持つ器形と明瞭な内面見込みの窪みから、11世紀後半～末葉頃の時期が考えられる。

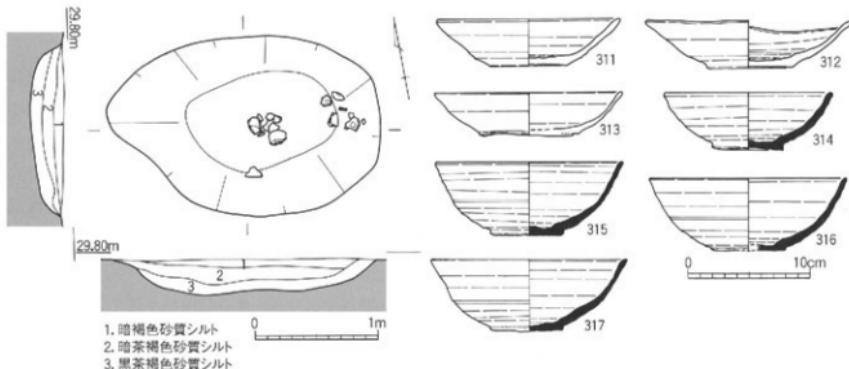


fig117. 35トレンチ SK01平面・断面図・出土遺物

第3節 36トレンチ

36トレンチは東西に長いトレンチで、削平が著しく、東端部分で浅い溝を3条検出したのみである。

調査開始後、造成により削平される範囲が存在することが明らかになり拡張して、36トレンチ拡張区として調査を実施した。この調査区も耕土を除去すると、黄灰色の基盤層となり、この面で遺構が検出された。検出した遺構は、古墳2基、掘立柱建物4棟、土坑4基、溝13条、ピット約40基、不明遺構2基である。

13号墳

調査区の中央部分で円弧を描く溝を検出した。墳丘と埋葬施設は削平されており、周溝のみが遺存する円墳と考えられる。墳丘部分の直径は約14mで、幅約3~4m、深さ0.3~0.5mの周溝が巡っている。周溝の東側は溜池により損壊を受けているが、本来は全周していたと考えられる。周溝の埋土中より、古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代後期の土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、蛸壺など多量の遺物が出土しており、飛鳥時代以降に周溝が埋没したものと考えられる。

古墳時代の遺物

周溝内からの出土遺物で、古墳時代に属するものは次の様なものがある。

318は須恵器広口壺で復元口径13.6cmを測る大形品である。外面は頸部中央やや下に2条の凹線を巡らし、その上から口縁部までを4帯の櫛描波状文で飾る。319は須恵器甕で復元口径32.8cmを測る大形品である。口縁端部は上部へつまみ上げた様な形状である。320は須恵器壺蓋で天井部と口縁部の境の稜は沈線状になっている。321は土師器高杯で口径15.1cm、器高12.1cmを測る。やや外反する杯部で、脚部はやや外反気味に緩く裾部へと広がる。裾部の広がりはそれ程大きくなはない。

322は須恵器高杯で復元口径12.0cm、器高11.2cmを測る。杯部内面に2本の平行線状のヘラ描がある。323は須恵器すり鉢で復元口径19.6cmを測る。体部外面を2条の凹線の間を櫛描波状文で飾る。324は

これらの遺物は6世紀後半頃の時期が考えられる。

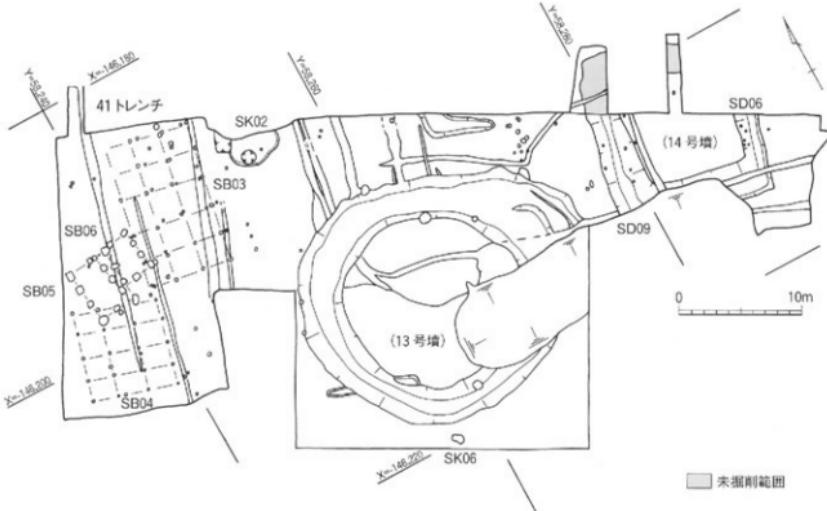
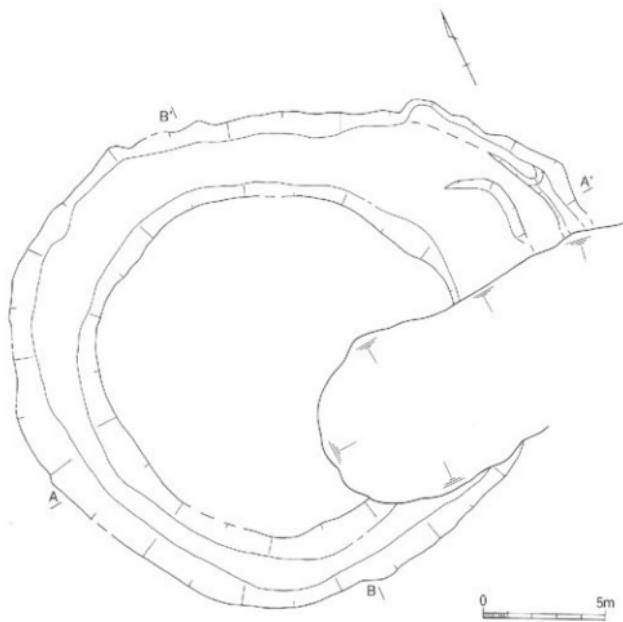


fig118. 36トレンチ拡張区 遺構平面図



30.50m



30.50m



30.50m



0

2m

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 1. 暗褐色シルト（土杭埋土） | 7. 茶褐色砂質シルト（黄褐色シルト小塊含む） |
| 2. 暗灰褐色シルト（土杭埋土） | 8. 暗茶褐色砂質シルト |
| 3. 雜赤次色砂質シルト（溝埋土） | 9. 増次褐色砂質シルト |
| 4. 暗褐色砂質シルト | 10. 黄灰色シルト |
| 5. 暗灰色砂質シルト | 11. 暗灰色中砂 |
| 6. 茶灰色砂質シルト | 12. 黄灰色中砂混りシルト |

fig119. 36トレンチ拡張区 13号墳平面・断面図

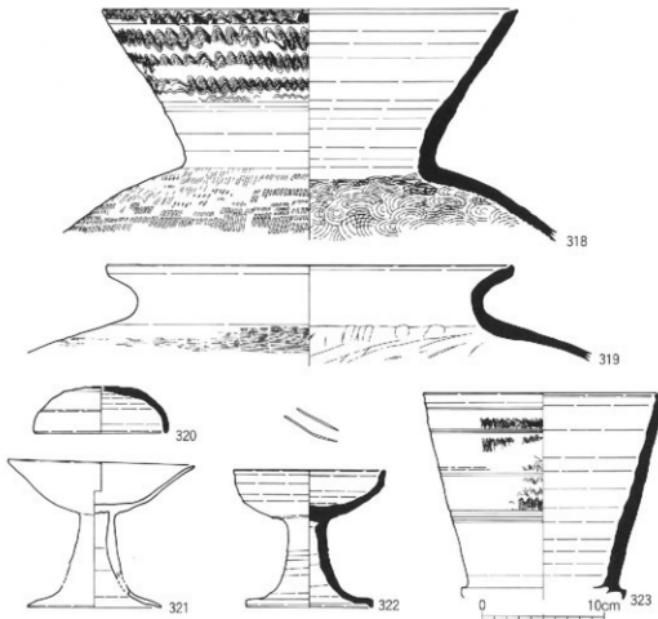


fig120. 36トレンチ拡張区 13号墳出土遺物(1)

飛鳥時代～平安時代の遺物

324～327、329、330は須恵器壺蓋で宝珠形つまみを有する。327は口径10.7cm、器高2.6cm、330は口径10.6cm、器高2.3cmを測る。328、331～343、351は須恵器壺身で丸みを持つ壺形と328、333、338、343の様な底部から直線的に外方へ延びるものがある。328は口縁部が外反する。壺形の331は口径10.0cm、器高3.9cmを測り、332は口径9.6cm、器高4.6cmを測る。334、337、339、340などは口径が11cmを超える。335は屈曲して立ち上がる体部から外反して口縁部が延びる。324～327、329、330の須恵器壺蓋は、7世紀前半頃の時期が考えられ、壺形の壺身も同時期であると思われる。

342は小形の須恵器壺である。345は須恵器皿で復元口径15.2cm、器高3.0cmを測り、灰釉陶器皿の模倣タイプとされる。9世紀後半頃の時期が考えられる。346、347は須恵器壺で、346は外反する口縁である。347は底部に外方へと延びる貼り付け高台が付く。348は須恵器鉢、349、350は須恵器壺である。349は頸部から上と高台を欠失するが8世紀初頭～前半頃の時期が考えられる。352は須恵器壺で底部外面が回転条切り、内面見込みが窪む。11世紀後半頃の時期が考えられる。353は須恵器盤で口径26.2cm、器高3.8cmを測る。底部外面にT字状のヘラ彫がある。354、355は須恵器鉢で、354は焼け歪みにより口縁部が体部へと落ち込んでいる。8世紀後半頃の時期が考えられる。356、357は土師器鍋で356は口径26.9cmを測る。器高は357が8.2cmを測る。共に口縁部は内湾し、外面ハケメ調整を施す。9世紀後半頃の時期が考えられる。

出土遺物は7世紀前半頃～11世紀後半頃までのものが混在している。13号墳の周溝は、飛鳥時代以降に埋没したものと考えられる。

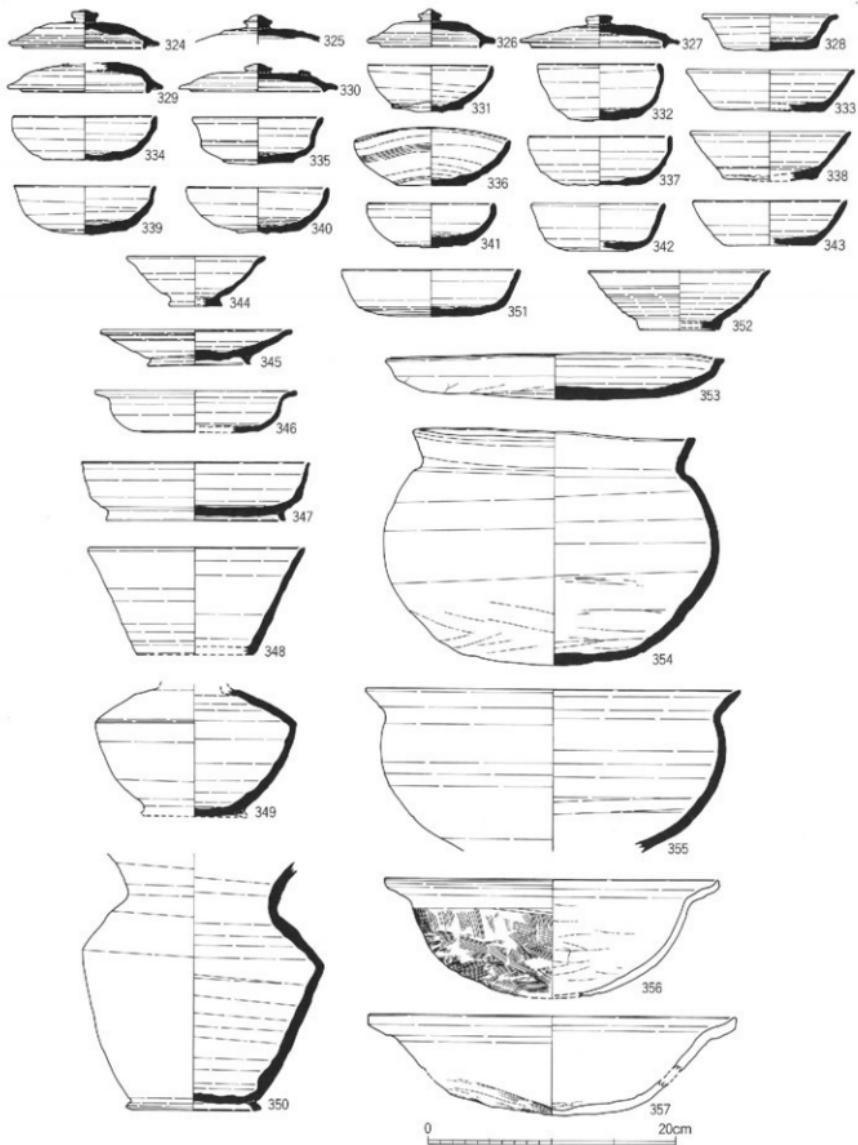


fig121. 36トレンチ拡張区 13号墳出土遺物(2)

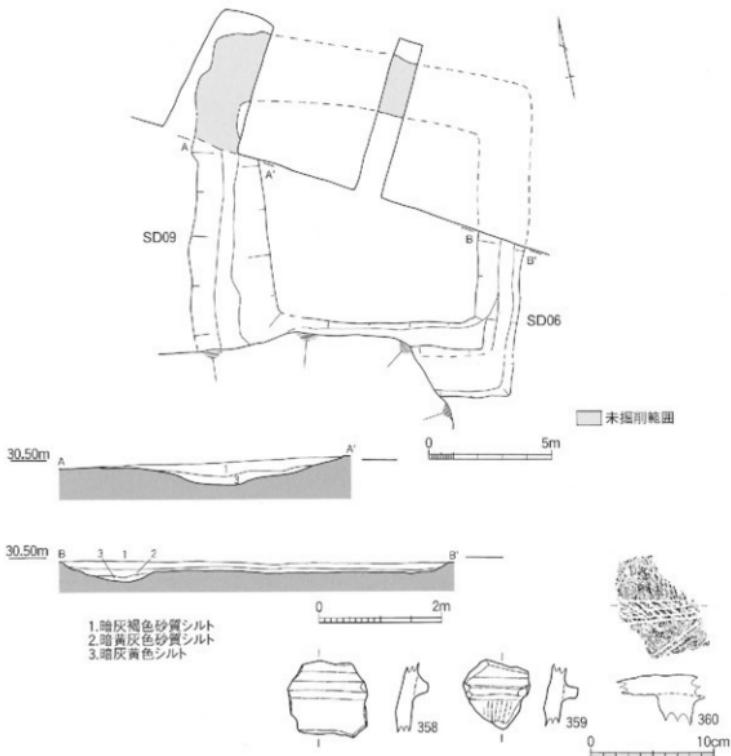


fig122. 36トレンチ拡張区 SD06 · 09 (14号墳) 平面・断面図・出土遺物・包含層出土遺物

14号墳 (SD06 · 09)

13号墳の東で検出した一辺約8.0~8.5mの方墳である。13号墳と同じく墳丘と埋葬施設は削平されて遺存しない。周溝は幅1.8~3.0m、深さ0.3~0.5mである。埋土は周溝東側では、下から暗灰黄色シルト、暗黄灰色砂質シルト、暗灰褐色砂質シルトの順に堆積するが、周溝西側では暗黄灰色砂質シルトは存在しない。

古墳の北側は調査区外であるため、墳形確認のトレンチを設定して拡張調査を実施したところ、周溝が方形に巡ることが判明した。周溝埋土中より、奈良時代の遺物と共に円筒埴輪片が数点出土したが、墳丘への埴輪樹立を考えるには少量である。

出土した埴輪片の358・359はいずれも小片で摩滅が著しく調整痕の観察は困難であるが、359の外面にわずかに縦方向のハケメが観察できる。突堤断面は緩い方形である。

この他、13・14号墳付近の遺物包含層から、盾形埴輪片が出土した。360は外面に上から、外側へ斜線を施す鋸歯文状の表現、横線4条に右下がりの斜線、左下へ下がる2条の順に線刻が認められる。内面には突堤状に貼り付けがあり、体部との接合部と考えられる。盾形埴輪表面の上部に相当する部分と考えられる。

SB03

調査区西半部では、掘立柱建物4棟がまとまって検出された。

SB03は東西3間(6.8m)、南北5間(11.7m)と考えられる、総柱の掘立柱建物である。

主軸は南北方向でN-10°-Eである。柱間は東西が2.1~2.4m、南北2.1~3.0mである。柱穴の掘形は直径0.2m~0.3mの円形で、深さは東から1列目、3・4列目は0.3m~0.5mとやや深いが、2列目は深さ0.05m~0.23mと浅い、断面観察から直徑0.15m前後の柱痕が確認できる柱穴も存在する。

柱穴からは土師器、須恵器が出上している。361はP4、363はP6、364はP7、362はP8からの出土遺物である。

361と362は須恵器蓋で、361は復元口径12.9cm、362は復元口径15.4cmを測る。共に内面にかえりを持ち、天井部を欠失する。

363は土師器塊の底部であろうか。底部外面にわずかに回転糸切り痕が観察される。

364は須恵器塊である。復元口径16.6cm、器高6.2cmを測る。底部外面は回転糸切りで、わずかに内湾気味に下外方へ延びる貼り付け高台をもつ。体部はわずかに丸みを持って、内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く取める。

364の須恵器塊からSB03の時期は、11世紀半ば頃の時期が考えられる。

SB04

SB03の南西で検出した東西3間(7.1m)、南北4間(7.4m)の総柱の掘立柱建物である。主軸は南北方向と考えられ、主軸はN-19°-Eである。柱間は東西が2.1~2.5m、南北が1.7~2.0mである。柱穴の掘形は直径0.2~0.3mの円形、深さは0.05m~0.25mで、削平により遺存状況はよくない。断面観察から直徑0.1m前後の柱痕が確認できるものもある。土師器、須恵器片が出土しているが時期の特定は困難である。埋土の色調から中世の可能性も考えられる。

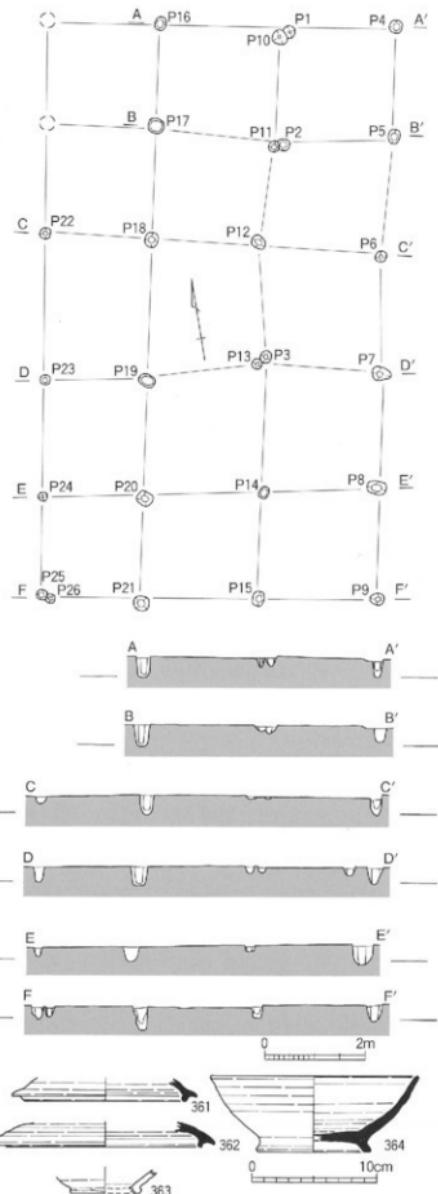


fig123. 36トレンチ拡張区 SB03平面・断面図・出土遺物

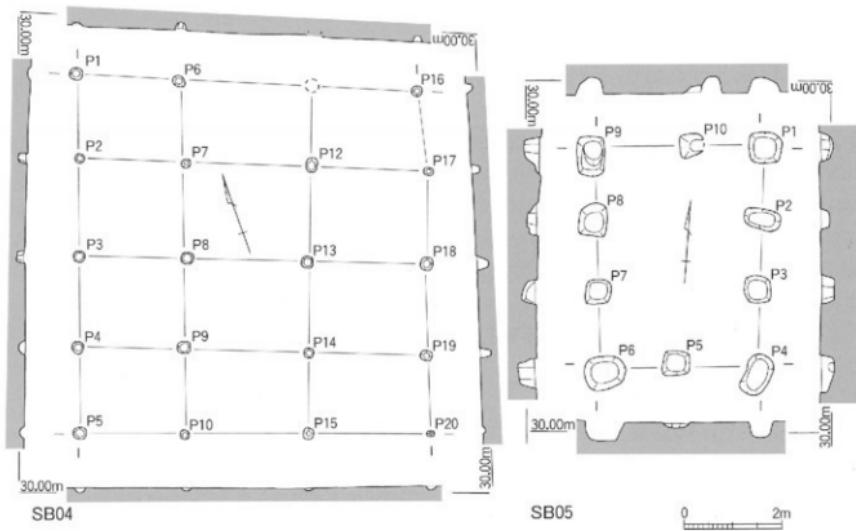


fig124. 36 トレンチ拡張区 SB04・05平面・断面図

SB05

SB04と後述するSB06に重なって検出したもので、東西2間（3.3m）、南北3間（4.4m）の掘立柱建物である。南北に主軸を持つ建物と考えられ、主軸はN-10°-Wである。柱間は東西が1.3～2.0m、南北が1.4～1.5mである。柱穴の掘形は一辺0.5～0.8mの隅丸方形もしくは隅丸長方形で、深さは最も深いもので0.4mである、南北両辺の中央ピットは深さ0.1m前後と浅い。殆どの柱穴で直径0.2m～0.25m前後の柱痕が確認できる。柱穴から土師器、須恵器片が出土しているが、建物の時期については不明である。

SB06

SB03とSB05に重なって検出したもので、東西2間（3.1m）、南北3間（3.3m）の掘立柱建物である。南北方向に主軸を持つ建物と考えられ、主軸はN-13°-Wである。柱間は東西が1.6m、南北が1.1～1.2mである。柱穴の掘形は一辺0.4～0.6mの隅丸方形で、深さは0.25m～0.4mである。すべての柱穴で直径0.15～0.2mの柱痕を確認した。

365は、P6から出土した須恵器壺蓋である。復元口径9.2cmを測る、かえりを有するもので、天井部を欠失する。

SB06の時期は、365から7世紀前半頃の可能性も考えられる。

SK02

SK02は調査区西半北側で検出した土坑である。長径4.3mを検出したが北側は調査区外へ続くため、全体の規模は不明である。

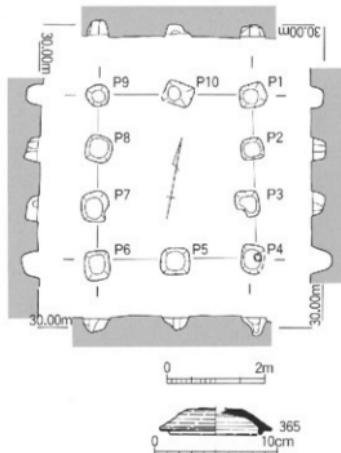


fig125. 36 トレンチ拡張区 SB06平面・断面図・出土遺物

深さは最も深い部分で0.15m、埋土は暗褐色砂質シルトである。埋土から土師器、須恵器が出土した。366と367は須恵器壺蓋である。366は復元口径15.8cmを測る。367は焼け歪みが著しいが、復元口径10.0cm、器高3.4cmを測る。共に内面にかえりを有するもので、366は天井部のつまみを欠失するが、367と同じくやや扁平な宝珠つまみを有するものと推定される。

368～370は須恵器壺である。368は焼け歪みによる変形が著しく、口縁の径は楕円形を呈する。復元口径10.0cm～11.2cm、器高11.2cmを測る。底部外面は回転ヘラ切りで、丸みを持って体部はやや外方に立ち上がる。369は口径11.3cm、器高4.3cmを測る。外面回転ヘラ切りの底部から、やや外反気味に体部が立ち上がる。内面底部には「×」状のヘラ描がある。370は復元口径11.0cm、器高4.0cmを測る。外面回転ヘラ切りの底部から、368と同じく丸みを持って立ち上がった体部はほぼ直立する。口縁端部は丸く取める。底部外面に「一」字状のヘラ描がある。

これらの遺物は、7世紀前半頃の時期が考えられる。

第4節 37～39トレーニチ

37～39トレーニチは、調査地の中で最も西に位置するトレーニチで、吉田池の南東に位置する。

37トレーニチ

東西方向に長いトレーニチである。この調査区も耕土を除去すると基盤層となる。遺構が希薄で、時期不明の溝1条とピット1基を検出したのみである。

38トレーニチ

37トレーニチの西側に位置する、南北方向に長いトレーニチである。37トレーニチ同様、耕土直下の基盤層上面でピットを2基検出したのみである。

39トレーニチ

37・38トレーニチ北側に位置する南北方向に長いトレーニチである。トレーニチ南半部は畑地の造成時に盛土されており、薄い遺物包含層が認められるが遺構は存在しない。北半部で溝1条と落ち込み2基を検出した。

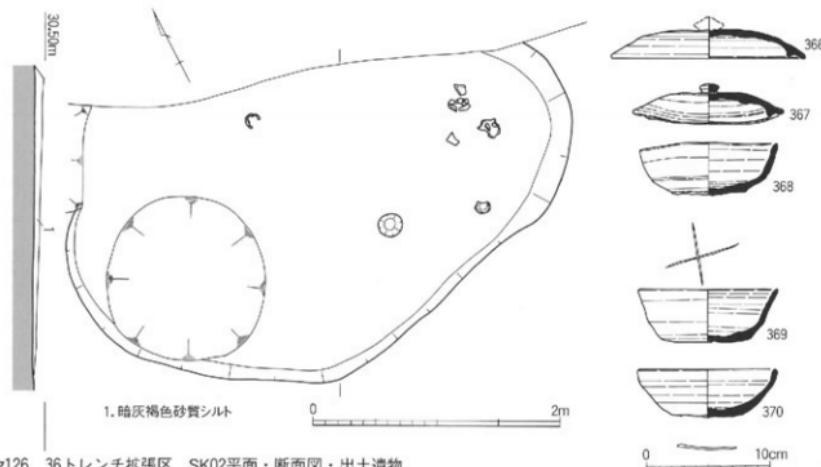


fig126. 36トレーニチ拡張区 SK02平面・断面図・出土遺物

第5節 40トレンチ

40トレンチは東西に長いトレンチで、延長約200mある。調査区が長いため、現況の畠地ごとに西から1区～7区まで設定して調査を実施した。調査の結果、西側の1区・2区と東側の7区については耕土を除去すると畠地造成時の盛土が存在し、その下層に黄灰色砂質シルトの基盤層が認められるが、中央部の3区～6区は盛土がなく耕土直下で黄灰色砂質シルトの基盤層となる。このため調査トレンチ外でも遺構の輪郭が確認できる箇所があり、そこでは主に遺構検出と記録のみに留めた。遺構の分布は1区・2区は希薄で、3区から7区にかけては濃密に集中している。検出した遺構は古墳1基、掘立柱建物8棟、溝8条、土坑1基、ピット・柱穴多数で、多くの遺構を確認した。

15号墳（SD08・10）

トレンチの東半部の7区、14号墳の北約35mの地点において、直角に曲がる溝を検出した。範囲の確認のため南側へ一部拡張したところ、方墳の周溝であることが判明した。なお、南半部は畠地の造成時の段により損壊を受けており、周溝を確認することはできなかった。墳丘は削平を受け存在していないが、一辺約8m程度の方墳に復元される。

周溝は幅1.3～1.8m、深さは0.15mしかなく、著しく削平されている状況である。周溝埋土より埴輪片と共に、奈良時代～平安時代にかけての遺物が出土している。

周溝からの出土遺物で、古墳に関連すると考えられるものは376～381の埴輪片である。376～379は円筒埴輪、380と381は湾曲する形状から朝顔形埴輪である可能性がある。いずれも摩滅、剥落が著しく、調整痕の観察は困難であるが、378、379ではヨコハケ、381では外面にタテハケ、内面にヨコハケがわずかに観察できる。突帯は379の様に緩いM字状を呈するものがある。

371～375は須恵器である。371は壺で、小形品と考えられる。外方にやや外反する貼り付け高台を持つ。372は壺で、口径11.6cm、器高3.7cmを測る。外面回転ヘラ切りの底面から内湾する体部が立ち上がる。外面にヘラ描がある。373は壺で、復元口径15.6cm、器高3.8cmを測る。下外方へと延びる貼り付け高台を有する。374は壺の頸部～口縁部である。口径9.4cmを測る。375は瓶である。破片のため底部の形状は不明であるが、底部付近の外面に穿孔がある。

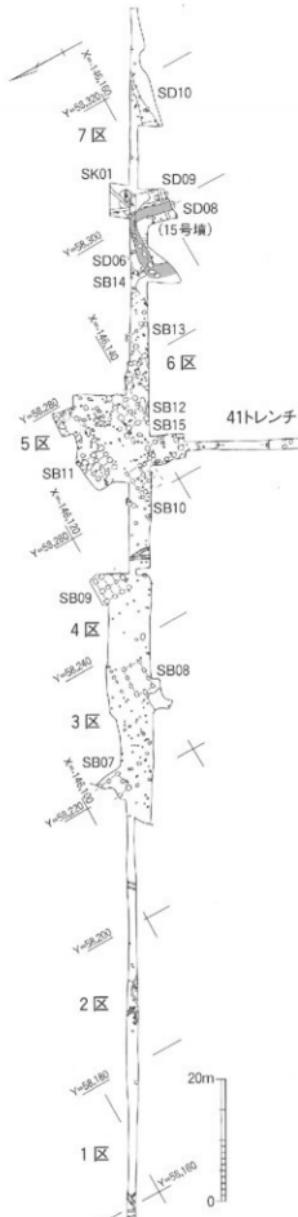


fig127. 40トレンチ 遺構平面図

これらの出土遺物は、埴輪は小片で摩滅が著しく、時期の特定は困難である。また、少量であるため、15号墳における埴丘への埴輪の樹立の有無については不明である。372は7世紀代頃の時期が考えられ、373、374は8世紀前半の時期が考えられる。

SB07

3区で検出したもので、東西2間(3.0m)、南北2間(3.4m)以上の掘立柱建物である。南北方向に主軸を持つ建物と考えられ、主軸はN-9°-Wである。柱間は東西が1.5m、南北が1.6~1.8mである。柱穴の掘形は一辺0.5~0.8mの隅丸方形もしくは隅丸長方形である。柱穴は全部で6基検出したが、うち5基は調査区外で残り1基のみ掘削した。

P5は深さ0.5mを測る。直径0.15m前後の柱痕を確認した。

SB08

4区で検出したもので、東西3間(4.8m)、南北2間(3.1m)の掘立柱建物である。東西方向に主軸を持つ建物で、主軸は北に対してほぼ90°である。柱間は東西が1.6m、南北が1.4~1.6mである。柱穴の掘形は一辺0.5~0.9mの隅丸長方形もしくは梢円形を呈する。4基の柱穴の掘削を行なったが、深さは0.3m~0.4mを測る。直径0.1m~0.2m前後の柱痕が認められる柱穴もある。

SB09

SB08の東側約10mで検出したもので、東西2間(3.8m)以上、南北3間(4.3m)の総柱の掘立柱建物である。主軸は南北方向、N-5°-Wで、柱間は東西が1.9m、南北が1.4~1.5mである。柱穴の掘形は一辺0.6~0.9mの隅丸方形もしくは円形である。柱穴は全部で11基検出したが、10基は調査区外で、掘削した1基は深さ0.4mを測り、直径0.1mの柱痕を確認した。

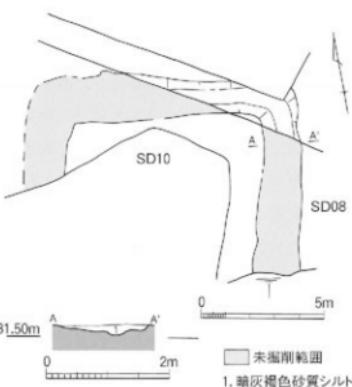


fig128. 40トレンチ SD08-10 (15号墳) 平面・断面図

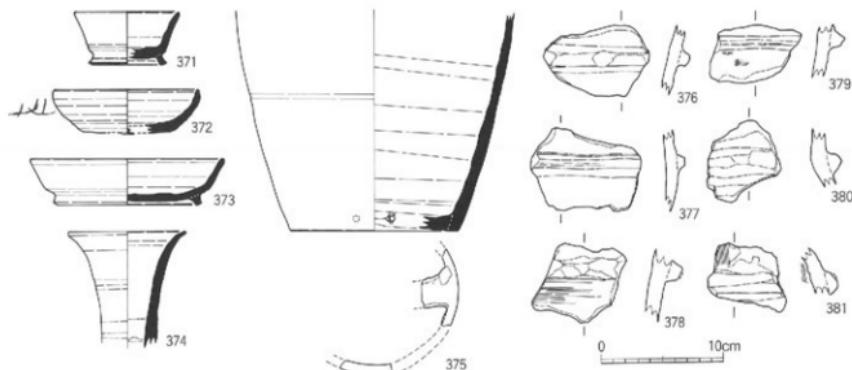


fig129. 40トレンチ SD08-10 (15号墳) 出土遺物

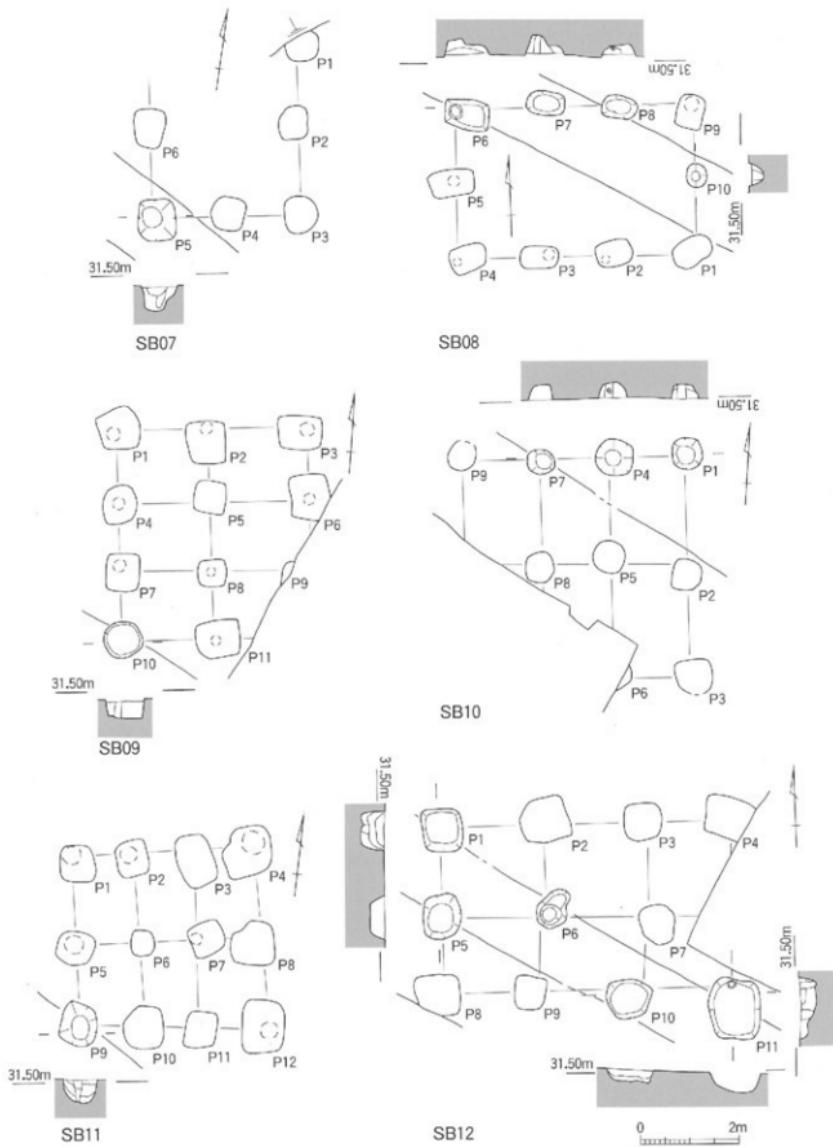


fig130. 40トレンチ SB07~12平面・断面図

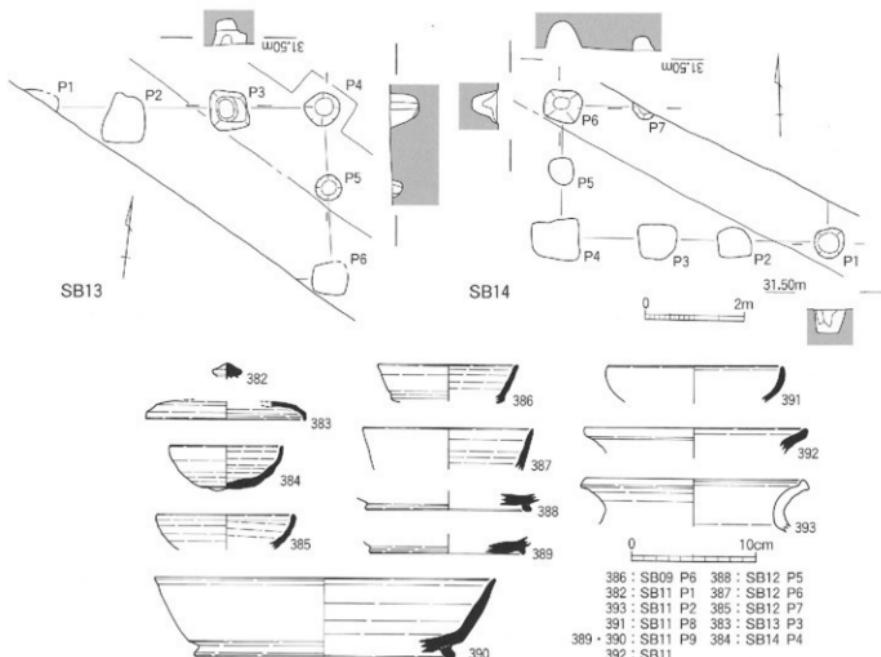


fig131. 40トレンチ SB13・14平面・断面図・掘立柱建物出土遺物

SB10

5区で検出したもので、東西3間（4.6m）、南北2間（4.4m）の総柱の掘立柱建物である。ほぼ正方形のプランで、南北を主軸にした場合N-4°-Wである。柱間は東西1.4~1.6m、南北2.2mで、柱穴の掘形は一辺0.6~0.7mの隅丸方形もしくは円形で、掘削した3基は深さ0.3m。直径0.2mの柱痕を確認した。

SB11

SB10の北東に隣接する東西3間（3.7m）、南北2間（3.6m）の総柱の掘立柱建物である。東西主軸と考えられ、N-99°-W、柱間は東西1.2m、南北1.7~1.8m。柱穴の掘形は一辺0.5~1.0mの隅丸方形もしくは隅丸長方形である。柱穴は全部で12基検出したが、11基は調査区外で、掘削した1基は深さ0.45mを測り、直径0.2mの柱痕を確認した。

SB12

SB10の東約5mに位置する東西3間（5.9m）以上、南北2間（3.5m）の総柱の掘立柱建物である。東西主軸で、北に対して90°である。柱間は東西1.8~2.1m、南北1.6~1.9mで、柱穴掘形は一辺0.6~0.9mの隅丸方形もしくは隅丸長方形で、掘削した柱穴は深さ0.25m~0.5m。直径0.15m前後の柱痕を確認した。

SB13

SB12の南東に隣接する東西3間（5.8m）以上、南北2間（3.5m）以上の掘立柱建物である。東西主軸と考えられ、N-100°-W、柱間は東西1.6~2.1m、南北1.7~1.8mである。柱穴掘形は一辺0.6~0.9mの隅丸方形もしくは直径0.5~0.7mの円形で、掘削した柱穴は深さ0.25m~0.4m。径0.15mの柱痕が存在した。

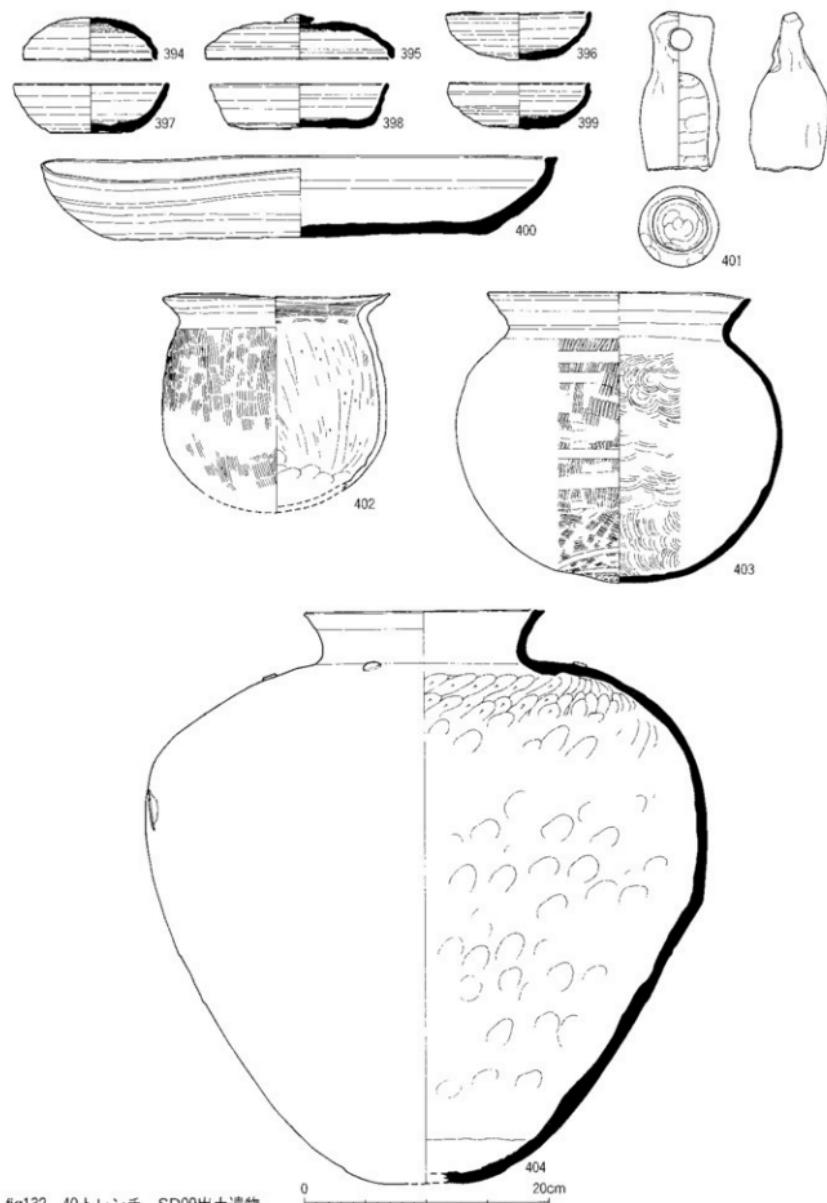


fig132. 40トレンチ SD09出土遺物

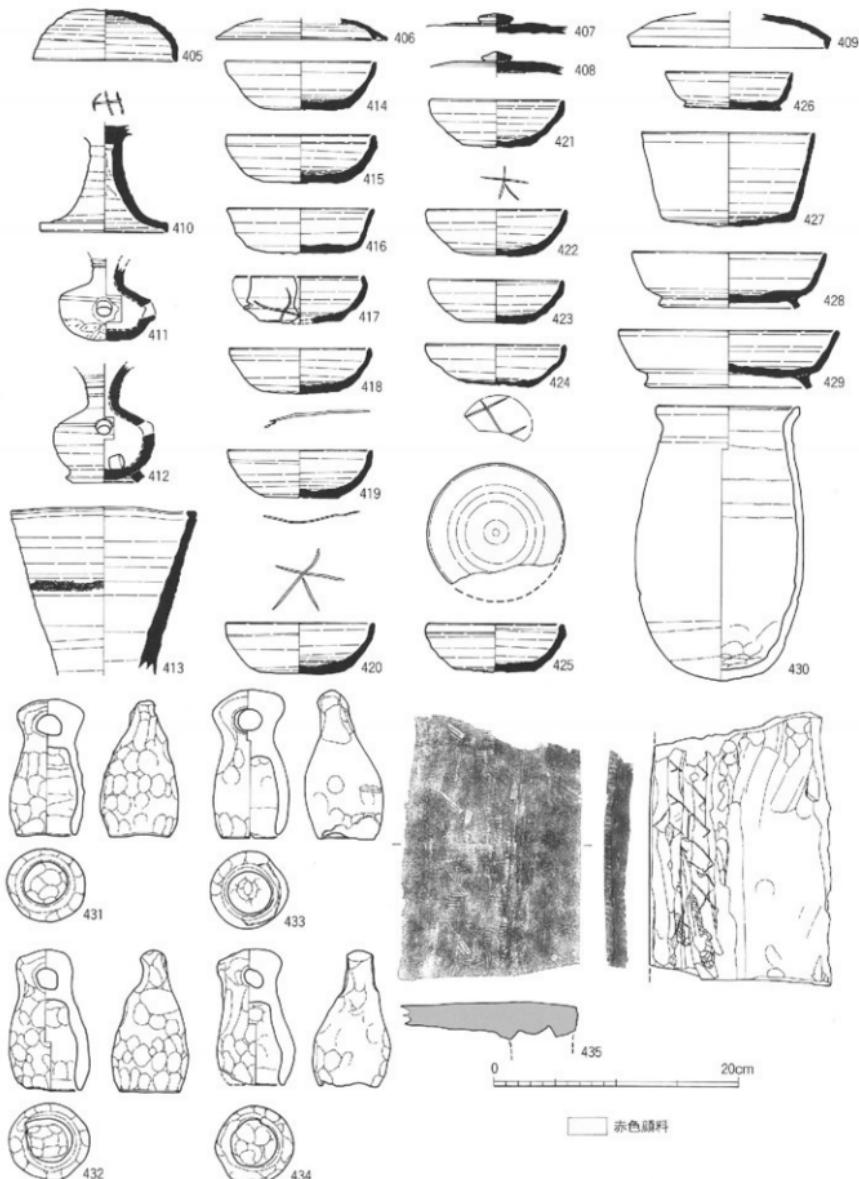


fig133. 40トレンチ SK01出土遺物

SB14

15号墳の周溝が埋没した上面で検出した掘立柱建物である。東西3間（5.4m）、南北2間（2.8m）で東西方向に主軸を持つ、主軸はN-88°-W、柱間は東西が1.5~1.9m、南北は1.3~1.5mである。柱穴の掘形は0.5~0.9mの隅丸方形で、掘削した柱穴は深さ0.3m~0.5m、直径0.15m前後の柱痕を確認した。

掘立柱建物群からの出土遺物

40トレンチの掘立柱建物群の柱穴の大半は調査区外に位置し、掘削を実施できたものは少数であった。柱穴からの出土遺物もごく少数であり、図示し得たのは、SB09、SB11~14からの出土遺物の一部である。

386はSB09P6から出土した須恵器坏で、復元口径11.2cmを測る。奈良時代頃の時期が考えられる。382、389~393はSB11からの出土遺物である。390は須恵器皿と考えられ、復元口径27.6cm、器高6.5cmを測る。奈良時代頃の時期が考えられる。385、387、388はSB12からの出土遺物で、388のやや外反気味、389の縮小化した貼り付け高台から奈良時代後半~平安時代初め頃にかけての時期が考えられる。383はSB13P3出土の須恵器坏蓋で奈良時代頃、384はSB14P4出土の須恵器坏身で、飛鳥時代~奈良時代頃の時期が考えられる。

これらの出土遺物は限られたものであるが、40トレンチの掘立柱建物群は、出土遺物から概ね奈良時代を中心とした、飛鳥時代~平安時代頃にかけての時期の焼造された可能性が考えられる。

SD09

SB14の東側で検出した幅3.0m、長さ5.0m、深さ0.07mの落ち込み状の溝で、多くの遺物が出土した。

394、395は須恵器蓋で、394は口径10.6cm、器高3.5cmを測る。395は扁平な宝珠つまみを有する。396~399は須恵器坏身である。396、397、398は外面回転ヘラ切りの底部から丸みを持った体部が立ち上がる。396は口径11.6cm、器高3.9cmを測る。398は底部からやや外反気味に体部が立ち上がる。400は須恵器盤で口径41.8cm、器高6.7cmを測り、焼け重む。401は土師器鉢である。402は土師器甕で、やや長い球形の体部から外反する口縁部で、外面と内面の頭部から上がハケメ、下はヘラケズリを施す。403は須恵器甕で、外面は縱位の平行タタキ後、粗くナデ消す、内面は同心円状タタキを施す。404は須恵器大甕で口径18.0cm、現存高46.9cmを測る。やや肩の張る器形で外面肩部に4個の円形浮文を貼り付けていたと推定される。

これらの出土遺物は394、396、397、399の7世紀後半頃から、404の8世紀末頃の時期が考えられるものがあり、SD09は概ね奈良時代後半頃の時期が考えられる。

SK01

SB14の東で検出した直径2mの円形で、検出面からの深さ1mの土坑である。用途は不明だが底は湧水層に達しておらず水溜めの可能性が考えられる。埋土中より飛鳥時代~奈良時代の遺物が多く出土している。

405~409は須恵器坏蓋である。410は須恵器高坏の脚部で底径10.2cm、坏部内面にヘラ描がある。411、412は須恵器甕で、共に体部を1ヶ所穿孔し、口縁を失する。412は底径5.2cm、穿孔した体部片が内部に遺存する。413は須恵器すり鉢である。414~426、428、429は須恵器坏身で426、428、429は貼り付け高台を有する。これ以外は外面回転ヘラ切りの底部から内湾する体部が立ち上がる。418は口径11.4cm、器高3.8cm、419は口径11.8cm、器高3.9cmを測り、両者共底部外面に「一」状のヘラ描がある。420は口径12.0cm、器高4.2cm、422は口径11.4cm、器高3.8cmで、両者は内面に「大」状のヘラ描がある。425は口径11.0cm、器高3.9cm、内面に赤色顔料の塗布が認められる。428、429の高台は断面四角で下外方へ延びる。427は須恵器鉢である。430は土師器製壇土器若しくは長胴甕で、口径11.6cm、器高22.5cmを測る。431~434は土師器鉢である。435は須恵器で外面平行タタキ、内面ナデで、植物の葉状圧痕、接合目的と推定されるヘラ描の刻みがある。

これらの遺物は7世紀半~8世紀末頃の時期と思われ、奈良時代末~平安時代初頭頃の埋没が推定される。

第6節 41トレンチ

41トレンチは、40トレンチと36トレンチの間に位置する、南北方向に長いトレンチである。現況では3枚の畝地で各段があり、北側と南側で約0.5mの比高差があるが、本来は北から南へ緩やかに傾斜する地形であったと推定される。掘立柱建物2棟、溝1条、ピット約20基、不明遺構1基を検出した。

SB15

SB15は調査区北端付近で検出した、東西2間(3.3m)、南北3間(4.5m)の掘立柱建物である。主軸は南北方向でN-7°-W、柱間は東西方向が1.7m、南北方向が1.5mである。柱穴の掘形は一辺0.7m~0.8mの隅丸方形である。掘削した柱穴は深さ0.25m~0.4mで、直径0.15m~0.2mの柱痕を確認した。

436はP8から出土した土師器盤と考えられる。復元口径27.0cmを測り、外面にハケメを施す。この他、柱穴から土師器、奈良時代の須恵器片が出土しており、8世紀後半頃の時期が考えられる。

SB16

調査区の中央付近で検出した、東西2間(3.0m)以上の掘立柱建物である。大半が調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。40トレンチで検出された掘立柱建物群や、SB15の方向から南北方向に主軸を持つ建物である可能性があり、その場合主軸はN-1°-Wでほぼ南北方向である。柱間は東西方向が2.0m、南北方向が1.6mである。柱穴の掘形は一辺0.6m~0.7mの隅丸方形で、直径0.15m前後の柱痕が確認できるものがあった。柱穴から土師器、須恵器片が出土しているが細片であり、建物の時期は不明である。

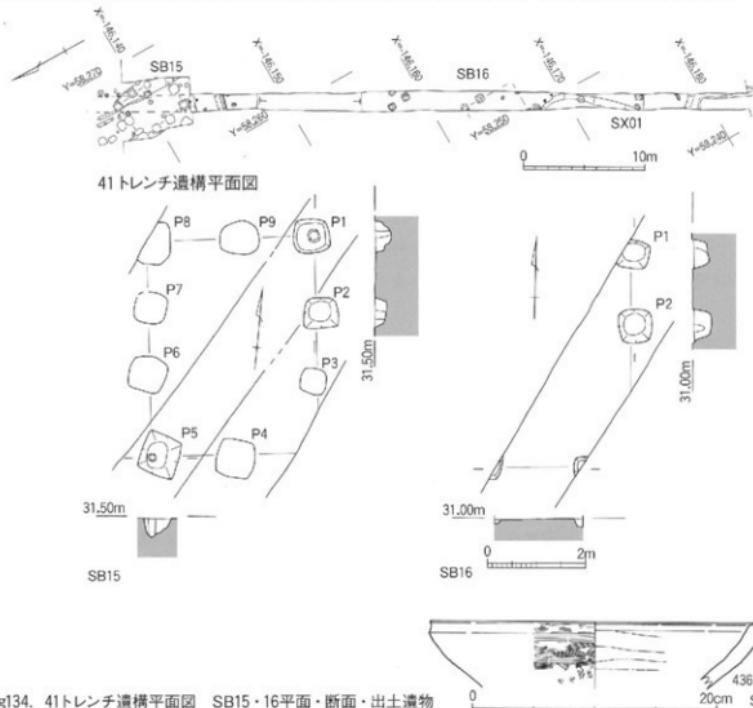


fig134. 41トレンチ遺構平面図 SB15・16平面・断面・出土遺物

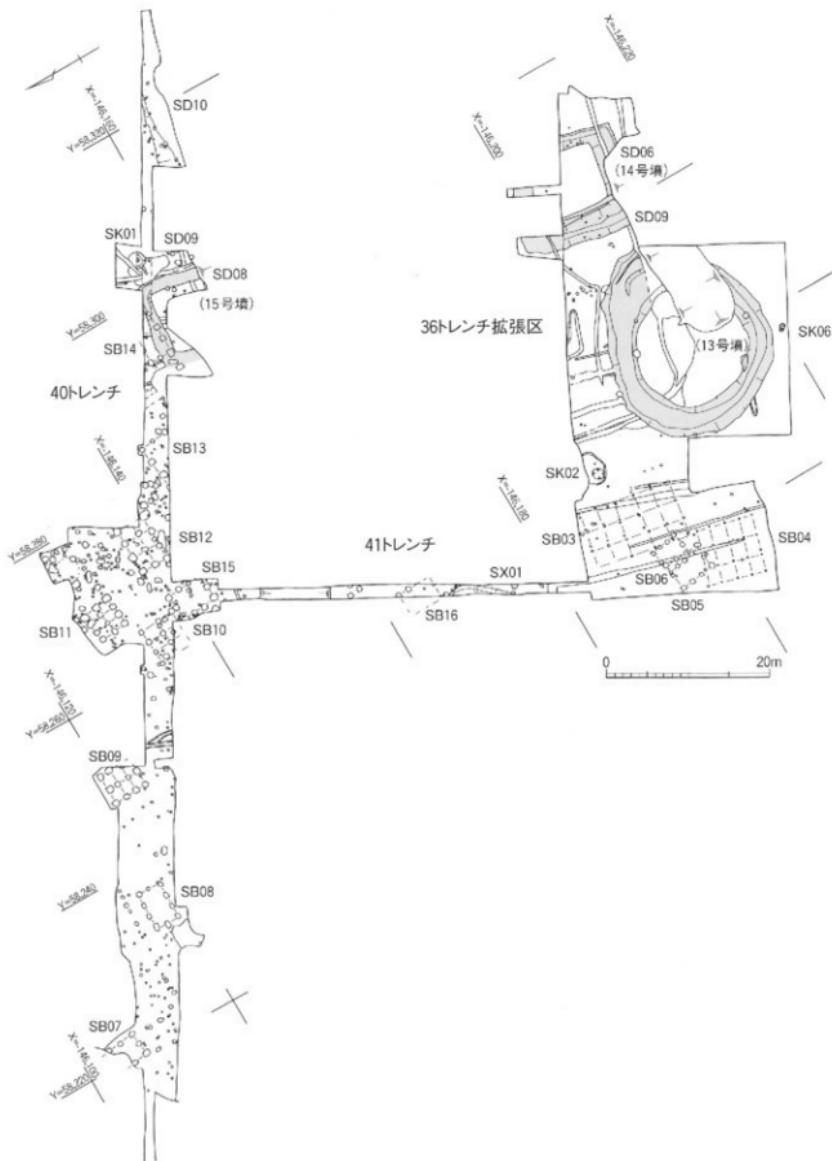


fig135. 36トレンチ拡張区 40・41トレンチ遺構平面図

SX01・溝

調査区南半で検出した、長さ8.0m以上、幅1.0m以上、深さ0.25mの落ち込み状の溝である。その形状から古墳の周溝である可能性も考えられるが、詳細は不明である。埋土からは奈良時代～中世の土師器、須恵器片が出土しているが、埋没する過程で流入したものと考えられる。

溝は幅約0.7m、深さ0.1～0.15m、西からへ流れ屈曲して南へ流れる。埋土の特徴から中世と思われる。

第7節 17号墳

大池の南西隅付近の段丘上、第39次調査31・32トレンチ東側付近において、圃場整備事業施工中の耕土層一時除去のために、耕土の掘削作業が実施されたところ、耕土直下の基盤層である黄灰色砂質シルト上面に円形に巡る古墳の周溝状の溝が現れた。この範囲はバイブルайн等の設置範囲外であり、工事掘削を伴わないことから遺構掘削作業は行なわず、検出作業と写真撮影、実測作業などの記録作業を実施した。

検出した溝は幅1.0m～3.0mで円形に巡るが、北側ではやや歪な形状を呈している。墳丘や埋葬施設は削平により失われているが、周溝と考えられる溝の形状から、長径12.5m、短径11mの円墳と考えられる。周溝の外側での径は東西21.4m、南北20.2mを測る。

周溝上面から土師器、須恵器片が検出されたが、いずれも小片で時期の特定には至らなかった。



fig136. 17号墳位置図 (S=1:5,000)

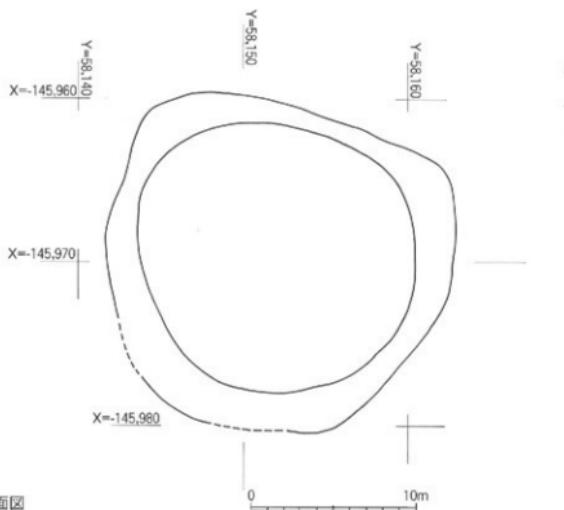


fig137. 17号墳平面図

第7章 第43次調査

第1節 42トレンチ

新設される排水路部分の調査で、調査区は複数の圃場にまたがり、また水路で分断されたりしているので便宜的に西から1区～4区と呼称して調査を実施した。以下、区ごとに概要を述べる。

1 区

1区は、耕作土を除去すると、暗灰色粘質土の旧耕土となり、若干の古墳時代～中世の遺物が含まれている。その下は褐色系の細砂～中砂の堆積が続き、現地表面から約0.9mの深さで砂疊層を検出した。おそらく明石川より派生する旧河道が埋没したものと考えられる。遺構は検出されなかった。

2 区

基本層序

2区は、耕土を除去すると灰褐色シルト質細砂の旧耕土（第2層）が存在し、その下に暗灰茶褐色シルト質細砂（第3層）、暗茶灰色シルト質極細砂（第4層）、暗灰色シルト質極細砂（第5層）、暗灰色細砂（第6層）、暗灰色中砂（第7層）、灰色砂疊（第8層）の順に堆積している。このうち第3層には多量の弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物と少量の古墳時代以降の須恵器が含まれている。第5層上面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。工事影響深度より下層では、一部断ち割りトレンチを設定して下層の確認を行った結果、第5層、第6層にも比較的多くの弥生時代終末期～古墳時代初頭頃の遺物が含まれていた。

断面観察により調査区の東端には流路の肩が確認でき、流路が埋没する際に遺物が流入したものと考えられる。

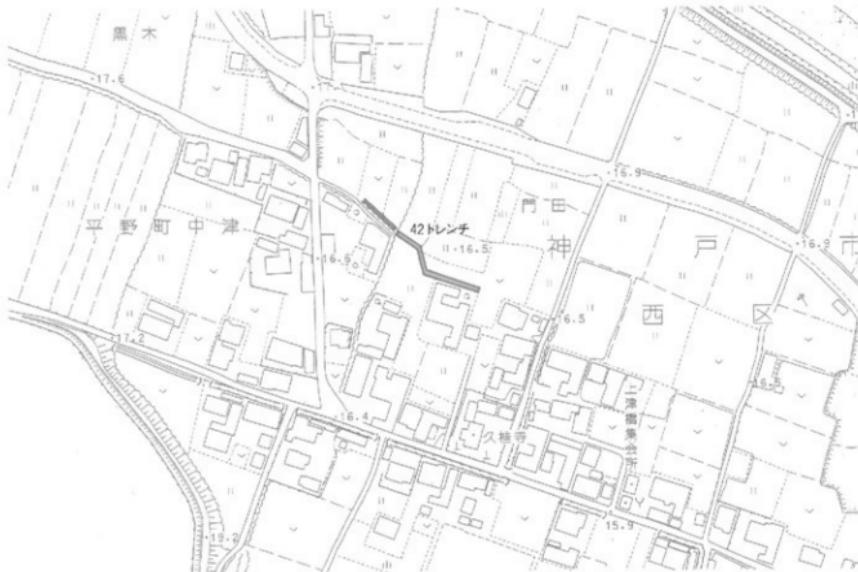


fig138. 第43次調査トレンチ配置図 (S=1:2,500)

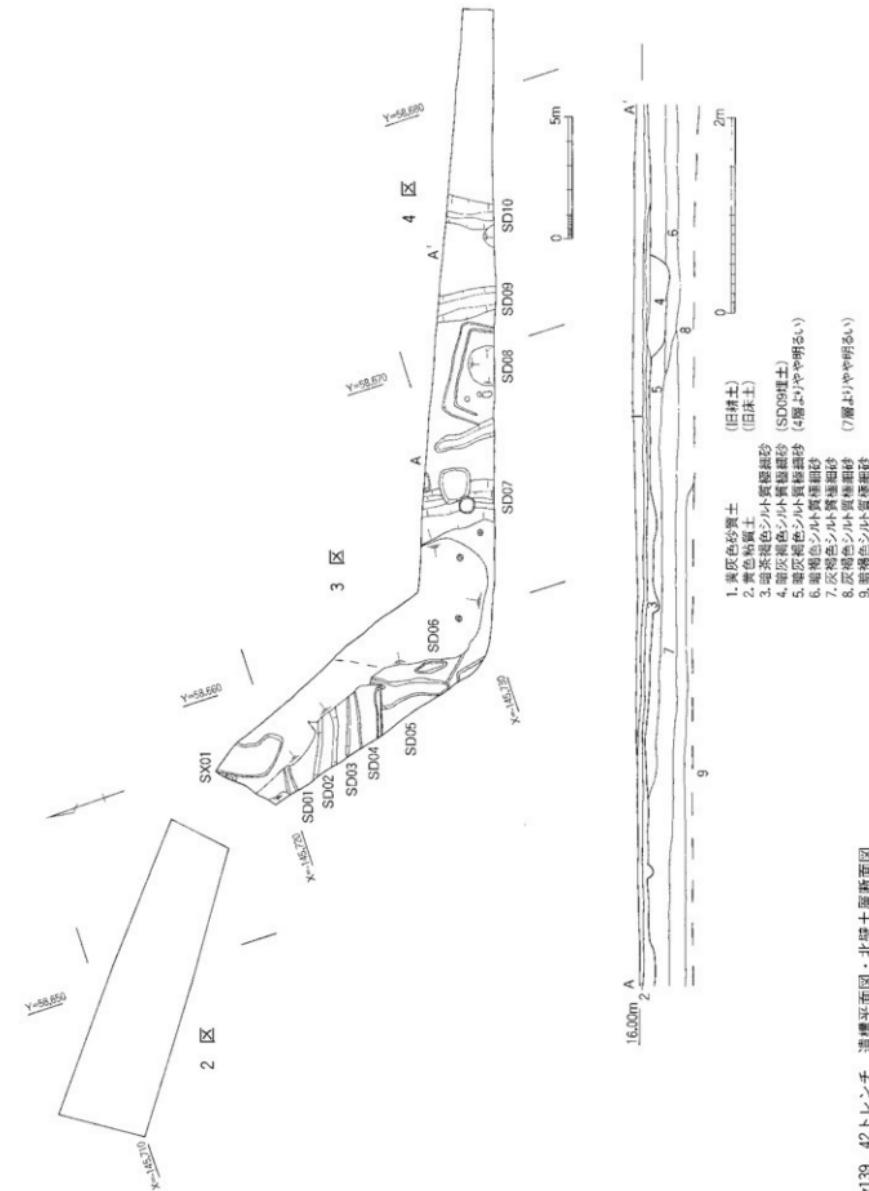


fig139. 42 レンチ 透構平面図・北壁土層断面図

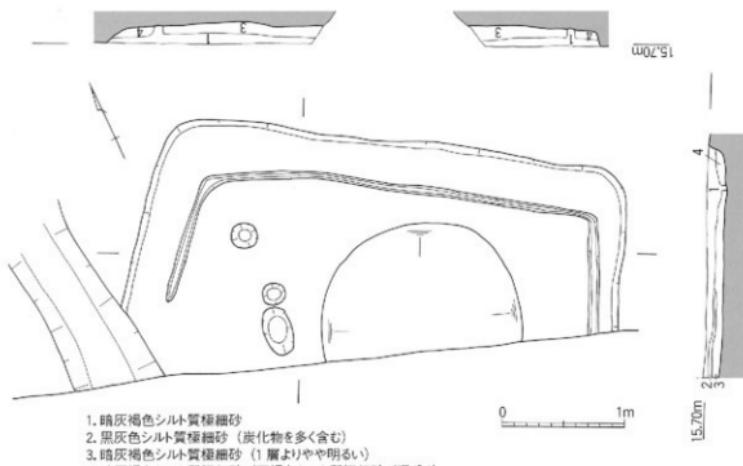


fig140. 42トレンチ4区 SB01平面・断面図

3 区

3区・4区は同一の堆積状況であり、耕土を除去すると、旧耕土である黄灰色砂質土が薄く堆積し、その下に遺物包含層である暗茶褐色シルト質極細砂が部分的に存在し、さらに下の暗灰褐色シルト質極細砂上面で遺構を検出した（第1遺構面）。第1遺構面の調査終了後、下層確認のため、一部断ち割りトレーニチを設定して掘削を行い、約0.4m下の暗褐色シルト質極細砂上面で第2遺構面を検出した。しかしながら、工事による掘削がこの深さまで到達しないため調査は実施せず確認に留めた。3区で検出した遺構は、遺物が小片のため詳細は不明だが、古墳時代以降と考えられる溝6条、ピット2基、不明遺構1基である。

4 区

4区で検出した遺構は堅穴建物1棟、溝4条、土坑2基、ピット2基である。

SB01

調査区内で北半部を検出した。一辺約4m程度の方形の堅穴建物と推定される。遺構面が削平されているため、検出面から床面までの深さが約0.15mしか遺存していない。また中央部に大きな搅乱があるため炉跡や主柱穴も不明である。



fig141. 42トレンチ4区 SD07平面・断面図

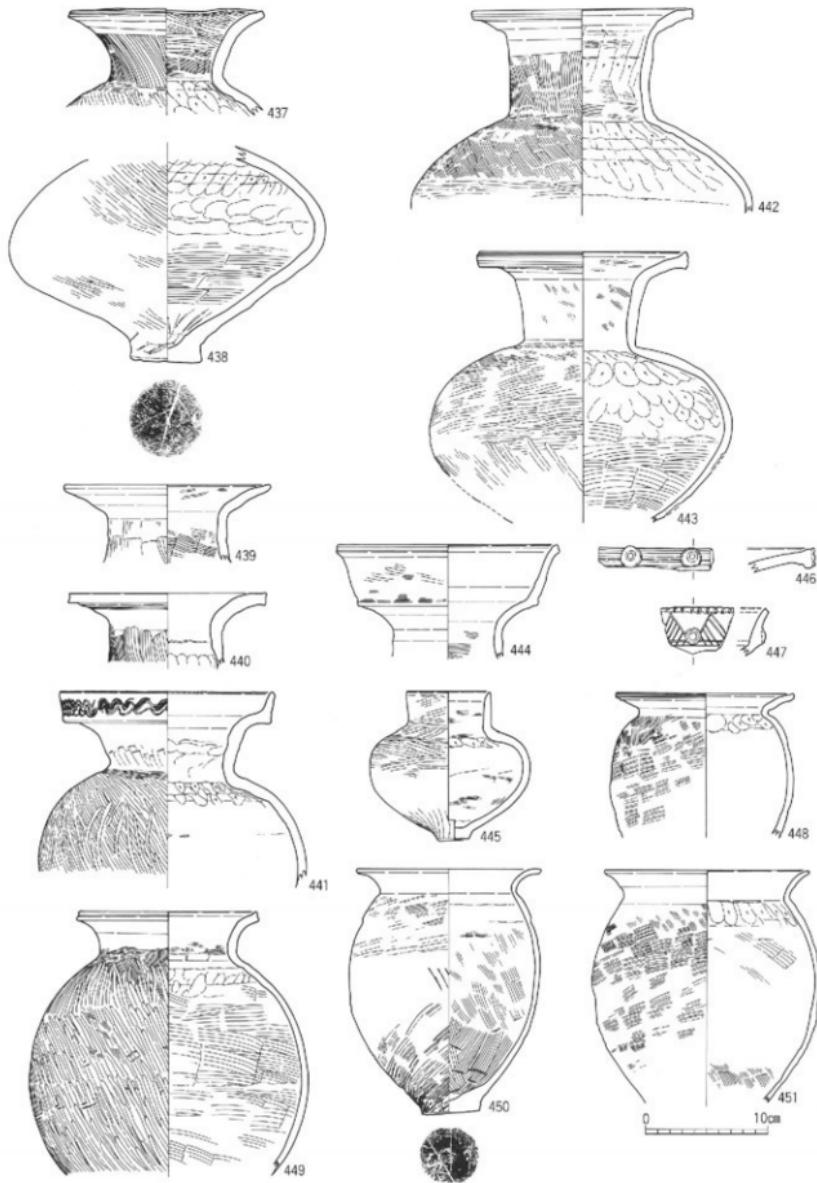


fig142. 42トレンチ4区 SD07出土遺物(1)

堅穴建物内部の、壁面より約0.3~0.4m内側に、幅約0.1m程度の浅い溝が壁面に平行して廻っており、その溝と壁面との間の埋土がやや異なっていることから、一段高いベッド状のものが存在して、溝はその盛土が崩壊するのを防ぐために板状のものを巡らせていた可能性が考えられる。

建物内部にピットが3基存在している。その中で大きなものは直径0.3m、深さ0.4mあり、主柱穴の一つと考えられる。堅穴建物の埋土より弥生時代後期～古墳時代初頭頃と考えられる遺物が出土している。

SD07

SD07は幅約1.7m、深さ0.6mで、下から暗茶灰色シルト質極細砂、暗褐色シルト質極細砂、暗灰色シルト質極細砂、暗灰褐色シルト質極細砂、暗褐色シルト質極細砂の順に堆積している。埋土中から弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の壺、甕などの完形に近い遺物が多量に出土した。

437~447は壺である。437は広口壺で口径15.6cmを測る。やや外方へ延びる頸部から外反する口縁部で、口縁端部外面は内側へ斜面を持ち、1条のヘラ描沈線を巡らしている。外面は体部と頸部の境付附近にハケメが確認でき、ハケメ後に縦線のヘラミガキ仕上げを行なう、口縁部下に3条のナデを施す。内面は頸部から上はヘラミガキとハケメ調整で、内面にユビナデが施し、口縁部内側に一条のナデを施す。438は頸部から上を消失する。小径の体部から扁平な無花果形の体部が立ち上がる。439、440、442、443は広口壺で直立する頸部から外反する口縁部を有する。口縁端部外面には442で1条、443は3条のヘラ描沈線を施す。また、440は頸部と口縁部の境に横位のハケメを一条施す。442、443の外面はハケメ後に肩付附近から下はヘラミガキで、内面は頸部から上及び体部下半はハケメで、体部上半から頸部の屈曲部にかけてユビナデ痕が顕著である。口径は439が16.0cmで、442が18.8cm、443は16.8cmである。446は広口壺の口縁部と考えられ、口縁端部外面に2条のヘラ描沈線と貼り付け竹管円形浮文で飾られている。441、444、447は二重口縁壺で、441は口径17.2cmを測り、やや外方に聞く頸部から外反する1次口縁の上に、わずかに外反する2次口縁が付く。2次口縁の外面には櫛描による波状文1帯が巡らされている。体部外面はヘラミガキが施される。444は復元口径17.8cmを測り、垂直に立ち上がる頸部から外反する1次口縁に、外方に延びた後にわずかに外反する2次口縁が付く。447は小片であるが、外反する2次口縁の外面はヘラ描による鋸歯文で飾られ、口縁端部には刻目が施されている。1次口縁との境に竹管円形浮文が貼り付けられている。445は短頸直口壺の小形品で、口径6.8cm、器高2.6cmを測る。小径の底部で無花果形の体部から垂直に頸部が立ち上がる。

448~465は甕である。449は球形の体部に外反する口縁部で、口縁端部外面に1条のヘラ描沈線を巡らす、外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はハケメで頸部付近はユビナデが顕著である。

外面にタタキを施す甕は、452の口径16.8cm、器高25.3cm、453の口径14.3cm、器高22.8cm、455の復元口径14.8cm、器高26.0cm、459の口径15.1cm、器高24.6cm、461の口径16.0cm、器高28.8cmなどの中形品、450の口径15.0cm、器高20.1cm、454の口径15.4cm、器高18.3cmのやや小形のもの、464の復元口径11.8cm、器高15.3cm、465の口径13.0cm、器高15.0cmの小形品がある。口縁部は448、457の様に低く外方へ延びるもの、450、455の外反するもの、451、453、456の頸部にナデを施して外反するもの、458~461の様に同じくナデにより外反させ、口縁端部内面のナデにより上方へつまみ上げた様な形状の460、461や、458、459の口縁端部の内湾が小さく、端部は丸く収めたものが存在し、459の直線的で立ち上がりの大きなものなどもある。体部外面は右上がりタタキを施すが、448、451のハケメ後にタタキを施すもの、461のタタキ後にハケメを施し、肩部に1条の横位のナデ施すもの、459のタタキ後にヘラミガキを粗く施すものもある。内面は450、451、454、465のハケメ、452、455、457、459、461、462の様なヘラケズリがある。

456は復元口径16.6cmを測る。頸部からナデにより外反する口縁部である。463は口径10.3cm、器高12.6cmで球形の体部から短く直線的に口縁部が立ち上がる。播磨町大中遺跡にタタキを施す類似例がある。

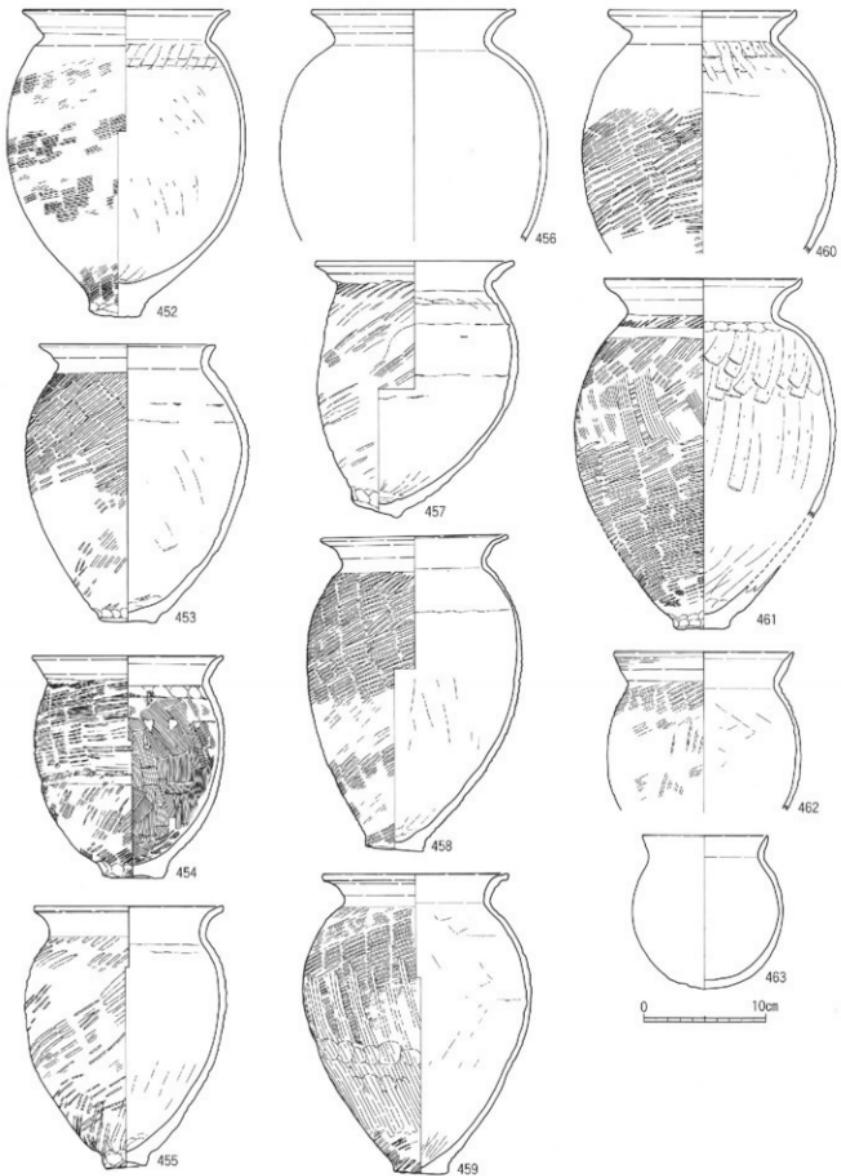


fig143. 42トレンチ4区 SD07出土遺物(2)

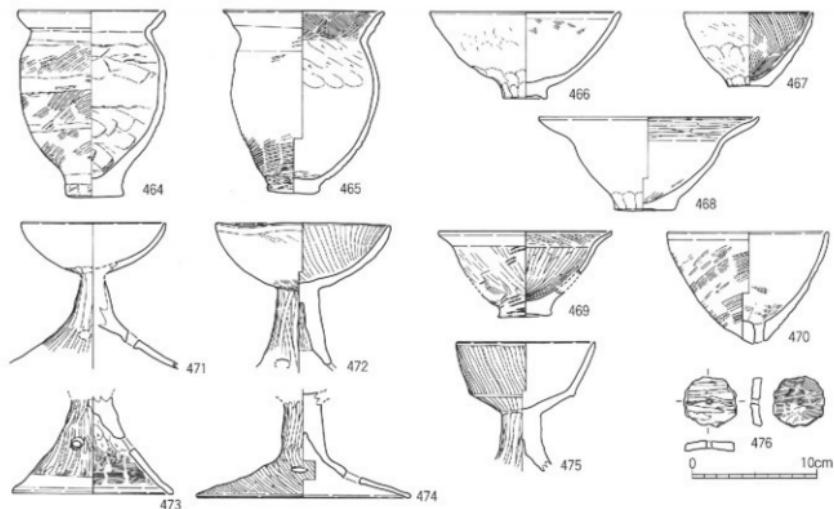


fig144. 42トレンチ4区 SD07出土遺物(3)

466～470は鉢である。466は内湾気味に立ち上がる体部である。467は底部からほぼ直線的に内湾する体部で、内面はハケメ調整である。468と469は内湾気味の体部から屈曲して外方に口縁部が延び、端部は上方へつまみ上げた様な形状を呈する。470は口径13.0cm、器高9.2cm、尖底で穿孔する。外面タタキで口縁部下に1条のヨコナデを施す。471～474の高环は环部が内湾する塊形の471、472、有稜の环部の475があり、口径は472が14.2cmを測る。脚部は緩やかに広がる473や、屈曲を持つ472、474などがある。裾部の穿孔は全体が分かる473では3ヶ所である。476は壺の体部片を転用し、中央部に穿孔した紡錘車である。

これらの出土遺物は、庄内式併行期頃の時期が考えられる。

SD10

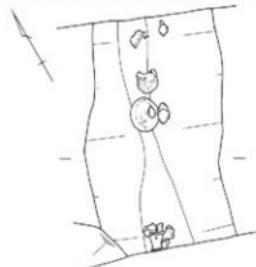
SD10は幅1.0m、深さ0.3mであるが、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の完形に近い土器が出土している。

477は壺の体部で、頭部から上を欠失する。小径な底部から無花果形に体部が立ち上がる。外面はヘラミガキである。

478と479は壺である。478は口径14.2cm、器高19.0cmを測る。口縁部は短く外反する。端部は上方にごくわずかにつまみ上げた様な形状を呈する。479と共に外面は右上がりタタキ、内面はハケメを施している。

480は鉢で復元口径18.8cm、器高9.1cmを測る。内湾し、ほぼ直立気味に立ち上がった体部からわずかに屈曲して外反する口縁部が伸びる。底部付近にわずかに右上がりタタキが確認できる。481は器台の体部で裾部境に3ヶ所穿孔される。

これらの出土遺物は、庄内式併行期頃の時期が考えられる。



1. 暗灰茶褐色シルト質櫛細砂（炭化物を含む）
2. 暗褐色シルト質櫛細砂

fig145. 42トレンチ4区 SD10平面・断面図

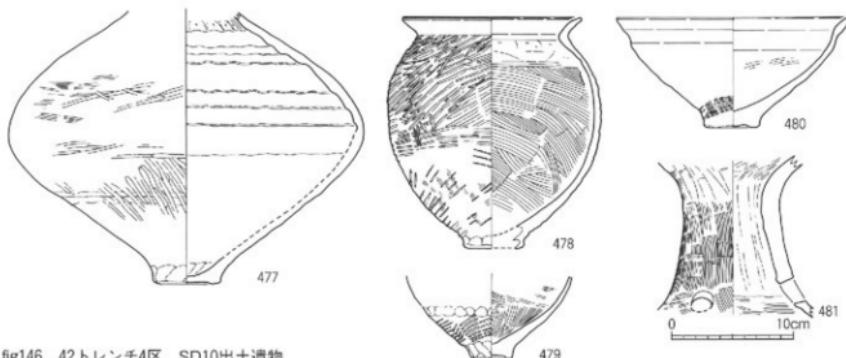


fig146. 42トレンチ4区 SD10出土遺物

第43次調査では遺物包含層やその他の遺構からも遺物が出土した。483がSP01からの出土で、その他は遺物包含層からの出土遺物である。

482は広口壺で復元口径17.6cmを測る。垂下口縁で口縁部外面には5条のヘラ描沈線を施す。483は長頸壺で口径6.0cmを測る。直立する頸部から外反する口縁部で、外面と内面の上部にヘラミガキが観察できる。

484は甕で復元口径14.3cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり、端部はやや内傾する面を持ち、1条の凹線が巡る。外面は右上がりタタキを施している。485は鉢で復元口径12.8cm、器高6.4cmを測る。内面に板ナデが認められる。486は高環、487は小形の甕で球形の体部からわずかに外反する口縁部が延びる。

488は上師器の瓶で、平底から緩やかに体部が立ち上がり口縁部はわずかに外反する。端部はやや内傾する面を持つ。体部中位に棒状の把手が付く。底部には1+5の形で孔が開けられている。

482~487は弥生時代後期末~古墳時代初頭の庄内式併行期。488は古墳時代後期頃の時期が考えられる。

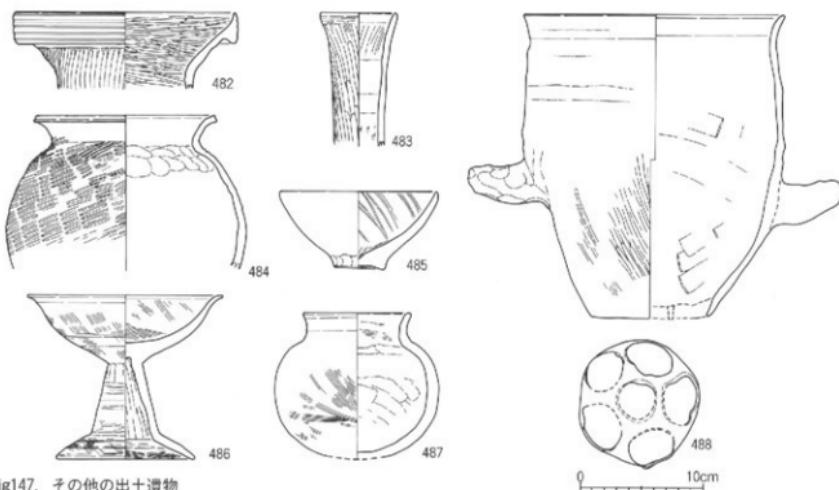


fig147. その他の出土遺物

第8章 第44次調査

第1節 43トレンチ

調査地は明石川南岸の沖積地に位置し、上津橋集落北側に所在する。調査開始前までは耕作地及び水田として使用されていた。調査地は、第43次調査区の東側に隣接しており、排水路布設部分の調査である。調査トレンチの番号は昨年度に引き続き、43トレンチ及び44トレンチとして調査を実施した。

基本層序

43トレンチの基本層序は、現耕土下に数枚の旧耕土・旧底土が存在し、その下層の灰褐色シルト質極細砂の上面で第1遺構面が検出される。この灰褐色シルト質極細砂及び暗灰褐色シルト質極細砂には、調査区の西半では、微細な遺物がわずかに含まれる。近隣の調査データからは、この下層の灰褐色シルト質極細砂（やや明るい）の上面に第2遺構面が検出されている。

現地表面から第1遺構面までの深さは、調査区東端～中央部で0.55m前後、西端0.5mで、同じく第2遺構面までは調査区東半においては1m、中央部で0.95m、西端では0.75m前後であり、西から東へと緩やかに下がる地形である。

調査成果

遺構面からは、掘立柱建物1棟、溝3条、土坑8基、ピット2基を検出した。出土遺物から、遺構の時期は中世と古墳時代の2つの時期に分けられる。

SB01

SB01は、調査区西半東側で検出した、掘立柱建物と考えられる遺構である。東西3間分を検出した。主軸はN-57°-Wである。

柱間は1.35～1.4m、柱穴は直径0.25m前後の円形で、検出面からの深さは0.22m～0.37mである。断面観察から直径0.1～0.15mの柱痕が確認され、柱痕を取り巻く様に礫が検出されたことから、軟弱な地盤において柱の安定を図るために、柱穴内に礫を充填しているものと推定される。柱穴は東西方向のみでの検出であるため、建物全体の規模は不明である。しかし北側に柱穴が検出されないことから、東・南方向に続く建物である可能性が考えられる。出土遺物は微細な上層器片が出上している。

中世の遺構であると考えられる。



fig148. 第44次調査トレンチ配置図 (S=1:2,500)

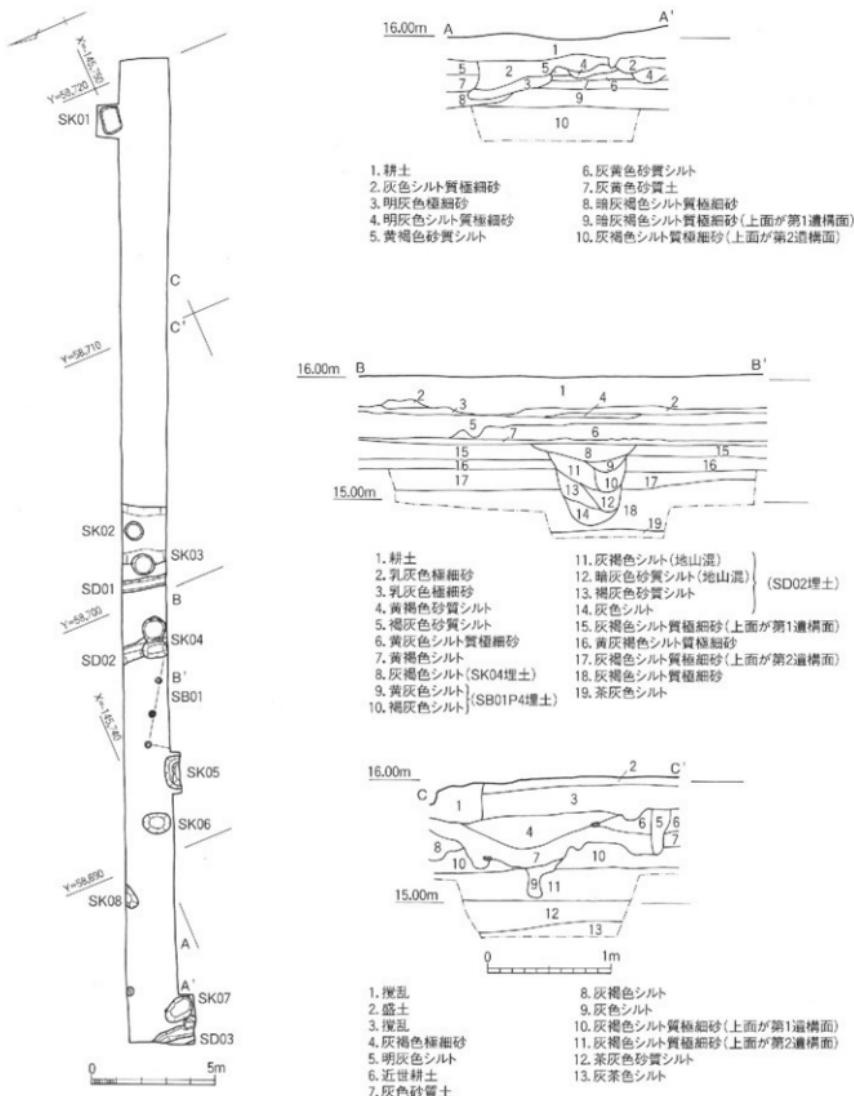


fig149. 43トレンチ遺構平面図・南壁土層断面図

SD03

SD03は、調査区西端で検出した幅0.4~0.5m、検出面からの深さ0.25m前後の溝である。ほぼ南北方向でやや西側へ緩く弧を描く、南から北へと流れる溝と考えられる。断面は不整形なU字状を呈し、埋土は西側に灰色砂質シルトの堆積がある他は、暗褐灰色砂質シルトの堆積である。埋土内からは土師器甕、高坏などが出土している。

487は土師器の甕である。口径12.2cm、現存高17.8cmを測る。やや長胴の体部から、外方へ頭部が延び、やや内湾気味の口縁部である。端部は丸く收める。体部外面はタテ方向のハケメ調整、内面はヨコ及びナナメ方向のハケメ調整を施し、内面にはユビナデ痕が確認できる。488は土師器の甕の底部であろうか。全体的に摩滅の影響が著しいが、外面には右上がりのタクキ痕が施されていることが観察できる。

489は土師器の高坏の脚部で、坏部を欠失する。底径10.0cmを測る。脚裾部の広がりはそれ程大きくはなく端部は丸く收める。脚裾部はやや内湾気味に立ち上がった後、脚柱部へと直線的に立ち上がる。内外面共に摩滅の影響が大きく、調整痕の観察は困難であるが、わずかに外面にヘラミガキが施されていることが観察できる。

出土遺物には490の弥生時代末~古墳時代初頭頃のものも含まれるが、489からSD03は、古墳時代前期の布留式併行期でも新しい時期が考えられる。

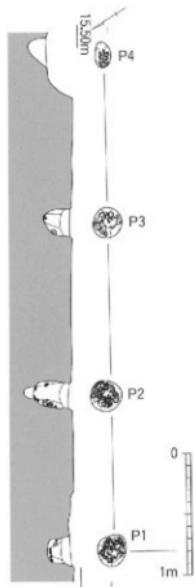


fig150. 43トレンチ
SB01平面・断面図

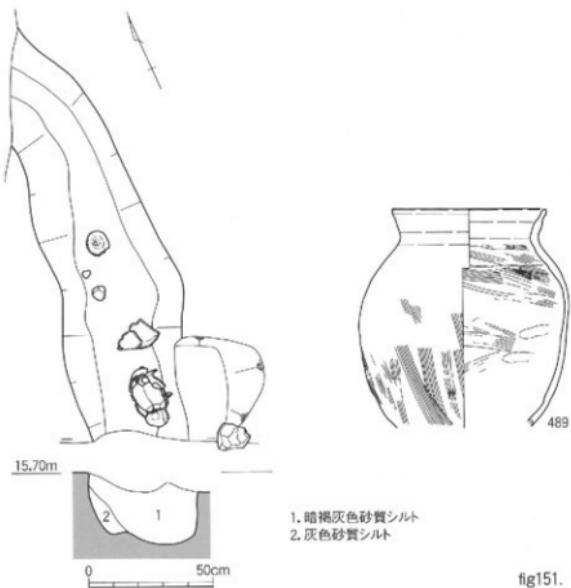


fig151. 43トレンチ SD03平面・断面図

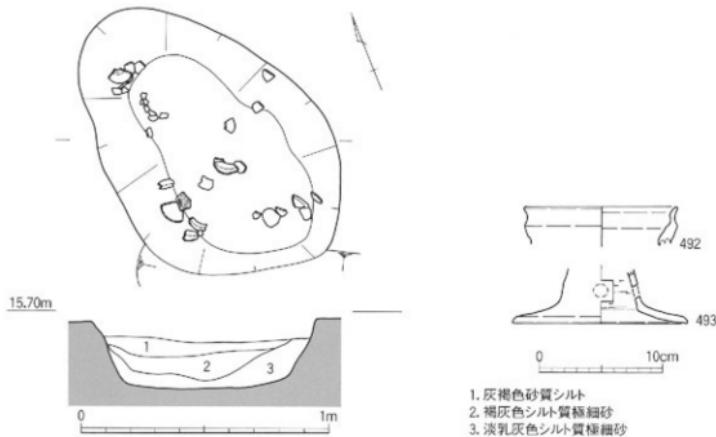


fig152. 43トレーニチ SK07平面・断面図・出土遺物

SK07

調査区西端で検出した長径1.3m、短径0.9m、検出面から深さ0.28mの土坑である。埋土は下から淡乳灰色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂、灰褐色砂質シルトで、埋土中からは土師器片多数が出土した。

出土遺物は大半が小片であり、図化が可能なものは極めて少量であった。

492は二重口縁壺の口縁部であろうか。復元口径12.2cmを測る。やや厚みのある下部から、外反気味に口縁部が立ち上がる。端部は丸く収める。493は高壺の脚台部で、復元底径は14.0cmを測る。大きく広がる脚裾部から、屈曲を持って、やや内湾気味に脚柱部が立ち上がる。脚柱部には円孔を施す。

出土遺物から、SK07は古墳時代初頭～前期頃の時期が考えられる。

下層の状況

近隣の調査データの成果から、調査区西半のみ全面調査を実施したが、第1造構面のベース層である灰褐色シルト質極細砂及び暗灰褐色シルト質極細砂から、わずかに遺物が出土したのみで、下層から造構は検出されなかった。このため、調査区東半については断削調査を実施するに留めた。東半においても調査の結果、造構、遺物は確認されなかった。

第1造構面ベース層からの遺物の出土が調査区西半に限られ、断削による土層観察では、東側は細砂を含む土層であることから、調査地は西側に位置する微高地から、東側に存在すると推定される明石川の旧流路、もしくは氾濫原の低地へと下がって行く立地状況にあるものと考えられる。

第2節 44トレーニチ

43トレーニチの東側に位置する南北方向のトレーニチである。

44トレーニチでは、現耕土下に複数の耕土層が堆積し、いずれも軟弱な地盤を形成している。中世の耕土層面とその下面、及び現表土下約0.8mの灰茶色極細砂面で土壤化した状況を確認したため、各層面で造構検出を行なったが、造構は検出されなかった。中世の耕土層から古墳時代後期、中世の遺物が出土しており、近隣に造構の存在する可能性を示唆するものである。

第9章 鉄製品・金属製品生産関連遺物・鳥帽子

第1節 鉄製品・金属製品生産関連遺物 (図版53・54、fig.153)

今回報告する調査においては、表4に掲載したとおり、総点数30点の鉄製品・金属製品生産関連遺物が出土している。内、鉄製品は24点、生産関連遺物（鉱滓）は6点を数える。

鉄製品の多くは鉄釘であり、いずれも角釘である。頭部の確認できるものについては、端部を打ち延ばした「頭巻釘」であるとわかる。この中で最大の個体（502）は長さ10cmに迫るものである。

506は第19トレンチの灰色粘質土より出土した刀子の残欠である。残存長は約4.2cm、刃部幅1.8cm、厚さ7.2mmを測る。刃は緩やかに斜行する片側で、断面長方形の茎に至る。

507は第17トレンチの褐色シルト質極細砂～砂質土より出土した、厚さ4.6mm鉄板状の製品の残欠である。端面の状況からは方形製品の破片である可能性が高く、断面はやや湾曲する。

510は7号墳の周溝埋上に包含されていた、厚さ約3.5mmの鉄板を横長の短冊形に成形した製品である。上部に三つ頭の突起を作り出し、この中央には約2.0mmの孔を穿つ。また身と突起の接合する付近には幅1.0mm、長さ9.0mm前後のスリットが開けられる。全体の形状は火打金に似るが、類例の調査が必要である。

520はSD09より出土した、方頭の鉄釘である。身部長は7.3cmで、両側に2.3mm程度張り出した両闊を経て

断面方形（幅4.8mm、厚さ3.0mm）の茎に至る。茎長は欠損により不明である。また、身部中央の長軸方向には幅約7.0mmの突帯が存在するが、用途は定かではない。

生産関連遺物の6点は鉱滓であり、いずれにも着磁性が認められることから、鉄製品の生産に関連する鉱滓（鉄滓）であると推定できる。いずれも底部に面を持つ椀形潭であるが、周辺に関連遺構は確認されておらず、当地において操業されていたか如何は定かではない。

次 数	番 号	遺物名	出土地区	出土層位	時期	法量 (mm)		
						長 さ	幅	厚 さ
34次	494	鉄釘	5トレンチ5区	包含層	12～13世紀	38.3～	9.8	6.8
	495	鉄釘	5トレンチ5区	包含層	12～13世紀	33.2～	6.1	1.2
	496	鉄釘	5トレンチ6区	SX5601	中世	40.0	—	3.8
	497	鉄釘	5トレンチ3区	包含層	12～13世紀	26.3～	—	5.2
	498	鉄釘	5トレンチ5区	包含層	12～13世紀	21.2～	—	5.3
	499	鉄釘	5トレンチ5区	包含層	12～13世紀	19.6～	—	6.1
35次	500	鉄釘	5トレンチ5区	pit541	11後半～13世紀初期	25.6～	—	3.8
	501	鉄片	5トレンチ5区	包含層	12～13世紀	16.5	—	3.6
	502	鉄釘	13トレンチ4区	灰褐色砂質シルト	中世	97.5～	14.3	10.4
	503	鉄釘	16トレンチ東端	試掘	—	50.7～	5.5	2.8
	504	鉄釘	15トレンチ	灰褐色シルト質極細砂	中世	31.5～	8.6	4.8
	505	鉄釘	13トレンチ2区	SH02	中世	33.7	—	4.8
37次	506	刀子	19トレンチ西	灰色粘質土	中世以降	41.9～	18.0	7.2
	507	鉄板	17トレンチ東端	褐色シルト質極細砂～砂質土	中世	58.6～	50.3～	4.6
	508	鉱滓	13トレンチ7区	灰褐色シルト質極細砂	中世	69.8	—	20.2
	509	鉱滓	17トレンチ	黄褐色粘質土+灰色シルト	中世	37.9～	—	12.6
	510	鉄製品	26トレンチ2区北端	7号埴居跡	奈良時代以降	53.1	21.7	3.5
	511	鉄釘	26トレンチ2区	7号埴居跡	奈良時代以降	25.3～	—	3.3
40次	512	鉱滓	21トレンチ1区	灰褐色極細砂	中世	30.1	—	13.5
	513	鉄釘	36トレンチ試掘4	暗灰褐色砂質シルト	中世	51.2～	8.0	7.1
	514	鉄釘	40トレンチ	SP03	古墳時代後期～中世	38.6～	8.8	5.0
	515	鉄釘	40トレンチ7区	SD09	8世紀後半	53.6	7.7	5.4
	516	鉄釘	36トレンチ鉱漁区	SK02	7世紀前半	28.3～	—	3.7
	517	鉄釘	40トレンチ4区	SP15	古墳時代後期～中世	22.5～	—	4.0
41次	518	鉄釘	36トレンチ鉱漁区	古墳周辺北西部上層	飛鳥時代～平安時代	31.7～	—	5.4
	519	鉄釘	36トレンチ鉱漁区	SD09	8世紀後半	31.5～	—	5.7
	520	鉄漁	40トレンチ7区	SD09	8世紀後半	78.3～	23.1	5.2
	521	鉱滓	36トレンチ鉱漁区	古墳周辺北西部上層	飛鳥時代～平安時代	181.5	—	33.3
	522	鉱滓	36トレンチ鉱漁区	古墳周辺北西部上層	飛鳥時代～平安時代	65.4	—	28.8
	523	鉱滓	36トレンチ鉱漁区	SD12	古墳時代後期～中世	44.7	—	17.1

表4 出土鉄製品・金属製品生産関連遺物一覧

* 鉄釘の法量は、幅=頭幅、厚さ=身幅を表す

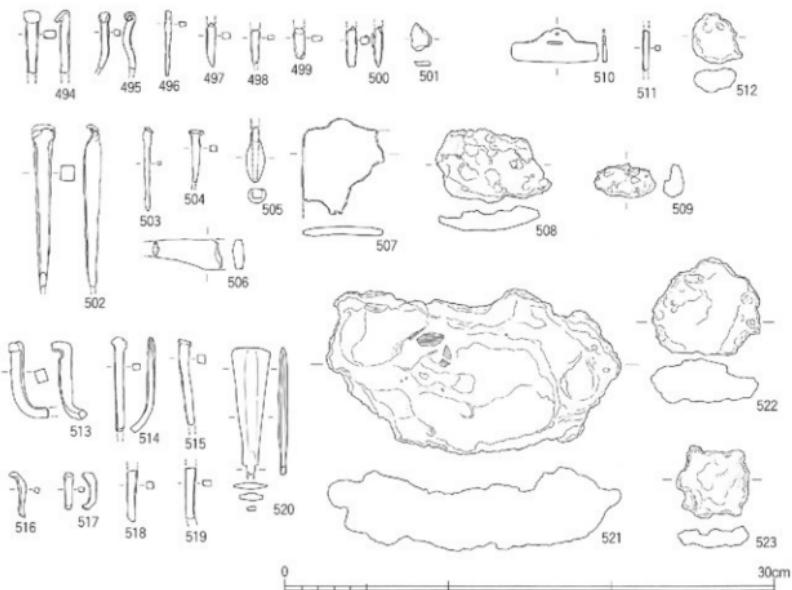


fig153. 鉄製品・金属製品製作関連遺物

第2節 烏帽子 (写真18、fig.154)

524は、第34次調査の第5トレンチ5区、SX55104より出土した漆塗り烏帽子である。SX55104は池状の落ち込みであり、12世紀末頃に埋没している。烏帽子はこの底部に穿たれたピットから出土したが、土砂によって押しつぶされ、さらに取り上げ時に大きく2片に割れてしまっている。現状で幅7.2cm、高さ4.9cmを測る。ただしこれは原形の法量を表す数値ではない。形状は、縁を下にしてドーム状の本体が立ち上がり、一見、立烏帽子ふうに見えるが、非常に脆弱であるため出土状態の下面土壤を除去できておらず、折りたまれるようにつぶれているとともに縁辺部が欠損していることなどから、詳細を明らかにできていない。

一方素材については、外表面の黒漆塗膜層がほとんど剥落しており、内表面の漆層に痕跡として記憶された布帛が観察できるため、下地材に用いられた布帛に漆塗りを施していたことが判る(写真19)。下地の布帛は平織り布であり、縫糸方向を水平にして用いている。織密度はほぼ全体が1cmあたり経糸約35本×緯糸約40本であり、一部に経糸約40本×緯糸約45本と、密度の高い部分が存在する(写真20左半)。単糸の撚りは弱く、太さは幅約0.2mmを測る(写真21)。また、写真22の画面右半分に見られるように、布帛の下層には不規則に絡み合った纖維が観察できる。この单纖維は比較的直線的であり、太さは大小あるが、太いもので約20μmを測る。烏帽子下地材の用例には麻・絹などの織物以外に紙などがあるが、本例については特定するに至っていない。

また烏帽子本体より漆塗膜と布の重層片を微量採取して薄片資料化(fig.154の濃アミ部片)し、縦横断面について透過光による顕微鏡観察を試みた(写真23~26)。採取資料は本体側面に相当する破片で、外表面の漆膜は消失している。写真では下部に内表面の漆塗膜層が存在し、上部に布の断面が観察できる。先述した

不明繊維については腐食のせいか、その存在が確認できなかった。

写真23・24は経糸横断面、写真25・26は緯糸横断面方向の写真である。写真23では画面中央で経糸が交差し、緯糸が緯糸の下をくぐっている状況が観察できる。劣化のため原形は推し量のみであるが、単糸は水平方向にかなりつぶれた瞳形を呈する。単糸中の單纖維は腐朽のためにかなりが失われており、断面形は写真では白く抜けた外形のみのネガティブ像として観察される。本数については正確な計数が不可能であった。比較的原形をとどめていると考えられるもの（写真24画面中央付近）では、やや丸みを帯びた二等辺三角形を呈し、法量は大型のもので長さ約 $28\mu\text{m}$ 、幅約 $11\mu\text{m}$ を測る。断面三角形は絹單纖維（フィブロイン）の特徴である。ただし、現代の管理養育された蚕の絹纖維横断面は、フィブロイン1本あたりの長さがおよそ $10\mu\text{m}$ 程度であり、これに比べるとかなり大型であるため、絹であるか否かの判定には慎重を要するであろう。写真25は経糸の交差点から外れており、経糸の縦断面のみが観察できる。緯糸横断面については観察できないが、表面観察の限りでは経糸と同様な纖維束であろうと思われる。

塗りについては内面側に3層の重ね塗りが観察でき、塗膜層の厚みを計測した（写真23）。経糸が交差する部分では厚さ約 $60\mu\text{m}$ を、交差しない部分では約 $105\mu\text{m}$ を測る。また写真25で3層各々の厚みを計測すると、1層目は布帛に浸透するため約 $20\mu\text{m}$ と薄く、2層目が約 $35\mu\text{m}$ 、3層目が約 $50\mu\text{m}$ と厚みにやや差が生じている。色調については写真が黑白であるため判じがたいが、透過光観察では1、2層目は赤褐色2.5YR4/6、3層目は極暗赤褐色2.5YR2/4を呈する（マンセル方式）。この色調差は1、2層目に生漆を、仕上げの3層目には顔料を混和した黒漆を使用したためと考えられる。使用された顔料は不明であるが、写真26に見るように微細な黒色粒子（径 $4\mu\text{m}$ 以下）がエマルジョン的に混和されている状況が観察された。



写真18 烏帽子



fig154. 烏帽子

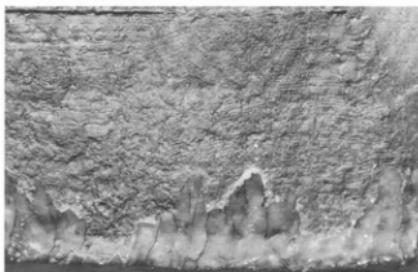


写真19 縁部分 マクロ写真 (2.5倍)

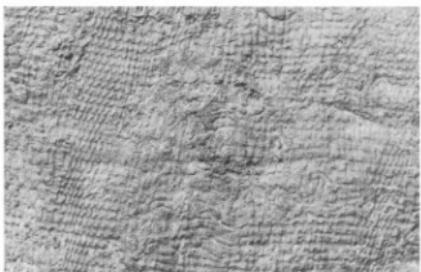


写真20 布痕跡 マクロ写真 (7倍)



写真21 布残欠 跳微鏡写真 (50倍)

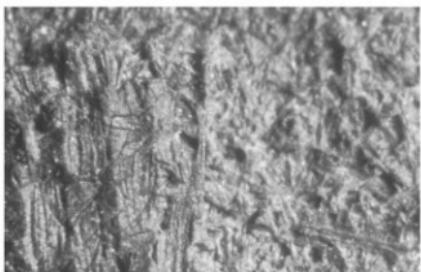


写真22 布・不明繊維残欠 跳微鏡写真 (50倍)



写真23 漆・布断面 (経糸横断方向) 跳微鏡写真 (70倍)

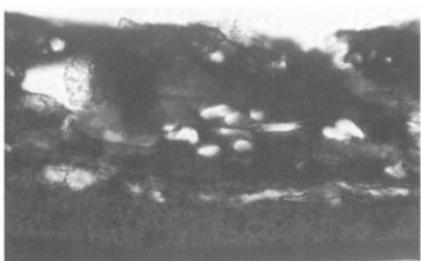


写真24 同左 跳微鏡写真 (240倍)



写真25 漆・布断面 (縦糸横断方向) 跳微鏡写真 (70倍)

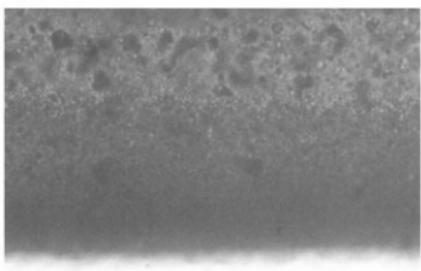


写真26 漆塗膜断面 跳微鏡写真 (600倍)

第10章 まとめ

第1節 調査の成果

今回の調査では、弥生時代～中世の遺構、遺物を確認した。調査の成果をまとめて概観してみたい。

弥生時代

弥生時代は低地部で前期後半～中期初頭、後期末～古墳時代初頭の2つの時期の遺構、遺物が確認された。前期後半～中期初頭の遺構、遺物は、5トレンチ4～6区を中心に分布が見られる。検出した遺構は土坑、ピット、流路、落ち込みなどで、調査時の段階では、調査地は明石川南岸の微高地縁辺部にあたると考えられ、集落域は近隣に存在すると想定されていたが、平成22年度に5トレンチと第43・44次調査地との間に位置する、県道野村・明石線南側で実施された第45次調査において、前期後半頃と考えられる竪穴建物などが検出され、集落域は5トレンチ南方の微高地土上に存在することが明らかとなった。今回出土した遺物は、多条化したヘラ描沈線の壺や、逆L字状口縁を有する壺、把手付鉢などから、第Ⅰ様式後半～第Ⅱ様式前半頃と考えられる。

弥生時代後期末葉～古墳時代初頭にかけての遺構、遺物は低地部の12・13・42トレンチにおいて集中的な分布が見られた。遺構は溝を主体とするが、42トレンチでは竪穴建物1棟を検出しておらず、集落域が存在するものと考えられる。出土した遺物は、12トレンチSD204出土(205)の「淡路型器台」と考えられる器台を始め、SD203～206では二重口縁壺、器台が多く含まれる。42トレンチSD07でも二重口縁壺の存在、口縁端部をつまみ上げるタタキ壺(460)、(461)などから、弥生時代後期後半でも新しい時期～庄内式併行期の時期が考えられる。尚、出土遺物には河内地域や淡路からの搬入が考えられるものが存在し、近江系に類似する42トレンチSD07出土の破片(図版48)も存在する。

古墳時代

古墳時代は、低地部の1・5・6トレンチの遺構や流路内から、中期後半～後期段階のまとまった遺物の出土があった他、段丘上の第37・40次調査での方墳2基、円墳10基の古墳群の検出が特筆される。

低地部の1トレンチSD05・SR201は6世紀後半の遺物が出土した。5トレンチ2区SR201出土(31)の二重口縁壺は、中期頃と考えられる。また、6トレンチSR01出土台付鉢(198)や、第35次13トレンチSD10の内面に赤色顔料の付着がある小形丸底壺(237)は特筆される。

段丘上で検出した古墳群は、いずれも墳丘や埋葬施設は削平されており、周溝のみの検出であった。第37次調査7号墳と12号墳の周溝からは多くの遺物が出土した。特に12号墳からはTK23式⁽¹⁾併行の須恵器と共に、多くの円筒埴輪と朝顔形埴輪の破片が出土した。これらの埴輪には成型若しくは調整にタタキ技法が使用されており、埴輪へのタタキの使用例は明石川流域では初の確認例である。この他、範囲確認のために実施した試掘調査では4ヶ所で円形に巡る周溝状の溝を検出しており、段丘上にはさらに古墳が存在すると考えられる。なお、古墳の中には周溝から掘立柱建物の時期に整地される、飛鳥時代～平安時代後期頃の遺物が出土しており、飛鳥時代以降に埋没したものと推定される。今回の調査では、低地部と段丘上の両者共、古墳時代の竪穴建物、掘立柱建物などの集落域を構成する遺構については、確認することはできなかった。

飛鳥時代～平安時代

段丘上の第37・39・40次調査で、掘立柱建物群、溝、土坑、落ち込みなどの多くの遺構を確認した。

検出された掘立柱建物は計19棟である。これらはほぼ南北に主軸を持つ建物で、4棟は東西主軸の建物である。方位に合致する多数の建物の築造は注目される、この中で36トレンチ拡張区SB03・04は東へ主軸を振

る、平安時代後期以降の建物である。段丘上では耕土層直下で多数の遺構が確認されたが、その多くは調査対象地外であり、検出状況での記録に留まつた。出土遺物も限られており、建物の同時並存状況などは不明であるが、出土遺物から奈良時代を主体とする時期の遺構である可能性が考えられる。前述した古墳の周溝や40トレンチSD09やSK01からの出土遺物には、平瓦や丸瓦などの瓦類も多く含まれており瓦葺建物の存在も考えられる。瓦類には、凸面に方格タタキを有する平瓦と「水切り突帯」を有する丸瓦（図版38）が存在している。前者は高橋美久二氏により、古代山陽道邑美駅（仮称）に比定⁽²⁾されている明石市長坂寺遺跡⁽³⁾に類例があり、後者は西区上池遺跡⁽⁴⁾に類例があるものである。出土遺跡では、段丘上において、これまでの調査でも同時期の掘立柱建物群が確認されており、多くの建物跡と特徴的な遺物の存在は興味深い。尚、「水切り突帯」を有する丸瓦は、三重県伊勢国分寺跡⁽⁵⁾などでも確認されている。

段丘上に飛鳥時代以前は、古墳群以外に顯著な遺構は確認されていない。奈良時代を中心これら建物群の築造が活発化したものと推定される。出土遺跡の南東には明石郡衙に推定される吉出南遺跡が所在し、その南には古代山陽道の通過が推定されている。その中で、これらの近接地域における整然とした建物群の存在は注目される。段丘上に展開する掘立柱建物群の性格については、今後の検討課題である。

平安時代後半～鎌倉時代

特筆される遺構として、低地部の5トレンチ4区SX55104、6区SK56201が挙げられる。SX55104からは13世紀代の遺物と共に、漆で皮膜した烏帽子が出土した。また、SK56201は12世紀後半～末葉の多量の須恵器塊と共に、和泉形瓦器塊がまとまって出土した⁽⁶⁾。神出古窯址群を擁し、西摂地域に比べて瓦器塊の出土が極めて少ない明石川流域において、今回の例は重要な資料と言えよう。須恵器塊へ同一文字の墨書きが複数に見られた点も合わせて特筆されるものである。13トレンチSK01からも須恵器塊2点と土師器羽釜を出土した。この時期の遺構は低地部の1・5トレンチや第35次13トレンチに遺構の分布が見られ、特に5トレンチに掘立柱建物などの顯著な遺構・遺物の分布が見られる。

段丘上は、鎌倉時代の遺構はごくわずかで、前段階に比べて遺構の分布が減少する傾向が認められる。また、天正6年（1577）から行なわれた羽柴秀吉による三木城攻めに際し、字「平内口」に所在したとされる寺院、日甫山蓮華寺が兵火により焼失したという伝承も存在する。

註 (1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

(2) 高橋美久二『古代交通の考古地理』大明堂 1995

(3) 中村調子『長坂寺遺跡と古代の山陽道』明石市域の遺跡詳細分布調査（1）明石市教育委員会 1987

(4) 西岡巧次・中村大介『上池遺跡第3次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2010

(5) 新田剛編『伊勢国分寺・同府跡一長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業概要報告』鈴鹿市教育委員会 1994

(6) 中世の須恵器・瓦器の年代観については下記による。

森田「東磨系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館1986

橋本久和『中世考古学と地域・流通』東陽社 1995

第2節 上津橋地区で確認された家形石棺棺蓋

上津橋集落北側の事業地内において、水路を横断する石橋として転用された家形石棺の棺蓋が確認された。当該地は工事により水路の付け替えが予定されているため、現状の写真撮影後、棺蓋を埋蔵文化財センターへ搬入し、保存を図ることとなった。棺蓋は上部を上にして、長側辺部側が水路と直交する状況で橋として設置され、農道から耕地への通路として使用されていたものである。

今回確認された棺蓋は、長さ141cm、幅71cm、高さ25cmで、棺蓋突起は存在しない。規模から小形棺に分類されるものである。尚、棺蓋の分類、各部名称については、増田一裕氏の分類⁽¹⁾に拠る。

外面は44cm~45cmの幅で上部平坦面を持ち、長短の両側辺部には斜面と垂直面を有する。斜面の角度は長側辺部50°及び55°、短側辺部49°及び53°で、各斜面にやや角度の違いがある。垂直面の高さは7cmである。内面は棺身と接する部分に幅13cm~15cmの平坦面を有し、中央部は平面長方形に下面が長側辺部長120cm、短側辺部幅43cm、上面が同じく35cm、113cm、深さ6cm前後の断面台形に削り込まれている。これらの数値から導き出される上部平坦面幅指数は62で、棺蓋部深さ指数は24である。

棺蓋内外面には、全体的にチョウナ敲打具技法⁽²⁾によるものと推定される、敲打状の工具痕が認められる。これは仕上げ作業に伴うものと考えられ、工具痕の方向は上部平坦面、斜面共長短の各側辺部に並行する様に進行する。垂直面は側辺部に対して並行するものと斜め上方へ向かう工具痕の進行があり、工具痕の方向には乱れがある。これは垂直面を除く他の部分では外面が底を下にし、内面は上部平坦面を下にして棺蓋製作作業を行ない、垂直面については、端部における作業の困難さから、内面の作業時に各側辺部に並行する形で作業を行ない、外面の作業時には上方から工具を使用して、端部の作業を行なった可能性が推定される。

石材は肉眼による観察では、色調が濁黄灰色を呈し、直径1cm~2cm大の不定円形の白色粒子を多く含む、これらの特徴から流紋岩質凝灰岩と考えられる。結晶の含有は多くはない。質量は349.8kgである。出合遺跡の立地する播磨地方では、加古川流域を中心にいわゆる広義の「竜山石」と呼称される、流紋岩質凝灰岩が産出され、古墳時代を通じての石材利用が確認されている。石材の自然科学的調査を実施していないため特定することはできないが、肉眼観察からは、兵庫考古科学談話会『竜山石』研究グループの产地同定調査成果⁽³⁾による高砂市竜山産の石材と特徴が類似し、加古川流域産石材の可能性が考えられる。

尚、内面には、1カ所の角に溝状の切り込みが設けられている他、平坦面を中心に直径20cm~10cm前後、

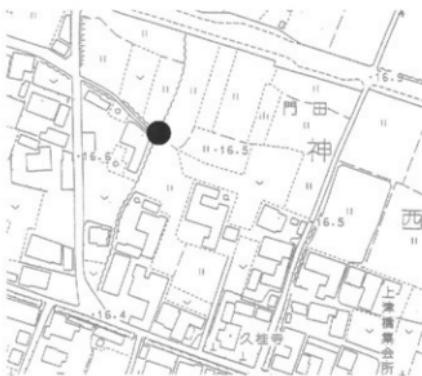


fig155. 家形石棺所在地 (S=1:2,500)



写真27 確認された家形石棺

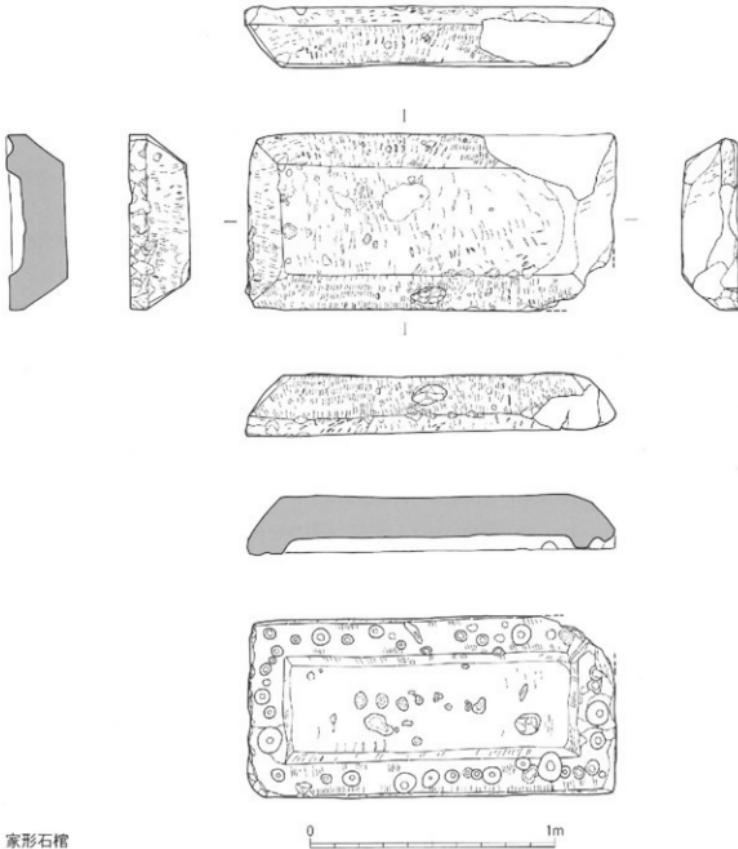


fig156. 家形石棺

深さ3cm前後の壠鉢状の窟みが多数存在している。この切り込みの存在と内面削り込みに滞水に伴うものと推定される鉄分の沈着があることから、手水鉢としての利用が推定され、橋として使用される以前に、内面を上にした手水鉢としての使用期間が考えられる。内面に多数存在する窟みは、この時期に雨だれ等により、硬度の軟らかい凝灰岩で製作された棺蓋が侵食されて発生したものと考えられる⁽⁴⁾。

近隣では本例同様に手水鉢に転用された、小形棺の棺身（全長1.9m）が、吉田郷土館に保管されている。

- 註 (1) 増田一裕「家形石棺の基礎的分析（上）～（下）」『古代学研究』162～164 古代学研究会2003・2004
 (2) 和田晴吾「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』石川考古学研究会 1983など
 (3) 兵庫考古科学談話会『竜山石』研究グループ「自然科学的調査に基づく播磨地方南西部『竜山石』の産地同定」『播磨学紀要』第9号 播磨学研究所 2003
 (4) 屋外に所在する（かつて所在した）、凝灰岩製の石棺に同様の類例が多く認められる。

第3節 出合古墳群について

(1) はじめに

明石川流域の古墳時代中期後半～後期にかけての古墳の動向については、これまでにいくつかの研究が行なわれている⁽¹⁾。ここでは、その成果と共に、今回確認された古墳群について検証を試みたい。

明石川流域では5世紀末になると、明石川、伊川、櫛谷川の各流域に、ほぼ同時期に帆立貝形古墳が築造されるという状況が発生する。白水瓢塚古墳の築造以降、王塚古墳などわずかな古墳の築造しか確認されていなかった当地域は、この段階以降状況が一変すると言っても過言ではない。

(2) 出合古墳群の築造

古墳時代中期後葉（5世紀後半）、明石川本流域の中村古墳群、櫛谷川流域の水谷古墳群、伊川流域の大王山3号墳など各流域の古墳群の中に、まさに一齊的とも言える状況で発生する帆立貝形古墳築造の現象の流れの中で、連動する様に、出合遺跡においても古墳群の築造が開始される。

これまでの調査成果から出合遺跡では段丘上に、出合1号墳（亀塚古墳）を中心に、5世紀後半～6世紀初めにかけて、帆立貝形古墳と中小の円・方墳によって構成される計5基の古墳群の築造が確認されている。いずれも墳丘は後世の削平を受けて消滅し、周溝のみが検出された。帆立貝形古墳である1号墳からは出迎昭三氏の編年TK23～TK47型式に併行する須恵器や、川西宏幸氏の編年V期に併行するものと考えられる、特異な形態を有する須恵質の円筒埴輪を含む円筒埴輪や家、太刀、盾、人物、動物などの豊富な種類の形象埴輪の一群が出土し、円墳である3号墳から5世紀後半の須恵器高环の出土が報告されている⁽²⁾。

今回の調査では、出合古墳群と同一段丘上で新たに12基の古墳（試掘調査による古墳と推定されるものを含めると16基）の存在が確認され、今回確認された古墳を含めて「出合古墳群」として再検討を要する状況になったと言える。

まずは出合遺跡において、これまでの調査で確認された古墳は、下記の表のとおりである。

地 区	名 称	墳 形	規 模	周 溝	出 土 遺 物	備 考
北 山	1号墳	帆立貝	全長29m	有 幅3.0m～3.5m	須恵器、埴輪（円筒、形象）	TK23～47、埴輪V期
北 山	2号墳	方	一边11m	有 幅2.2m		
北 山	3号墳	円	直径11m	有 幅3.5m	須恵器（高环）	5世紀後半
北 山	4号墳	円	不明	有		周溝の一部のみ検出
北 山	5号墳	円	直径11.6m	有 幅3m前後		
堂ノ上	6号墳	円	直径12.5m	有 幅2.9m～4.5m	須恵器	旧堂ノ上1号墳、MT15～TK10
堂ノ上	7号墳	円	直径13m	有 幅2.3m	須恵器	旧堂ノ上2号墳、MT15～TK10
堂ノ上	8号墳	円	直径11.2m	有 幅2.0m		旧堂ノ上3号墳
堂ノ上	9号墳	円	直径9.8m	有 幅2.4m	須恵器	旧堂ノ上4号墳、周溝一部、TK23～47
堂ノ上	10号墳	円	不明	有 幅1.3m以上	円筒埴輪片	旧堂ノ上5号墳、周溝一部、埴輪片
堂ノ上	11号墳	円	直径4.0m	有 幅0.8m～1.1m		旧堂ノ上6号墳
堂ノ上	12号墳	円	直径13m	有 幅2.8m	須恵器、円筒埴輪	旧堂ノ上7号墳、TK23、埴輪IV期
坂ノ上	13号墳	円	直径12m	有 幅3.3m	土器器、須恵器	旧坂ノ上1号墳、TK10～TK43?
坂ノ上	14号墳	方	一边8.0m～8.5m	有 幅1.8m～3.0m	円筒埴輪片	旧坂ノ上2号墳、埴輪片出土
坂ノ上	15号墳	方	一边8.0m	有 幅1.3m～1.8m		旧坂ノ上3号墳、埴輪片出土
坂ノ上	16号墳	円	直径10m?	有 幅2.3m		旧坂ノ上4号墳、周溝一部検出
平内口	17号墳	円	直径16.5m～17.5m	有 幅1.0m～2.8m		旧坂ノ上5号墳、周溝の検出のみ
堂ノ上		円	不明	有		試掘調査、周溝の一部のみ検出
堂ノ上		円	不明	有		試掘調査、周溝の一部のみ検出
堂ノ上		円	不明	有		試掘調査、周溝の一部のみ検出
堂ノ上		円	不明	有 幅約2m		試掘調査、周溝の一部のみ検出

表5 出合古墳群一覧表

これらの古墳は、同じ段丘上に築かれており、出土遺物がほぼ同時期であると考えられることから、相前後する時期に築かれた同一の古墳群として、捉えることができるであろう。その築造過程は、墳丘と埋葬施設が削平されており、周溝からの限られた出土遺物の中での確認になるが、現段階では最も早く築かれた古墳は、5世紀後半の須恵器高杯が出土した3号墳と、TK23型式に併行する須恵器とIV期の埴輪を有する12号墳であり、1号墳はこの次段階に位置付けられる。MT15～TK10型式の須恵器を出土した6・7号墳は1号墳の次段階の築造で、13号墳がこれに続くと考えられる。その他の古墳は、現状では築造時期及びその過程は不明であるが、今後近隣地の調査の進展によりその順序が変わる可能性がある。

(3) 12号墳出土埴輪

12号墳は「出合古墳群」で初期に築造された古墳と推定されると共に、第4章で述べた様に、特徴的な埴輪の使用が明らかとなっている。12号墳の円筒埴輪、朝顔形埴輪の大きな特徴は、成形若しくは調整にタタキを採用している点である。12号墳出土の埴輪について、その特徴を再確認しておきたい。

- ①タタキはすべて、平行タタキであり、口縁部付近の器面と突帯端部に施されている。(1・2段目にはタタキは認められない。)
- ②器面と突帯端部のタタキには、両者を横断する様な連続性は見られない。
- ③口縁部付近の器体は、タタキ後にハケメ(タテ方向或いはヨコ方向)を施す。
- ④器面のハケメ調整は、タテハケ後にヨコハケを施す。突帯付加後の2次調整は存在しない。
- ⑤一部に、胎土が精良でタタキを施さない扁平な突帯を持つ、やや硬質な焼成の個体が存在する。
- ⑥須恵質のものは認められない。

以上の点が挙げられる。

製作技法にタタキを使用する埴輪は、いわゆる「淡輪型埴輪」、「尾張型埴輪」と呼称される一群に使用されている技法であり、両者は窯焼成による須恵質のものが含まれ、輪状の蔓や枝をはめて成形する「底部設定技法」やタタキの使用などに特徴づけられる一群である。両者は各地域におけるまとまりも確認されており、須恵器窯での焼成の存在から、その製作には須恵器製作集団との関わりが指摘されている。

タタキを有する埴輪はこれまでに明石川流域では未確認で、神戸市内でも初の確認例と考えられる。12号墳の埴輪に認められるのは平行タタキであり、これに類する埴輪は、兵庫県内では西宮市津門稻荷山古墳⁽³⁾、相生市宿櫛塚古墳⁽⁴⁾、近隣では岡山県岡山市中山6号墳⁽⁵⁾、同県津山市橋木塚古墳⁽⁶⁾で平行タタキを施した埴輪が確認され、三田市芳ノ塚1号墳⁽⁷⁾、岡山県津山市十六夜山古墳⁽⁸⁾で格子目タタキを使用した埴輪が確認され、「淡輪型埴輪」との関連が指摘されている。築造時期は円筒埴輪がIV～V期、須恵器はTK23～47型式併行期に位置付けられ、12号墳とほぼ同時期である。また、加古川市坂元遺跡⁽⁹⁾の「淡輪型埴輪」が上屋構造を持たない土坑で焼成された例は、窯窓以外の生産例で、注目される。

12号墳の埴輪底部に「底部設定」に伴う段を有しない点は、両者との直接的な技法上の系譜に不明な点があるが、タタキの使用という、従来の埴輪製作技法に見られない新たな技術の導入は、出合遺跡周辺においても須恵器製作技法を新たに埴輪製作へ導入した可能性⁽¹⁰⁾を指摘できよう。明石川流域では現在埴輪の製作は確認されていないが、加古川流域の坂元遺跡での埴輪窯の存在から、明石川流域付近でも埴輪生産の存在の可能性が推定されよう。また、明石川流域とその周辺での須恵器生産は、初期段階であるTK73型式併行の時期が考えられる出合窯⁽¹¹⁾以降、現在窯址は確認されておらず、菅原雄一氏は本格的な生産は明石市赤根川・金ヶ崎窯のMT15型式段階からであると指摘されている。12号墳で検出されたTK23型式に併行する時期の須恵器窯の存在と須恵器生産、埴輪製作集団及び埴輪製作技法の系譜については今後の課題である。



fig157. 出合古墳群 ($S=1:5,000$) (作図は文化財課 丸山潔の協力を得た。)

(4) 出合古墳群の性格

明石川流域で一齊に築造される帆立貝形古墳の多くはV期の円筒埴輪を伴うことが確認されており、共伴した須恵器からTK23~47型式併行期の時期が考えられている。12号墳は、これらよりもやや先行するIV期段階の数少ない例であり、その存在は特筆される。12号墳の次段階の1号墳は帆立貝形古墳である。埴輪の樹立が想定され、円筒埴輪は須恵質で2条突帯、円形スカシを有し、タテハケ調整を施すものがある。小底径の器形や高い基底部、突端部への断続ナデ状の押捺など特異な例とされ、同様の円筒埴輪は明石川流域やその近隣地ではこれまでに確認されていない。同時期の帆立貝形古墳である水谷大東古墳を含む水谷古墳群や、鬼神山古墳、柿谷1号墳、高津橋大塚2号墳や延命寺2号墳などの須恵質を含むV期の円筒埴輪にもその存在は確認されていない。1号墳の円筒埴輪が12号墳と同様に新たな技術からの産出と捉えると、12号墳から1号墳への系譜を考える上で、周辺に確認されない特徴的な埴輪を両者が共に有する点と、円墳から帆立貝形古墳への築造は注意を要する点として指摘できよう。また、これらの次段階に位置付けられる6号墳は二重の周溝を有しており、一部の調査のため詳細は不明の点が多いが、その存在は注目される。

出合古墳群は畿内縁辺部に築造された、いわゆる「古式群集墳」⁽¹²⁾と考えられ、12号墳出土埴輪はその「古式群集墳」へと供給されたものである⁽¹³⁾。その埴輪製作には須恵器製作集団の関わりが想定されることから、被葬者は古墳時代中期末~後期の政治的及び社会的な大きな変動を背景に台頭した、新興首長層や有力家長層であると考えられる。明石川流域の同時期の古墳群とは、1・12号墳の特徴的な埴輪や6号墳の二重の周溝などに異なった様相が認められる。出合古墳群は、新興集団の明石川流域進出への足跡として捉えられる可能性もあるのではないだろうか。

(5) おわりに

計5ヵ年にわたる出合遺跡の調査は、多くの成果をもたらした。しかし、その多彩な遺跡の性格については、今後さらなる十分な検討が必要である。出合遺跡の全貌はようやく一部の姿を見せ始めた段階である。

- 註 (1) 宮木 博「明石川流域における後期古墳 -木棺直葬から横穴石室へ-」『歴史と神戸』23巻4号 神戸史学会 1984
渡邉伸行「木棺直葬墳の終焉-明石川流域の古墳の調査から」『神戸市史紀要「神戸の歴史」』第15号 神戸市市长秘書室 1986
谷 正俊「明石川流域における古墳時代後期の古墳群について」『水谷遺跡第10次調査 馬掛原遺跡第1次』神戸市教育委員会 2003
菅原雄・「古墳時代における須恵器地方窯成立の一様相-兵庫県明石市所在赤根川・金ヶ崎窯の検討」『古代学研究』174 古代学研究会 2006
富山直人「明石川流域の古墳時代」『兵庫発信の考古学』間壁蔵子先生喜寿記念論文集刊行会 2009
(2) 篠木義昌・亀田修一「埴輪出合遺跡について」『兵庫県の歴史』22 兵庫県 1986など
(3) 芦屋市教育委員会 泰園秀人氏よりご教示を頂いた。
合田及伸「津門脇舟町遺跡発掘調査報告書」西宮市教育委員会 2002
(4) 松本正信「宿禰塚古墳と周辺の古墳」『龍野市史 第4巻』龍野市 1984
(5) 格 真治「中山遺跡・中山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121 日本道路公团中國支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1997
(6) 小郷利幸・白石 純「橋本塚古墳群」津山市教育委員会 2003
(7) 平田 学「芳ノ塚古墳群」『三田市史 第8号 考古編』三田市 2010
(8) 尾上元規・金田善敬「十六夜山古墳・十六夜山遺跡」岡山県教育委員会 1998
(9) 渡邉 昇編「坂元遺跡Ⅱ」兵庫県教育委員会 2009
(10) タタキを有する埴輪については、羽曳野市教育委員会 河内一浩氏にご教示を頂いた。
(11) 亀田修一「攝磨出合窯跡の検討」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』岡山理科大学埋蔵文化財研究会 2008
(12) 群集墳の定義については、和田晴吾氏の分類による。
和田晴吾「群集墳と終末期古墳」『新版「古代の日本」第5巻 近畿!』角川書店 1992
(13) タタキを有する埴輪の性格などについて、奈良県立橿原考古学研究所 坂 靖氏にご教示を頂いた。

写 真 図 版



1トレンチ北半第1遺構面全景（北から）



1トレンチ北半第2遺構面全景（南から）



2トレンチ第2遺構面全景（北西から）



3トレンチ全景（南西から）



5トレンチ2区第2遺構面（東から）



5トレンチ2区第2遺構面（西から）



5トレンチ2区SR201（西から）



5トレンチ2区SR201遺物出土状況（南東から）



5 トレンチ4区全景（南東から）



5 トレンチ4区
SK5401～5403（北から）



5 トレンチ4区SK5402（西から）



5トレンチ5区
第1構造面全景（南東から）



5トレンチ5区
SB55101（南東から）



5トレンチ6区
第2構造面全景（北から）



5 トレンチ6区SK56201（南から）



6 トレンチ全景（南から）



6 トレンチSR01（北東から）



1 トレンチSR201・SK204出土遺物



5トレンチ2区SR201出土遺物(1)



35

5トレンチ2区SR201出土遺物(2)



36



79

5トレンチ2区SK201出土遺物



42



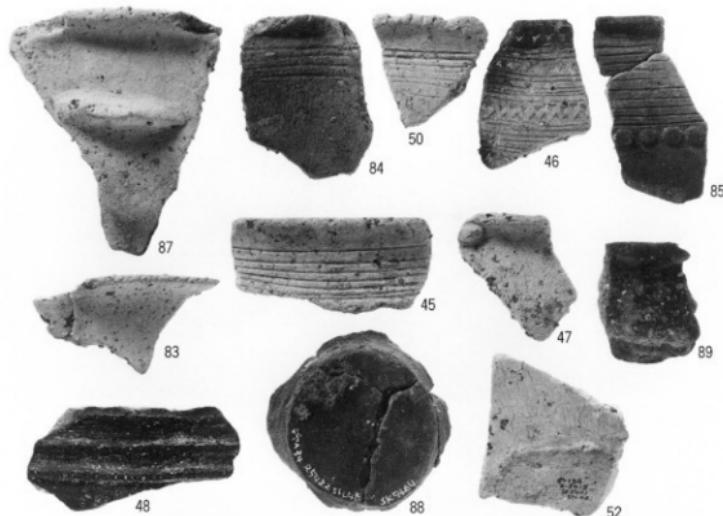
82

5トレンチ4区SK5403出土遺物

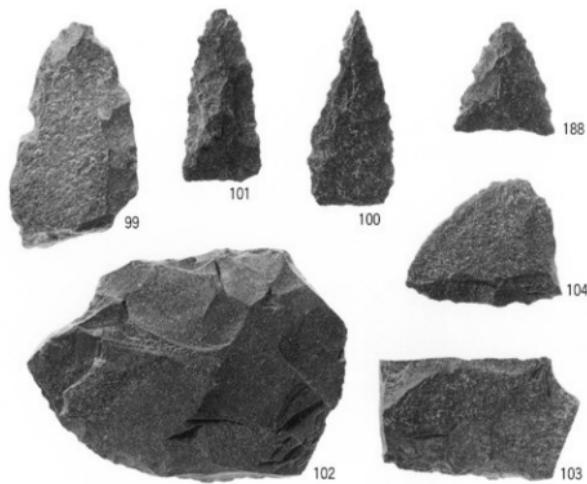


140

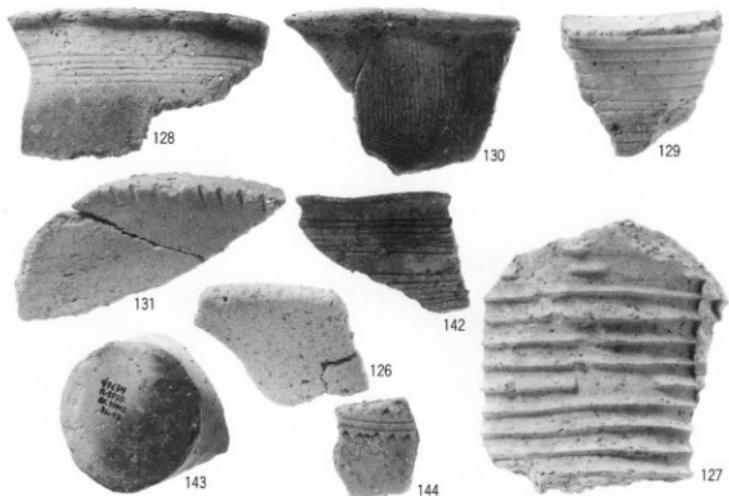
5トレンチ5区SK55202出土遺物(1)



5トレンチ4区SD5401・SK5404出土遺物



5トレンチ4・6区出土石器



5トレンチ5区SD55201・SK55202出土遺物(2)



5トレンチ5区SK55202出土遺物(3)



5トレンチ6区SK6201出土遺物(1)



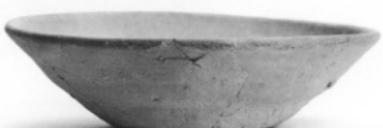
150



157



152



164



153



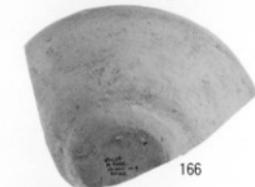
165



167



180



166



168



201

5 トレンチ6区SK6201出土遺物(2)



6 トレンチSR01出土遺物



12トレンチ東半第1遺構面（南西から）



12トレンチ西半第2遺構面（南東・北西から）





12トレンチ
SD205遺物出土状況（北西から）



12トレンチSD205（北東から）



12トレンチSD206（南東から）



13トレンチ全景（北西から）



13トレンチSD01（南東から）



13トレンチSK01（南西から）



205

12トレンチSD204出土遺物



210



208



230

12トレンチSD205出土遺物

12トレンチSD206出土遺物(1)



228



233



229



235



234

12トレンチSD206出土遺物(2)



231



232

12 トレンチSD206出土遺物(3)



237



239

13 トレンチSD01出土遺物



13 トレンチSK01出土遺物



21トレンチ2区全景（西から）



21トレンチ3区全景（西から）



21トレンチ3区SB01（北から）



21 トレンチ7号墳（西から）



21 トレンチ7号墳遺物出土状況（南西から）



24 トレンチ8号墳（南東から）



25 トレンチ6号墳（東から）



25 トレンチ6号墳（南東から）



26 トレンチ12号墳（東から）



26 トレンチ12号墳遺物出土状況（東から）



26 トレンチ12号墳（北西から）



26 トレンチ12号墳遺物出土状況（東から）



245



247



246

21 トレンチSK02出土遺物



248



251



249



252

21 トレンチ7号墳出土遺物(1)



254



263



265



255



266

21 トレンチ7号墳出土遺物(2)



261



262



269

26 トレンチ12号墳出土遺物(1)



267



276



277

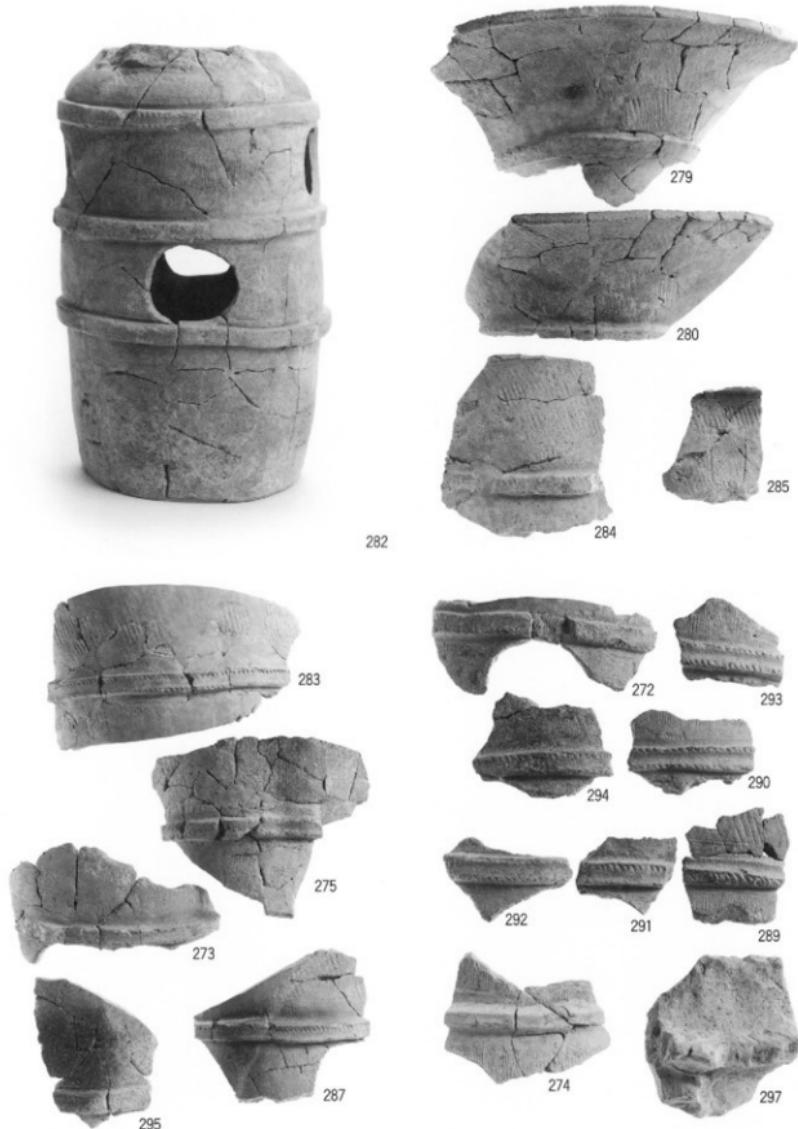


271



281

26 トレンチ12号墳出土遺物(2)



26 トレンチ12号墳出土遺物(3)



30 トレンチ全景（東から）



31・32 トレンチ全景（南西から）



33トレンチ全景（南西から）



33トレンチSB01・02（東から）



34トレンチ全景（南西から・北東から）



34トレンチSB01（南から）



35 トレンチ16号墳（北西から）



36 トレンチ拡張区13号墳（東から）



36 トレンチ拡張区13・14号墳（東から）



36 トレンチ拡張区掘立柱建物群（北西から）



40号 trench (東から)



17号墳 (北東から)



307



312



315



314

36 トレンチ拡張区SK01出土遺物



309

35 トレンチSD02・03 (16号墳) 出土遺物

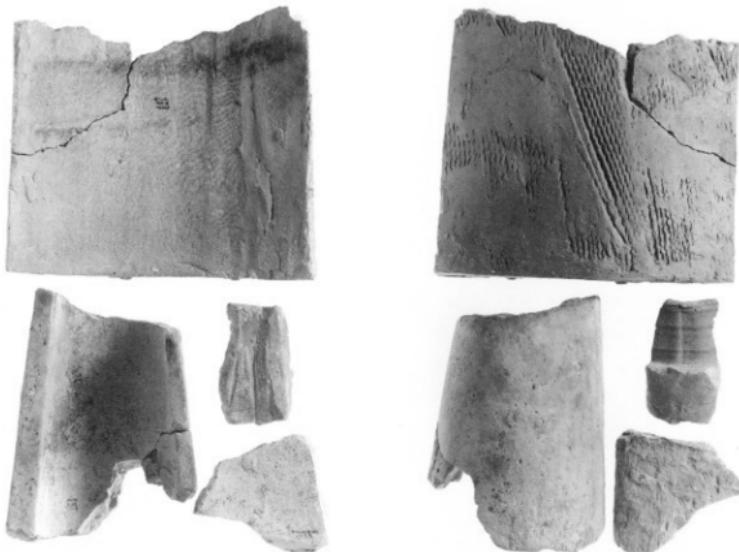


321

36 トレンチ拡張区13号墳出土遺物(1)



36 トレンチ拡張区13号墳出土遺物(2)



36 トレンチ拡張区13号墳出土遺物(3)



367 36 トレンチ拡張区SK02出土遺物

369



368

36 トレンチ拡張区SK06出土遺物



395



402



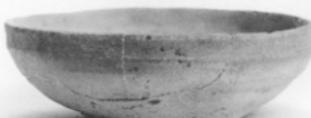
396



398



403



399



404

40 トレンチSD09出土遺物



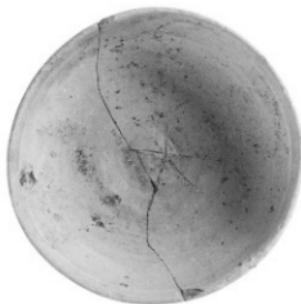
400



40 トレンチSK01出土遺物(1)



412



427



420



419



422

40 トレンチSK01出土遺物(2)

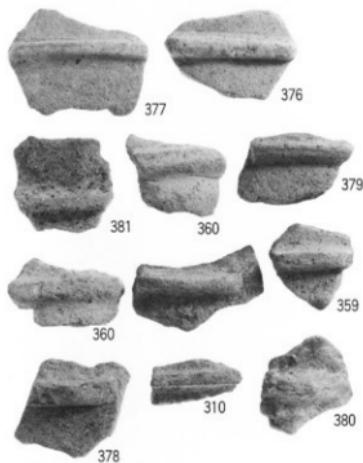


435



430

40トレンチSK01出土遺物(3)



第40次調査出土埴輪



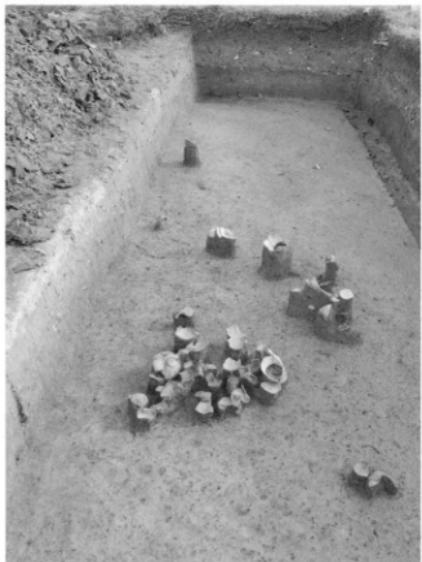
42トレンチ3区（南から）



42トレンチ4区（北西から）



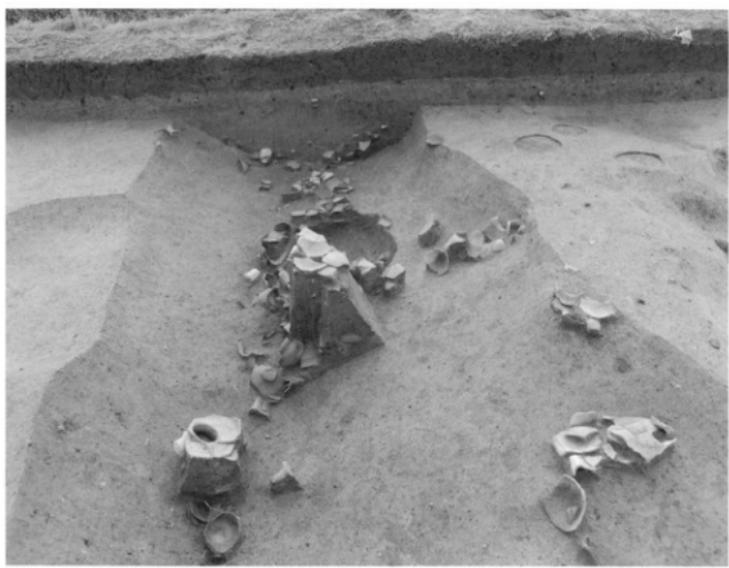
42トレンチSB01（北東から）



42トレンチ4区遺物出土状況（北西から）



42トレンチ4区SD10（北東から）



42トレンチ4区SD07（北東から）



437



442



438



443



441



444



445

42 トレンチ4区SD07出土遺物(1)



448



452



450



451



453

42 トレンチ4区SD07出土遺物(2)



455

458



454



461



463

42トレンチ4区SD07出土遺物(3)



464



465



466



447



467



476

42 トレンチ4区SD07出土遺物(4)



477



488



478



480

42 トレンチ4区SD10出土遺物



488

42 トレンチ遺構に伴わない遺物



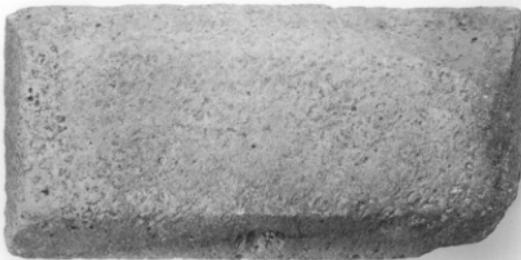
43 トレンチ全景（北東から）



43 トレンチ西半（北東から）



家形石棺棺蓋



棺蓋外面



棺蓋內面



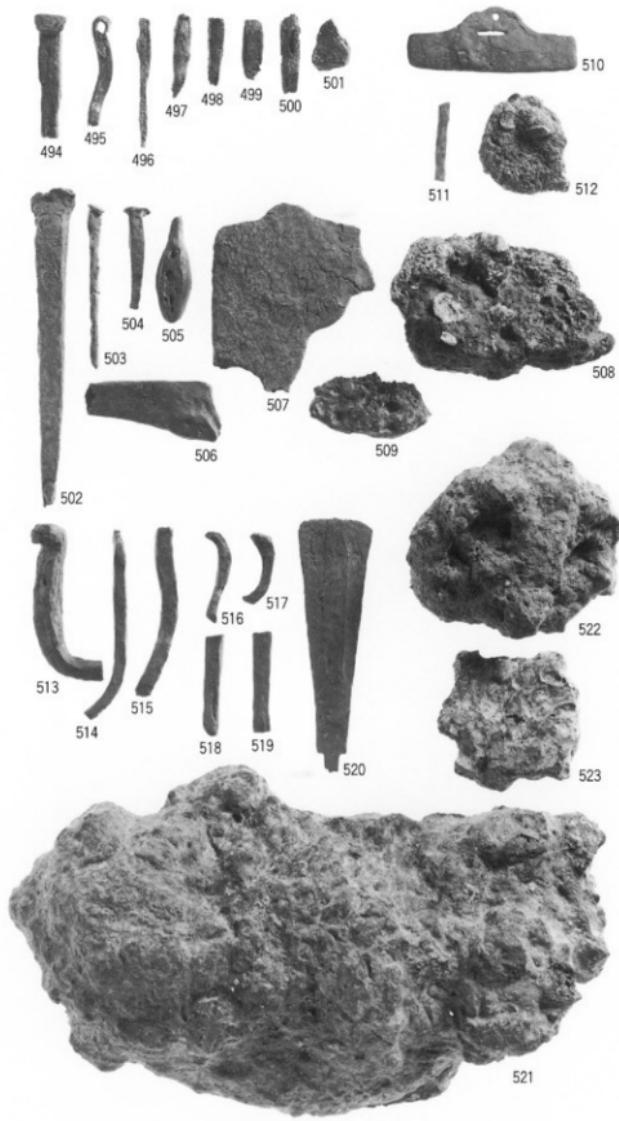
上部平坦面工具痕



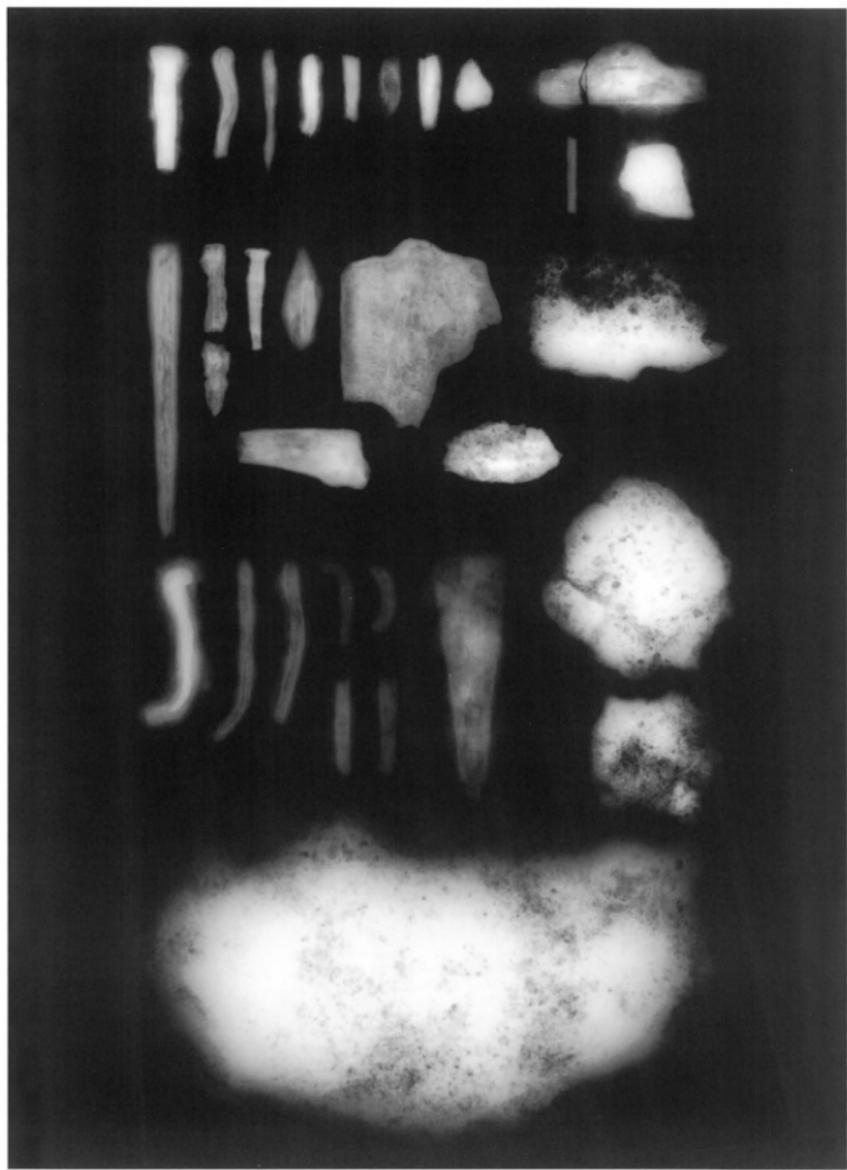
短側辺部工具痕



長側辺部工具痕



鉄製品・金属製品生産関連遺物



鉄製品・金属製品生産関連遺物（X線透過像）

報 告 書 抄 錄

出合遺跡

第34・35・37・39・40・43・44次発掘調査報告書

2011.3.31

発行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1-1
TEL 078-371-7000



出合12号墳